
聖痕使い

中間

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖痕使い

【Nコード】

N5887W

【作者名】

中間

【あらすじ】

何かを解決するたびに女の子が増えていくお話です。 ジンは神様に異世界を魔物の侵攻から救ってくれ、と頼まれ自ら異世界に。そこでジンは、世界を守るため世界のありとあらゆる力を集めることになるのだが、ジンは一緒に女も集めてハーレムを作ることになる。 処女作ですので、拙いですがよろしく願います。 一章は勢いで書いたので、あれですが二章はもう少し頑張ってみます。 つかキャラ出しすぎてグダグダに

プロローグ 神様に会う

目が覚めると白い空間にいた。

どうすればいいのかわからずにその場で寝ようとする

「やあ始めまして仁^{じん}くん」

後ろから声が聞こえてきた。

「誰だお前？」

「この世界の神をやっているものです」

後ろを向くと思いつき腰曲げて神様が頭下げてる。

見た目は、笑っていること以外あまり特徴のないスーツ姿の青年だった。

「ずいぶん腰の低い神様だな」

「いやあ今日は、お願いする立場なもので」

「・・・・・・・・」

無視していると

「異世界にいつてほしいのです」

「・・・・・・・・」

「ちなみにあなたが行かなければその世界は滅びます」

お願いじゃなくていきなり脅してきた。

「・・・何で俺なんだ」

「あなたにしかできないからです。」

「だか「神様の事情です。」らな・・・」

話す気はないらしい。

「たくさんの人間が死にます。老若男女種族を問わず大勢の命が失われます。」

俺はしばらく考えた。異世界に興味がないわけではないのだ、まあまだ夢かもしれないのだが真面目に考えてみることにする。そして

「・・・わかった、行こう・・・ただ一ヶ月待てないか」

「それくらいなら何とかしましょう」

「いいのかよ。」

「何事も余裕を持って行動しないといけませんからね。それでは、細かいことまた後で」

人間くさいことを言う神様だった。

「ああ、わかった。」

・・・後で？

そこで目が覚めた。

「おはようございます」

「・・・・・・・・」

ベットの横でスーツ姿の人形が喋ってた。神様だった。

はあ・・・夢じゃなかったのね。夢に出てきた意味あるのか疑問だ。

あの後いろいろ聞いた事情は

曰く

・その世界は、ファンタジーの世界で剣や魔法や精霊や龍やエルフ
やらがいろいろいるらしい

・もう少ししたら魔物の大侵攻があるらしいが世界は、それをし
らない

・それどころか、戦争までやってるので正直やばいとのこと

・侵攻は三回あってあとになるほど苛烈になるらしい

・俺が選ばれたのは、精霊と相性がいいからと人格らしい（あまり
良い性格だとは思っていないのだが）

・俺は、まず精霊界で修行をするらしい（神様は碌な戦闘能力はく
れないらしい・・・神様使えねえな）

・今の世界のほうが高位であるため戻ってくることはできないらし
い。

・基本的に異世界の情報は話せないらしい。
というものだった。

一ヶ月の間にやったことは、バイトと身辺整理だ。

貯金とバイト代で親に旅行をプレゼントしたり、学校には退学届けを出したり、親友とは今までのことをいろいろと話して清算した。親に手紙も用意した。

そして今日が旅立ちなので両親に気分を重かったのだが、別れを告げようと思ったら

「息子の旅立ちに乾杯」

「「乾杯」」

なんか両親と親友と後なんでもか元担任がいて宴みたいになってた。

「・・・何してるんだ？」

「ああ私が教えましたよ」

神様が人形姿でお茶を啜っていた。

「貴様のせいかなー」

「まあまあ私たちも大体わかってたし正確な日はわからなかったけど」

「普段やる気ないのにここ最近妙に真剣だったからな」

「まさか異世界だとは思わなかったが」

「応援しているぞ」

上から俺、母、父、親友、担任だ

さすが俺の両親とこの俺と付き合いのある友人だな。担任は・・・
まあ流石は教師と言ったところか。
こうして小さな宴を開かれた後俺は、異世界に旅立った。

あ、精霊界のほうにな。

しまった手紙を処分するのを忘れた。

1話 精霊界から異世界へ

「ねえ、もう行っちゃうの？」

真っ白な髪にさらに真っ白な服を着ている、小さい女の子がジンに聞いてきた。

「ああ、そろそろ異世界に行く。」

「ふえ」

女の子が泣きそうになった。

「大丈夫。大きくなったらあっちで会えるから。」

抱きしめて頭を撫でてやる。しばらくすると

「わかった。パパ」

そうなんです。私、父になってしまいました。といってもこの子は、精霊なので人間とは違う生まれ方なんです。精霊の統合を初めてしたときに、生まれてしまった子で水と風と土の属性を持ちます。新しい雪の精霊で名前は小雪。

ちなみに精霊界の修行は大変でしたよ。最後なんて精霊王たちあんま手加減していなかった気がする。

しかし、その成果として精霊王達に認められ、左腕には7つの聖痕

が刻まれている。

それぞれ、火、水、風、土、雷、光、闇の精霊王から与えられた。

小雪の遊び相手を務めているところに刀神が歩いて来た。

前の世界の神の知り合いらしい、たまに精霊界に来て刀術の稽古をつけてもらっていた。

格好は侍スタイルだが髪は後ろで結んだだけの物だ。

「しっかり鍛錬を怠るなよ」

「最後の言葉まで小言ですか師匠」

「まあ、いいじゃないか君のことが心配なんだよ彼は」

なんか元の世界の神もきた。

その神が始めて真剣な顔になって。

「ありがとう。元の世界を捨てて来てくれて。本当にありがとう」

真剣な顔をして頭を下げる神に、俺は面食らった。

「まあ任せろ今の俺は結構強いぜ」

「うん、パパは強いんだよ〜」

「それに、ほかは勝手にさせてもらっしな」

神様が不思議そうに聞いてくる。

「なにするつもりだい」

「せっかく異世界に行くんだ前の世界でできないことをしたいじゃないか」

「俺はハーレムをつくる」

「「……………」」

「わーい、わたしもパパのハーレムに入る〜」

「ああ、待っているぞ我が娘よ」

娘の頭を撫でてやる。

「こんなだったっけ？ジンって」

「まあ時間は人を変えるし、その程度の褒美はいいんじゃないか」

と刀神。

「いや、けど娘だよ」

「まあ血のつながりはないし神ではよくあるだろう」

「……………うん、そうだね……………だといいなあ」

「それじゃあ行くか世界でも救いに」

「ああジン、これを渡しておくよ」

懐中時計のようなものを渡してきた。

「最初の侵攻が360日後、ゼロになった時に侵攻が始まる、場所は大陸の中央に大きな山があるからそこだよ」

時計の上の部分に360と青く光る数字が浮かんでいた。ほかは反時計回りをしている時計が三つ（時、分、秒だろう）ある。

「じゃあ門を開くね、水の精霊王の懇意の神殿に落とすからその方が何かとやりやすいと思うし、あと例の能力もついでにつけとくら」

「わかった。」

なんかこいつからなにかもらうの初めてだな。

「いつてらっしゃーい」

「達者でな」

そこで門が開いた。

「いつてきます」

「頼んだよジン」

こうして俺は第二の故郷に別れを告げた。

2話 異世界の女の子

異世界1日目

門をぬけたと思ったら、いきなり空中に出た。

下が水溜りになっていたから、水の精霊に手伝ってもらって自分の位置だけ水をのけて着地する。

よく見ると噴水のようなところだった。ジンの服装は、闇の精霊王が作ってくれた黒衣姿だ。

闇の精霊王は小さな少女でかわいいやつだった。

「あなたがジン様ですか？」

女の声が聞こえる。顔を上げると。

水色の髪を腰まで伸ばした綺麗な娘が漫画に出てくるような神官巫女のような服を着て目も前に立っていた。

「そうだが、君が巫女さんでいいのかな？」

「は、はい。わたしはこの神殿の巫女をしているソフィアと申します」

「そんなに硬くなくても。別に普通で良いぞ。どこまで聞いている？」

「私の友人が行くとだけ、水の精霊王様から聞いています。」

「じゃ簡単に来た目的を話そう」

魔物の大侵攻について話した。

「そのような事が、大変なことになっているのですね」

「簡単に信じるんだな。この世界の人間は何も知らないって聞いてただけだ。」

「巫女ですし先ほどのジンさんが何も無いところから現れえるのを拝見していましたから」

そんなものなのか？ついでに聖痕を見せる。

「すごいです。聖痕はひとつだけでも持っていれば歴史に名を残すような人達ばかりで、いまはもうほとんどいないのにそれを7つすべてだなんて。」

なんか感動している。まあ聖痕は精霊王に認められたものにだけ与えられるもので、精霊に対して絶対の支配力を発揮する物で、一つ一つに絶大な力がある。聖痕の発動時は、精霊王に近い力を与えられると思われているのだ、まあ実際はそこまで便利な物ではないのだが。

突然雰囲気が変わって真剣な表情で

「あ、あのお願ひがあります。どうかお力をお貸しください。」

「？・・・魔物でも出てるの？」

「いいえ、実はこのあたりの村を盗賊が牛耳っていて毎月食べ物などを奪われているのです。」

毎月？

「略奪じゃなくて定期的に奪いにくるのか？」

「はい、それでこれ以上奪われると村が餓死してしまいます。」

なんだかソフィアの言葉には違和感がある。違和感を確かめるために

「じゃあ一度村の人集めてくれる」

村の状況を見るのが一番早い、予想通りだと何か手を打たないといけなくなる。

3話 村の状況

まだ夜が明けたばかりのようだった。

ソフィアに村の人を集めて集会を開いてもらった。

思ったとおりだった村の人間はみんな痩せている。これでは餓死者が出ていそうだな。考えていると

ほとんどの村人は、不審そう目で見てきた。まあ仕方ないなよそ者だしちよつと強気に言っとくか。

「まず聞きたいんだけどなんで戦わずに滅ぶ方を選んだんだあんたら？」

「な、なんだと」

「よそ者が知ったような口を」

村人が怒り出す。村人A、Bがうるさいな。

「静かに」

なんか村長ぼいのが出てきたな。ダンディなおっちゃんが村人の格好をしいていた。

「どういうことだね食べ物を持ち上げなければ我々は殺されていた。なのに君は我々が滅びを選んだと言った。それはなぜだね？」

「なんでって」

俺は、あきれてしまった。今若者を制したところからもおそらく村長のなるう。村長ですらこの状況の矛盾に気づいていないのだおそらくあまり物事を考えずにすごしてきたのだからまあこの世界ではしかたないのかもしれないが

「あんたらすでに食べるのに困ってんだろ本来少しずつたべものを奪うのなら生かさず殺さずが基本だ。だが、この村は滅びようとしているなぜだ？簡単だ他の村が逆らわないようにするための生贄に選ばれたんだよあんたたちは」

「そ、そんな」

盗賊が取ったこの手法には、たまに見せしめがないと村が言うことを聞かなくなるからな。

村人たちが絶望の表情を浮かべる。はあ、少しくらい考えろよな。

「ジンさんどうすればいいのですか？」

いち早く立ち直ったソフィアが聞いてきた。

「少なくともこの村ができることはないな。どいつもこいつも痩せていて碌に戦えんだろ」

なんか絶望が深くなってきた。

「盗賊は、どれくらいいるんだ」

「80人ほどで今日の昼ごろに五人ほどが徴収にきます。」

「ならなんともなるな」

「えっ、なるんですか」

なんか驚かれた。まあ問題は撃退した後の復讐だよなあ殺るならいつきに壊滅させないと後が面倒だ。
しばらく考え。・・・よしこの作戦でいこう。

「じゃあ報酬の方だが」

また絶望の表情を浮かべた絶望好きだな。

「あ、あのジンさんもうこの村にはなにも・・・」

「ああ、俺がほしいのは旅の友だよそこでだ。ソフィア」

「なんでしょう」

「それをソフィアに頼みたいんだ。」

4話 盗賊一掃

あのあと集会が荒れた荒れた。まあソフィアさん美人だもんな。何より俺が信用できないらしい。特に村長みたいな名前はオルムさん（ソフィアさんの親代わりでもあったらしい）なんか怒ってたなあ。

まあ仕方ないか、その場合は、ソフィアさんのおかげで何とかおさまった。そこに

「ただの王都までの道案内だよ」

と説明しその後ソフィアさんが

「わかりました。ご案内します。」

といていたのでそこで集会は解散となった。

で、今何をしているかという目の前で盗賊が三人ぶっ倒れている内ひとり死んでいる。

「さつさとつれて帰れ、お前らみたいな雑魚が4、50人で徒党を組んでも雑魚は雑魚なんだよ」

盗どもは、仲間を抱えて逃げていった。その顔には、憎悪を浮かべていた。

「どうして先ほど、4、50人と言ったのですか？」

ソフィアさんが聞いてきた

「4、50で言うておけばもっと大人数でくるかな〜て、それにひとりは殺したから黙っていられないだろうし」

正直作戦といってもこの程度なのだが最初の五人は、格闘だけで倒したから挑発には乗るはず。殺す時だけは、精霊術を使ったが。まあ村人は不安そうだったが、どうにもならん。もともとこの村のためだしな。

この日は神殿に泊めてもつらた。

異世界2日目

次の日の真昼間に案の定八十人を超える人数で押しかけてきた。これならほとんど来たと思ってよさそうだな。

「てめえか、うちの部下やってくれたのは」

村のはずれに立っているいかにも村人っぽくない俺になんか話しかけてきた。

俺は、軽く無視して。

「ソフィアさんは、そこで俺の精霊術を見ててくれ」

「はい、ジンさん」

ちょっと震えている。ちょっとかわいい。

「おい無視してんじゃねえぞ」

「知らん、死ね」

手を掲げ

「『炎蛇・四首』」

- ソフィアサイド -

彼は80人程度どうとでもなるといつていました。

確かに精霊術は、強いです。魔法のように詠唱を必要としないので単独での戦闘もできます。その分魔法に比べて習得が難しいのですが。精霊と通じなければならぬので才能も必要です。

それでも80人を相手にするのは、難しいはずなんですというより無理です。

なのにどうしようか考えている間に昨日は昼に来た盗賊を倒してしまい今日の襲撃が決まってしまうました。

そして目の前には、80人を超える盗賊がいるのです。さすがにこわいです。

「ソフィアさんそこで俺の精霊術を見ててくれ」

「はい、ジンさん」

すでに彼の周りには、かなりの火の精霊が集まっていました。それは、わたしの想像を超える力でした。

これには驚きました。わたしは、てっきり聖痕を使うものだと思っていたのです。聖痕を使わずにこれなのか、と。
彼は、手を掲げ

「『炎蛇・四首』」

炎の大蛇が四匹出て来ました。

「灰にしろ」

大蛇が盗賊に襲いかかりました。大蛇に噛まれた盗賊は燃え灰になりました。

「ひいい」

「なんだよこれ」

「聞いてねえぞ」

一方的でした。剣で攻撃しても剣は溶けてしまい盾で防ぐこともできず3分ほどで盗賊は、全滅していました。

その凄惨なはずの光景は、私を魅了しました。この人は聖痕に頼り切った戦いかたをしません。そんな彼が聖痕を使ったらと思うとゾクゾクします。私はこのとき彼に魅せられてしまったのです。

5話 ソフィアの告白

・ソフィアサイド・

村の人たちは大変喜んでいました。わたしもホッとしてしまいました。

盗賊のアジトからお金や食料も手に入って、今年はなんとか大丈夫そうです。

お昼を食べ終わるとジンさん、やっぱりジン様と呼びましょう、ジン様が

「じゃあ王都までよろしく」

「え、もう行くのですか？」

「ああ、あまり時間もないからな」

今言わないともう言えないかもしれない。だから私は、この場で自分の考えをジン様に伝えることにする。

「あの私も連れて行ってください」

「うん、だから王都までよろしくって」

「そうではなくて、その先もずっとお傍にいさせてください。」

「それってつまり」

顔が体が熱くなってきました。

「はい、その・・・お慕いしています。」

「・・・」

「・・・」

「その、ありがとう。・・・でも俺、実はハーレムを作ろうとか考えてますよ。」

「えと、ジン様ならそれくらいは、いいと思います。きっと」

「（なんか様付けに戻っているな）かなり危険ですよ。」

「私も精霊術が使えます。自分の身ぐらいは守れると思います。もし足りないならもっと力をつけます。」

「オルムさん、いいんですか？」

「ソフィアをよろしくお願いします。」

満面の笑みのオルムさん。

「（さっきはあんなに怒っていたくせに）・・・俺は夜は意地悪ですよ」

「大丈夫です。すべて受けとめます」

「・・・わかりました。これからもよろしくソフィアさん。」

「あのソフィアとおよび下さい」

「わかった。ソフィア」

「はい。ジン様」

「じゃあ挨拶とかあるだろうし出発は明日の朝で」

「よろしいのですか？」

「ああ、新しい仲間のためだ」

「ありがとうございます。」

ジン様はやっぱり優しい方です。

・ジンサイド・

その夜俺はソフィアと同じ部屋にいた。

俺は、ベットの上でソフィアの髪を後ろから撫でていた。

「ありがとうソフィア、一緒に来ると言ってくれて。俺はこの世界では、一人ぼっちだった。だからとても嬉しい」

そう言って俺は、ソフィアを抱きしめた。ちょっと声が震えていたかも。

「ずっとお側にいますから、もう一人にはなれませんか。」

「そうだな」

ソフィアが手を握ってくれた。

俺はしばらくの間、髪をもう一度今度は全体的に、撫でた後、ソフィアを抱えてベットに倒れこんだ

「ひゃ」

「ソフィア実は、この前まで精霊界にいたから実は一年ほど禁欲生活だったんだ加減できないかも」

「はい。思う存分に。あの、でも初めてなので最初はやさしく」

「わかった」

こうして俺は、この夜ソフィアが気絶するまで彼女と愛し合った。

6話 奴隷商人

異世界3日目

朝ソフィアの体を拭きながら謝った。

「ソフィア、その、すまん」

「いえっ、そのっ、すごかったです。」

頬を染めてそんなことを言ってくれた。襲いそうになるのを我慢する。

それでもその表情の中に疲れが見える。昨日は気絶するまでしかなかったらなあ。

村の人間も盗賊の一件で俺のことを認めてくれたのかソフィアがついていくことに反対はしなかった。

一部の男どもはまた絶望していたが。

俺のことが怖くないんだな。俺は、殺してもあまり罪悪感を感じなかった自分が怖かったのに。

確かに俺は、必要なことに躊躇はしない性格だったが殺しを平然とすることはなあ。

今は、王都への街道を進みながらこの世界について隣を歩くソフィアに聞いていた。ソフィアもほとんどあの村を出ることがなかったので、あまり村の外のことにはあまり知らないらしい。

話を聞くと大陸の中央は、人間の国が多く外側のほうは、人間の国

が少なく亜人の国が多いらしい。

今いる国の話になるとソフィアの顔が少し曇った。話を聞いてみると、この国の名前はグーロム王国またの名を『奴隷王国』つまり国が奴隷を推奨しているのだ。

王もかなりの愚か者らしく奴隷を得るために、戦争を起こすような王で、他国の民どころか自国の民にも嫌われているらしい。

だが他の国の支配者階級は奴隷を手に入れられるので黙認している。表立って反対しているのは、クイント皇国だけであるらしい。

クイント皇国の王は傑物らしく国力も大きい（協力関係を築くならクイント皇国か）。魔物の大侵攻は、俺だけでは無理らしいから国単位の協力が必要不可欠だからな。

クイント皇国を中心に何とかならないだろうか。

「この世界は、本当にだめそうだな。」

「はい、今大侵攻があれば簡単に滅ぶでしょうね。」

今日は暗くなり適当なところで野宿になった精霊達のおかげで野宿も快適だ。警戒もしてくれるし。

そうして、次の日

異世界4日目

「なあソフィアこいつらって」

「はい、奴隷商人と子飼の傭兵といったところでしょう」

俺たちは、ガラの悪い傭兵崩れに囲まれていた。商隊が前から来たと思ったら、傭兵崩れが出てきて、いきなりこれだ。

「そんで商品は、あの馬車の中で俺たちもそこに入れと」

「そうでしょうね（気の毒な方たちですね、まあ自業自得ですが）」

ソフィアは、かわいそうな人を見るような表情をうかべた。俺が手加減しないのがわかっていからだろう馬車から豚が出てきた。

「おまえらも今から私の奴隷だ。ぐふっぐふっ」

気持ち悪いやつだな。喋るなイライラする。

「気持ち悪い豚だな」

口が滑った。

「なんだと貴様！！おいお前たち男は殺してかまわん」

沸点の低いやつだ。

丸腰だと侮ったのだろう傭兵が剣を抜こうとしているがのんびりしたものだっただと思ったらその傭兵が吹っ飛んだ。

ただの風の精霊を使った突風だ殺傷能力はない。これで時間も稼いだ。

「なつ、精霊術師だと」

その吹っ飛んだ男が立ったところで

「『風刃』」

腕を横に薙いだ。

とつさにしゃがんだ二人以外の奴隷商人と傭兵の首が風の刃に切り飛ばされた。

お、避けたよ、見えないはずなのに。よけた内の一人が切りかかってきた。

「まて！」

もうひとりが止めようとするが、俺は半身になって剣を避けて、風を纏った左手で剣を右手で顔を掴んだ

「なに！」

剣を握ったのに驚いたのだろうはい時間切れ。

「『流雷』」

バチィッ

顔を掴んだ右手から電流が流れ男は気絶した。もう一人の男が悔しそうにしていたので。

「気にするな、殺していない」

「えっ」

「俺の質問に答えれば逃がしてやる」

少し困惑していたが。

「わかった」

敵意がないことを示すためだろう男はその場に剣を置いた。

「何でも聞いてくれ」

「なぜ奴隷商人の護衛をしていたんだ？」

「えっ、どういことですか？」

ソフィアが驚いていた。

「この二人は、ほかと違う感じがした。」

実際格好からして傭兵もどきとは違った。装備にしっかりと手入れもしているようだし、何より質が違う。

「ああ、俺たちは冒険者だ」

「・・・冒険者がこんなことを」

ソフィアが蔑んだ目で見ていた。冒険者が慌てて

「いや、俺たちは商隊の護衛を受けたんだ。それが奴隷の運搬にすりかえられてて前金を使ってしまうていて下りることができなかったんだ」

「そうだったんですか」

ソフィアの表情が和らいだ俺は苦笑して次の質問にうつる。

「なぜ冒険者を雇っていたんだ？」

「運んでいたのが、高級奴隷と戦闘奴隷で結構な額で用心のためだったらしい」

「奴隷を解放するには、どうすればいい？」

「マスターキーを使うか、主が開放するしかない、キーは購入者の所にあるしだろっし主は君が殺しちゃったから」

冒険者は残念そうに

「中の二人は助けられないと思う」

ソフィアが悲しそうにしていた。だが今はは話せない、これはあまり公にはしたくないのだ。

「そうかありがとう。俺はジンこっちはソフィア、俺の女だ。」

ソフィアが頬を染め、ジークは羨ましそうにしていた。

「ソフィアです。先ほどは、失礼しました。」

「俺はジーク、冒険者だ。」

「ジークは中の二人について知っているのか？」

「いや、顔もしないな。」

それなら問題ないだろう。嘘をつく必要もないし。

「中の二人とやらは俺に任せてくれ。ジークは仲間を王都に運んだほうがいい」

「そうだな」

ジークは、仲間を荷物のように馬にくくると
なんか扱いひどいな、ほかにもないかやらかしているのか？

「本当にありがとう仲間を殺さないでくれて、王都に行くんだろ？」

「ああ」

「じゃあまた会えるかもしれないな」

「かもな」

そしてジークは去っていった。
あれは、前振りだろうか。

7話 奴隷の二人

それじゃあなかの二人とご対面しますかね。

馬車の中に入ると暗くてよく見えないが金髪と炎髪の少女が床に座っていた。

首には、複雑な模様のかかれた鉄の首輪のような物がつけれていた。俺の顔を見ると金髪には、ビクツと怯えられた、炎髪の方は俺の前まで来ると突然。床に頭を押し付け土下座の格好で

「奴隷の分際でお願い申し上げます。イリヤは逃がしてもらえませんか、どうか、わたしが戦闘奴隷も高級奴隷もいたします。だからどうかイリヤを逃がしてくださいお願いします。イリヤはまだ」

「黙ってくれ」

ビクツ

つい言葉に怒気を混じらせてしまった。炎髪が黙ってガクガク震えている。このとき俺は、かなり苛立っていた。

これがこの世界の普通なのか、自分の認識を改めさせられた。軽く会ってみるか、と思った自分が腹立たしい。

「ちょっと頭を冷やしてくる、ソフィア二人を頼む」

俺は馬車から出て少し離れて座り込んだ周りは血のにおいが充満していた。

初対面の誰とも知れない人間に對してすることが、あの対応なのかこの国は、それが普通なのかはわからない。

だが、今決めたこの世界から奴隷制度をなくす絶対になくす。たとえ国を滅ぼしても。

ソフィアに心配をかけてしまったな。

しばらくしてから馬車に戻った。

ビクッ

怯えられた

「ああ、さつきはすまなかった。」

「い、いえ、ソフィアさんから私達に対して怒っているわけではないと聞きましたので」

金髪の少女が初めて喋った。金髪を肩ぐらいまであつて顔はかなり整っている。髪から耳は尖っているのでエルフだった。

「あ、あの先程は、も、も申し訳ありませんでした。」

炎髪の方は、かなりの怯えている近くで怒気を浴びせてしまったから仕方ないか。

顔が俯いていてよく見えないが、それでも綺麗なのはわかった。髪をポニーテールにしているのも可愛い。

「あの私たちはどうなるのでしょうか」

「悪いようにはしない」

それでも二人は、不安そうだった。

「ソフィア、マスターキーはあったか？」

実は一応探してもらっていたんだが

「いいえありません。着飾るための衣装と宝石などがあるだけです。」

「やはりないか。・・・しかたない神様のやつにもらった力を使うしかないか。」

「あの助けをいただいてありがとうございました。ですが私たちは・

・・」

二人は、あきらめの表情を浮かべた。キーがなければ逃げることはできない、そんな二人に俺は、

「二人とも立つてくれるか？」

「「え」」

「ほら早く」

「「は、はい」」

その姿勢だとちよつとあぶないな

「ちよつと前かがみになつてくれる」

二人は、言われるがまま前かがみになる。

俺は、両手をあげ二人の鉄の首輪に手をあてて神様からもらった力『契約の無効化』を使った。

首輪が少し淡い光を放ったと思つたら。

ゴト

二人の首輪が落ちていた。

「「「え」」」

これには、ソフィアも驚いていた。

「驚いているところ悪いけど、どんどん行くよ、いいかい今から君たちは自由だ、そして俺たちと君達は対等だいいね。

ちなみに今の力は、『契約の無効化』つて力で神様とか余程のやつと契約しない限り無効化できる。つまり君たちはもう奴隷ではないんだ」

徐々に状況が飲み込めてきたようだ。絶望の表情は消えその顔に希望が表れる。いいことだ。二人でなにか話しているとおもむろに。

「あのお願ひがあります。」

「なんだい、聞けることならきくけど。」

「私達をあなたの奴隷にしてください」

「なぜそうなる」

「むう、覚悟はしていましたが、二日目で二人旅が終わってしまいまいた。

俺は、驚くというより呆れていて。ソフィアはなんだか残念そうだった。

理由を聞いてみると奴隷から開放してくれた恩を返すために側に置いてほしいらしい。

ならばどうすれば側にいられるか考えた挙句出た言葉が「奴隷にしてください」だったのだ。

「それじゃあ意味がないじゃないか」

「そうなんですけど」

「それなら別の形で仕えればいいだけです。それにジン様もハーレムを作ると言っていたではありませんか」

さっきまで残念そうだったのになぜかソフィアが乗り気になっていた。

（これで夜の営みを満足させて差し上げることができます。）

なんて考えていたことにジンが気づくはずもない。ハーレムと聞いて二人は、頬を染めていた。エルフの少女なんかちょっと嬉しそう

だった。

結局エルフの少女はメイド、炎髪の少女は護衛として仕えることになった。

「じゃあよろしく俺は、ジン。聖痕使いだ。」

「ソフィアです。水の精霊術師です。」

エルフの少女は、恥ずかしそうに

「イリヤです。治癒術師です。その、未永く可愛がって下さい」とんでもない事を言つてのけた。この子は絶対天然だな。

炎髪の少女は、くだけた感じで

「リリスよ、冒険者でギルドランクはB。これからよろしくねジン、ソフィア」

こちらが素なのだろう、これはいい傾向だ。

二人には、衣装のなかで比較的に落ち着いた服に着替えてもらった。ついでに宝石類を頂いた。二人とも何か聞きたそうにしていたが。

「先に王都に向かおう、宿でいろいろ話すよ」

「そうしましょう」

「わかりました」

「了解」

8話 宿屋とイリヤ

聞いていたことだが二日足らずで王都についてしまった。そのたった二日の距離しかない村が盗賊に苦しんでいたことに俺は、驚いた。これが国民に対する扱いが王なら治安にも気を使うべきだろうに。だが反乱は難しいのだろう成功しても失敗して死ぬのは奴隷だ。まず傷つくのは奴隷、この国ではそれが当たり前なのだ。

門はあっさり通れた。怪しいやつなどいちいち取り締まらないのだから。

もう夕方なので、ソフィアが一度泊まったことのある宿屋を目指した。王都を眺めているとやはり裕福なところと貧しい者の差は激しい裏路地を見たときは、吐きそうになった。

首輪の付いた死体がいくつか転がっていたのだ。俺は密かにこの国を滅ぼす決意を強くした。

もう他の物を眺めたりせず前だけを見て歩いた。ソウイア達もつらそうにしていた。不謹慎ではあるがそのことに安堵してしまっていた。

宿屋に着くとソフィアが女将に、

「ダブルとツイン一部屋ずつお願いします。」

「いやちよつと待てソフィア、まず三人部屋と一人部屋を聞くべきだろう。」

「三人でやるんですか」

「（何いってんだこの子は）いや違うから」

「それにツインとダブルの方が安いんですよ」

後ろの二人は、何も言わないので、後ぶっちゃけ女将の視線が痛い

蔑まれているわけではないのだがなんかニヤニヤしている。実はこのとき後ろでイリヤが何か言いたそうにしているのを見たからなのだが。

「わかった、それでいい」

食堂で先に食事を済ませた後。部屋に行った。ちなみにこの世界の通貨は、ギルだ。

金貨一枚〃	10000ギル
半金貨一枚〃	1000ギル
銀貨一枚〃	100ギル
半銀貨一枚〃	10ギル
銅貨一枚〃	1ギル

になる（半金貨、半銀貨は、混ぜ物があって色が鈍いのだ）1ギル
〃約10円だ。

一部屋150×2ギル、宿泊客は一食30×4ギル　しめて420
ギルの出費だ
それを盗賊のアジトから取ってきた銀貨4枚で払い半銀貨を一枚受け取っていた。

盗賊は周りの村を食い物にしていただけあつてかなり溜め込んでいた。換金の必要のない貨幣を幾らか貰ってきていたのだ。

その額は1万ギル　なので残高9580ギルなり

割り当てられた部屋の、ダブルの方に集まり、イリヤとリリスに魔物の大侵攻と神様に頼まれたことについて話した。

ソフィアの時のようにはいかなかったが、ソフィアが室内なのに空から降ってきたことをはなしたり、『契約の無効化』を思い出して

もらったり七つの聖痕を見せて一応の納得を得た。

嘘をつく必要性がないこととイリヤが聖痕について少し知っていたおかげだ。その上でついてくるかを聞くともちろん絶対について行くと言ってくれた。

「あのご主人様」

「・・・なぜにご主人様？」

「リリースが、メイドならそれが基本だと」

リリースが、ニマゝとしていた。まあ役得だからそのままで

「で、なんだっけ？」

「確か聖痕は、徐々に力を溜めていくもので使用にインターバルがあるのですよね？」

「ああ、よく知っているな。でも今は光と闇以外は、ほぼ満タンだぞ。光と闇についてはまだ聖痕の発動ができないから溜めることができないんだが」

「それでジン様は、盗賊も奴隷商人も聖痕を使わずに倒していたのですね。」

ソフィアが納得していた。

「そゆこと、まあ聖痕のおまけみたいなもので精霊と仲いいからな、でもなんでそんなこと聞くんのだ？」

「聖痕保持者が殺されるときは、基本そのインターバルの間ですから、ここにいる人だけでも知っておくべきかと思ひまして。」

「やっぱりそうなのか、まあ俺は、素でも強いし聖痕も七つあるから大丈夫だと思うが、ありがとなイリヤ」

頭を撫でてやると嬉しそうに細めた目から涙がこぼれた。

「どうした？大丈夫か？」

震えた声でイリヤが

「はい、うれしくて本当なら私今頃誰かに買われてきつと今も奴隷で、でもご主人様に助けていただいてうれしくて」

怖かったのだろう、頭を抱きしめ頭を撫でてやる。

しばらくそうしていると、リリスとソフィヤが、

「じゃあ今日はこの辺でお開きとゆうことで、ごゆっくりご兩人」

「たくさん甘えてくださいねイリヤさん」

部屋を出て行ってしまった。

もう外は真っ暗になってしまった。

「ご主人様」

「落ち着いたか？」

「はいご主人様の腕の中とても落ち着きます」

なんか言葉がとろけてきているな。頭を撫でていると顔を上げてきた近い。周りを見て

「あの、二人は？」

気付いていなかったのか。

「ああもうひとつの部屋にいったよ、ごゆっくりだと」

俯いたイリヤが顔を真っ赤にして

「・・・あのご主人様、・・・その・・・お情けを・・・ください」

詰まりながらもそういつてくれた。

「いいのか、俺はハーレムを作るつもりだぞ。」

「はい、ご主人様ならば当然です。私もそこに入れて同じように愛してくださればわたしは幸せです。それにもうソフィアさんは入っているでしょう、負けられません」

考えた時間は、ほんのわずかだった。

「わかった。イリヤ、俺の女になつてくれ。」

「はい、あなたの女にしてください」

「早速で悪いんだが・・・耳を触ってもいいか」

「ふえ・・・耳ですか、ど、どうぞ」

触つてみると不思議な感じがした、さわり心地は人間の耳とそこま
で変わらない気がするのだがあきらかに耳の形がちがうのが面白
かった。

特に触っているとイリヤが

「あつ・ん・んあ」

ちよつと喘ぐのだエルフで耳が気持ちいいのか、やるなイリヤ。そ
んなイリヤに我慢できずベットに押し倒して

「先に言っておく俺Sなんだ」

「ならば私がMになります。」

さすが天然のイリヤ、凄いセリフを平然と言うな。

俺は、イリヤと体を重ねた。

9話 宿屋の朝

異世界5日目

朝起きると隣でイリヤが裸で寝ていた。寝起きにイリヤの耳で少し遊んでからベットを出る。

自分が着替えた後、イリヤの体を布で綺麗に拭いていると。

「あ、おはようございます。ご主人様。」

イリヤが起きた。

「おはよう」

俺はそのままイリヤの体を綺麗にする作業を続けた。

「あの、自分で・・・」

「いいから、させて」

黙ってしまった。イリヤの顔が赤くなっていく。

・・・

「よし終わり」

「はう、ありがとうございます。」

恥ずかしかったのか急いで服をきている。
ちよつと意地悪をしたくなった。

「これでイリヤの体で触れていない所はないな」

ピタッ

止まってしまった。可愛いやつである。頭を撫で

「二人を呼んでくるから、早く支度しろよ」

部屋を出ると

「うっご主人様のバカ」

本当に可愛いやつである。

ちょっと時間を置いてからソフィアとリリスをつれて部屋に戻った。

「飯の前に少し話そう、大侵攻については昨日話したな、大侵攻を阻むのが一番の目標だが、それとは別に俺個人の目標もある。」

「ご主人様の目標ですか？」

「そうだそれはだな。・・・この世界から奴隷と奴隷制度をなくすることだ」

「・・・ジン様、それはさすがに難しいと思います。」

「そうだよジン、奴隷を持っているのは、基本的に支配者側なんだよ。」

二人は否定的だが。イリヤは、

「ご主人様、さすがです。どこまでもついていきます。」

とろん、としていた。

「まあ、これは決意表明みたいなものだ、一応手も考えてる。まだ不確定要素が多すぎるがなんとかなると思う。」

この言葉に、二人もなにか考え込んでいたが、何も言っただけで来なかった。

俺は、話を変えて

「大侵攻を阻むための協力体制を取る国を探す必要があるんだが、どの国がいいと思う？」

「それはやっぱりクイント皇国がいいと思うよ。あそここの王は、民に慕われているし。奴隷を禁止しているから、ジンの民にもありだと思っ。」

冒険者のリリースが発言した。実際のところ村からあまり出ないソフィヤやエルフの里から出てきて日の浅いイリヤ達に比べリリースは世間についての情報を持っていた。これは正直助かった。

「じゃあクイント皇国と協力体制を取る方向で行こう。クイント皇国となるとさすがに遠いから、まずは金か」

「それならみんなも冒険者になろうよ、そうすれば情報も力もお金も手に入るからさ」

「情報とお金はわかるが力も手に入るのか？」

「うん、あ、そっかジンは知らないか。あのね冒険者登録するときに丸薬みたいなのを飲むんだ。」

くわしくは、知らないけれどそれを飲むと体質が変わって魔物を倒すと気力と魔力が少くしずつあがるんだよ。個人差はあるけどね。」

「へえ、便利なんだな。戦えばある程度は強くなれるのか」

それなら俺はまだまだ強くなれるかもしれない。

「まあ強さの上限にも、限りがあつて上限までいくとギルドカードの称号に『到達者』っていうのが出るんだよ。

さらになんと能力ランクS以上の人は、『超越者』っていう称号が出るんだ。『超越者』は、凄く少ないんだよ。後、精霊術より魔術が主流なのもそのせいだと思うよ」

またまたリリース。冒険者なのだから当たり前なのかもだがちょっと意外だ。

「ジンなんか今失礼なこと考えていない。」

するどいな。

「いいや。それじゃあ装備とかいろいろ準備しなきゃいけないし。今日は、お買い物と冒険者登録ということでもいいかなできれば依頼？クエスト？も受けたい。」

「そうと決まれば朝ごはんにしましょう」

「ちよつと待つて、あともうひとつ聖痕についてはできるだけ伏せておいてまだ目立つわけにはいかないから、あと『契約の無効化』については絶対に喋っちゃだめ」

「『契約の無効化』もですか。」

「考えてもみて俺はあらゆる契約を無効化つまり無視できるんだ、それでは誰も怖くて契約できなくなるし悪用の仕方はいくらでもある。誰かが利用するために近づいてくるかもしれない。だからもしばれそうになつてもあくまで奴隷解放の能力ということにしておいて。」

実は、もうひとつあるのだがそれについては、今はいいだろう。

「……」

三人とも呆けた顔をしている
俺まで困惑して。

「どうした？」

「いろいろ考えているのですね、ますます惚れます。」

「さすがご主人様です。尊敬します」

「ほえ、ジンってすごいね、普通は力を誇示したくなと思うんだけど。人間ができてるのかな？」

照れくさくなったので

「よしこれで終わり飯に行くぞ」

先に食堂に向かった。

朝食 25 × 4 = 100 ギル

残高 9440 ギルなり

10話 登録とチーム名

朝食を終えた俺たちは、冒険者ギルドに、向かっていた。俺は、道中リリスに質問していた。

「そつえば称号てのはどんなのがあるんだ」

「いろいろあるよ？、ピンからキリまであつて、すごいのはやっぱり超越者かな」

「確か到達者と超越者は条件があつたよな全部そつなのか？」

「大体はそうだね、でも中には神様の気まぐれで、ユニークなものもあるらしいよ」

神様の気まぐれ・・・嫌な予感がするな

「なあ、登録するときに称号つて係の人とかに見られるかな？」

「見られるはずだよ」

どうしよう

「何か困る称号がでるのですか？」

つと、ソフィアが聞いてくる。

「ちょっと神様を思い出したら不安になったんだ、宿で言っただけでまだ目立ちたくないからな」

「はあ」

良くわからなかったらしい。まあ仕方ないかソフィアたちはあの神様に会ったことないからなあ。あいつ神様のくせにいたずら好きなんだよ。

そうこうしている内に、俺達は冒険者ギルドに着いた。

王都の冒険者ギルドは、あまり大きくない。この国に冒険者があまり来ないかららしい、この国に近づきたくないからだろう。

中に入ると、一応人がいるにはいた。ガラが悪いチンピラみたいなのがたくさん。

チンピラみたいなのは、俺を見た後、後ろの三人を見たらニタニタと気持ち悪く笑ってこちらに近づいてきた。

「なあなあ、嬢ちゃん達そんなのといないで俺達のところ来いよ」と、腕を伸ばしてきた。動こうとしたリリスを止めて。俺がその腕を掴んだ

「悪いなこいつらは、俺の連れでね」

「野郎にようはねえんだよ。ひっこんでろ」

俺は怒気を込めて

「これが最後だ。俺の女に触れるな」

一瞬怯んで何を思ったのかいきなり殴りかかってきた。
掴んだ腕に電気を流す。声も無く男が倒れた。

これだけで終わってしまった。周りは、なにが起こったのかわらないといった様子だった。

俺はそれらを見捨てて三人と奥に向かう。

「やっぱりお強いんですね。ご主人様は」

「はじめて見たけど、あっけなさすぎてジンの実力がぜんぜんわかんなかった。」

さりげなくリリースがさっきの男を雑魚だと貶していた。
むかついていたのだろう。

奥のカウンターで受付嬢に

「冒険者の登録がしたいんだけど」

「四名様ですか？」

あれ落ち着いてるな。もう少し怖がられるかと思ってたんだが

「いや、三人だ」

「では、こちらにどうぞ。」

別の部屋に通され

「ずいぶん落ち着いているんだな」

「この国では隙は見せられませんから」

よく見ると彼女は、黒い髪を肩でそろえていて少し鋭い目に眼鏡を

かけていて美人秘書といった感じだ。

「大変だな、俺はジンこっちは」

「ソフィアです。」

「イリヤです。」

「リリスだよ。」

「始めましてクレアと申します。」

ずいぶんクールな人だな。

「それではこちらに両手を置いてください。」

見ると部屋の中央に、腰の高さまである四角い石としか言い様のないものがあつた。

石の上に両手を置いて十秒ほどしたら強く光りだした。正直眩しい。

「なんですかこれは、こんなに強く光るなんて。それに時間がかかりすぎ」

「さすが、ジンだね。」

何度か見たことがあるであろうふたりが驚いている。

石からカードと黒い丸薬みたいなものが光から出てきた。出てきたカードは、光になって体に入ってしまった。残った丸薬をもって

「これで終わり？」

「うん終わりだよ。」

とリリスが答えた。クレアさんは、まだ呆けている。

その間に残りの二人の終わってしまった。やっぱり俺のときほど時

間はかからなかったし、光も弱かった。

この時には、クレアさんも何とか落ち着いていた。

「それでは、その丸薬を飲み込んでください、飲み込んだらカードを見せてください。登録しますので、出し方は、念じれば出てきます。」

三人とも丸薬を飲み込んだ後、カードを出してみる。

「お、出た出た。」

「よし、みんなで見せっこしよ」

「そうだな」

まずソフィアが

名前 ソフィア 種族 人間 性別 女

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力D 魔力C

チーム なし

称号 水の巫女 精霊術師

「精霊術師ですか、珍しいですね。」

「へえ、ソフィアって巫女さんだったんだ。」

次はイリヤだ

名前 イリヤ 種族 エルフ 性別 女

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力E 魔力B

チーム なし

称号 ジンのメイド 治癒術師

「・・・・・・・・」

次いこつか。

はい、リリース。

名前 リリス 種族 人間 性別 女

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム なし

称号 ジンの護衛 熟練者

「また変なのがある」

「あのクレアさんからでいいですか。」

「まあいいですけど。」

名前 クレア 種族 人間 性別 女

ギルドランク C

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム なし

称号 ギルド職員

「それじゃあ真打といきますか。」

ソフィアが嬉しそうに言う。クレアさんも興味があるようだ。顔が近い

「見せなきゃだめだよな。」
「だめですよ」

名前 ジン 男 種族 人間 性別 男

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力B 魔力D

チーム なし

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 三人の女の主

奴隷の解放者 精霊術師

「あ、あなた何者ですか？聖痕つてまさか？」

クレアさんを落ち着けるために魔物の大侵攻について話すことになった。

「ということで、できれば内緒にしてほしいんだ。」

「わかりました。世界の危機です、わたしも協力を惜しみません。」

ギルドの職員で目の前でカードを出されては、信じるしかなかったのだからすんなり信じてくれた。

思わぬところでギルド内に協力者ができた。

「気を取り直して一応ギルドやカードのことを説明いたします。最初のギルドランクは、能力ランクから二つ下のものがつけられます。

ランクは上位から、SSS - SS - S - A - B - C - D - E - F - G となります。依頼は、自分のランクよりひとつ上の物まで受けることができます。

成功が続けば昇格、失敗すれば降格です。昇格には、自分のランクより下の依頼をこなしてもあまり意味がありません。」

「つまり降格は、依頼のランクに関係なく失敗が続けば落ちるということですか？」

「はい、そうです。丸薬のことは知っていますか？」

「ああ、知ってる。」

「そうですか、あと、能力ランクは、あくまで気力と魔力の平均なので、精霊術師の実力は関係ありません。なのでジンさんは、すぐにランクを上げていけると思いますよ。

最後にチームについてですね、依頼や探索は複数ですることが多いですし、チームに専門の依頼もあります。あとチームをつくればお金の貯金ができます。個人の貯金は、人数が多くてできないんです。

チームに関してはそんなところですね、どうしますか、チームをつくりますか？」

「そんなに簡単に作れるのか？」

「ええ、チーム名さえ決まればすぐにでも」

「どうするか」

「ジン様が決めてください。私達は、ジン様の女なのですから」

「そうです。ご主人様」

「私もジンが決めていいと思う。」

「それじゃあ」

しばらく考えて

「『世界を結ぶ者達』でどうだろう。魔物の大侵攻には世界の人々の力が必要だ、そして俺達は国を種族を繋げなければいけない、だから『世界を結ぶ者達』」

どうだろう、真剣に考えてみたのだが

「おお、いいね、それ」

「そうですね。頑張りましょう。」

「今のこのバラバラな世界を繋げる。これは、戦いの後の世界が楽しみですね。」

「すばらしいと、思いますよ。」

こうして俺達のチーム名が決まった。

11話 依頼とお買い物

チームの登録が終わるとクレアさんが

「依頼は受けられますか？」

「そうですね、みんなで受けられて、お金を稼げるそんな都合がいのつてありますか？」

「ありますよ」

「・・・あるんですか」

これは、驚きだ。

「チーム限定の依頼でランクが低くいけどちょっときつい依頼があります。」

「どんな依頼ですか？」

普通なら疑うところだが俺はもうクレアさんを信用していた。

「討伐系の依頼で一週間以内に一定数以上の魔物を討伐する依頼です。成功報酬はそれほど高くないのですが、どの魔物をどれだけ倒したかで報酬が上乘せされます。」

「討伐すればただけ報酬が貰えるのか、いいね。それでお願いします。」

「では、皆さんのギルドカードに依頼をいれますね」

俺たちがカードを渡すとカウンターの石盤の上に置き何か操作していた。

「これで誰がどれだけ魔物を倒したかが分かります。ギルドカードを見てみてください。一番したに欄が増えていきますから。」

作業が終わり返してもらった。

ギルドカードを見ると。一番したに

総合討伐数 0 0 0

ジン討伐数 0 0 0

内訳

と、いった具合だ

「討伐指定地域は、オルムの森です。指定討伐数は300です。報酬に上乗せできるのは500なので上限は800ですね。」

「ありがと、次いでに何処かい武具屋と宝石商を知らないか？」

「武具屋でしたら、ギルドを出て左側の三件先あるところがいいですよ、ギルドが近いので商売もまとめですしギルドが懇意にしているので、宝石商は武具屋の正面にあるお店をおすすめします。」

「ありがと。じゃあ皆行こうか」

「頑張ってくださいね」

こうして俺たちはギルドを出た。

俺たちはまず宝石商で奴隷商人の馬車から取ってきた宝石や装飾品を売りはらった。

宝石と装飾品は三万ギルになった。
そして今俺たちは、勧められた武具屋にいる。

「誰に何がいるんだっけ？」

「わたしはレイピアかな、前使っていたのもレイピアだったし」

リリスは、すんなり答えたが、ソフィアとイリヤは黙ったままだ

「どうした？二人とも」

「実は何があるのか解らなくて」

「実はわたしも」

「じゃあ店主に聞いてみようか」

「じゃあ、わたしはあっちでレイピアさがすね」

「ああ、頼む」

リリスは剣が並ぶ場所にいった。

「じゃあ、二人とも行こうか」

奥に行くと恰幅のいいおじさんが話しかけてきた。

「いらっしやいませ。私はこの店の店主のドルトンと申します、何かお探しで？」

「ええ精霊術師と治癒術師で使えるそうなものつてありますか？」

「ふむ、精霊術師のかたは、どの精霊をお使いになるのですかな？」

「水の精霊です。」

「それでしたら」

ドルトンは、奥から小さな箱を持ってきて中を見せてくれた。それは青い石のような物のついた石の栄える綺麗な指輪だった。

「こちらについている石は、水の石といいまして魔力を込めると水の精霊が集まりやすくなるものです。名前は、そのまま水の指輪といます。」

「試しても？」

「どうぞどうぞ」

ソフィアに持たせてみる。するとしばらくしていつも以上に精霊が集まってきた。

これは、アリだな。

「これはいくらですか？」

「精霊術師は少ないので、需要は少ないのですが、水の石が貴重でして。8000ギルになります。」

「買います。」

「え、よろしいのですかそんな大金」

「装備をケチってソフィアが怪我したら大変だろ、だからいいの。」

「ありがとうございます。（やった、ジン様から指輪をいただけるなんて）」

「いいなあ、ソフィアさん」

イリヤが羨ましそうにしている。

それを見たドルトンが、気を利かせたのかおもしろそうに

「治療術師の方は、こちらなどいかがでしょうか？」

別の箱を取り出した。こちら指輪だ。こちらは、石は無く少し幅広く複雑な文様が描かれているこちら水指輪に劣らず綺麗な指輪だった。

「これは単純な、治療魔法を含む魔法の補助ですね。その中でも治療術を意識して作られたものです。ヒーリング・リングといえます。」

「

イリヤが目を輝かせていた。ソフィアは、少しうなだれていたが。イリヤがおそろおそろ

「あの、おいくらですか？」

「そのこちらは、治癒術を意識しているのと、装飾品もかねておりまして10000ギルとなります。」

「うう、高いです。」

イリヤが落ち込んでしまった。

「イリヤ大丈夫だから」

と頭を撫でる。撫でていると

「どうしたの？」

リリアが戻ってきた。

「ちょっとな、それより決まった？。」

「うん、ちょっと高いんだけど。」

そして、レイピアを出してきた。

「わたしスピードタイプだから。強度補強と軽量化の魔法がかけられてるこれを選んだんだけどね。値段がね、その〜」

リリスが、言いづらそうに

「4000ギルなんだ」

少なくとも二人よりは安い。

ああ、ふたりが落ち込んでしまった。

「あーえーと、後俺だな。刀はあるか？」

「刀ですか、内にあるのは、これくらいしか。」

刀の入った箱を持ってきて中から二本取り出した。あまりいい物ではない。ドルトンもそれはわかつているのだろうバツがわるそうだ。箱を見るともう一本小太刀があった。俺は妙に気になって

「それは？」

「ああこれですか。これは不良品でして抜けないのです。」

「見せてもらえますか」

「どうぞ」

持って抜いてみる。簡単に抜けた、すると突然、

「【初めまして、我が主、わたしは『鉄餓刀』（てつがとう）と申します。テツとお呼びください。】」

小太刀が喋りだした。みんなにも聞こえているのだろうみんな驚い

ている。しかし土の精霊術師でもある俺は、落ち着いていた。これは、土の精霊に似ている。

「よろしく俺はジン、誰にも抜けなかったらしいんだが？」

「【私は、土の精霊使いでないとぬけません。私の製作者が土の聖痕保持者でしたので。】」

「それですか。それでテツおまえは何ができるんだ？」

「【刀は切るものです。あえて言うなら金属等を吸収して成長することが出来ますね。】」

「よし買った。店主こいつは、いくらだ？」

「きみすごいね。土の精霊術師のかな？勉強になったよ。凄そうだけど他の人には売れないし1000ギルでいいよ。」

「これからよろしくなテツ」

「【はい、よろしくお願いします主】」

全部で23000ギルか・・・

「なあ、鎧以外に体を守るものってあるか？」

「それでしたら、防御の護符などいかがでしょう。魔力を通すだけで体の周りに障壁を張ってくれます。強度を魔力に左右されてしまうのが難点ですが。」

「それはいくらだ。」

「ひとつ1000ギルになります。」

「よし四つ買おう、全部で27000か」

「いえいえこれだけの金額を買っていただけるのです。珍しい物も見れましたしサービスで25000ギルでどうぞでしょう。」

「ありがたい。それで頼む」

お金を払い各々自分の武器と護符を持って出口に向かう

「毎度ありがとうございます。またのご来店をお待ちしております。」

9440 + 30000 - 25000 = 14440

その後も、イリヤとリリスの服や食料などこれから必要な物を買いきれ940ギルになった。

残金 13500ギル

12話 初恋

異世界6日目

- リリスサイド -

私は、今イリヤと魔物退治をしている。

最初はみんなで森に入ったのだが、この森のランクはEランクつまりFランクの冒険者まで入ることができる。

Bランクの私やジンにとって少々退屈だったのだ。総合で50匹ほど狩ったところでジンが（一週間で300なので単純にノルマは終わっている）

「ソフィアの修行をやるうと思うんだ」

という話になり

なので効率を上げるために二手に分かれたのだ。

ジンがソフィアの修行をするため、イリヤと私が組むのは必然だろう。

イリヤと知り合ったのは、奴隷時代に奴隷される際に負わされた怪我を、こっそり治してもらったのがきっかけで友達になった。（奴隷には、自害以外のことを命令でき禁止もできるが、イリヤは治療行為を禁止されていなかった）

奴隷の間、わたしは友達として不安に潰れそうなイリヤを支えることはできたと思う。でもその不安を取り除くことは出来なかった。

それを簡単に取り除いてくれたのがジンだった。イリヤにとってジンが特別になるのに時間はかからなかった。

そして私も奴隷の身から救ってもらった恩がある。好きではある、あるが、イリヤやソフィアと同じなのか自信がない。

小さい頃から冒険者をしていて忙しかったし、同じ場所にいる事がなく恋愛などしたことがない。初恋もまだだと思う。

ジンは、ハ、ハーレムを作るって言っていたし時間はあるだろうか。

わからないことはわからないのでわかるまで放置することにした。

「イリヤ残念だったね、ジンと一緒にいられなくて」

「うん、ちよっとね」

少し沈んでいる。

わかれる時は、平気そうだったのにやっぱりジンの側が一番安心できるのだろつ。励ますために

「それじゃあたくさん魔物狩ってジンにほめてもらおうよ」

「そうだね、頑張ったら。頭撫でってくれるかな」

イリヤが赤くなってる。イリヤは、ジンが絡むと頭が桃色になるなあ。いや天然なだけかな。

私達は、それから順調に狩りを行った。気付くとずいぶん奥に来てしまった。

そろそろ戻ろうかと思っていた時に私達はそれに出くわした。

それは、サイのような形をしていた魔物で、だが角は太く長さにいたっては、2メートルぐらいある。

皮膚は、黒い鉱物の様なもので出来ていてとてもスピードタイプの

わたしやイリヤの攻撃魔法が効くとは思えない。
名前はノワールサイ、サイ型の堅さが売りのAランクの魔物だ。
(何でこんなところに上級の魔物がいるのよ)

心中で嘆いていると、ノワールサイが突っ込んできた。
ヤバイ

私はイリヤを抱えて右に跳んだ。ノワールサイは、私達がいた後ろの木を、

三本ほどへし折った。

デタラメな突進力だ。ジンには悪いがこの突進に護符はあまり意味がないだろう。なので呆けているイリヤに

「イリヤ！きた道を戻ってジンを呼んで来て」

声が大きくなってしまった。

「リリースはどうするの？」

声が震えている。怖いのだろう当たり前だ今の見たのだから。それでもこちらを気遣うイリヤに

「私は、あいつを引き付ける。大丈夫ノワールサイの動きは、単調だから時間稼ぎくらいはできるから」

これは事実だが逃げられる保証はない。ノワールサイに障害物は、関係ないのだから

「わかった。待ってて絶対にご主人様を連れてくるから」

そう言つてイリヤは走り出した。

「それじゃあ張り切つていきましょうか。」

私は、引きつけるために無駄と知りながら切りかかる

あれからずいぶんたった。突進を防御せずにすべて回避する。回避しながら考える。

正直イリヤがジンを連れてくるのは、難しいだろうこの森は広いし、木で視界も悪いイリヤの体力も心配だ。だけど諦めた訳ではない、こいつの視界を奪えればスピードタイプの私は、逃げられるはずだ。こいつの動きも大体覚えた。

眼を潰してから逃走

これしかない。決めたら回避しながら時を待つだけだ。

それから何度目かの突進でノワールサイは、苛立っているのか無理な停止をした。

いい位置だ一歩で突ける。

(ここなら)

私はレイピアを突き出す。

ガキン

ノワールサイは首を下げてレイピアに角を当ててきた。レイピアは弾かれ体勢を崩してしまう。しまったこのノワールサイ、自分の弱

点を知ってる。ノワールサイが体当たりをしてきた。

ヤバイ

助走がなかったなので、私は回避とレイピアと護符で何とか受け流すことができたが。しかし、今度こそ完全に体勢を崩されて転倒してしまいすぐには動けない。

ノワールサイが再度突っ込んで来る。

（避けられない、死ぬ、ジン助けて）
眼を閉じてしまう。

・・・いつまでも衝撃は襲って来ない。

代わりに、心地良い風と暖かい体温を感じる、その体温が戦いで疲れ冷えた体を温めてくれる。

眼をあけると私はジンに、お姫様抱っこされていた。

（タイミング良すぎだよ、ジン）

「ジン！」

ジンに抱っこされたまま首に抱きついて頬にキスをした。

私は、初めて恋をした。

13話 魔物討伐

話は二手に別れる前まで戻る。

しかし、この辺の魔物は弱いな。ほとんどの魔物が、動物が少し強くなった程度のもので護符があれば死にそうにない。危険がないのはいいことなどだが。

俺は、狼に似たハイウルフを、鉄餓刀で切り裂きながら。鉄餓刀に話しかける。

「なんかお前普通だな。」

「【今の私は、主に抜かれたばかり初期性能ですので。】」

「前の所有者のときには成長しなかったのか？」

「【いいえ、ただ主が移った時に初期化されてしまうのです】」

「そらまた、面倒な機能をつけたもんだ。」

「【いいえ、そうとも言えません。前のままですとあまりに癖が強すぎますし、成長にもいろいろあるので主の好きなように育ててください。】」

好きなようにって

「具体的にどうすればいいんだ?。」

「【金属等を吸収させる時に、私を持って意識を集中してください。さすれば、勝手に主好みに成長いたしますよ。成長を続けければ隠し機能もあつたりします。】」

「それはそれは、楽しみにしていよう。」

いったん会話をやめてギルドカードを見る。

総合討伐数	050
ジン討伐数	019
内訳	ハイウルフ 10 グリーングリズリー 2 ラビットドン 7

50か、ソフィアのほうを見る。指輪の力は使えているのだが、攻撃が不得手らしいのだ。まだ、一体も倒せていない。ノルマは終わったしソフィアの修行でもするか

「皆ちよつときてくれ」

三人に側に来てもらう。

「どうしました?。」

「ソフィアの修行をやるうと思うんだ」

「何故ですか?」

「私やつぱり弱いですか? 一体も倒せていませんし」

イリヤは不思議そうにしていた。ソフィアは泣きそうになっていた。
った。

「いやそうじゃなくて、ソフィアって攻撃が苦手みたいだからその指導をしようかと思ってな、これから先自衛は出来たほうがいいだろうしな」

この言葉にソフィアも納得してくれて。泣き止んでくれた。

「たしかにそうですね。それではご指導お願いします。」

「それでは私達は、どうしましょう?」

「二人には悪いけど、このまま狩りを続けてほしい。討伐数がものをいう依頼だからね。」

イリヤは、一応攻撃魔術が使えるので今は、大丈夫だろう。

「わかりました。」

「了解」

二人と別れソフィアの修行が始まった。

いくつか術を見せてもらったが制御はうまいし精霊の力も申し分ない。となると、ただ攻撃用のイメージが持てないのだろうそれなら見せるのが手っ取り早い。

「ソフィア今から俺がいくつか攻撃用の術を見せるからそれをヒン

トにして。」

「はい。勉強させてもらいます」

ソフィアが意気込んでいる。

見せたのは、圧縮して撃つ『水撃』と圧縮した水でものを切る『斬水』この二つだけ。これから自分の形を見つけてくれるといいのだが。

精霊術には決まった形が無い、なので自分で形を作ったほうが力を発揮しやすいのだ。

練習を重ね『水撃』に近い物でハイウルフを倒せるようになったころ。

探査用の風の精霊がイリヤの声を拾ってきた。イリヤはなにか焦っているようだ。

「ソフィア今日は、ここまでにしよう」

「はあ、はあ、わかりました。」

しまったやらせすぎたか。

「大丈夫か？」

「大丈夫です。早く足を引つ張らないようになりたいですから。」

別にソフィアも集団戦なら問題はないのだが、今はイリヤのほうだ、リリスの声が聞こえないのも気になる。

「ソフィア悪いけどついてきて、何かあったのかも」

「何かって何ですか？」

「まだわからん、急ぐぞ」

俺は、駆け出す。迷わずに森の奥に進みすぐにイリヤを見つけた。

「大丈夫か？」

「ご主人様、・・・あの、はあはあ、その」

息切れしているし、えらい慌てようだ。

「落ち着け、なにがあつた。リリスは？」

そこでソフィアも追いついてくる。

「ノワールサイに襲われて、今リリスが引きつけてくれてご主人様を呼んできてつて」

俺は、ソフィアに聞いてみた。

「やばいのか？」

ソフィアの顔も強張っていた。

「ノワールサイは、Aランクの魔物です。単純な意味でBランクのリリスさんでは勝てない可能性が高いと思います。」

くそ、俺のせいだ一目から二手に分かれるんじゃないものな。こういう依頼は、なにが起るかわからないものなの。

「すぐに行く。二人はここで待ってて」

「どうやって行くのですか？」

道案内のことだろう。しかし、それには取り合わず。使う覚悟を、決める。

「聖痕を使う」

俺は、リリスのためにこの世界ではじめて聖痕を使うことを決めた。

風の聖痕を発動

「聖痕発動『嵐帝』」

俺の、周りを風が包む傍目には風の衣を着ているようにも見える。発動と同時に俺の視界と感覚が広がっていく。

見つけた。

『嵐帝』状態の俺は、このオルムの森をすべてを見通すほどの探索範囲を持つリリスを見つけるのにかかった時間は、二秒ほどだ。呆然とする二人に

「ちょっと行ってくる。『疾風』」

俺は、ものすごい速さで走り出した。覚えたばかりの気を使い脚力をあげ、『疾風』で空気抵抗をなくし追い風を起こす、邪魔な木や魔物を風で吹き飛ばしながらリリスの場所に向かう。

二人の目からはすぐに見えなくなってしまった。

「あれが、ジン様の聖痕の発動」

「ご主人様の、本気」

二人は、自分達の近くにラビットドンが来るまで呆然と突っ立っていた。

見えた。

黒いサイの前からリリスを掻っ攫い嵐帝を解く。

リリスが突進を受ける寸前に、助けられた。

ギリギリだった。よかった本当によかった。後少し遅れたもうリリスに会えなかったかもしれない。この世界ではじめて死を身近なものに感じた。

目を閉じているリリスの身体は、長時間の間、回避のみの体力より精神面の戦いだったからか、とても冷えている。

リリスが目を開けると、目を潤ませて

「ジン！」

抱きついてきて頬にキスされた。

この状況でキスされたことに驚きながらも俺は嬉しくなった。特別になれた気がしたから。

「リリス、大丈夫？」

「うん、平気ジンが助けてくれたから。」

「じゃあちよつと待っててあれ片付けてくる。」
そういつて側に降ろす

リリスは残念そうにしながらも腕を離してくれた

「うん、待ってるね」

リリスが信頼の眼差しを向けてくるなか
律儀に待っていた、ノワールサイの前に行き。

「おい黒いの。俺は、俺の大切な女を傷つけるやつを許さない。ちよつと残酷な死に方をしてもらうぞ」

次の瞬間ノワールサイが突っ込んで来る。俺は、右足を上げ地面に落とす。

「『五重・土壁』」

俺とノワールサイの間に5枚の土壁が地中からせりだす。ノワールサイはそのまま突っ込み土壁を粉砕するが4枚目で突進が止まった。

今度は両手を地面置いて

「『落とし土牢』」

ノワールサイの地面が陥没し円柱状に穴が開き、ノワールサイが落っこちる。ノワールサイは、狭くて身動きがとれず這い出ることができない。

そこでリリスが近づいてくる。

「もう終わったのさすがだねジン。」

「いや、まだだよ。言つたる残酷な死に方をしてもらつて」

「な、何するの？」

「こうする、『炎蛇・六首』」

炎蛇を一分ごとに一匹ずつ穴に順次投入し長時間熱する。皮膚のおかげで燃えることはないが、熱は感じるだろう。生き物なんだから当たり前だ。

つまり俺は、ノワールサイを生きたまま焼き殺したのだ。

ノワールサイは身動きも息も叫ぶことも出来ず悶えながら死んだ。

「ジンすごい、大好き」

リリスとしては、自分の好きな人が自分のことで怒ってくれたのが嬉しいらしく、抱きついてきた。俺も失ったかもしれない女の子を大事に抱き締めた。

しばらくした後、キスをして離れる。

「二人のところに戻るか」

「ちょっと待つて。あれ冷やしてくれないかな？」

リリスが、ノワールサイを指す。俺は怪訝を思いながら水を出して冷やす。

穴に降りてリリスが近づき

「『採取』」

光がノワールサイの身体を包みこむ。するとノワールサイの角が根元で折れたり体から黒い鉱石が出てきた。

「この魔法で素材とか貴重な部分を取れるんだよ。まあランクB以上の魔物じゃないと碌な素材が無いから最初はいらないんだけど。Bランク以上の冒険者では、わりと必須なんだよこの魔法。」

そういいながら角を冒険者用の袋に入れる。この袋は、入れた物を自動で圧縮してくれる優れものだ。リリスのレイピアと同じ軽量化の魔法もかけられている。

次に黒い鉱石も入れていった。

「今度こそ行こうか」

と声をかけるとリリスは近づいて来て、腕を絡ませてきた。今までで一番いい笑顔で、

「そうだね。行こ」

そのまま俺達は来た道に戻った。

14話 三人の思い（前書き）

稚拙な文章ですが、よろしくお願いします。

14話 三人の思い

戻った俺達を迎えたのは、温かい目線で俺とリリスを見る二人の姿だった。

「どうしたんだ、二人とも？」

「いえ、やっぱりこうなりましたか。」

「ジン様が助けに行ったのです。リリスが惚れても仕方ありません。」

「

そのことが、まあ俺は、前から俺の女発言しているしな。リリスを見ると。

俺の背中に隠れて顔を真っ赤にしてもじもじしていた。なにこれかわい。

「今日は、譲りましょう」

「今日だけですよ、リリス」

リリスが小さく返事をした。

「うん」

今このテントには俺とリリスが向き合って座っている。

リリスが髪と同じくらい真っ赤な顔で一生懸命に

「あの、ジンお願い、抱いて」

俺は無言でリリスの手を持って引き寄せ、キスをする。俺は、長いキスの後リリスのすべてを征服していった。

リリスは、冒険者なだけあって体力がありすべての行為を受け入れてくれた。

異世界7日目

横で裸のリリスが寝ている。起こさないようにその場を出る

今日で依頼二日目か、と思いながら鞘からテツを取り出します。取り出した小太刀に

「そっいえばお前、金属とかを吸収するんだよな。」

「【そうですよ、主】」

「これなんかどうなんだ？」

昨日手に入った、ノワールサイの鉱石をテツの近くに置く。

「【これはノワール鉱石ですね。かなり良い物ですね、吸収してもよろしいのですか？】」

「ああ、かまわない」

「【それでしたら私をノワール鉱石の上に乗せてください】」

「こうか？」

テツを、ノワール鉱石の上に置く。すると、鉱石が光だし粒子になってゆつくり吸収されていった。
鉱石がなくなると、今度は、テツが光だし光が消えるとテツの刀身が綺麗な黒色になっていた。

「へえ綺麗だな。」

「【ありがとうございます。】」

なんか、うれしそうだな。

「【切れ味も良くなっていますよ。昨日の魔物を切れるくらいには】」
「

それは、何気に凄いのではないのか？聞いてみると

「【それだけ良質だったのです。倒し方も良かったのでしょうか】」

ああ、丸焼きだったもんなあ。たしかに傷なんかもなかっただろうな。

あとは、問題がひとつある。これを解決するために討伐に出る前に一度皆にあつまってもらった。

「実は、これからの討伐に問題がでてな」

「問題ですか？それはどのような？」

「聖痕を使ったときに見つけたんだが。ノワールサイが、奥のほうにまだいるんだ。」

「『えええ！』」

「だから、俺が先行して倒すから皆にはここら辺の魔物を討伐してほしい」

「わかりました、けど、大丈夫なんですか？Aランクなんですよね。」

心配そうにソフィアが聞いてくるそれに

「大丈夫だよジンなら、私を助けてくれた時も余裕そうだったし。」
自慢げにリリスが答えた。

「そうゆうことじゃあ行つて来るね。と、その前にリリス『採取』の魔法教えてくれる」

「いいよ」

『採取』を教えてもらった俺は、一人森の奥に向かった。

- イリヤサイド -

ご主人様は、森の奥に行つてしまいました。私達は、この辺りの魔物の討伐を任せられました。

今日もご主人様とあまり一緒にいられないのが残念です。

それにしてもあの聖痕の発動『嵐帝』といいましたか、あれは凄かったです。精霊術師ではない私にも精霊の存在がわかるほどの精霊が集まっていたのです。

その後の探知も数秒で終わりました。後で聞いたら、風の精霊は探知が得意で、雷の精霊の次に早いそうです。

その力で救われた、リリスは、帰ってきたときすでにご主人様のことが好きになっているようでした。それにすごく可愛くなっていました。

このあたりの魔物を粗方片付けたころ、お昼になっていました。ソフィアさんが

「そろそろお昼にしませんか？このあたりにはもうあまり魔物はいないようですし。」

この方は、ソフィアさんご主人様のこの世界に来たときから行動を共にしているそうです。羨ましいです。

「そうだね、ジンもまだかかるだろうし」

こちらはリリス、私の友達です。奴隷にされていたときにできた友達でいろいろ相談に乗ってもらいました。ご主人様という呼び方も彼女に教えてもらいました。

私もお腹がすいてきていたので

「私も賛成です。」

三人一致で昼食となりました。周りの良く見える場所に移動して、携帯食料や果物やパンなど簡単な物を食べています。

実は、このパーティー料理の得意な人がいなかったのです。ご主人様が一番まともではありましたが、簡単なものしか作れないしこの世界の食材に詳しくないと言っていました。いつかは、改善したいです。

「リリスさん、昨日はどうでした？」

いきなりソフィアさんが爆弾を投下しました。

「ど、どうってなにか」

「夜の営みです。」

「えと、その、ねえ」

リリスはこの方面は、ウブですねえ。

「勘弁してください。」

リリスは、何気に一番ウブだと思います。
そういえば、

「そういえばこうやって三人で話すのって初めてですね。」

「そうですね。いつもジン様がいましたから。」

「そうだよね、私達の中心って間違いなくジンだしね。」

「あっ」

ソフィアさんがなにか思い出したようです。大事なことなのか真剣な表情で教えてくれました。

「ジン様もいないですし、伝えたいことがあります。これは、ジン様がこちらに来たばかりのことなのですが。」

ジン様が、（ありがとうソフィアついてくると言ってくれて。俺実はこの世界では、一人ぼっちだったんだよね） と言っていたことがあるのです。」

「それって」

「ご主人様」

声に、悲しみが混じります。

それは、どれほどの孤独なんだろう。わたしはご主人様の強さに目を奪われて、私はそのことに気づきませんでした。

「当たり前なんですけど、この世界にジン様が来たとき、縁のある人は一人もいませんでした。

ですから、仲間であり私と同じでジン様が大好きなあなた達に話したのです。そしてこれからも一緒にジン様を支えていきたいのです。お強いジン様の孤独を埋め、支えるのは一人では無理ですから」

「そうですね。もっと力をつけて役に立たないといけませんね。その点リリスはいいですよねえ、冒険者の知識を持っているからご主人様のお役に立てて」

「でもあたし冒険者なのに戦闘では役に立てなかったし、イリヤは治癒術があるじゃない」

「ご主人様は怪我しませんし、してほしくもありません」

「私も攻撃の術がまだいまいちで。」

・・・

「「「はあ」「」」

みんなでため息をついてしまいました。

「でも好きな人のためです。がんばりましょう。」
「そうだね」

「その点は、ここにいる人は大丈夫でしょう」

私達は、決意と結束を強い物にしてご主人様のため何ができるかを考えます。

日が沈む少し前にご主人様が帰ってきました。私達は三人ともご主人様のもとに走って向かいます。

「お帰りなさいませ、ご主人様。」

「お疲れ様です。ジン様」

「おつかれ」

「ただいま、みんな」

ご主人様は最初驚いていましたが、すぐにうれしそうに笑ってくださいました。

ご主人様ずっとお側にいますよ。

経過報告としては、昨日より順調に進んでいます。内容としては

1日目 072

2日目 242

内 ジン 105

ソフィア 028

イリヤ 036

リリース 073

これなら一週間より、はやく終わりそうですね。

「ご主人様、あしたも頑張りましょう。」

14話 三人の思い（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

15話 討伐報酬と幼い龍

異世界11日目

「お帰りなさいませジンさん。ご無事で何よりです」

俺達は、5日で依頼を終え6日目には王都に戻りそのままギルドに来ていた。

「クレアさんお久しぶりです。これが討伐数です。」

そう言っただけは、ギルドカードを見せる。

クレアさんが俺のカードを、受け取りながら三人に。

「他の皆さんのも見せてもらってよろしいでしょうか、内訳が計算に必要なので。」

三人も渡す。クレアさんが内訳を読みはじめた

「えーとノワールサイ？それも三体！？」

「どうしました？クレアさん」

「あの、欄にAランクの魔物があるのですが」

「ええ、倒しましたよ。あ、リリースに聞いたんですけど、素材ってここで買い取ってもらえるんですね。」

「え、ええ、はいそうです。能力ランクCでAランクの魔物を倒し

ますか、さすが聖痕保持者ですね。・・・ちょっと待っていてください。」

奥に戻り、貫禄はあるが少し疲れていそうな中年の男性が連れて戻ってきた。

「君がAランクの魔物を倒したのかい？」

少し不審そうにしている、仕方がないがちょっとムカつくな。なので証拠を出す

「ええこれがノワールサイの素材です。」

角とノワール鉱石を取り出す。

「こちらの方が例の聖痕保持者です。」

「・・・聖痕を見せてもらってもいいかな？」

クレアさんが話しているのなら仕方ないか。

「どうぞ」

左腕の聖痕を見せる。

「先程は失礼しました。ギルドマスターのガルダと申します。突然ですが特例であなた達のランクを上げたいと思うのですがよろしいでしょうか、クレアの推薦です。」

「はい？いいんですか？」

「ええ実力がある人に、依頼をどんどんやってもらうためにたまにあるのですよ。受けていただけますか？」

「まあランクが上がるのはありがたいから構わないが」

「それでは、Aランクを倒した、ジンくんはEランクからBランクに、イリヤさんとソフィアさんはFランクからEランクに上げたいと思います。」

「いきなりBですか、よろしいので？」

「ええそれだけ期待しているのです。それでは、わたしはこれで仕事がありますので」

奥に戻っていつてしまった。すぐに行ってしまったな忙しいのか？
思わぬ形で昇格してしまったな。

「それでは、報酬についてですねちょっと待ってください」

討伐した内訳は

総合討伐数 812

内訳

ノワールサイ	003	ハイウルフ	332	グリーングリ
ズリー	101	ラビットドン	296	バインドスネーク
80				0

となっている。

上乗せ報酬は

Aランク⇨金貨一枚

Bランク⇨半金貨一枚

Cランク⇨銀貨一枚

Dランク⇨半銀貨五枚

Eランク⇨半銀貨一枚

Fランク⇨銅貨一枚

Gランクの魔物はいないらしい

「上乗せ報酬としては、Aランクが3、Dランクが181、Eランクが628なので。超過の12体を除いて金貨三枚と半銀貨152枚分なので総額45210ギルになります。」

「「「「おお「「「「

「お金持ちです。」

「一週間で45000ギル、冒険者って儲かるんですね。」

「いやいや本来Eランクの報酬じゃないからねこれ、普通なら10000ギル前後ってところだよ。」

リスが二人に常識を語っている。
それを横目に

「素材の方はどうなりますか？」

「ちょっと待ってください、ええと、ノワールサイの角700ギル、ノワール鉱石ひとつ250ギルいくつ売りますか？。」

「？ほかにも使い道が？」

「ありますよ、鍛冶屋で加工したり需要の高いところで売ったりですね。」

角は3本、鉾石は14個ある（ひとつはすでに消費している）
一応少し残すか

「じゃあ角を二つと鉾石を12個売ります。」

「はい、ありがとうございます。4400ギルになります。」

合計49610を受け取り

13500 + 49610 = 63110

持ち金63110ギル

「クレアさんこの辺りで一番いい鉾石って何ですか？」

「鉾石ですか？」

「金属ならなんでもいいですよ」

「それなら竜輝石がありますが。これは入手困難なんです。」

「なぜです？」

「昔はよかったです、今は龍の縄張りなのです。」
いるのか龍が

「龍ってやっぱり強いのか？」

「種類にもありますが上の方は最強種に選ばれるほどです、知能も高く言葉も扱います。」

ぜひ見てみたい、会ってみたい。

それに協力を取り付けられれば大きな戦力になる。決めた

「それってどこにあるんですか？」

「・・・行くのですか？」

クレアとしては心配なのだろう

「行く」

「あなた達はいいの？」

クレアさんは後ろの三人を見る。

「どこまでもついでいきます。」

「ご主人様の望むままに」

「右に同じ」

クレアさんがしゅしゅ。

「わかりました。教えますよ、龍のいる場所はノーバル山です。」

俺は今ひとりでノーバル山にいる。なぜ一人かというとクレアさんが

「ただしあそこは龍がいるのでBランク以上の人しか入れません。」

「「ええ〜」」

「やった」

リリスが喜んでるが

「リリスは、王都に残って長旅の準備をしてほしいんだ。」

「ええ〜」

三人には駄々をこねられたが何とか説得した。ベットの中で。

そういうわけで一人で山の頂上を目指しているのだ。ここに来るのに一日かかった。

ここは、龍がいること意外はいたって普通のところで。龍がいないころのノーバル山は、Dランクの冒険者が入れる山だった。だから、強い魔物はいないはずなのだ、はずなのだか。

少し先で小型の龍とBランクの牛鬼三体が戦闘していた。いやどちらかというと牛鬼が小型の龍を襲っているようだ。

どうするか迷っている間に牛鬼の持つ棍棒が龍を襲い直撃を受け倒れてしまった。

（悩むのはやめだ）

まず助ける。それからだ

決めたら即行動、駆けると同時に龍に止めをさそうとする牛鬼の顔に炎球を叩きつけ一番近い牛鬼の首を後ろから鉄餓刀で切り飛ばす。

あと二匹、こちらから手を出さなかった牛鬼がここで状況を理解したらしく棍棒を振り下ろしてくる。これの攻撃に対し、右の鉄餓刀で受け流しながら風を纏った左手で喉を貫く。首に穴の開いた牛鬼は、血を吐きながら後ろに倒れる。

あと一匹、最初に炎を顔にぶつけた牛鬼は、仲間が倒されたことで逃げようと背を向ける。その背を見ながら左手を空に掲げる

「『落雷』」

上空に集めていた雷の精霊で牛鬼に雷を落す。

『落雷』を受けた牛鬼は黒焦げになり絶命する。

ひとまず片付いたな。

龍の状態を確認しようと、後ろを向くと女の子になっていた。

「・・・何故に？」

気を失っている女の子が答えてくれるはずもなく、疑問はなくならないが。

「まあまず安全なところに移すかね」

近づく顔が見えた。文句無し的美少女だ。驚くほど綺麗で長い銀髪だ。年は10歳くらいに見えるが龍であるなら見た目はあてになるのかわからない。

少女が横になれる場所を作りそこに寝かせ、精霊術で結界を作る。荷物の中で一番回復効果のあるポーションを少しずつ飲ませる。

俺にはこれ以上のことができない、駄目だなあ俺。

夜通し看病を続けいつの間にか寝ていた。

異世界14日目

座ったまま眠っていたらしい、目が覚めると少女は先に起きていた。どうすればいいのかわからないといった感じだ。昨日のことを思い出し、こちらから話しかける

「おはよう、体大丈夫？」

「は、はい。大丈夫みたいです。」

答えてくれた。さてどうしたもんか。

「良かったよ、ポーションが効いたんだね。龍に効くか心配だったんだ。」

「あの、ありがとうございます。わたしは、ティリエルと申します。」

「そんなにかたくならないでいいよ。俺はジン、冒険者だ。」

「あの、何で助けてくれたのですか？それにこんなに親切に」

「うーん、何故と聞かれても特に理由は無いんだよなあ。牛鬼がムカついたからかな？親切にしたのは、君が可愛かったからかな」

「な、なな、なんです。いきなり」

真っ赤になって慌てている。初々しい反応だ。

「いや俺は、君の問いに答えただけなんだけど」

「むう、変な人です。それだけで助けるなんて」

「いやいや、美少女は貴重だよ、宝だよ」

「も、もういいです。それでなにかお礼がしたいんですが」

「そんなのいいよ。」

「そういうわけには」

身を乗り出そうとして

「イツ」

痛みに顔をゆがめるティリエルに

「じゃあお昼までは安静にしておいてくれると助かるかな」

「むう、わかりました。そうさせてもらいます。」

やはり本調子ではないようだ。不服そうではあったが横になってくれた。

「そういえば龍って、なにが食べられるのかな？」

「人と同じ物を食べますよ。」

「それじゃあ軽く食事にしよう。」

持ってきた食べ物の内、果物類を中心に渡す。

「いいのですか？」

「いいのいいの。そういえばこれからどうする？」

「父の所に戻ろうと思います。心配しているでしょうし。」

「そっか」

そういえば俺って龍に会いに来たんだっけ。ティリエルに頼んでみようかな、と考えていると。

「あの、一緒に来てもらえませんか？」

16話 聖痕使いVS銀龍

あの後、いっしょにティリエルの父親の所に向かうことが決まった。朝食を食べた後にポーションをもうひとつ飲んでもらい、いくらか良くなったがまだ体が痛むようなので、俺が背負って行くことにした。

背負われたティリエルは、この時、道を指差しながら

（背中広いです。強いし優しい、私にはいけないけどお兄様とはこんな感じなのでしょうか。）

なんて暢気なこと考えており、この後起こるであろうことをまったく考えていなかった。

ティリエルの言うとおりに進み、開けた所に山小屋が見えてきた。山小屋？え？

「もしかしてあれ？」

「そうですあれです。」

なんというか。イメージが崩れていった。

「家なんだね」

「わたし達を何だと思ってるんですか。私達は、人の姿になれますから、家にくらい住みます。それに人の方が燃費もいいんですよ、怪我したとき人の姿になったのもそのせいです」

それでかと俺が疑問をひとつ解消していると。山小屋の扉から

「ティリエル、いったいど・・・ここに・・・」

渋いおっさんが出てきた。おそらくティリエルの父親だろう。心配していたのだろう慌てて出てきた、しかしそのティリエルの父親の言葉が途中から小さくなっていつて最後は俺に焦点を合わせる

「貴様の仕業かー」

「・・・面倒そうな父親だね。ティリエルちよつと降りてもらっていい」

「人の娘を勝手に呼び捨てにするなー」

「落ち着いてください、お父さん」

「だれがお父さんだー」

最後はちよつと遊んでみた。

「貴様殺す」

ティリエル父は、いきなり銀色の光に包まれ丸い光の玉ができる。それが一気に大きくなって二階建てくらいの大きさで光がはじけた。すると中から、いかにも強そうな銀龍があらわれた。銀龍は、この世界でも有数の力を持った存在らしい。たしかに、彼から受けるプレッシャーは、戦闘時の精霊王たちに近いものを感じる。手加減なんてできそうにない。

「ティリエル急いで離れて、ちよつと派手な喧嘩になりそうだ。」

「だめです。死んじゃいます。私といった方が」

泣きそうになっている。まったく父親の癖に何してるんだ。
ティリエルの頭を撫でながら

「大丈夫どっちも死んだりしないから」

いざとなれば切り札もある。

「信じますよ。」

「信じて。」

ティリエルは急いで距離を取る。

「娘といい雰囲気をつくるな――」

「うつせー、子離れの時間だ親バカやろっ」

聖痕使いと銀龍の喧嘩が始まった。

「『七重・土壁』」

まず土壁で俺の姿を隠すが、すべての土壁を尻尾の一振りで破壊される。狙いの定まっていないう尻尾をなんとかよけて、土煙の中側面に回り込む。

「『炎蛇・四首』」

炎の蛇、四匹で多角的に攻撃する。三匹直撃した。

が、まったくの無傷、しかし驚いてはいた、俺が二種類の精霊を使ったことに対してだろう。

それでも銀龍はその驚きを押し隠し、避けずにつくった時間を使って魔法を行使する。

「駆けるは魔の風、無数の刃となりて我が敵を切り刻め『トルネード』」

チツ、口を狙うんだった。というか竜の形態でも喋れるんだな。放たれた『トルネード』は広範囲に回転する風をぶつけてくるものよ。うだ。その中に、風の刃が無数に存在する。詠唱そのままだな。

これは防ぐのも避けるのも難しい。なのでもうひとつの方法を取った。

次の瞬間俺のいた場所に『トルネード』が直撃する。風が止むと俺は、

地中から這い出た。

つまり、地中に潜ったのだ。それを見た銀龍はそれならばとブレスを放とうとしている。

このバカがこいつクラスの龍がブレスを放てば周りが吹き飛ばぞ、ティリエルのこと忘れていないか。

仕方なく

「火の聖痕を発動『炎王』」

体を炎が包み炎の鎧を着ているようにも、ジンが燃えているようにも見える。

銀龍はまた驚きながらもプレスを放つ、規模は小さい意外と冷静か？それとも侮っているのか？

「『炎竜砲』」

俺はそのプレスを、超高温の熱線で全力を持って迎え撃つ。思ったよりプレスの規模が小さかったため、一瞬の拮抗の後、熱線がプレスを押し返し銀龍に向かう。

銀龍は、自分に向かってくる熱線を見てプレスを中断し熱線进行を避ける。熱線は後ろの森に落ちクレーターを作る。

「避けんな！」

「避けるわ！」

ちっ、炎蛇はよけなかつたくせに。

あゝあ、銀龍の後ろの森が火の海だよ。

「貴様、聖痕持ちかそれに複数の精霊術を扱う。人間か？」

「失礼なやつだな。俺は異世界人だ。」

「ほう、いつそその方が納得ができる。面白い、良からう次の攻撃を凌いだら娘との仲を認めてやる」

まだ勘違いしてるよ。まあ親に先に認めてもらうのも悪くない。俺は『炎王』を解除し、

「いいだろう受けてたつ。土の聖痕を発動『岩皇』」

『岩皇』は『炎王』とは違い見た目は変わらない。しかしよく見るとジンの足が地面に沈んでいる。ジンがとてつもなく重くなっているのだ。

「ほかの聖痕もあるのかますます面白い受けてみる、銀龍の最大のプレスを」

「受けてたつ。俺の全力の守りだ『土鉄岩金壁』」

これは、土壁・岩壁・鉄壁・金剛壁の壁を最大の大きさでつくる術で、もつとも防御力が高い。

完成と同時にプレスが放たれる。土壁が岩壁が受けて威力を散らし鉄壁と金剛壁が防ごうとする。

金剛壁に亀裂が入った。地形すらも変えるだろう凄まじい威力。しかしこの術の最大の特徴、

それは、防壁の維持が必要ないことだつまり。

「雷の聖痕を発動『雷神』」

『雷神』は雷が体を包みジン自身が雷のように見える。

「『タケミカヅチ』」

雷で螺旋状の槍を作り出し、プレスが防壁破ると同時に投げる。雷槍は、プレスの中心を突き破って進む。勢いは止まらず銀龍は、直撃する前にまたも避ける。

「どつよ」

「・・・完敗だ。まさか人に押し返される、いや貰かれるとは思わなかったよ。」

そう『タケミカツチ』は、雷の槍を回転させて一点を貫く技だ。

「いや、まだだ、あんたに見せたいものがある」

「まだ何かあるのか？」

「ある。この後話すことを円滑にするために見といてくれ」

「いいだろう」

俺は、銀龍に切り札を見せる。

今日の前には、誤解を解いたあとティリエルと銀龍あらためアルベルトさんに、魔物の大侵攻についてと異世界人であること、精霊界で修行しすべての聖痕を持っていることを話し終わったところだ。

「そのための切り札か。それでここに来た目的はなんだ？大体予想はつくが。」

「まずは、アルベルトに戦列に加わってほしいんだ、頼む」

俺は、頭を下げる。

「・・・いいだろう。我はしばらくの間ここにいるから、必要なときに呼んでくれ。」

「いいのかそんなにあっさり、龍でも危険な戦いかもしれないぞ」

「かまわない、ジンは我を凌駕しているし、全力をぶつけ合った仲だ。龍は強い物に従う。それに私はジンと友になりたいと思っている。」

凌駕か、確かに切り札の俺は反則みたいなものだからな。しかしこれはありがたいので。

「ああ、これからもよろしくアルベルト」

「そこでだな。ひとつ頼みがある」

「なんだ？」

全然予想がつかない。

「ティリエルを連れて行ってやってほしい」

「なにを言い出すのです。お父様！」

「はっ？お前ティリエルのことであれだけ怒ってたじゃないか。」

「まあ、そろそろティリエルにも世界を見せるべきだと思っていたんだ。ジンなら安心だ。それにティリエルもお前のことを好いてい

るようだしな。そうだろうティリエル？」

「うつ・・・はい」

頬を染めて小さく頷く。

「えと、俺複数の女性と関係持ってますよ。」

「龍はそんなこと気にせんよ、なあティリエル。」

「はい、その、連れて行ってください。お願いします。」

「いや、でも、まだ年齢的に」

「私これでも15歳です！」

15歳なのか12歳くらいに見えるぞ、でもかわいいしつか。

「わかった。ティリエル一緒に行こう。」

うれしそうな表情を浮かべた後、恥ずかしそうに頼んできたのが

「あの、お兄様と呼んでもいいですか？」

これはいい、可愛すぎる、アルベルトの前なのにティリエルを抱きしめてしまった。

抱きしめられて赤くなったティリエルに

「こちらからお願いしたいくらいだ。よろしくティリエル。」

「はい、お兄様」

「うおーーーー」

アルベルトが暴走しそうななるが、

「お父様！またお兄様に迷惑をかけたら承知しませんよ。」

「ううゝわかったよ、すまなかったよ」

「本当に反省していますか、お兄様でなければ死んでいたんですよ。」

俺としては、この世界で始めて本気で戦闘をできて楽しかったのだが、ティリエルは先の戦いについて父に対して少しご立腹らしい。旗色が悪くなったのを感じたのか

「そつえば先程、まずは、といていたね。まだあるんじゃないかな？」

話を変えてきた。なのでもうひとつの方をきりだす

「竜輝石つてのを探している。ついでに入手もしたい。知っているか？」

「ああ、知ってるしちょうどあるぞ。もう必要ないからあげよう」

「もう必要ない？」

「竜輝石は幼い龍が成長するのに必要な物でな、人間で言う栄養みたいな物だ。そしてティリエルには、もう必要ないからな。」

それでこの山に住み着いていたのか。それより少し前は、必要だったのか。

引き出しから袋を取り出し、渡してきた。竜輝石がいくつか入っているようだ。

これが竜輝石か。竜輝石は、自分で光を放っている宝石の原石に見えた。光が強いほどいい物らしい。

「そうか、ならありがたく貰おう。」

竜輝石の入った袋を冒険者の袋に入れる。

「今日は、泊まっていくといい、戦闘で疲れただろう。わたしも今すぐ娘と別れるのはつらい。」

後半に本音が出ているぞ。まあ聖痕を三つも使って疲れているのは事実だから。

「そうさせてもらおうかな」

「それでは、もう遅いですしお食事にしましょう。」

ティリエルの雰囲気に対し料理は丸焼きというワイルドなものだった。こんな山奥ではしょうがないか。

夜、枕を抱え黒いひらひらした寝巻きを着たティリエルが、

「お兄様、あの一緒に寝てもいいですか？」

本当に可愛いなティリエルは、

「いいよ、おいで」

この夜は一緒に寝た。ティリエルは抱きつき癖があるようで、腰に腕を回し、脚を俺の脚に絡ませてきた。

この日は俺もティリエルを抱き枕にして寝た。寝ただけだぞ。だってアルベルトいるしな。

16話 聖痕使いVS銀龍（後書き）

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

17話 小太刀が少女

異世界15日目

目が覚めると綺麗な銀色の髪があった、下を向くとティリエルの寝顔があった。

起こすのも忍びないので起きるまでティリエルの感触を楽しむことにした。

しばらく楽しんでいるとティリエルが起きた。

「おはよう、ティリエル」

「おはようございます。お兄様」

寝ぼけ眼で、すりすりしてくる。徐々に、目が覚めてきたのだろう。恥ずかしくなったのか顔が赤くなってきた。逃げられないように頭を抱きしめる。

「あうあう」

ちよつとやりすぎたかな。開放してあげて

「起きようか」

「はい」

「それでは、お父様行ってきます。」

「行ってらっしゃいティリエル。ジン、ティリエルのこと頼んだよ。」

「ああ、大事にするさ。」

こうして俺と顔が赤いティリエルは、王都に向かった。

異世界16日目

王都に戻ったのは昼過ぎだ。集合場所の宿に行ってみたが、皆出かけていたのでもうひとつ二人部屋を取って部屋に向う。

部屋に入ってテツを取り出す。

「【主、どうかしましたか?】」

「ひゃ」

ティリエルが驚いている。二人しかいないはずの部屋で突然知らない声が聞こえたのだから当然だろう。

「こいつは鉄餓刀のテツ、俺の小太刀だ」

「【初めまして、ティリエルさん。】」

「は、初めまして、テツさん」

「テツいい物が手に入ったんだ。」

竜輝石を取り出す。

「【竜輝石ですか、吸収してもいいですか？】」

なんかテツの声がはしゃいでいるように感じる。

「いいぞ」

テツと竜輝石を重ねる、いつかのように竜輝石が、粒子になって吸収された。黒い刀身が変化して白い龍の模様が現れた。しかし、今回はそれで終わらずに光が強くなっていき光が球体ようになった。アルベルトが銀龍になった時のものに似ている。光がはじけてなくなったとき裸の少女が現れた。

「主二つ目で人の姿になりました。」

「・・・テツか？」

「はい。テツですよ主。」

につこり笑って抱きついてくる

「テツまず服を着ようかティリエルも驚いてる。ティリエル服を貸してあげてくれないかな。」

「ご主人様帰ってきたんですか。」

「ジン！」「ジン様」

三人が来てしまった。

簡単に今の状況をいうと、龍のいる山から戻ってきた主が二人の美少女を侍らせていてしかも片方は裸だ。どう説明しようか。

「ご主人様、龍の山に行っただけでは？」

「どうして女の子を侍らせてるんですか？」

「どうして裸なのかな？」

「・・・まずはテツ服着て。」

何とかなだめてベットに座って説明を始める。

「こっちはテツだよ。」

「えっ、テツさんなんですか」

「そっだ、俺も驚いてな。竜輝石を吸収させると人の姿になったんだよ。」

「あらためて、はじめまして主の刀で所有物のテツです。ハーレム加入を希望します。」

テツがすかさず俺の膝の上を占拠する。

「歓迎するよ。」

「こんな子だったんだ」

「わかんないもんだね」

「羨ましいです。」

「こっちはティリエル、龍だよ。それも銀龍」

「わ、わたしもハーレムに入りたいです。」

ティリエルが何故か焦っている。テツのせいかな？

「もちろんだよ、おいでティリエル。」

ティリエルは、うれしそうに俺の右隣にやってくる。

「まあもうあきらめています」

「そうだね、目を離れた数日で二人も、いやテツは元からいたんだっけ。」

二人はあきれていた。もう一人は

「わたしもご主人様の隣に行きます」

といって左隣に座って服の袖を掴んできた。

この世界の女の子は、本当にハーレムに抵抗がないんだな。力が第一の世界だからか？それとも側室があるからおかしくないのか？まあいいか俺にとっていいことには変わらないからな。

「それじゃあ細かい事情を話すよ。」

説明が終わると

「龍にまで勝ったんですか。それも成体に」

「それもティリエルの父親ってことは銀龍だよ。龍の中でも上位のはずだよ」

「ご主人様、凄いです。」

「本当に凄かったんですよ。」

「ええ、主は凄いです。」

後半凄いしか言われていないな。

「これからのことについてなんだが、リリース準備の方はどうなった。」

「ばつちりだよ。長距離移動だから馬車と馬を買ったよ。ほかに保存食や必要な装備も。それで全部で15000ギルくらいだったよ。馬車は、ソフィアとイリヤが練習したから多分大丈夫だよ」

「ありがとう。三人とも」

「ふふん、夜楽しみにしているよ」

「久しぶりですね」

「ご主人様、たくさん可愛がってくださいね。」

三人一緒にですか。それは楽しそうだ。

外はもう夕飯時だ。

「それじゃあ飯に行こうか。明日はギルドに行くからね。それでクイント皇国に行く日を決めようと思う。」

異世界17日目

目が覚めると身動きが取れなかった。右腕をリリスの、左腕をソフイアの胸に抱えられている。体の上にはイリヤに占領されている。皆裸だ。左右の二人にいたずらする。

「んっ」

「あっ」

起きたのでいたずらをやめて。

「おはよう二人とも」

「おはようございます。ジン様」

「おはようジン」

解放してもらった両腕でイリヤにいたずらして起こす。

「やん」

「おはようイリヤ」

「おはようございます〜ご主人様〜」

まだ半分寝ているな。

とても刺激的な朝だった。

ティリエルとテツを起こして食事を済ませてギルドに向う。

ここ数日の出費は

宿泊費	1500ギル	食費	1000ギル	その他	610
ギル	合計3110				
63110	-15000	-3110	45000		

今の持ち金45000ギル

ギルドについたが何か慌ただしいクレアの姿も見えないので。
ほかの係りの人に頼んでギルドカードの更新とティリエルのギルドカードを作った。

名前 ティリエル 女 15歳 龍族

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 幼い銀龍

・・・神のやつ義妹ってなんだ義妹って。
それにしても『幼い銀龍』か幼いがとれるときが楽しみだな。

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 五人の女の主
奴隷の解放者 精霊術師

俺は、気力と魔力が両方ランクが上がっていた。そういえば牛鬼と戦ったときよく動けたんだよな。
気力が上がったおかげだったのか。

「ジンは、成長も早いね。まあAランクの魔物とか倒しちゃってるから当然っちゃ当然だけど。」
「五人に、増えています。人化してテツさんも含まれたんでしょうね。」

「はい、次ソフィアとイリヤ」

名前 ソフィア 女 18歳 人間
ギルドランク E
能力ランク 総合C 気力D 魔力B
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 水の巫女 精霊術師

名前 イリヤ 女 17歳 エルフ
ギルドランク E
能力ランク 総合C 気力D 魔力B
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 ジンのメイド 治癒術師

「うんうん、順調だね。こっちが普通だよ」
「二人の能力が綺麗に並んだな」

「リリスは」

名前 リリス 女 17歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

「変化ないな」

「まあBランクまで行くとCやBランクをたくさん狩らないといけないからね」

ギルドカードの確認が終わったところ、懐かしい声が聞こえた。

ジークだ。もう一人たしか俺が一撃で気絶させたやつだ。

「ジンくん久しぶり」

「誰なんですか？」

そういえばソフィア以外初めて会うな。

「ああ、彼はジーク。王都に来るときに知り合っただ。」

「彼女達は、俺の連れで」

「ソフィアです。ジークさん久しぶりですね。」

「イリヤです。ご主人様のメイドをしています。」

「リリスよ。肩書は一応ジンの護衛、ほとんどいらないけど」

「ティリエルです。お兄様に最近同行させてもらうことになりました。」

「テツです。」

「これは、ご丁寧には俺はジークこっちはカイル一応俺の相棒だ」

「何だよ一応って。あの、ジンあの方はすまなかった。」

「いや別にいいよ」

「そうだ。そんなことよりジン早く王都を出た方がいい」

「？何故だ、その内出るつもりだったんだが」

「まだ、正式に公表されていないが、おそらく戦争が起こる。ギルドが騒がしいのもそのせいだ」

この国の王は、どこまでバカなんだ。

「・・・どこことやるんだ？」

「クイント皇国」

「待て、クイント皇国は、ここらで一番強いんだろう。戦争なんかして勝てるのか。」

「いいや。勝てないだろうな。」

「なら何のために」

「奴隷を作るため、だろうな」

「わけがわからん。奴隷もなにも負ければ国がなくなるだろ」

「・・・かつてこの国は、自分より大きな国を倒したことがある。その方法は相手の国の奴隷を軍のいたるところに配置しての特攻だった。兵は、戦えなかった。戦えた者も心を病んだ。」

「・・・」

俺は怒りで一瞬訳が分からなくなった。この国はこの世界はここまで酷いのか。許されるのか。

「たぶん、勝つことが目的じゃなくて、クイント皇国の奴隷を得ることが目的だろう。そうなればクイント皇国も下手に動けなくなる。」

「ジンさん！戻ってきたんですね。」

クレアさんがギルドの外から入ってきた。

「お願いします。助けてください。このままでは、この戦争は泥沼化します。」

さっきの説明だけなら長期戦にはならないと思ったのだが、まだ何かあるのか。

「どういうことですか？」

「ここでは、ジンさんだけで奥に来ていただけませんか」

「わかった。皆は待ってて」

奥に来てと言われてきたが、そこはギルドマスターの執務室だった。もちろん俺を迎えたのはこの部屋の主ギルドマスターのガルダだった。クレアもいる。

「よく来てくれた。立ち話もなんだし座ってくれ」

正面のソファーを指しながらの言葉に力がない。前会った時も疲れてるのかと思っただけ今は、度をこしている今にも過労で倒れるんじゃないかとすら思う。

俺がソファーに座ると

「すまない、ギルドカードを見せてくれないか」

あまり見せたい物ではないんだが

「どうぞ」

しばらく俺のギルドカードを眺めると突然頭を下げて

「頼む、力を貸してもらえないだろうか」

「頭を、上げてくれ。まず何があったのか何が起こるのかを教えてください」

「そうだな、単刀直入にいう。この国の愚王が大使として来られる予定の姫を捕らえようとしている。」

「・・・そんなことをすればクイント皇国は引けなくなる。なるほど、泥沼だな」

あきれて怒りを忘れてしまった。

「ええ、何とか救ってお国にお返ししなければいけないのです。だが我々では大使達の居場所が分からないのです。力を貸してください？」

「わかった、協力する。わかっていることは？」

「ほとんど分かっているのです。」

それなら

「少し調べてみましょう」

部屋の窓に近づき

「『風見鳥』」

どこにでも居そうな鳥を三羽ほど作り出す。風の精霊に形を与えて偵察を行う術だ。これなら景色も見えろし音も聞こえる。

「それは？」

「偵察用の精霊獣です。」

そして言おうか迷ったが二人に

「・・・場合によっては、俺はこの国を滅ぼしますよ。」

「それもいいでしょう、この国は、たくさんの犠牲で成り立つ国。こんな国はなくなるべきなのでしょう。」

「わたしも、別にこの国は好きではありません。ジンさん、思いっきりやっちゃって下さい。」

これで決まった。国民が滅べとっているのだ。決まりだ

この国、グーロム王国には消えてもらう。

17話 小太刀が少女（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

18話 愚王の蛮行

ここはグーロム王国の王都にある王城。

贅を凝らした広い部屋の豪華な椅子に豪奢な服を来た男が座っていた。周りには、見目麗しいの奴隷の女性を侍らせていた。

若い兵士が、伝令に来た。

「申し上げます国王陛下。」

「話せ」

「クイント出身の奴隷の選別はまもなく終わります。その、その後国内のクイント皇国出身の者を奴隷にするとありますが、よろしいのですか？」

「余に意見するのか？」

「い、いえ決してそのようなことは」

若い兵士は、慌てて弁明する。

「しかたない、余自ら話してやろう」

国王は、すばらしいことのように

「此度の計画は、クイント皇国の皇女レティーシアを捕らえ奴隷とし戦争の旗頭とする。そして今回の戦争でクイント皇国の力を削ぎ、

手にいれた奴隷で最近うるさいクイント皇国を黙らせる、というものだ。そのために多くのクイントの奴隷が必要なのだ。しかし数が少ないならば作るしかないだろう奴隷を。何か意見があるか？」

「いえ、そのようなことは、ありません、陛下の深いお考えに感服いたしました。」

このとき若い兵士の中には、

（そんな理由で奴隷を作ればこの国から人が出て行くのではないか、皇女を奴隷にしたら皇国との泥沼の戦争になるんじゃないか等疑問は尽きないが、ここは追従するしかない）

その言葉を聞いて満足したのか

「さがれ」

若い兵士を下がらせ、別のことを口にする

「おい、レティーシアの方はどうなっている？」

側のぶくぶく太った文官風の男が

「ラシード將軍に騎士団500名を変装させて持たせ捕獲に向わせました。今頃コルテス地方の辺りでしょう」

この王城内の奴隷以外のほとんどの人種は、こんなばかりである。他国の姫を呼び捨てにしたり、捕獲などとほざくのが当たり前なのだ。

「それでは、期待しよう。かの姫騎士を奴隷として迎える日が楽しみだ。」

といやらしい笑みを浮かべいた。

これを精霊で作られた鳥が一部始終を見て聞いていた。

ところ変わってギルドのギルドマスターの執務室のジン。

「なんだ、これは！。皇国を黙らせるこれだけのために戦争をするのか、そんなことをすれば最悪の場合共倒れだぞ、負けなくても、この国から人は離れる。この国は、何もせずとも滅びる。混乱だけを残して」

「それがこの国の末路ですか」

少し寂しそうにクレアさんが聞いてくる。

「ああ、この国は、終わる。だから最もいい形で終わらせる。終わらせてみせる。」

決意を込めて二人を見る。

「手を貸してもらいますよ。ギルドマスターあなたの依頼だ。」

「任せてくれ。どうすればいい？」

「まずは、後見人になつてもらふ。二つ目ここからクイント皇国に行くにはどうしたらいいか教えてくれ」

「後見人の件は任せてください。クイント皇国に行くには三つの道があります。」

「ならその三つの道が描かれている地図はあるか？」

「クレア取ってきてくれ」

クレアさんが慌て部屋を出る。

「あとこの世界の戦争を簡単に教えてくれ。」

ギルドマスターに、簡単な説明を受けるが、ほとんど予想の範疇だった。飛び道具が魔法になっている感じで白兵戦が基本らしい。

「持つてきました。！」

「ありがとうございます。コルテス地方とはどの辺りですか？」

「ここです。」

ガルダが指したのは、王都とそんなに離れていないところだった。近いかなりやばそうだ。だが、離れていないとはいってもおそらく徒歩で二、三日はかかる。まだ間に合うかもしれない。

「この地図は借りれますか？」

「本来はよくないのですが。持つていつてください。」

「最後に、俺のことは内密にお願いします。」

「わかった」

「わかりました」

「では、姫様を救いにいきます。」

皆のところに戻り開口一番に

「すまん、またちよつと出る。ティリエルだけ付いて来てくれるか、テツは小太刀に戻ってくれ」

「「「またですか」」」

三人が泣きそうになる

帰って来たばかりだからな。

「すまん緊急なんだ。三人は、クイント皇国の皇都に向ってくれ。ジーク突然で悪いが、三人の護衛をしてくれないか、金は払う。」

みんなの表情が変わる。この情勢での緊急だ碌な事ではないだろう。

「お金は、いいよ。もともとこの国を出るつもりだったんだ。借りも返したいしな。」

「じゃあ頼む、お前達は皇都に行くのに一番短い道を通ってくれ。」
むくれる三人の頭を撫でてやる。

「すまないな、すぐに出ることになって。」

「早く来て下さいね。」

「怪我しないで下さいねご主人様」

「いつか絶対ジンに「ついて来てくれ」って言わせてやるから」

「楽しみにしてるよ。あれテツは？」

「【主ここに】」

テツが座っていた椅子に小太刀があつた。

「ティリエルできるだけでいい俺を乗せて飛んでくれないか？」

「お兄様、喜んで」

嬉しそうに言ってくれる

「ありがとう、時間がないすぐに出る。いいかい？」

「はい。大丈夫です。」

「じゃあ行こう」

外に出て三人に振り返り出てきた三人をまとめて抱き締め。

「行ってくる。」

「はい。行つてらっしゃいませ。」

三人が見送ってくれる。

龍化したティリエルに乗って飛びだつ。

なんの障害物もない空を飛んで目的地に向かう。

二時間ほどでティリエルが疲れ始めていた。

まだ幼く体もあり大きくないのに良く頑張ってくれた。

一度地上に降りて方向を確認してから、ティリエルを脇に抱えて走り出す。

ランクAに上がった気力を使って『闘気』（全体的な身体能力の強化）を使う。

二時間ほど走り。

コルテス地方の手前で

「ティリエル飛べるか？」

「なんとか、乗ってください」

「いやここからは探索もやるから、自分で飛ぶよ」

「飛ぶ？」

ティリエルが、きょとんとしている。

「聖痕発動『嵐帝』」

精霊を使ってコルテス地方全てを見渡す。いた、かなり街道をそれている。逃げている最中のような。追っているのは百人ぐらい、別のところに四百人いる。

追っている方を潰すことにする。

「ゆっくりでいいから付いてきて。すぐに降りたらダメだからね。終わったら俺が呼ぶから」

そうティリエルに注意して

『嵐帝』の力で人の身で空を飛ぶ

追いついたときには、もう乱戦になっていた。

人間が入りに乱れているこれでは白兵戦しかできない。テツを抜いて空から落ちるように飛ぶ。

三人で一人に攻撃する山賊風の男達がいたので、真ん中の男を、空から地上に落ちるのに合わせて肩から斜めに切り殺す。男の体は切った軌跡にそって斜めにずれ血を噴き出して絶命した。

着地と同時に一人殺し、立ち上がって右の男を小太刀で首を切り飛ばし、左の男は風を纏った左手で首を突き刺す。

三人を瞬殺した俺は、攻撃を受けていた奴を見ると

ジリッ

警戒されていた。しかたない突然空から降ってきたのだからな。驚いたことに、助けたのは女だった。女騎士だった。

美人だが今は時間が無い

「助けにきた。今は、先にコイツらの殲滅を手伝って欲しい。」

女騎士もそうするべきだとわかっていたのだろう。頷いて

「わかった。感謝する」

俺は、近くの山賊風の一団に突っ込んでいく。女もついてきた。

一番近い敵を小太刀で切り、別の者を炎で燃やす。囲まれそうになると風で吹き飛ばす。三方向から攻撃されれば水で防いだ。その間に、俺は刀技の実践を重ね洗練されていく。

戦いの中、刀神との修行を思い出し、徐々に精霊を使わずに回りの敵を片づけるようになり、精霊は周りの援護につかうようになっていた。

三人を相手にしていたことから見当はついていたが女騎士もやはり相当の手練だった。

長剣を巧みに使い危なげなく敵を倒している。一対一なら不覚を取ることはない様に見えた。女騎士ひ援護はいらなかった。

数が減り不利を悟った敵は逃げ出した。

「『風刃』」

敵味方がはつきりしたので『風刃』で逃げる敵を、横に真つ二つにして殺して戦闘は終わった。

これからが問題だ。残った周りの人間は、感謝はしているが、その強さに得体の知れなさを感じているようだ。時間がない早めに話をつけたい。まず、どうやって皇女に会うかが問題だ。

そんな時、女騎士が近づいてきた。

「君、一緒に来てくれないか？話を聞きたいんだ。」

この状況で話しかけてくるのだ、少なくとも話は進むだろう。

「わかった。ちょっと待ってくれ、ティリエル―！」

「はい」

空から龍が降りてきた。みんなが驚き身構える中、ティリエルは空中で人の姿に戻る。
落ちてきたティリエルを受け止めた。

「お兄様、疲れました。」

周りは啞然としていた。

「君は龍なのか？」

「俺は違うよ」

女騎士は訳が分からなくなったようで

「とにかく来てくれ」

考えることをやめ連れて行くことにしたらしい。

馬車に案内された。馬車は、派手さはないが質がよく皇女が乗るのに恥ないものだった。

中に案内されて、女騎士が

「この者が、先程助力してくれた者です。」

俺のことを中の人に紹介する。馬車にいたのは、ドレスを着た令嬢が一人とメイドが二人、護衛が一人と俺を連れてきた女騎士の五人の人間いた。

メイドが喋る。

「此度のご助力まことにありがとうございます。主が何かお礼をしたいと仰いまして。こうしてお呼びさせていただきました。」

お礼するのに呼びつける必要はない、つまり

「ですが、その前に何故こんなところにいたのか、お聞かせ願えませんか？」

こっちが本命だろう。ここは街道を外れてたまたま通りかかった、ということはありえない。

目的があるはずだ、と思っているのだろう。時間がないさつさと終わらせよう。令嬢を見て

「あなた方を助けるためですよ。皇女様」

18話 愚王の蛮行（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

19話 皇女

「あなた方を助けに来たのですよ。皇女様」

五人全員に動揺がはしる。それを見て確信した。

「よかった。あなた達が皇女様ご一行であることは間違いなさそうだな。」

「お前は何者だ？」

「俺は、冒険者のジン。グーロム王国のギルドマスターに頼まれて助けに来た。」

俺は皇女様といいながら。口調を変えなかった。ティリエルは、戸惑っていたが、俺は改めなかった。案の定、

「き、貴様こちらのお方を皇女様と知っているなら、その口調を改めろ！」

護衛の男が怒りだす。

これからのことを考えると俺は皇国とは対等でなければいけない。従うつもりはなかった。

「断る、俺はあんたの国の民ではない。公の場ならともかく、この場にその必要性を感じない」

「なんだと！」

「落ち着いてくださいレオン卿。ジン殿あなたギルドマスターの部下なのですか？」

訝しげに見てくるメイドさん。にしても皇女は喋らないなお飾りなのか？

「いいや、違うあくまで対等な関係だ。依頼主ではあるが」

ギルドマスターは基本一国に一人しかいない。そして冒険者を束ねる存在でそれなりに力があるだが、俺はそのギルドマスターと自分を対等だと説明した。

「じゃあ、あなたは」

「ちょっと待って、時間がないんだ、まだ続くかな？」

その無礼な物言いに護衛が声もなく怒りを顔にするが

「では、最後に・・・あなたは味方ですか？」

「それはこれからする話を聞いてから、あんた達が判断してくれ。」

「貴様は、私の敵だ」

話の腰を折るなよ。

「ちょっと黙れ単細胞、話が進まん」

「単細胞？どういう意味だ？」

あゝ細胞がわからんか、そりゃそうだな。男は無視して

「時間がない、そろそろ俺の話を聞いてもらう。まずあんた達には、皇国に戻ってもらいたい。」

「それは無理です。皇女は大使として来ています。その責任を放棄することは出来ません」

「果たせない責任を守る必要はないだろ」

メイドさんが声を荒げる

「果たせないとはどういう意味ですか!？」

皇女をバカにされたと思ったのかな？

「皇女に問題があるわけじゃない、グーロム王国があんた達を大使として扱わないといっている。」

「な、何故ですか？私達はグーロム王国に招待されて」

初めて皇女が声を出した。戸惑っているようだな

「招待はおそらく罠だろう。大方、奴隷制度の緩和か皇国出身の奴隷を解放するとかなんとか言って呼びつけたんだろ」

「（そこまでわかっているのか!）」

交渉の内容を知っていた皇女付きのメイドは驚愕していた。事実なのだ交渉の内容は皇国出身の奴隷の解放についてだった。何

を要求されるかはわからないが無視できない内容だったのだ。実際グーロム王国は皇国出身の奴隷を集めていると聞いている。

「グーロム王国は戦争の準備をしている。そして、その前に皇女を捕らえるつもりだ。」

「えっ、そんな」

皇女の顔が青ざめる。他の者も動揺している。

「姫様、落ち着いてください。ジン殿それを証明できますか？」

「あんた達の状況そのものが証明だろう。この襲撃初めてじゃないんだろ、おそろくなんどか襲撃を受けたはずだ」

「なぜそんなことまで」

「生き残りと死体の数を数えたが皇女を守るにはちと少ない」

「それが何故襲撃を受けたことが証明になるのですか？」

「普通は勝てない相手を襲撃したりしない、なのにあんた達は何度も襲撃を受け護衛が少なくなってしまった。しかし、壊滅したわけではないから、戻ることできない」

「護衛が少なく？」

「戻ることができない？」

女騎士とメイドが呟く

「そこが大事なんだ護衛がある程度いれば勝てなくても皇女を逃がすことができる。今のあんた達は敵から皇女を逃がせるかな？それに壊滅させては皇女に逃げられる。」

「しかし！それは証明にはなりません」

メイドは、理解できても納得できないらしい。さっきの戦闘を考えれば皇国に戻ることはおかしくないはずなのだが

「私は彼の言葉を信じる。先程の戦闘、彼がいなければ我々は死んでいた。信じるには十分だろう。ミリア、今は耐えてくれ。」

女騎士が援護してくれた。

「わかりました。皇国に戻りましょう。」

「なら急ごうまだ追手は四百人ぐらいいるから」

「「「えっ」」」

「だから急いでいると言っているだろ。いつそ、そいつらを証拠にするか」

「で、では早く戻らないと」

「駄目だ、相手は四百もいるんだぞ当然前の街道は封鎖されてる」

地図を取り出して一つの街道をしめす。そこは前の街道の反対側の街道だった。

「だからこつちの街道に出る」

「何故だ？その街道はもつとも皇都まで距離があるぞ。それに道はわかるのか？」

「道はわかる。理由は追手が分散してかなり数を減らせる。それに元々この道しかない」

道は、聖痕を使ったときにあらかた調べていた。
三つの内一つには敵がいる、もう一つには今の場所からは行けない。

「・・・わかった。皇女様」

女騎士が皇女に採決を促す。

「わかりました。あなたの言葉を信じましょう。直ちに皇国に戻ります。」

「了解しました。それでジン殿、君を雇いたいのだが」

「ああ、俺が裏切らないように。なにか繋がりが欲しいのか」

「すまない、何かないかな？」

「謝ることじゃないさ。そうだな皇都についたら戦争について皇王と話したいその渡りをつけてもらいたい」

「わかった。掛け合ってみよう」

「それで君達、名前はなんて言うんだ？」

「そうだったな。私はレイシアだ。さっきはありがとう。」

女騎士が名乗りほかにも名乗りはじめる

「私はミリアと申します。こちらは、我らの主のレティーシア様です。」

「よろしく願いたします」

こちらは、応答していたメイドと皇女

「ミーシャです。」

「レオンだ」

終始喋らなかったのがミーシャで護衛がレオンらしい。

「これからのことについて話したい、戦えるのはどれくらいいるんだ？」

「・・・八人」

「八人が、戦うのは無理だな。どうするか？馬は？」

「人数分はある」

「移動しながら話そう、すまないがティリエルを馬車に乗せてくれないかここに来るのに無理をさせた」

「かまいませんよ」

「よしでは行こう」

俺が馬車を降りると

「ジン殿馬を」

「いやいい乗れないからな、走る遅れるなよ」

「はい？」

外の騎士が今に乗るのを確認してから走る
気力と精霊の力で驚く早さで駆ける

「は、早い。全員遅れるな」

レイシアは、慌て馬を走らせる。近くにきたレイシアに

「街道に出るまで走る」

「本当に何者なんですか？」

その後、道なき道を進み、時には道を強引に作り進んだ。
街道に出た時に

「新しい道ができてしまった。」

皆茫然としていた。

「すまん疲れた。馬車に乗せてくれ」

周りの人間は安堵していた。

「よかった。ちゃんと疲れるんだな」

と別の騎士が呟いた。失礼な

馬車に入った俺は、最初のメンバーを集めて話をはじめ

「これでゆっくり話が出るな」

「正体について教えてくれないか」

「それは時間がかかるから追手を振り切ったらな」

「ここまで来るのか」

「来るだろな四百人の内二百ぐらいは騎兵だった。分散しても、その内五十人前後が来るだろう。」

「どうする、相手は騎兵なのだろ馬車のいる我々はすぐ追いつかれる」

「だからこの先の川まで行く。そして橋を壊す」

橋の手前で追手に見つかった。

「手筈どつりに」

八人の騎士が引き付けながら橋を渡る。

追手が橋を渡りはじめ、土の精霊術で脆くしたところまできた時

「『炎蛇・六首』」

炎の蛇がその場所にいた騎兵ごと橋を破壊した。石造りの立派な橋が木っ端微塵だ。

何故こうなったかというと橋の破壊方法を言った時にミーシャが

「橋と一緒に敵さんを破壊すれば。後のことを気にしなくて良くて一石二鳥ですね」

と、とても怖いことを言つてのけた。

ミーシャは見た目は小動物みたいで性格も引つ込み思案なのだが、たまに怖いことをいう、それも天然なので腹黒いのはちがいがよく分らない子だ。

俺達は、夜になり移動が困難になったところ開けたところで野営にすることにした。

準備が終わったころレイシアが

「そろそろ君の正体を教えてくれないかな？」

19話 皇女（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

20話 龍の思いと小太刀の思い

「俺は異世界人だ。」

「……………」

まあそうなるよな。ちなみにこの場にいるのは、皇女のレティーシアとメイドのミリアそして女騎士のレイシアそして俺とティリエルの五人、これは俺が人数を減らすように頼んだ結果だ。この五人で馬車の中で話している。風の結界で防音して外には漏れないようにしている。

「まあ、信用できないだろうから、これを見てくれ。」

そっいつてギルドカードを、見せる。

名前 ジン 男 18歳 人間

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 五人の女の主

奴隷の解放者 精霊術師

「救世主？精霊王の友人？」

「そ、俺って救世主らしいんだよね。」

「聖痕使いというのは？まさか」

「このことだな」

左腕の聖痕を見せる。

「これが聖痕か、それであの精霊術か、納得だな」

「それで、俺が何をしにこの世界に来ただけだ」

魔物の大侵攻について話した。

「そんなことが本当に起こるのですか、とても信じられません」

と、メイドさん。

「誰が何を言おうと起こるものは起こる、それに嘘をつく必要もないだろう。」

「そうですか」

「というより、考えても答えなんかでないだろ。今は、知っていてくれていればいい。皇族が知っているだけでこれからのことも変わるからね。」

「ジン殿、聖痕を使えば簡単に勝てたのではないですか？」

レイシアが不満というより単純に不思議がっていた。

「あゝ実は、いま水の聖痕以外使えないんだわ」

「……えっ」「」

「実はここに来る前に銀龍と戦ったときに三つ使ってあんたら見つけるのに一つ使っていてな。聖痕って連続しようできないし、力が戻るまで少しかかるんだよね」

「ぎ、銀龍？銀龍と戦ったのか！」

「ああ、勝ったぜ。ちなみにティリエルの父親な。」

「……………」

「だから、皇王との謁見よろしく頼むよ。」

「【ご主人様、人の姿になってもよいでしょうか？】」

ビクッ

三人が驚いているな。

「いいぞ。」

テツが人の姿になる。

「こいつはテツ、俺の小太刀だ。」

テツは突然、

「皆さん主はお疲れです。主については、これ以降ティリエルさんに聞いてください」

「どうしたんだテツ今は、」

テツが無理に俺を外に連れ出そうとする。

「お願いです。主一緒に来てください。お願いします。」

テツの声が震えている。

「わかった。すまない後は、ティリエルに聞いてくれ、ティリエルも何でも答えていいから。」

俺はテツを連れて馬車を出る。

・テツとジン・

人気の無いところまで俺を連れていくと、突然テツは、抱きついてきた。

「どうしたテツ大丈夫か？」

「私は問題ありません。私が心配しているのは主のことです」

「俺のこと？」

「人を斬った時、主の心が軋んでいるようでした。」

その時に持たれていたからこそ、聞けた心の悲鳴だ。

「・・・俺は、この世界で何人も殺している。今さらだな」

盗賊、奴隷商人とそれなりに殺している。

そのはずなのに、

なぜ俺は今泣いている。

「私は、ずっと主の側にいました。なので主のいた世界のこととも一番聞いています。」

それは他愛もないことを話した、ソフィア達との会話のことだろう。

「だから知っています。主の周りは、とても想像できないくらい平和な世界で、魔法はなく亜人もいない世界だったと」

テツは、俺のことを理解しようとしてくれていた。

「だから主にとって、人を『斬る』というのは、精霊術を使つてのものより『殺し』を特別意識することで。その事で、自分を責めているのだとわかりました。」

そうなのだ俺は今までの人間を、精霊術だけで殺してきた。怖かったのだ人を斬った時の感覚を覚えるのが、殺した人間の血を浴びるのが。

そして今日俺は斬る感覚を覚え、血を浴びた、恐怖を隠すために途中からは稽古に見立てたりもした。稽古に見立ててたくさん『斬った』のだ。

「主は優しいです。すべてを捨てて、この世界を救いに来てくれました。主は強いです。銀龍にすら勝ってしまいました。主は私達の誇りです。」

テツが喋ることを、やめない。

「ですけど、主は人なんです、時には私達に甘えてください。自分の中に溜めず、たまに吐き出してください。わたし達は受け止めますし支えます。そしてずっと側にいます。」

「ありがとう、テツ」

今日俺はテツの胸の中で泣いた。

馬車の中

ジンがでて行った後の馬車は沈黙が続いていた。テツ出現しその後すぐにジンを連れて行ったことで、その場をしばらくの間沈黙が支配していた。

レイシアが、沈黙を破って口を開く

「その、ティリエル殿」

「ティリエルで結構ですよ。」

「じゃあティリエル、ジン殿もああ言っていたしジン殿について聞いていいかい？」

「どうぞ、なんでも聞いてください」

「ありがとう、さっき龍がどうたら言っていたがジン殿はやはり強いのか？」

「ええ、強いんですよ。私の父に勝ってしまいましたし、個人で勝てる人間はいないと思います。聖痕を使えば一国とも戦えると思いますよ。」

「そこまでか、お兄様ってどういうこと？」

「旅に同行するさいに私からお願いしました。」

こうしてレイシアが、質問しティリエルが答えレティーシアとミリアは聞き役に徹した。

質問にいくつか答えたところにレティーシアが

「お二人の様子を見に行かなくてよろしいのでしょうか？」

「絶対に行かないでください！」

幼いティリエルの剣幕に三人が戸惑う

「お兄様は今きつと辛い思いをしています。」

「ここに来るまでに何かあったんですか？」

「いいえ、お兄様が辛いのは、人を殺したからだと思います。そのことはテツさんの方が分かると思います」

。だからお兄様を任せたのですから。」

「人を殺したから？それだけ？」

「お兄様は、お優しいのです。本当は殺しなんてしたくないんです」

「あれほど力を持っているのに」

「そんなことは関係ありません。お兄様は、この世界を救うために力をつけたと言っていました。人を殺すためではありません。」

また馬車の中が静かになる。レイシアは、ジンの力のみに取り残されていたことを恥じていたし、ティリエルも今自分がジンになにもできないことを再確認して沈んでいた。

「え」と、ティリエルちゃんは、どうしてジン殿と一緒にいるのですか？」

皇女が場の空気を変えるために新しい質問をする。

「えっ、え、えと、大好きだから」

空気がやわらぐ

「あ、あと支えになりたいんです。お兄様はこの世界に一人で来たらしいので故郷もないですし、だから、その」

「俺の話か？」

「うひゃ！」

「どうしたティリエル？」

「ど、どこから聞いて」

「どうしてジン殿と一緒にってあたりからだな」

ボン

真っ赤になった。

落ち着くのを待っていると

「その、大丈夫ですかお兄様？」

「大丈夫だよ。にしても俺ってそんなに顔に出てるかな」

「大丈夫ですよ。少なくとも皇女様方は気づいていなかったのだから」

「それはよかった。」

「お兄様、あの、今日は三人で寝ましょう。」

「……ありがとうティリエル。じゃあまた明日、お休み皇女様」

そういつて馬車を後にする

その後の馬車

「ティリエル様の言葉を聞いてどう思われますか？レティーシア様」

「信用していいだろう。ティリエルの信頼は本物だった。」

「その上でどうするのですか？、皇女様」

「わたしはあいつが気に入った。何より強い」

（姫様がここまで異性を気に入るのは初めてね。どうなるのかしら）

「強いのは関係ないでしょうに、まあいいです。では、渡りはつけるといふことでいいんですね？」

「ああ、そうしてくれ。ふふっ、あいつの驚く顔が楽しみだな」

20話 龍の思いと小太刀の思い（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

21話 皇都へ

異世界21日目

俺達は今、追手に追いつかれそうになっていた。その数80前後の完全武装の正真正銘の騎士団だ。

「あいつら軍馬まで出してきやがった」

レオンが毒づいている。

しかし、騎士団と軍馬を出してきたということは軍が、つまりは国が動いていることの証明だ。

この行動は、皇女達に俺の言葉に信憑性を持たせてくれた。

この場を切り抜くことができれば、交渉はしやすくなる。

「どうするんだ、貴様のせいだぞ」

たしかに、追いつかれたのは、一番距離のある道を選んだ結果ではある。他の道が2、3日で皇国に着くのに対してこの道は、5日もかかるのだ。

他の道が正解だとも思えないが、軍馬を出してきたのは、想定外だった。

グーロム王国はもう隠すつもりがないようだ。

それに敵は、甲冑を着けていて、聞くとおれには耐魔耐精霊の術がかけられている。負ける気はしないが、守りながらでは厳しい、だから

「あの狭い道まで行けば俺が何とかする」

「本当だろうな？」

レオンがさつきからうるさいな

「レオン卿今は逃げることだけ考えなさい」

レイシアが一喝する。

「了解しました。」

狭い道までたどり着いた。俺は、馬車から飛び降りた。

「お兄様！」

「ジン殿！」

「先に行け」

これ一度言ってみたかったんだよな。

「『岩壁』」

道を岩の壁でふさぎ馬車が見えなくなる。

「悪いな、ここから先は、通行止めだ。死にたいやつはかかってこい。」

俺は、高低差を埋めるため土で足場を作り80近い敵を迎え撃つ。

皇女達は、夜にはなんとか国境を超え、国境の近くで野営をしていた。皇女たちはジンを待っているというよりティリエルへの配慮のつもりだった。

「お兄様」

ティリエルは、ジンが来るであろう方向をずっと見ていた。

そこに、レオンとミリアが近づいて来た。

「お前、戻って来ると思ってたのか？」

ドコッ

「ゴフッ」

声にびつくりしてティリエルが振り返ると、ミリアの拳が脇腹を抉っていた。

「言葉を選びなさい。ジン様は、我々のためにあの場に残ったのですよ。」

「ふふっ 大丈夫ですよ。お兄様は帰ってきます。」

二人はその年下の少女の揺るがない声に呆気にとられていると

「あっ」

街道に二つの人影が見えた。次の瞬間ティリエルが走り出す。

「お兄様！遅いです。」

ジンのところまで走り飛び付く

「痛い、痛いティリエルそこはやめて」

「お兄様どこか怪我したんですか！。」

「ああラシードって奴がわりとできるやつでな、痛み分けになった。」

そこにミリアたちも追いついてくる。

「ラシード將軍ですか、よくご無事で彼は氣力がSの実力者なんですよ。」

「へーじゃあ、あいつ『超越者』なのか？」

「いいえ、彼は魔力が低かったのでAランクなんです。超越者は、能力ランクがSランクからなのでちがいます。彼は『到達者』です。」

レイシアまで出てきた。

「ジン殿戻ってきたのか、信じていたぞ。」

「ああ、レイシア達は、怪我はなかったか？」

「我々は大丈夫だ。それよりジン殿怪我しているのか、大丈夫なのか？」

「かすり傷だよ。」

レイシアは、心配そうな顔をしていたがそれを聞いて安心し今度は真剣な表情で

「ジン殿此度の件、真に感謝する。グーロム軍が出てきていたのだ、あなたの言葉は真実なのだろう。わたしはあなたを信る。皇帝陛下への取次ぎは任せてくれ。まあ元々皇女の恩人だ、会うことは簡単だと思うが。」

「それはありがたいな。」

「ジン様は異世界から来たのでしたね。ジン様は、なんのために戦っているのですか？この世界に思い入れのないあなたがどうしてもこまでできるのですか？」

ミリアにとって、それはとても不思議なことだった。しかし、ジンはとっては当たり前のことで

「自分のためだな」

「自分のですか？」

「そう、さあ明日は皇都までまだ距離はあるんだ今日は休もう。と

「いうより疲れた休みたい」

そういつて締めくくった。

異世界24日目

三日かかって、やっと皇都の城門についた。
もう昼を回っている。

「やっと、皇都についたな。」

「ご主人様、ご無事で」

イリヤが凄い勢いで走ってくる。側まで来ると飛びついてきた。

「ご主人様、寂しかったです。」

「ずっと城門前で待っていたのか？」

呆れるような嬉しいような。

「はい。三人で順番に待ってました。」

「ジン殿我々は、先に城に向います。明日の昼ごろにお出ください。」

気を使ってくれたのか、レイシアたちとはここで別れることになり先に城に向った。

「わかった。イリヤ二人のところに案内して。これからのことを話そう」

「わかりました。行きましょう」

イリヤはそう言って俺と手を繋いで歩き出す。

クイント皇国は皇都は、グーロム王国の王都に比べてとても綺麗な所だった。少なくとも表通りには孤児は、見えない。しかし、孤児院も見えなかったからどこかにはいるのだろう。

市場にも活気があり個々の家も立派だ。あらゆる点でグーロム王国を凌駕している。

なぜ、グーロム王国は、皇国に戦争しようとしているのか、わからない。とても皇国に勝てるとは思えない。そこで、グーロム王国の目的が勝つこちらではないことを思い出し怒りを覚えた。

いかな、こんな状態であいつらに会うのは、なんとか気を鎮めようと思って、テツを抱きかかえる。

「と、突然、ど、どうしたのですか主？」

「ちょっとだけこうさせて」

「はい、ど、どうぞ、好きなだけ、むしろずっとでも」

「むっ」

ティリエル達がむくれているのは見ないことにして二人の待つ宿を目指す。

宿に着くと

「ジン様」「ジン」

テツを降ろして飛びついてきた二人を抱きとめる。

ソフィアなんかちょっと泣いている。

二人を解放して全員の顔を見る。

「これから忙しくなるぞ、なんせ国を一つ潰すんだからな」

「わたし、あの国嫌いです。」

「そうそう」

奴隷にされていたことがあるイリヤとリリスは、全面的に賛成という感じで、他の者も

「主が潰すと言うのなら潰すまでです。」

「人の国にあまり興味ありません。」

龍と小太刀の二人には、人の国という形に興味がないらしい。
ただソフィアだけは

「ジン様、わたしの村は大丈夫でしょうか？」

ソフィアの村は、王都から近いいため巻き込まれないか心配なのだろう。

「大丈夫できるだけ綺麗に片付けるつもりだし、皇国が勝てば国民からは問題なく受け入れられるだろう」

ソフィアは、一応それで納得してくれたようだ。

「わかりました。」

「明日の昼に、登城だ。皆準備しておいてくれ。」

「はい」

「それでご主人様今日の夜は」

「イリヤさん、お兄様は疲れています。そういうことは後日にしてください。明日は登城なんですよ」

「む、いいじゃないですか、お二人はずっと一緒に寝ていたんでしょ」

「うえ、まあそれは」

「やっぱり寝てたんだ」

「うっ」

「大丈夫だよティリエル。まあでも一緒に寝るだけな」

「やった」

イリヤが嬉しそうにしているところに

「じゃあわたし達もいいですね、ジン様」

「そうだね、ジン」

「なんでそうなるんですか！」

「まあまあイリヤ、二人も一緒にいられなかったのは、同じだろ」

「ううわかりました。」

世界は救うつもりだが、やっぱりこういうのは大事だよな。

結局この夜は、三人を抱くことになったが。

21話 皇都へ（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

22話 登城と皇帝

異世界25日目

「ずいぶん大きいな。」

まあ当たり前なのだが、皇都の城はかなり大きく贅を凝らしている。グーロムの城は遠目にしか見ていないが、皇国の城との格の差は歴然だ。

正直日本出身の俺としては無駄な気がするが、この時代には権威を保つためには必要なのだろうな。
城門に近づくとミリアさんが待っていてくれた。

「お待ちしておりました。ジン様」

「ミリアさん、どうなりましたか？」

顔見知りのメイドが迎えてくれた。

「すぐにお話になるそうです。ついて来てください。」

問題なく通してくれた。

入ってみると城内はとても慌ただしい、グーロム王国が動いたんだらうな

「こちらです」

ミリアさんが扉を開ける。俺達はミリアさんと共に、部屋に入ると

部屋には、男女が三人ずついる、その内一人に問題がある。

「レイシア？何故？」

レイシアがドレスを着て座っているのだ。

「はっはっはっ、実はわたしが皇女だったのだよ」

「えーーーーーーー」

これはティリエルだ。

「はぁ」

俺はため息をついていた。

ため息を吐く俺を見て残念そうに

「なんだジン驚いてくれないのか」

「想定内だよ、想定内だが」

レイシアいやレティーシアの元に迎え両肩に手を置いて体重をかける

「驚いてはいない、だがな、どこの国に影武者がいるのに一対三をする皇女がいる。この国の皇女はアホなのかバカなのか、というかミリアさんはあれを認めているのか、影武者の存在意義は、なんのための護衛だ、俺が着く前に死んでたら全部台無しだったぞ、だいたい」

「わ、悪かった。すまん謝る」

レティーシアを知る者たちは、怒るといふより感嘆していた。
（おお、あの姫に謝らせたぞ）

「まだ言い足りないが、まあ許そう。それで誰が皇帝かな」

「わたしだ。娘が迷惑をかけた。」

皇帝は、髭を伸ばした、威厳のありそうな男だった。

それにしても、皇族に対しての無礼を受け流すか、ずいぶん器の大きい男だな。誰も騒がないところを見るとこれは、身内だけの会議らしいな。

「まあ、まず自己紹介からしましょうか」

「そうだな、わたしはクルト・クイントこの国の皇帝だ。」

皇帝の左側の女性が

「アイリス・クイントよ。皇妃をやっています。」

右の男が

「アッシュ・クイントです。一応皇太子です。」

優男みたいだが、目に力のある青年だ。

「アリシャ・クイント。第一皇女」

第一皇女と名乗ったが、明らかにレティーシアより小さい。それに、

表情があまりない子だな。

「一応名乗ろうレティーシア・クイントだ。第二皇女だな」

「ゲオルグだ。将軍をやっている」

老将軍といった感じの軍人だな。

「じゃあこつちだな。俺は、ジン異世界人だ。神に、この世界のことを頼まれこの世界に来た。」

「ソフィアです。ジンの付き人のようなものです。」

「イリヤです。ご主人様に仕えております。」

「リリースです。護衛をやっています。まあジンには必要ないんですが。」

「ティリエルです。銀龍です。」

「テツ。主の小太刀」

ある程度聞いていたのだろうとくに質問はなかった。

「自己紹介も終わったことだし、話に移ろう。」

「そうだな。そちらの要求は何だね?。」

「要求じゃあない提案だ」

「提案?」

「そうだ。魔物の大侵攻については聞いたんだろそれを一緒に防がないか、という提案」

「それについては、一応起こるものとして行動することになった。わたし達としても協力体制を敷きたいと思っていた。」

「それはありがたい、これからよろしく」

二人握手を交わす。

レティーシアのおかげか簡単に話がついたな。

「しかし、それには問題もある。軍を動かせば、他国が黙っていないだろう」

「他国は巻き込むしかないだろうな、巻き込まないと攻められる、そうなったら魔物の大侵攻を知っていても王の立场上動けないだろうし、元々魔物の大侵攻は、皇国独力では厳しい」

「目の前の問題もある」

「グーロム王国が、外の様子だと宣戦布告でもされたか」

皇帝は、目を見張った。その情報は、ここにいる者しか知らないはずだからだ。

もつとも感づいている者はいるだろうが、それは少数で情勢に詳しい物だけだ。その少数に入っていることが異常なのだが。

「ほかには、他国を巻き込む方法か、それは後回しにしよう。まずこの戦争だな」

「他国を巻き込むことについては、この戦争に勝てれば何とかなるだろう。勝ち方にもよるが、かなりの発言力を持てるはず。その

ためにジン殿力を貸してもらいたい。」

「わかった。それだと勝ち方が問題だな。」

「話が早くて助かる。では、戦争に関する話に入っても」

「お願いする。しかしあなたは一国の王なのでしょうもう少し上から目線でもいいと思うんだが」

「いいですよ。ここには、身内しかいませんし。戦力についてですが、グーロム王国は

奴隷兵	5万
戦闘奴隷	1万
兵士	2万
貴族の私兵	2万

の約10万こちらは

兵士	5万
貴族の私兵	3万

の約8万の兵がある」

「それなら正面からでも勝てるんじゃないか？5万は奴隷何だろう」

「三つ問題がある。一つ目は、クイント出身の奴隷がいること。二つ目は、戦えば損耗は避けられない。三つ目、これが一番問題なのだが、わが国の南側の国境付近にカルモンド王国の軍が近づいているその数5万これが問題なのだ。宣戦布告はされていないがあの国

の王は、グーロム王国と仲がいいのだ」

「どうするつもりなんだ？」

「損害を小さくしてに勝つ方法が今のところない」

しばらく考える。

「俺にいくつか案がある」

「おお、ありがたい。聞かせてくれないかね」

「まずはな……」

こうして二人の間でポンポン話が進んでしまい。周りは、口を挟む隙もなく呆然として二人を眺めて終わってしまった。

「二人は、何か打ち合わせをしていたのでしょうか？」

「いや、していないと思うが」

レティーシアとミリアさんがそんな会話をしていると

「これなら何とかなりそうだ。アッシュ、ゲオルグ將軍この方針で以降と思うのだが？」

「問題ないと、思われます。」

「それで進めましょう。」

「レティーシア」

「ん・・は、はい」

レティーシアは、呆けていた。

「お前にジン殿の副官を命ずる補佐するように」

「はっ」

「アツシュ、ゲオルグあとは頼んだぞ」

「「はっ」」

二人が、部屋を出て行く。

「ところでジン殿後ろの女性は、君の女かね」

「はいっ？」

「いや、君が複数の女性を愛する男ならレティーシアもどうだね」

「な、なにをいつているのですか、父上」

レティーシアが、照れている。脈アリなのか？しかし

「何が目的ですか？この国に留めておくためですか」

「そんなに深く考えなくていいよ。先程娘を叱って謝らせただろう。あれは、おてんばでなかなか嫁の貰い手がなくてな君ならばと思つてな。あれも君を気に入っているようだし」

「なっとなな」

レティーシアが超照れている。どちらかというと綺麗という感じが、意外と可愛い所もあるな。

なんだかこの流れアルベルト（ティリアル之父）のときと似てるな。

「まあ、すぐでなくともいいさ、今は戦時だからね。」

その戦時に娘の縁談の話かよ、図太いやつだな。

「それじゃあ失礼するよ、特訓しないとイケないからな。」

後ろの水の精霊術師の方を向って

「がんばるぞ、ソフィア」

22話 登城と皇帝（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

23話 戦場へ

異世界32日目

宣戦布告から一週間後俺達は戦場にいた。

「時間がありません。急いで陣地を組んでください」

陣地設営の指示を出しているのは、アッシュ皇子だ。

総指揮は、ゲオルグ将軍が執っている。

「アッシュ、俺は手筈どうり時間稼ぎと、仕込みをやってくる。」

アッシュとは、すぐに気安い中になれた。アッシュにとって身分を気にしないでいい相手は初めてで、付き合い易らしい。

「お願いします。なんせこの戦いは、あなたにかかっているのですから」

そうなのだ。ここにきているのは兵は三万のみ残り五万は、カルモンド王国との国境の近くに行かせてカルモンド王国軍を牽制している。俺達は三分の一以下の戦力でそれも野戦を行わなければいけないのだ。国境を越えられると国民を奴隷にされるから国境付近まで出るしかないのだ。

「テツいいかい？」

「はい、大丈夫です主」

「わかった。アッシュ、行ってくる」

「行つてらっしゃい」

俺は、敵軍が来るであろう方向に向つて走り出す。

時間稼ぎ自体は簡単だった。

まずは地の精霊で落とし穴を作る。
次に水の精霊で沼もどきを作る。

これを行軍進路にいくつか作ったただけ。
それだけで行軍速度は落ちた。

あるかもわからないものを気にしながらの行軍は、格段に落ちるし沼も人数が多くて迂回するのも一苦労なのだ。

「ええい、なにをとろとろやっている。」

グーロム軍のコートル將軍は苛立っていた。この戦争は、コートル將軍にとって勝ち戦なのだ。將軍としては、さつさと勝って報酬と奴隷を手に入れたいのだ。

実際この戦いを勝ち戦と見て予定より貴族共が多く集まっている。まあ集まっただけでも奴隷商からのなりあがりの貴族ばかりで、昔からの貴族は不参加だったが。

「兵が落とし穴を気にしているようですね」

これはラシード將軍だ、レティーシア皇女を捕まえられなかったため、コートル將軍の補佐をするはめになった。

「そんなもの、指輪の力でどうとのもしろ」

奴隷を兵隊にするときは、一度奴隷を王の下に集めそのあと命令権を与えた指輪を将軍に与える、という仕組みをとっている。そこからさらに奴隷を指揮するようために命令権の一部を指輪に移譲して士官に渡していく。実際問題、五万の奴隷を一人で指揮できるはずがないのだ。そのために、指輪を与えて指揮をさせるのだ。

「それは不可能です。穴を無視しろと命令すれば、穴に気づいても落ちていくことになります。それに後続も避けずに進むのでそのまま落ちてしまいます。」

「ちっ、所詮は奴隷か」

奴隷にしたのも奴隷を取り入れたのもグーロム王国ゆえだろうに、とラシードは思ったが、口には出さなかった。

「このままいくと着くのは、夕刻ですな。決戦は、明日にした方がよさそうですね。」

「そんなこと知るか、こちらは三倍以上なのだ。ついたら夜だろうと攻撃を開始する」

こいつは疲労のことは考えないのか、とラシードが呆れていると

ドンッ・・・ドンッ・・・

（来たか）

二度爆発音が聞こえ外が騒ぎになっている。これなら今日の決戦は

さすがにないな、とラシード將軍は落ち着いていたが

「なんだ、何の音だ」

コートル將軍にとっては、それどころではないらしい。

「『炎爆』」

この技は、殺傷能力はかなり低いが爆音と衝撃が強く、敵を混乱させることが目的のときは、大いに役立つ。一応直撃はさせないように全体に満遍なく『炎爆』を落とした。程よく混乱したら地中から潜入する。案外地中が一番発見されないのだ。

潜入したのは、戦闘奴隷一万の軍団でそこで孤立しているやつを探す。

いた、少年だ。風の精霊を使って音を消して後ろから近づき少年を物陰に引きずりこむと同時に首輪の契約を破棄する。

「えっ」

少年は驚いて首の手を伸ばす。引きずり込まれたことよりも首輪が外れたことに驚いているようだ。

次第に落ち着いてきたのだろう。感謝を、言うためか大声を出されそうになったので口を押さえ黙らせる。

「静かに」

コクコク

「時間がないんだ。頼みたいことがある」

言いながら手を離す。

「何でも言ってください」

奴隷から解放されただけでここまで信頼されるのか

「戦闘奴隷のリーダー格ってわかるか？」

「何人かはわかります。」

「居場所に、見つからないように案内してほしい。」

「わかりました。お名前を聞いてもよいでしょうか？」

「ジンだ、君は？」

「僕は、レイトといいます。」

陣地内を移動して

「あの人です。」

「ここに呼べる？」

「はい、呼んできますか？」

「頼む」

レイトが男に近づいていつて何事か話てすぐにこちらに来た。

「レイトいいものってなんなんだ？」

それで釣れるのかよ、まあ見た目からしていかにもなマッチョではあるが。

レイトの時と同じようにして気づかれないように首輪をはずす

「えっ」

レイトと同じ反応だな。

俺は、これを何度も繰り返し敵陣地で味方を増やしていった。

数が増えたら作戦を説明し、さらに数が増えていくと誤魔化す係りや説明する係り、奴隷を連れてくる係り、捕まえる係りと効率を上げていった。

その後リーダー格の人達に後を任せて皇国軍に戻った。

「お帰り」

「お帰りなさいませ」

レティーシアとソフィアが迎えてくれる。

ソフィアとテツとレティーシア以外の女には、後方に下がってもらっている。イリヤを医療関係のところに行かせてリリスとティリエルは、その護衛についている。

「しかし、以外だな。君の女達あつさり後方に下がったんだな。冒険者風の女とか来たがと思ったんだけど」

「それはですね。それがジン様のためになるからですよ。ジン様は、私達が戦場にいるとどうしても気にしますから。」

「ありがとな、ソフィア」

ソフィアの頭を撫でていると

「主、わたしも」

テツが人に戻り、おねだりしてきたので
片腕で抱き上げてテツの小さな体の感触を楽しむ。

「ジン殿ここは戦場たぞ」

レティーシアが怒ったので

「わるいわるい」

俺は謝罪して、テツを降ろす

「羨ましいんですか？」

「羨ましいんですね。」

「ち、ちがうもん」

自分の叫んだ言葉を思い返したのか、真っ赤になって無言で走って逃げていった。

「今の可愛かったな」

「やりますね。皇女様」

「主に気があるのって本当みたいですよ」

「やっぱりそうですね、皇帝も二人を認めるようなことを言っていましたし」

「仲間になるかな？」

俺は、二人がレティーシアについて話しているのを聞きながら陣地を見渡す、3倍の敵と戦うのにみんな諦めていなかった。希望を持っていたのだ。この状況で希望を持たせることのできるこの国は、やはり良い国なんだろうな。だからこそ絶対に勝つ。

「やれることは、やった。後は戦うだけだ。さあ完勝するぞ」

「「はい」」

23話 戦場へ（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

24話 皇国軍VS王国軍

異世界33日目

グーロム王国軍側

「なんだ聞いていたのよりさらに少ないではないか」

コートル將軍は、敵の数を見てほくそ笑む

「そうでございますね」

副官が相槌を打つ。ラシード將軍は、自分の部隊を率いている。

「こちらから仕掛けてやろう。全軍に伝令、あのような陣地正面から粉碎させる」

クイント皇国軍側

ワアアー

「来たな」

「ええ来ました。手筈どおり陣地内まで引き込みます。」

「ああ頼むぜ、なんとか持たせてくれよ。」

「わかっていますよ」

しかし、この陣地には、今一万しか残っていないのだ。残りは、伏兵として左右に、一万ずつ伏せている。

今は、旗を増やしたり陣地を使って数をごまかしている。

一万で十万を受け止めることには不安がある。

不安が顔に出ていたのだろう。

「大丈夫です。相手は奴隷兵こちらは、正規兵です。見事に釣って見せます」

「わかった。信じるよアツシュ」

「全軍迎撃準備、各部隊長は手筈どつりに」

一番隊から十番隊まで作り各部隊長に千の兵を持たせたのだ

「敵近づいてきます。」

「弓構え・・・放て」

無数の矢が敵軍に降り注ぐ。

この矢のさきは潰してあるが、万の軍が動く戦場では、死者も怪我人もでる。

だが、もちろん被害は普通の矢に比べ少ない。

その代わり勢いもあり落ちないまま先頭の部隊がぶつかり合う。

何とか初撃を受け流すと

「一番隊と二番隊は、後退してください。七番隊と八番隊はその援護を」

この陣地は元々逃げやすく作っている。

第一と第二部隊は陣地をうまく使い難く後退をこなし、追撃してきた敵を七番隊と八番隊が攻撃する。一番隊と二番隊は、体制を整えたら部隊の援護に回る。これを繰り返しながら戦闘を行い敵を引き連れながら後退する。

これを難なくこなすのは、皇国軍の練度の高さの賜物だろう。

グーロム王国軍側

「いいぞ。押しているこのまま一気に全軍で攻め落とせ。」

コートル將軍には、それがわからず意気揚々と指示をだす。

「全軍で、でありますか？」

「そうだ、さっさとしろ」

隊長達は、渋々言われたとつり全軍が前進した。

皇国軍側

「思ったより早く。後続がでて来ましたね。」

アッシュが、嬉しそうな表情を浮かべる。

「よほど、こらえ性のない將軍なのでしょうな」

副官が相手の將軍を評価する。その評価は見事に当たっていた。

「ではそろそろ。全軍、全力で後退してください。ジン殿に伝令を」

ジンの側には、ソフィアとレティーシアあと小太刀のテツがいた。

「ジン殿、アッシュ様から「いつでもやってくれ」とのことです。」

「了解。ソフィア準備はいいかい？」

「はい。大丈夫です。」

「じゃあ、いくよ」

俺は、そういつてソフィアの手を握る

「水の聖痕発動『水龍』」

水の精霊が俺とソフィアを、包む。

「『水翼』」

さらに背中に、大きな水の翼ができる。

『水翼』は、大量の水を使うための準備だ。

「ソフィアは、危ないと思った人を助けることだけを考えて」

「はい！」

「いくよ。『陸津波』」

次の瞬間、翼から大量の水が噴出し、大量の水は制御され津波になる。陸に出来た2メートルの津波が五万の奴隷兵を押し流した。

ジンとソフィアは、この技そのものより、呑み込まれた人間を助けることに全力を尽くした。

ソフィアとの修行とは、この共同作業のことだったのだ。

溺れそうな人間を、波から出したり、流された武器を安全なところによけたり、何かにぶつかりそうな人をそらしたりした。

陸の津波がおさまった時五万の奴隷と後続の突出していた正規兵五千の兵が左右に押し流されていた。戦線復帰は不可能だろう。

「すごいな、これがジン殿の実力の一端か。」

アッシュは、しばらく呆けてしまった。その間に空に、青い光が撃ち上がった。

ジンが、光の精霊術で出した合図だ

この合図を、待っていた複数の人間がいた。

例えばクイント皇国軍には、

アッシュ皇子が、

「合図だ。騎馬隊を先頭に、突撃してください。魔術師はその援護を」

アッシュは、今まで温存していた九番隊と十番隊の騎兵二千を出して正面から反撃にでた。その後ろを、馬に乗った魔術師千人がついていく。

伏兵の指揮をしているゲオルグは、

「合図じゃな。一気に攻める。我らの目的は、貴族の私兵二万のみじゃ、それ以外は、手柄にならないと思え。突撃！」

次の瞬間一万もの伏兵が、地中から現れた。ジンが土の聖痕の『岩皇』を使って作った地下の空洞から出てきたのだ。ジンが、敵軍の足止めをしていたのは、彼らをここに伏せる時間を稼ぐためだったのだ。グーロム王国はこの空洞を知らないため伏兵に対して無警戒だった。

さらに敵軍を挟んで反対側には、ゲオルグの副官が、同じ内容を叫んで突撃を仕掛けた。

グーロム王国では、

戦闘奴隷の一角のレクト達が

「合図ですムガルさん」

ムガルとは、レクトの次に解放した戦闘奴隷だ。レクトをつけて後を任せた一人だ。

「見えとるよ。」

彼の目の前では、部隊長だった者の死体がある。この時、いたるところで奴隷を操る指輪持ちの部隊長が不意打ちで戦死していた。

「虐げられるのは今日で終わりだ。俺達には、救世主のジン様がついてる。ジン様の頼みで今から貴族共を殺しに行く。いいか野郎ども」

「」「オオオー」「」

ここにいるのは、五十人程だが、解放した戦闘奴隷は、二千いる。

「救世主様のために」

「」「救世主様のために」「」

二千の奴隷が牙を向いた瞬間だ。

正規兵の一角ではラシード將軍が

「私は、民達を守るためこの国を捨てるついてきてくれるか？」

「我らラシード將軍と共に」

彼らは、ラシード將軍に鍛えられ、ラシード將軍を尊敬している兵達だ。その数五千。

「ありがとう。これよりコートル將軍を討つ。ついてこい」

ラシード將軍と五千の兵が、駒から人に戻り。反旗を翻した。

合図を聞いた五ヶ所が反撃に出たとき、ジンはティリエルの背に乗り空から戦場を見渡していた。ティリエルも合図を見て行動した一人だ。

戦場は、すでにほぼ決着がついていた。

奴隷兵五万は、すでに『陸津波』により左右に割られており、元々高くない士気が全くなっている状態で騎兵を止められる筈もなくほぼ素通りして貴族の私兵に肉薄する。

戦闘奴隷一万は、指揮官をすべて失い。何もせずに伏兵一万と元戦闘奴隷二千を、貴族の場所に通した。

正規兵二万は、五千を『陸津波』に呑み込まれ、さらに五千に裏切られ半分になっていた。残った一万もラシード將軍を見てどうすればいいのかわからなくなりラシード將軍と合流したゲオルグ將軍率いる一万に簡単に突破されてしまう。

こうして

貴族の私兵 二万

対

正面 三千

右 一万二千

左 一万五千

の三万の戦闘入った。

貴族の私兵は、何とか抵抗しようとするが、『陸津波』を見せられ動揺しているところに、突然の三方向からの攻撃に組織立った抵抗ができず簡単に崩されていく。

それに比べて攻める側の、皇国軍、ラシード將軍の兵、元戦闘奴隷と三種類の人間が混じっているにも関わらず。かなりの連携が取れている。

この時、指示していたのは、戦場の流れを空から見ていたジンだ。風の精霊を使つて各リーダー格に命令を出し、合流させ連携を取らせていた。空から戦況を見ていたジンには簡単なことだった。

グーロム王国側は、

「なんだこれは、なぜこんなことになっている。」

命令を出すべきコートル將軍は呆然としていて、碌に命令も出せていない。

しばらくして自分を取り戻した時の第一声は

「もう無理だ。私は、逃げるぞ」

とだけ叫び一番最初に、逃げたした。元々將軍の器でわなかったのだ。それを見た他の貴族（奴隷商人でもある）達も我先にと逃げ出す。逃げる彼らの道は、後方しかない。

前方は三千の敵と五万の奴隷の壁その後ろには七千の敵、左右には一万を超える敵がいる。彼らが後方を選んだのは必然だった。しかし、その必然は作られた必然だった。

後方には、『嵐帝』を発動したジンが待っていたのだ。

コートル將軍がジンを見かけた時すでに辺りは血の海だった。すでに逃げようとした者がいたようでジンは、『嵐帝』の広範囲索敵を使い後ろ側に逃げてきた敵をすべてを殺していた。一人残らずだ。

「お前がコートル將軍だな。その首貰うぞ」

ヒュン

小さな風の音がした。

それだけでコートル將軍は、首を体から切り離され絶命した。
この時のジンは、口以外全く体を動かしていなかった。

コートル將軍の首が風に運ばれジンの近くに落ちた次の瞬間、

「『削嵐』」

逃げてきた貴族とその私兵は、声を出すこともできずに無数の風の刃にすり潰されて肉片になった。

間もなくして、正規兵の指揮を取っていたグーロム王国側の最後の將軍が降伏勧告を受け入れ戦いは、終わりを告げた。

こちらの被害は死者百人、怪我人が七百人ほどだ。

グーロム王国側は、貴族の私兵二万のほぼすべてが戦死、それと正規兵に少し死傷者が出た。

文句無しの完勝だった。

25話 解放宣言

この場の戦いは終わったがまだまだやることがある。

俺は簡単な後始末を終わらせると二人に

「アツシユ、ゲオルグ將軍作戦の第二段階に移りたいと思う。」

「わかった。ゲオルグ將軍後はお任せします。」

「わかりました。」

「さあ行くぞ、王都へ」

異世界34日目

休まず馬を走らせて（俺は自分の足で走ったが）何とか次の日には、王都にたどり着いたその数は、騎兵八千その騎兵が王都の四つの門を二千ずつ付き東西南北の門を封鎖している。この八千は、皇国軍五千頭とラシード將軍率いる千頭、残りの二千頭は王国軍から奪った馬だ。八千もの騎兵はそうそう見れるものではない。

「ラシード貴様、娘がどうなってもいいのか！」

今城壁の上で肥満体型の男が、首輪のついた小さな女の子を引き連れてラシード將軍を脅している。

驚きはない、以前ラシード將軍と戦い今回の策を持ちかけた時に、何故現政権に逆らわないのか聞いたら、娘を人質に取られていることを聞いていた。

「ジン殿頼む娘を助けてくれ」

「もちろんだ。」

今のラシードには、俺と戦った時の雄壮さはなく娘を出され精神に余裕がなくなっている。早く娘を助けることにしよう。

「大丈夫だラシード。お前を連れて来たのは、お前がいればあいつらがお前の娘を連れて来ると思ったからなんだ」

「どういう意味だ？」

「つまり外に連れて来てくれれば絶対に助けられるってこと・・・
雷の聖痕を発動『雷神』」

次の瞬間には、雷速で近づいた俺は肥満体型の男からラシードの娘を奪い取っていた。

「な、に」

呆然とする男を無視して城壁の上から飛び降りる。雷速で逃げないのは、女の子が耐えられないからだ。

「ひゃ~~~~~」

女の子の悲鳴を上げている。良い悲鳴だ元気そうだな。

気付いた兵が矢を射かけて来るが、すべて雷で焼く。

地面に降りるとすぐにラシード將軍の元に行く。

「おお、フローラ良かった本当に良かった」

「お父さん、うっ」

「どうした！フローラ！」

突然フローラが苦しみだした。首輪の逃亡防止のための機能だろう。すぐに、首輪を外してやる。

「あっ」

「なっ」

きょんとしたフローラがこちらを見ている。
頭に手を置いて

「もう大丈夫だよ。君は自由だ。」

フローラの目から涙が零れた。そうなるともう止まらず泣き出してしまふ。

ラシード將軍が、娘を抱き締める。

その場を離れ

「アッシュ降伏勧告は、すんだか」

俺の声はかなり冷たくなっていた。

「その返事が、あの子だったんだよね」

「そうか。じゃあ適当に殺して来るから」

「気を付けてください」

「誰にいつてんだよ。」

俺は、そのままにしていた『雷神』の力で城壁の上に戻る。そこからは、一方的な殺戮が始まった。

人間が雷速に、反応できるはずもない。めばしい者を雷で殺していく。

奴隷と女子供以外をあらかじめ片付けると城門を開けて外で待っていたアッシュ達を中に入れる。

その後王都からも人を集め城の庭園に来てもらう。

庭園には、皇国兵、王国兵、国民、奴隷達にラシード達が集まっていた。

そこに、俺は一人の男を放り出す。

「ひい、わ、わたしを誰だと、お、思っている」

男をこの国の王を無視して。

「皆聴いてくれ。この男は、この国の王だ。此度の戦争はすべてこの男がやったことだ。そして私は、この国と奴隷制度を否定する。」

この男は、その象徴だ、ゆえに俺が判決を下す。そして俺は奴隷のいない世界をつくることをここに宣言する。」

周りは状況をあまり理解できていないようだ、構わず

「『炎蛇・四首』・・・消えろ、元凶」

俺は男を四肢から炎蛇に食わせる。喰われた部分は、焼かれ血はないそのせいで失血死はせず長い苦しみを味わって死んだ。死刑のあと男の存在したはずの場所には王冠だけが残っていた。

近くに、アッシュがやってきて

「私は、アッシュ・クイント、クイント皇国の皇太子です。ここにクイント皇国皇帝クルト・クイント名の元にクイント皇国の勝利とグーロム王国内の奴隷の解放を宣言します。」

一時の静寂後に、ここに集まった全ての人間が歓声を上げた。

王都は、そのまま宴に入った。

しかし俺には、仕事が残っていた。奴隷を解放する仕事だ。首輪を外しても次から次へと奴隷が来るので休む暇がない。

この戦争で、聖痕を四つも使ったのでかなり疲れていた。それでも休む訳にはいかなのでふらふらになりながら解放していた。一度寝ぼけて頭からこけてしまった。奴隷の解放は、見かねたテツが止めるまで続いた。

「ありがとつな、テツ。実は結構限界だった。今日は、一緒に寝よ

う」

「はい。お供します」

俺は、城にあった一室でテツを抱っこして眠りについた。奴隷兵五万と戦闘奴隷八千のほうは、城からマスターキーが見つかりどうしても見つからなかった少数だけですんだ。あぶなかった六万近い人間を解放していたらぶっ倒れていた。

異世界35日目

マスターキーが見つからなかった五百人の解放が終わった時すでに昼を過ぎていた。全員が感謝を口にするのでかなり時間がかかってしまった。中には忠誠を誓う者までいた。

今俺の側には一緒に寝たテツしかいないので仲間達を探すことにする。その前にアッシュに挨拶するか。

「よっアッシュ大変そうだな」

アッシュの部屋には、紙の壁が出来ていた。

「やあジン、失敗したよ。秘書官を連れてくるんだった。」

「レティーシアは、手伝わないのか？」

「役に立たない」

バツサリ切った

「ジン手伝つてくれないか？」

「いやだ、それに俺じゃあ大したこと出来んだろ。それより俺の女達を知らないか？」

「ああそっちの問題があつた。実は一人判断に困る人がいてね、その人の扱いに困っていてレティーシア達に頼んだんだよ」

「判断に困る人？」

「この国の王つて子供はいなかつた筈なんだけど。その人、私は、この国の王女です」って言うんだよ。変だろ」

確かに敗戦国の王女を名乗る意味がわからない。普通敗戦国の王族なんて殺されるか良くて妾にしたりと政治の道具にされるのがおちだ。

「確かに変だな。俺も女達に会うついでに会ってみるよ。」

居場所を聞いてその場に向かう。

26話 忘却の王女

教えてもらった部屋に行きノックすると中からソフィアが顔を出した。

「ジン様！ご無事で」

「ジン」「お兄様」「ご主人様」

聞き付けた三人が飛び出してきた。なんとか三人を受け止める。

「みんな元気そうだな。中の人に会わせてくれる」

中に通してもらい自称王女に直面する。

見た目は、森を思わせる深い緑色の長い髪。顔立ちはかなり整っているが、どこことなく表情が硬い。体は小さく10才を越えた辺りだろうか。

「はじめまして俺はジン、君は？」

「これはどうも私は、ミリーと申します」

傍目にはわからないが、どこことなく不安定な感じがする。

「みんな外で待ってて」

「ジン様、彼女に王女についての話をするなら気を付けてください」

「わかった」

みんなを外に出す。

ボタン

「それで何が聞きたいんですか？」

「君は何者だい？」

一瞬ピクツとなったが

「私はこの国の王女です。」

「どうして王女を名乗ったんだい？」

「王女が王女と名乗るのがおかしいですか、英雄さん」

「知っていたか」

「ここから見ていました。」

なるほどここは昨日の庭園がよく見える。

では、俺は仇になるのか

それにしても、彼女から憎しみは感じない

「どうして王女になりたいんだ？」

「ですから」

苛立たそうにしたミリーに

「いやこの際君が王女かどうかは問題じゃないんだ。」

「な、何で？」

あきらかなに動揺だ

「君のことを知っている人がいない以上、君は王女になれない」

「そんな」

彼女は、かなりの衝撃を受けているようだ。

「この国の高官の、ほとんどは死んでいるんだが、君を知っているのは？」

彼女の言ったのは重臣ばかりでようするにゴミのような奴らだった。つまり俺が殺している確認はできない。

「王宮でその人数しか知らないということは、君は何処かの村で王宮とは直接関係なく生まれたんじゃないか？」

「そうです。私は妾ですらない女から生まれて。数年前に連れてこられました。」

ミリーの声が低くなった気がする。
それでも続ける

「なら村には帰れないのか？」

「私の村は燃やされました。」

「・・・」

「私はこの国に全て奪われました。私の家族は殺され、村は焼き払われ、忘却の魔法で名前を忘れさせられ偽りの名前を与えられ。娘と呼ばれながらも、わたしの立場は伯爵の娘でした。そしてほとんどの間ここに監禁され教育だけを受けていました。」

ミリーは、全てをぶちまけるように語る

「もう私には、家族も生まれた村も名前すらありません私には、何もありません。確かなものが、信じられるものが、なら愚かであるうとこの国の王女でいなければ私は何なんですか？教えてください私は何なんですか？嘘で着飾った私は何者なんですか？」

空虚な顔に涙を浮かべた彼女を見ながら思った。

この子は俺に似ている。

一度世界との繋がりをすべて失い自分のことがわからず、とても不安定になっている。

違うのは、俺は自分で選び、ミリーは奪われた。

「たしかに君は何者でもないのだろうね」

「ッ、そう、ですよね」

絶望に打ちひしがれるミリーに俺は近づき脇に手を入れ抱き上げる。

「な、何ですか？」

できるだけ声に力を入れて話しかける

「何者でもないのなら、何者かになれば良い、まず名前を与えてやる。これから一生使う名前だ。」

「名前？」

「そうだ。そうだな………今から君はフェリスだ。」

「フェリス？」

「そうだ。フェリス何か好きなことや得意なことはないのか？」

「えっえっ」

この時女の子は、ジンの勢いに吞まれていた。

「何かあるだろう？」

「えと、料理が好きです。」

「上手い？」

「と、得意です。」

「なら俺のところで料理人をしないか？」

「え、なんで」

「俺の仲間で料理が得意なやつがいなくなてな。」

「そうじゃなくて・・・なんで、そこまでしてくれるんですか？」

「俺も似た経験がある。その時、俺はすぐにソフィアたちに出会えたから大丈夫だった。」

「えっ」

「だから、俺が居場所になってやるよ、名前もやる、だから新しい人生を歩んでみないか、君には未来も自由もある、これから君は何でもできるんだよ。確かに君は一度終わったのかもしれない。けど、もう一度俺の側で始めてみないか」

「あっ、わたし」

フェリスの目から涙が溢れる

「いいんですか？」

「おいで」

フェリスになった女の子は、ジンの胸に顔を埋めて

「わぁーーーー」

大きな声で泣き出した。

「はじめよう、新しい君を」

フェリスは落ち着くと

「ありがとうございます。それで、その願いがあるんです」

恥ずかしそうに

「あのジンさんのこと、お兄ちゃんって呼んでもいいですか？」

「えっ」

「だめ？」

「いや、いいよ」

それだけで、顔を輝かせてくれた。
ティリエル、なんて言うかな。

「フェリス仲間になってくれる？」

「はい」

新しい仲間が加わった。

そこで外の皆を呼び戻した。
あらためて自己紹介をした。みんな名前が変わったことに驚いていたがフェリスが名乗った時にとっても嬉しそうに笑ったのを見て、なにも言わなかった。

ただ、ティリエルは

「お兄様は、私のお兄様です」

「お兄ちゃんになってくれるっていったもん。だからお兄ちゃんは、私のお兄ちゃんだよ」

フェリスが子供っぽくなっている。こちらが素なんだろうな

「む」

「う」

「こら、二人とも仲良くしなさい。」

二人を左右に抱き抱えキスをする。

「お兄様」

ティリエルは、うつとりしていたが

「~~~~~ッ」

フェリスは、言葉にならない悲鳴を上げ、顔を真っ赤にしている。

フェリスは、初々しいなと和む。

「そういえばアッシュに話通さないと。ついでに皇国に帰ることも話すか、皆それで良いか？」

「はい。いいですよ。」

ソフィアが返事をして他の皆も頷く。

「そういえばレティーシアは、どうするんだ？」

「私も戻る。事務仕事は苦手だ。」

うん、アッシュも期待していなかったみたいだしね。
今日は、もう遅いから帰るのは明日だな。

「よし、皆で夕食にしよう」

「はい」

アッシュに、フェリスは俺が預かることになったことと明日皇都に戻ることを伝えた。戻ること伝えた時泣きそうになっていたが男の涙なんかに興味はないので無視だ。

27話 我が家

異世界36日目

皆で朝食を取っている時に

「そういえばフェリスの位置付けってどうなったのだ？」

レティーシアが聞いてきたので

「料理人兼メイドだな。」

「まあ、メイドはなんとなくわかっていただけだね。あの格好だしね」

俺の隣のフェリスは、メイド服を着ていた。少々幼いが服装は正統派のメイド服だ。ちなみにイリヤも対抗してメイド服を着用している。二人とも可愛い、フェリスは小さなメイドでイリヤはエルフェイドに仕上がっている。

「料理得意なんだ」

「はい」

「この料理もフェリスが作ったんだぞ」

「え、そうなの。いつもの料理と比べても遜色ないよこれ」

「はい、とってもおいしいです。」

「すごいよね。まだ小さいのに」

「小さいは、余計です。」

そう言いながらフェリスも満更ではないらしい、頼が緩んでいる。

食事も終わった頃に、アツシュが訪ねてきた。

「やあジン、お客さんが来てるよ」

「お久しぶりです。ジンさん」

そこには、ギルド職員のクレアさんがいた。

アツシュにクレアさんを皇国に送るように頼まれ何がなんだかかわらないまま城を出ることになった。

道中何をしに行くのか訊くと

「ギルドマスターは基本一国に一人なんです。普通は戦争などで国が潰れたり増えたりした時に揉めるんですけど、今回はうちのマスターがあっさり降りたんです。そしてギルドマスターがいるところが冒険者ギルドの本部になるので、それで皇国のギルドの方という調整するためにわたしが赴くことになったんです。」

「大変だな。わざわざ皇国を行き来するなんて」

「いえ、そうでもないですよ。もともと皇国には興味がありましたし、それに向こうに住む予定なんです。」

「え、住むの？」

「はい、まだ住む家は決まっていませんけどね。」

「またなんで？」

「毎回報告に戻るのも面倒ですし、それに興味があるんです。英雄様に」

「なぬ」

「む」

「あらあら」

「一名様追加」

「なはは」

女達の反応はそれぞれだな。最近の英雄といえば俺しかないからな。

「あゝまあよろしく。」

「ええ、よろしく願います。」

異世界38日目

皇国の城についた時、俺達は国賓待遇でもてなされた。召し使い達が左右に立って道ができている。

「ジン様、ご無事で」

たくさんのお迎えの中からミリアさんが出てきて迎えてくれる。

「皇帝がお待ちです。こちらにどうぞ。」

クルト皇帝の執務室に案内された。

「ようクルト久しぶりだな。」

「ジンくん、ありがとう。君のおかげで問題がいくつも解決したよ。単純な意味での脅威であったグーロム王国を潰してくれたのをはじめ、グーロム王国内の奴隷推奨派の貴族達の殲滅、ラシード將軍の引き入れに奴隷の解放これらすべて君がいなければなしえなかった。」

「といっても、まだ問題は残っているだろ。一応戦場の貴族と王城の貴族はすべて始末したが残党はいるだろ。ラシードだけにグーロムの軍を任せるわけにはいかないしな。元王国領が落ち着くのはいつ頃になりそうなんだ？」

「半年以内には一先ず終わらせたい、他国に集まってもらうのに時間がかかるからな。それまでには終わらせないと魔物の大侵攻に対して動けないかもしれないからね」

半年か、実際に元王国領を立て直すのまだ先になるのだろうな。一先ずというのは、本当に緊急の要件だけを片付けるのだろう。

「まあそれまで俺はゆっくりさせてもらうよ。ここ一ヶ月忙しかつたしな。」

「おおそうかゆっくりするのか、そこでだ、どうだねジンくんゆっ

くりするために自分の屋敷など欲しくはないかね？」

「なんだよ、突然」

「いや、君への報酬を考えていたんだよ。先程言ったとおり君の戦果は計り知れんそれで報酬に関して悩んだ結果、その候補のひとつが屋敷になったんだよ。どうだね？」

「そうだな、ありがたく貰っておこうかな。」

「あれ？意外だな。君はどこかの国に肩入れするのは嫌がると思っていたのだが」

「まあな、でもいつまでもどこかの宿屋に泊まるのも問題だし、それに屋敷は報酬なんだろ。それに帰る所があるっていうのは良いことだからな」

帰る家があるのは、割と重要だと俺は考えている。

「そうかい。それはそれとしてレティーシアについては、考えてくれたかい？」

「俺としては、歓迎なんだが国としてどうなんだ？」

「たしかにすぐに結婚というわけにはいかないな。だから今は一緒にの屋敷に住ませてやってくれないか？」

「ち、父上！」

縁談は以前にきいていたが今度は同居の話まで出てきたのだ黙って

いられない。まあレティーシアは、怒っているというより恥ずかしく
がっているようだ。

「俺は構わないが、屋敷は大きいのか？」

「まあまあ大きいよ。それでレティーシアは、どうするんだい？」

「わ、わたしは」

「ジンくんの側には魅力的な女の子がいっぱいいるようだ、この
ままでは出遅れてしまうぞ」

「うー、……ジン殿そのへん厄介になってもいいのだろうか
？」

「もちろん」

「よし決まりだ。それじゃあ、屋敷の場所は、ミリアが知っている
ミリアに案内してもらってくれ」

「わかった」

そして俺達は、ミリアさん先導のもと俺達の家になるところに向っ
た。

「「「でかい」」」
「「「大きい」」」

「確かにでかいな。」

「どこを見ているんですか！」

ソフィアに怒られてしまった。

「ミリアさんの胸」

「確かに大きいですけど、今はそっちじゃありませんお屋敷のことです」

大きいを連呼されてミリアさんが赤面している。

「皇帝が言ってたじゃん大きいって」

「ですがこれは」

目の前には、豪邸と呼ぶにふさわしい建物だった。軽く迷子になれそうな大きさだ。皇族のレティーシアはともかく、ほかの女達は、萎縮してしまっている。

「それだけの仕事をしたってことだよ。」

「でもそれはほとんどジン様の手柄で」

「なに言ってるんだよ。俺はお前達がいるから頑張れるんだ。お前達のおかげで俺は孤独にならずにすんでいるんだからな。俺が住む以上俺の女が住むのになんの問題もないさ。」

「うーん、わかりました。」

まだ、不服そうだがその内なれるだろう

「それでもこの規模だと掃除が大変だな」

「それなら大丈夫ですよ。私がジン様のお世話をさせていただくことになったので、掃除等はお任せください。」

これには、焦った。

「いやいや、それはさすがに悪いだろ。せつかく皇族付きなんだし、それにいくらミリアさんでもこの規模を一人で管理するのは」

屋敷を見ても慌てなかった俺が、ミリアさんという個人が関わった瞬間焦りだしたのを見て。

「「「あはは」「」」

ミリアさんを含めみんなに笑われてしまった。

「主らしいです。」

テツよ、どういう評価なんだそれは。

「ふふっこれは、私から志願したんですよ。レイトという名前を覚えていますか？」

「ああ覚えてる、戦闘奴隷二千を解放したとき一番最初に解放したやつだ」

「レイトは私の弟です。」

そうだったのか、そういえば俺が皇女を助けた時、ミリアはどうしてもグーロム王国との交渉に行きたそうだった。弟が奴隷だったからなのか

「ジン様、弟を助けていただきありがとうございます。このご恩を返すために私は志願したのです。」

言いきつた後顔を赤らめて

「あと、その、気になるのでしたら、わ、私の胸を好きにしてください。でもいいですよ」

女達は、少し呆れ顔だ。俺としてはうれしい、ミリアさんの胸は、この場では一番大きいのだ。

「それでは夜にでも」

ポカ
ビシッ

フェリスにパンチされレティーシアにチョップをくらった。

その後その二人を何故か周りの女達が諭していた。

内容を聞いてみると内、ジンと一緒にいるなら早くなれなさい、ということらしい。

「でも一人だと大変だろ」

「私も手伝いますよ」

「私も」

ジンのメイドをやっているフェリスとイリアが名乗りを上げる。

「それでも三人だしなあ」

「それも大丈夫です。ジン様が解放された奴隷の方達から志願した人を国で雇って屋敷にいれるので大丈夫ですよ」

至れり尽くせりだな。

「出来れば屋敷内は女の子だけがいいなあ。俺の女をジロジロ見られるのは嫌だし。それはそうと、いろいろありがとう。それじゃあ改めてよろしくミリアさん」

「私はもうあなたの物です。ミリアと及びください」

「わかった。ミリア」

そうして俺は、新しい我が家に入った。

その夜に、ジンの寝室にミリアが訪ねてきた。

「本当に来てくれたんだ」

「来ちゃいました」

「本当にいいのか？恩といっても弟を助けたことだろう」

ミリアははにかみながら

「ふふっ、お忘れですか、レティーシア様を助けに来て頂いた時わたしも助けてもらってるんですよ」

「まあ、そうかもしれないが」

「それとも魅力ないですか？」

そういいながらもミリアは服を脱いでいくそして下着姿になり。胸を強調している。

明らかに体に自信があるし余裕もある。ならば

「いいや、かなり魅力的だよ。」

そう言っミリアを後ろを向かせて胸を両手で包む。そして氣と電氣を使って一瞬でミリアを絶頂に導く。

この世界に来てから少しずつ性技を練習していたのだ。ミリアの余裕は一気に消え去った。

「寝かさないからな」

「あ、ちょ、まっ、~~~~~ッ」

28話 女達との休日 1日目

異世界38日目

食事中にイリヤが

「これからどうするのですか？ご主人様」

「そうだな、今は聖痕が使えないから、使えるようになるまで、家で束の間の休みを楽しむことにする」

「それでしたら皆さんと順番に楽しむというのはどうですか？」

それいいな、個人と一緒にいられる時間少なかったからな。

「それ採用」

「わたしも賛成です」

声が膝の上から聞こえる。フェリスが俺の膝の上で食事を一緒にとっているのだ。

料理人の特権だそうだ。毎日すると皆が怒りそうなのでほどほどにしよう。

皆と遊ぶということはお金を使うな今の残金は

それほど大きな買い物はなかったがお金は消費するものなので、これまで細かいところで使ったのが1000ギル、フェリスの服類

に1000ギルの2000ギルを使ったので

45000ギル - 2000ギル = 43000ギル

皇国軍と一緒に行動していたのであまり出費はなかったようだな。

でもこれ俺だけの金じゃあないんだよなあ。まあ、なんとかなるか。

- レティーシアの場合 -

お昼すぎにレティーシアが俺の部屋に現れた。

「ジン殿、くじ引きの結果最初はわたしになったのだが、
……
何をしよう?」

「確かになほとんど考える時間なかったからな」

「うーん、……あつ、そうだジン殿手合わせをしないか、一度や
つてみたかったんだ。」

「休みじゃあなくなっているが、まあいいか。中庭でやろうか」

「やった」

レティーシアが嬉しそうにしてくれているならいいか。

中庭に出て俺は木刀を、レティーシアは木剣を構える。

「はじめ」

途中で捕まえたメイドさんに合図をいってもらう。捕まえる時に手を掴んだら赤面された。メイドのほとんどは俺が奴隷から解放した人たちで、恩を感じている人が多い、中には好意を持っている人もいるらしい。

打ち合いを始める。

打ち合ってわかったがレティーシアの剣はリリスのような戦いの場で鍛えられた剣ではなく誰かにならったのだろう技があり型があるようだ。何かの剣術なのだろう動きが洗練されている。ただ少し単調で型に嵌っている分俺にはやりやすい。

フェイントで釣った所に懐に入り足を引っ掛け肩で押し倒す。あっさり転倒してそこに木刀を突きつける。

「負けたか」

ちよつと不満そうなレティーシアを立ちあがらせる

「しかし、依然見たときはもっと早かったと思うのだが」

それで不満そうなのか、手加減したと思われたか

「手加減したわけじゃないぞ、普段は精霊にいろいろ助けてもらってるんだ。さっきの俺本来の力だよ」

「そつなのか、それでも私は負けたのか」

今度は、落ち込んでしまった。

「まあ俺の師は、刀神つまり神様だからな」

「か、神が師なのか羨ましいな」

「そうでもないぞ、あいつの修行って滅茶苦茶だったし。なんと死を覚悟したことか、おまけに期間が短いからって一時期は、朝昼晩、飯時、寝てる時も風呂の時も不意打ちしかけてきやがって。風呂の時なんか壁壊して女子風呂と繋がってしまっただけの精霊王と鉢合っし。」

ちょっとトラウマになっているらしい。少しトリップしている。

「ジ、ジン殿帰って来い。そ、それより私に対してなにか指摘はないか？」

「あ、ああそうだな攻撃が単調に感じたかな、俺も未熟だからよくわからないけど、少なくともレティーシアの攻撃を受けていて驚きはなかったな。まあその分まだまだ強くなれると思うが。」

「そうなのか、ジン稽古に付き合ってくれないか？」

「いいよ。存分にやろう」

二人で夕方まで汗を流したが、全くといっていいぐらい色気のないすごし方だなレティーシアらしいが。

・ソフィアの場合・

レティーシアとの稽古が終わりレティーシアに先にお風呂入ってもらっている、

「ジン様、次は私の番ですよ。」

「こんな時間からでいいのか？」

もう日が沈んでいる。あまり時間もないと思うのだが。

「大丈夫です。さつき中庭の稽古見ていたんですけど汗を掻かれていたので、その、一緒にお風呂に入りませんか？」

なんだこの展開、レティーシアとは正反対にとっても色気のある展開になってる。まあ断る理由もない

「じゃあ俺からもお願いするよ」

レティーシアがあがった頃に浴室に向かい、先に入って待っていると

「ジン様、お邪魔します。」

タオル以外にも身につけていないソフィアが入ってきた。髪を頭の上で団子にしているのが新鮮で可愛い。

「お背中お流します。」

「ああ、頼むよ。」

ソフィアに背中を流してもらった後で

「次は俺が背中を流そう」

「えっいいですよ。そんな」

「いいからいいから」

「ジン様手つきがいやらしいです」

「気にするな」

「あっ」

すっかりソフィアの背中を流してさらにちょっとだけいたずらした。

体を洗ったら二人でお湯入る、もちろんタオルは外して入るので全裸だ。

やっと恥ずかしさが薄れてきたのかソフィアが

「ジン様見てください」

精霊術で作った見事な水の鳥を見せてくれた。

やっぱりソフィアの制御は、すばらしいな。この能力があったからこそ奴隷兵5万を押し流す決心が出来たのだ。

ソフィアは俺をすごいと言うがソフィアも少しは自身を持っていいと思うのだが。

「すごいなソフィアは、俺も何か作ってみようかな」

そこからは、二人で精霊術を使ったり精霊術の話をしたりして時間をすごした。

そろそろあがろうかと思ったときソフィアが型に頭を寄せてきた。

「私村にいた頃は、こんなことになるなんて思いもしませんでした。ずっとあの村で巫女をやりながら精霊術で農作業を手伝って暮らすものと思っていました。ジン様のおかげで世界を見られました。ありがとうございます・・・ま・・・す」

バシャ

言葉が尻すぼみになっていって最後には顔から湯船に顔を落としてしまった。

すぐに抱き起こすと真っ赤になっている。完全にのぼせている。

体を拭いて服を着せ自分の部屋で介抱していると

「うーん」

「起きたか？」

「あ、ジン様申し訳ありません」

状況も理解できているようだ。

「駄目じゃないか無理しちゃ」

「だって」

ソフィアが口の辺りまで毛布を上げて

「ジン様と二人っきりで話すの楽しかったんですもん」

可愛いなオイ

「ま、まあそれじゃあ仕方ないな、うん」

「ジン殿いますか？」

レティーシアだ

「どうぞ」

「失礼します。よかったソフィア殿は気づかれたんですね」

「ああ、ついさっきな」

「それですねジン殿、その、夜は私とソフィア殿が閨を共にすることになっているのですが、よろしいでしょうか」

そんなことになっていたのか。明日もそうなるのだろうか。

「もちろん、歓迎するよ。もともとソフィアは、動かせなかったしね」

その夜は、俺を中心に川の字で寝ることになった。ソフィアとレティーシアは、二人とも疲れていたのだろう二人は、手を繋いだ程度で静かな夜をすごした。

29話 女達との休日 2日目

異世界39日目

・ティリエルの場合・

「あの、お兄様はお空のお散歩に行きませんか？」

朝にティリエルが訪ねてきた。

「うーん、今聖痕は使えないからな〜難しいな」

「いえ、私の背に乗ってくださいればいいです。」

「いいのかい？前乗ったときはかなり疲れていただろう」

「わたしも成長していますし、そんなに早く飛ばなければ大丈夫です。」

「ティリエルがいいならいいけど」

「じゃあ行きましょう」

俺とティリエルは、朝のお散歩に空を飛んだ。

以前にらせてもらった時は、とても速くて余裕がなかったからあまり楽しいとは思わなかったが、実際龍の背に乗って空を飛ぶのはけっこう楽しい。前の世界では夢想でしか出来なかったことがこの世界では出来る、こういう時異世界に来てよかったと思う。

ティリエルに乗って皇都を一週してから屋敷に戻る。

「あ、ティリエルそのままです。」

「どうしたんですか、お兄様？」

「龍の姿のティリエルの世話をしてみたんです。」

龍の姿のティリエルは、とても綺麗だ銀の鱗に覆われていてすべて本物の銀のような輝きを放っている。そしてその光が不快にならないのだ。そんなティリエルを世話したくなったのだ。

メイドさんに頼んで、タオルを持ってきてもらおう。持ってきてもらったタオルでティリエルの体を拭く。

「気分はどうだ？」

「気持ちいいです。もっと強くして下さいても。」

「そうか。」

ティリエルにどうして欲しいかを聞きながらお世話をさせてもらった。

ティリエルの世話が一通り終わりティリエルも人の姿に戻る。

今は膝の上で遅めの朝食を取っている。昨日フェリスが膝の上で食事しているのが羨ましかったようだ。

食事をしていると突然ティリアルが

「お兄様、どうして私は夜伽に呼んでくださらないんですか？」

「ゴホ、ゴホ」

むせてしまった

「どうした突然？」

「私だってもう十五ですよ、前の世界はよくわかりませんが、この世界では結婚だって出来ます。」

ティリエルの見た目は、少々幼いフェリスほどではないが、アルベルトと話してからと考えていた。答えに困っていると悲しそうな声音で

「やっぱり見た目ですか？」

「そうじゃあないけど」

「じゃあ私のことがお嫌いなのですか？」

「それはありえない。愛してる」

「なら」

「・・・わかったよ。そうだな１６歳になったら、俺の方から呼ぶよ、俺の国では女性は１６歳から結婚できるんだ。頼む俺はティリエルを大事にしたいんだ。」

「・・・わかりました。今はその言葉で我慢します。ただ一つお願いがあります。」

「なんだい？」

「キスをしてください」

「わかった」

そう言つて俺はティリエルにキスをする。

するとなんとティリエルが舌を入れてさらに舌を絡ませてきた。俺もそれにこたえる。

少し長めのキスが終わったとき

「ごちそうさまでした。」

うつとりした表情のティリエルがいた。

その言葉は、朝食の終わりともう一つの意味をもっていた。

・テツの場合・

ティリエルとの食事が終わり部屋でくつろいでいると

「主、私の番」

「どうして足音を殺してきたんだ。」

テツが音もなく現れた。

「主を驚かせようとした。けど、驚かなかつた足音聞こえた？」

「いいや聞こえなかった。ただ精霊が教えてくれるんだよ、不自然

な行動を取ればわかるんだ。」

「主に奇襲は効かないの?」

「少なくとも俺個人には、奇襲は無意味だな。」

「主すごい、さすが私の主です。」

「はは、ありがと。テツは、何をするか決まったのか?」

「決まらなかった。主何かない?」

「そうだな、・・・街に出ようか」

「街に?」

テツの頭を撫でながら

「何か楽しいことがあるかもしれないだろ」

「はい、行きましょう」

今は、テツと手を繋いであてもなく街を歩いている。テツは、歩いているだけなのに楽しそうにしてくれている。

だからといって何もしいわけにはいかないよなあ、装飾品店が見えてきた。テツは、女の子だし鉱石を吸収する、興味があるかもしれない。

「テツ、あそこに入ろう」

テツを連れて店に入る。

「わあ、主宝石がいっぱいです。」

よかったテツは、興味をしめしてくれた。テツと店内を見て回る。

「主ありがとうございます。」

テツが小走りで展示品を見て回る。テツのこんなにはしゃいだところは、はじめて見たな。

「この穴は、何でしょう？」

テツが見ている者は銀細工の首飾りで翼を模して作られているようだ。二つの翼が重なるように作られていて、翼に一つずつ穴がある。店主に聞くと

「その穴に宝石を埋め込むんです。プレゼントでよく使われていて受け取る側と渡す側で宝石を選ぶんです。」

その説明を聞きながらテツは、ずっとその首飾りを見ていた。気に入ったようだ。

「お値段は？」

「付ける宝石によりますが付ける石自体は小さいので、2000ギルから2500ギル程度になります。」

「テツは、何を付ける？」

「いいのですか？」

「いいよ、初めてのデートのプレゼントだよ」

「主ありがとうございます。」

テツはダイヤモンドを俺はブルートパーズを選んだ。俺は、確か前の世界で、トパーズの石言葉でいい感じだった気がしたから選んだ。テツにダイヤモンドについて聞くとダイヤモンドは、硬度がとても高いのでテツのような存在には特別であるらしい。

「どうですか主？」

「似合っているぞ」

「えへへへ」

今日はテツがよく笑ってくれるのが嬉しい、テツはあまり表情をださないから笑っているということは本当に楽しんでくれているのだろう。

いつもは、落ち着いていているからか見た目より大人っぽく見えるが、笑うと雰囲気が見た目相応に幼く見える。笑顔のテツと腕を組んで俺は帰路についた。

テツの首には銀の首飾りが揺れていた。

これ以降テツが小太刀の姿になった時、柄の下の部分に銀の装飾と二つの宝石が輝いていた。

43000ギル - 2400ギル = 40600ギル

- フェリスの場合 -

「テツさんが笑顔で部屋の方に歩いていったんですが、お兄ちゃんがいなくて笑うなんて結構珍しいですね。お兄ちゃん、テツさんと何してきたんですか？」

「テツとは、街でデートをしていたんだ。それより、フェリスは何をするか決まった？」

「デート羨ましいですね。私がしたい事ですね、わたしといえばやっぱり料理なのでお兄ちゃんの故郷の料理を再現したいです。」

「・・・ありがとう、フェリス」

思わずフェリスを抱きしめてしまう。フェリスは、顔を真っ赤にし
ながら恥ずかしそうに

「それで、その、食材のお買い物と一緒に行きませんか？」

「いいよ、それじゃあお買い物という名のデートにいきますか？」

「い、いえデートとかそんなのじゃあ・・・デートなのかな？・・・
デートかあ」

最初は狼狽していたが、最後の方は嬉しそうに頬を緩めていた。

出る前に料理を決めるのが意外と悩んだ。出来そうな物でこの世界で似ている物がなく、かつ俺が食いたい物となると意外と少ない、この世界の食べ物は、異世界人の俺が不自由しない程度には、前の世界と似通っていた。

結局作るものは、ハンバーグになった。この世界では、基本的に肉は焼くだけだったのだ。

「お兄ちゃんの話の聞くと混ぜるお肉と野菜が問題ですね、香辛料はなんとかなりそう。」

「いくつか買って帰って試そうか？」

「そうしましょう。余ったお肉は、別のときに使えばいいですし」

「それじゃあ行こうか」

まずは、肉屋だ。聞くとこの世界のお肉は、魔物の肉が多いらしい。一応牛や羊は、いるらしく放牧もしてはいるがそれは毛や乳を得るためだ。魔物の危険があつて大量に家畜を飼うのが難しいらしく、家畜を潰して食べることはまれらしい。ちなみに豚はいない魔物にずいぶん昔に絶滅させられたらしい。

「それじゃあ牛型の魔物のお肉を二種類と猪のお肉に猪型の魔物のお肉をお願いします。」

四種類のお肉で挑戦することになった。
おじちゃんが話しかけてくる。

「嬢ちゃん、家の手伝いかい？えらいねえ、こちらはお兄さんかい？」

フェリスは、今メイド服を着ていないので家の手伝いと思われたらしい。

「いいえ違います。」

「あれ？でもお兄ちゃんって呼んでなかったっけ。じゃあ近所のお兄さんかい？」

「違います」

「じゃあ親戚」

「うゝ、ちがうもん」

フェリスの素が出てきて泣きそうになってしまった。理由がわからない理由がわからないので慰めることも出来ない。

おじちゃんもお客を泣かせたことになんか焦っている。

「あんた、なにお客泣かせてんだい！」

「いや、俺もよくわかんなくてよお」

「まったく、この二人はデートの途中だったんだよ。それをあんたは、妹の枠に押し込めようとして」

「そ、そうなのかい嬢ちゃんそれは悪かった。この鳥肉もおまけするから許しておくれ」

おじちゃんが慌てて謝罪を口にする。

「いえご迷惑をおかけしました。大丈夫です、私のほうにも問題がありましたから」

居心地が悪くなったので店を出ることにする。

「お兄ちゃん、私たちってデートしてるようには見えないんだね」

「周りの目なんか気にするな実際はデートをしているし、俺はフェリスを大事に思っている。それでいいじゃないか、それにその内、気にならなくなるさ」

「どうしてですか？」

「俺は、精霊界で長く過ごしていたから体質が変化して少し自然そのものに近くなっているんだ。そのおかげで俺は長寿で歳を取るスピードも遅いんだ。水の精霊王の話では300年は生きられるらしい」

フェリスの頭を撫でながら

「三年後には、すっかり連れ合いに見えるさ」

「嬉しいですけど、それだと私のほうが先におばあちゃんになってしまいそうです。わたしも冒険者になろうかな」

「どうしてそこで冒険者になるんだ？」

「冒険者の人はある程度強くなると少し長寿になるらしいんです。能力ランクA以上必要らしいですが」

「へーそれなら同じ時を過ごせるかもな。」

「はい、がんばります。」

フェリスがやる気になっている。まあいいか護身にもなるし

「それじゃあ残りの食材を買いに行こうか」

「はい」

後は、混ぜる玉ねぎとかの野菜だなこれは、もうフェリスにお任せだった。

家に帰り、フェリスと一緒に夕飯を作ることに手間のかかる挽肉は俺が担当した。

結果ハンバーグは牛型の魔物のお肉と猪型の魔物のお肉が一番おいしかった。

その夕食には食卓にハンバーグが並び、フェリスはいつも以上に幸せそうに俺の膝の上で食事を取っていた。

その夜

「『今日は私たちです。』」

やっぱり、寝室に三人娘がやって来た。ティリエルとテツとフェリスだ。

ティリエルの抱き付き癖に対抗するようにほかの二人も抱きついてきた。

一番小さいフェリスが体の上でティリエルが右、テツが左に抱きついたままの就寝となった。
三人ともやわらかかった。

30話 女達との休日 3日目

異世界40日目

- ミリアの場合 -

「ご主人様失礼します。」

「どうしたんだ、ミリア急にご主人様なんて」

前までジン様だったのに

「ジン様は私の主になりましたので、わたしもイリヤさんを見習ってご主人様とお呼びしようと思ひまして。」

「いやまあ、俺はいいんだけどね。それよりミリアは、どうするか決まった？」

「それが決まらなくて」

「?・・・なんで」

「私は、使用人としての教育を受けていたので自分の主だと思つと何かを頼むのも気が引けるといいいますか」

生真面目だなミリアはそこもいい所だが。

「それじゃあ、ミリアの仕事を見学させてもらおうかな。」

「見学ですか？それは楽しいのですか？」

「きつと楽しいさ」

そして今、俺とミリアは普段使わない部屋を掃除していた。これは、通常の仕事ではない、そもそも二人でやる仕事でもない。何故こうなったかというと

ミリアと話し、やることは決まったが、問題が発生した。仕事がないのだ。今日ミリアは、オフなので仕事を入れていなかったのだ。他の人の仕事をとるわけにもいかない。そこでミリアが出した案が

「空き部屋をお掃除しましょう。」

ということになった。元々ミリアの仕事は掃除が多いらしい。食事をフェリスが、掃除をミリアが担当して周りのメイドはその手伝いをしているそうだ。

さすがに一人で片付けるのは大変なので俺も、手伝うことにしたのだ。

「ご主人様は、ご主人様なのですから、あまり他の人の仕事を取らないようにしてくださいよ。」

まあ、仕事を取ることが悪いのは何となくはわかる。仕事がない使用人は肩身が狭くなるようなのだ。

「わかったわかった。でも今日はミリアと共同作業がしたかったんだ。」

「ご、ご主人様」

おお、照れてる照れてる。

「ほら、外に出たらあまりミリアに会えないかもだろ」

「あつ、そうですね。」

ミリアが少し落ち込んでしまった。落ち込んでくれるのなら提案ぐらいはしてみよう

「フェリスにも話したんだけどミリアも冒険者登録をして一緒に旅をしないか？少し危険だから断ってもいいんだが」

「いえ、行かせてください！。私てつきり置いていかれると思っていたので、誘ってくださいって嬉しいですよ。」

「そこまで、嬉しいものなのか？」

「だって誘ってくださるということは、わたしを側に置きたいと思っ
て下さっているということ、それが嬉しくないはずがありません。」

「そ、そうか。それじゃあ明日にでもギルドに行くか」

そう言われると少し照れるな。ミリアは興奮した様子で

「はい、それでは、引き継ぎなどをしないとイケないので、ちょっと行ってきます。」

行ってしまった。掃除の途中だったがまあいいか、まだ終わっていないが切りは良いのだ、後は本職に任せよう。

・リリスの場合・

お昼を過ぎたころにリリスが部屋になって来た。

「リリスは決まった？」

「私も手合わせ・・・と言いたい所だけどそれじゃあ、つまらないから一緒にお出かけしよ」

「わかった。何処に行くんだ？」

「武具屋」

目的地に向かう道すがら何故武具屋なのか訪ねると

「実は、ノールサイと戦った時ので、レイピアの損耗が激しくてさ新しい武器が欲しいから下見をしたくて」

「そんなに前からか、大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。すぐには折れないと思う」

「それならいいが」

そうこうしている内に皇国の武具屋の一つに着いた。

「前の武具屋では、武器を見るのに付き合えなかったんだよな。リリスは今回もスピード重視なのか？」

「そのつもりだからレイピアにしようと思っただけど」

悩みながらレイピアの棚を見るリリスに

「ちょっといいか？」

「なに？」

「リリスって基本刺突がメインだよな」

「そうだよ、なんで知ってるの？手合わせしたことないよね？」

「リリスのことは、よく見ているからな」

「あ、ありがとう」

顔をそらしながら礼を言っている、照れてるようだ

「それならエストックなんかどうだ、刺突を重視した武器だからリリスには合うと思うんだ」

エストックとは両手用の刺突重視の武器だ。エストックは、剣身の

断面は菱形で、先端になるにつれ狭まり先端は鋭く尖っている。レイピアと違い両手で突ける分威力が期待できる。

「リリスのスピードは申し分ないし少しはパワーを求めてみたらどうだ。ノワールサイのような固いやつに出会ったら大変だろ」

「エストックかあ、みてみよっか」

エストックは、刀同様数が少ないから奥に仕舞われているらしく表には並んでいない。

店主に奥から持ってきてもらいエストックをみてる。
全てに目を通した結果一つのエストックを手についた。

「これが一番いいかな」

そのエストックは、軽量化の魔法を始め、二重強度強化と雷を纏わせて貫く力をかなり高めた物だ。かなりの業物だ。

「これは、いくらですか？」

「それでしたら複数の魔法をかけられているので、15000ギルになります。」

「た、高いよジン」

「確かに高いな、まあ大丈夫だろう。それをくれ」

「ジン今日は下見のつもりだったんだけど」

「いいのいいの、なあ護符ってあるか？」

「ありますよ、いくつほど？」

「二つくれ」

4 0 6 0 0 - 1 7 0 0 0 = 2 3 6 0 0 ギル

残金 2 3 6 0 0 ギル

「ジンは刀見ないの？」

「テツがいるだろう」

「ふふん、レティーシアとの稽古を見ていた時に気付いたんだけどジンって本当は、二刀流だね。」

「・・・気付かれたか。皆を驚かそうと思って黙っていたのになあ。」

「他には、誰も知らないの？」

「テツは、知ってるよ、なんせ俺の小太刀だからな。話さない訳にはいかないし、自分で気付いていたしな」

「少し妬けるなあ。」

「そういうなよ。そうだな、気付かれたんなら、ちょっと見てみるか」

店主に刀も見せてもらうが

「やっぱりテツに釣り合う刀はないか」

刀を戻し店を出る。リリスが腕を組んできた。リリスの感触を楽しんでいると

「ジン今度二刀流見せてよ。」

「機会があればな」

・イリヤの場合・

最後の一人が、夕食と入浴の後に部屋にやって来た。

「ご主人様、私が最後になりました。」

「いらつしゃい、でも今から何をするの？」

以前この時間帯に来たソフィアは、お風呂を共にしたが、今日はそれも終わっている。

「ご主人様もお掃除とお買い物物でお疲れでしょうからマッサージをさせていただきます。」

「俺には、願ったり叶ったりだが、イリヤはいいのか？」

「はい、ご褒美です。させていただきます」

「そこまで言うならお願いするよ」

そのまま座っていたベットに横になる。ベットに寝転がる俺にイリヤが跨りマッサージを始める。

イリヤはマッサージに治療魔術と一緒に使うようでかなり気持ちいい、蕩けそうだ。

「ご主人様、質問してもいいですか？」

「なんだい」

「ご主人様はどうしてこちらの世界に来たのですか？」

「言わなきゃ駄目？」

「駄目ではありません。ただご主人様の女の一人として知りたいのです。」

「わかった。話そう、そうだな理由は、いくつかあるんだが結局俺のためなんだよな」

「ちゃんと教えてください」

「そうだな簡単なのは、神が言うには、俺でなければいけなかったらしいんだよ。」

「ご主人様でない？」

「精霊との相性と人格らしい、次の理由は知ってしまったからだな」

「何を知ったのですか」

「俺が行かなければこの世界が減ぶことを知ってしまった。俺は他人の命を粗雑に扱える人間ではなかったんだよ。三つ目が……」

「三つ目は？」

「たぶん三つ目が、本音だろうな。俺は前の世界で物事に本気になれなかったんだよ。物事にあまり興味を持てなかつし、興味を持ったものでは優秀な成績を収め、すぐにやる気もなくなった。」

「……」

イリヤは、黙って聞いていた。

「生き甲斐がなかったんだよ。前の世界では、大事な人たちはいたけど毎日が退屈だった。だから退屈が嫌で異世界行きを決めたんだ。だから前の世界に未練はない。ちゃんと別れを伝えられたからな。ほらな、自分のためだろ」

「そのおかげで私たちは生きていられます。」

「そうだな俺は、この世界でお前達に出会った。俺は生き甲斐とこの世界大事な者を手に入れた。そして目標を持てた俺は今とても充実している。ありがとうイリヤ」

「ならどうして奴隷を解放するなどと」

「奴隷制度が気に入らないんだ。それに神は俺に好きにしろと言っ

てくれたからな。俺は、今の世界を壊し新しい世界を造ることしたんだ。」

「ご主人様はどのような世界を求めているのですか」

「それはだな、人と人が仲良くなつて奴隷制度がなくなりあらゆる種族が手を取り合えるそんな世界を造りたいと思っている」

「とても素晴らしいと私は思います。」

（ご主人様あなたは、やはり素晴らしい人です。この世界に来たきっかけは退屈しのぎだとしても、精霊界での修行も、私たちを救ってくれたことも、奴隷を解放しようとすることも、この世界を導きまとめようとすることも、あなただからこそなのですよご主人様です。ですからどこまでもお供しますご主人様）

イリヤはこの人と共に歩むことを改めて心に誓ったのだった。

その夜

「ジン」「ご主人様」

リリス、ミリア、イリヤの三人が部屋に現れた。まあここまでの二日の夜でわかっていたことだ。

ほかの二日と違うのはその夜がとても濃厚なものになったことだろう。

三人を同時に愛し合うことになったが、先に力尽きたのは三人の方だった。三人ともジンの性技によってイキまくり失神してしまったのだ。

三日目の夜は、疲れ果てていた三人をベットに押し込み裸の三人を抱えて一緒に寝ることにした。

31話 方針と新たな仲間

異世界41日目

朝起きると。

「ご主人様お客様が来ています。」

「誰？」

「アツシュ皇太子様です。」

「アツシュ？」

グーロム王国で、わかれてから一週間もたっていない。とても元王国領が安定したとは思えないのだが、何かあったのか？不安に思いながらアツシュの待つ部屋に向かう。

予想通り問題が発生していた。俺達は、王城で奴隷の解放を宣言したが、数日たって奴隷を隠し持っているやつらが目立ってきたのだ。しかし、安易に軍を動かせば、証拠隠滅のために奴隷が殺されてしまう。

そこで個人で、貴族や商人を潰せる俺に白羽の矢がたったのだ。

「わかった。俺の方で対処しよう。」

「ありがとうジン。できる限り手助けはするよ」

アツシユは、俺の返事を聞くとすぐに元王国領に戻っていった。朝食後アツシユの話を踏まえて、これからのことを決めるためにみんなに集まってもらった。

そこで元王国領の状況を話す。

「そのようなことになっているのですか」

反応はそれぞれだったが、以外とフェリスの反応が一番大きかった。顔は青ざめて俯いている。

「大丈夫か？」

フェリスの肩を抱きながら話しかける。

「その、私、お城の奴隷の扱いを知ってて、とてもひどいことを」
顔は上げてくれたが、その目には涙があった。フェリスには城の生活そのものがトラウマなのだろう。

「大丈夫だフェリス俺達はその奴隷を助けに行くんだからな、それにこの俺が行くんだ絶対大丈夫」

「はい、・・・はい」

フェリスは、一番身近に奴隷がいたんだな。イリヤとリリスは一度奴隷になったが、奴隷を体験する前に俺が助けているから体験はし

ていない。

フェリスの、記憶から王城の生活を忘れさせるのは、まだ時間がかかるな。

フェリスが落ち着くのを待つて話を続ける。

「俺の簡単な方針をこれから話す、

一つ目

元王国領の奴隷解放

二つ目

元王国領の残党の殲滅

三つ目

俺達自身の強化

四つ目

お金を稼ぐ

この四つがおおまかな方針だ。質問はあるか？」

「フェリスちゃんやミリアさんも連れていくのですか？あとレティーシア様はどうするのですか？」

「ああ、二人共同行する。このあと冒険者登録をしにギルドに行く。レティーシアのことは、皇帝に聞かないとな」

「それなら大丈夫だ。アッシュが、同行していいと言っていた。」

アッシュのやつ俺より先にレティーシアに話していたということ
は、俺が断らないこと前提だったなあ野郎。

三人の同行に反対などはなかった。

フェリスとミリアに護符を渡す。ちなみに、ティリエルとレティー

シアは護符を元々持っていた。

レティーシアは、姫騎士と呼ばれているから不思議ではなかったし、テイリエルはアルベルトが持たせたようだ。テツは、気力と魔力を持たないから使えない。

「よし皆でギルドに行こう」

「み、皆ですか？」

確かに俺達は、9人と多人数だしな。

「今日だけだよ。ギルドカードの更新もしたいし依頼も受けるから。」
「一応は納得してくれたので、俺達はギルドに行くことにした。」

「へえ、ここが皇国の冒険者ギルドか、大きいな。グーロム王国のギルドって本当に小さかったんだな」

俺たちがギルドに入ると騒がしかったのが一瞬静かになったが、すぐにまた騒がしくなった。しかし、中には元の場所に戻らず俺達に正確には俺の女達に近づいてきた。こっちでもあるんだな通過儀礼なのか？

顔立ちは整っているが、どうも軽い感じがする金髪のにいちゃんだった。

「ねえちゃん達俺と遊ばない。依頼が終わってばかりで今結構お金あるんだよね。」

男がミリアに触れようとしたので間に入る

「彼女達は、俺の連れだ。手をだすな」

「オイオイそれを決めるのは彼女達だろう」

「それでしたら話しかけないでください」

「喋るな」「雑魚」

「私達はジン様のものです」

「死ね」「消えろ」

穏やかなものもあるが、暴言のほうが多い。

「な、なんで、そこまで言われなといけないんだ。」

まあもつともだな。

「悪いな。皆も挑発するな。だがこいつらは俺の女だ。もう一度言う手をだすな」

「・・・ちっ」

舌打ちして男は去っていった。

「皆ここはグーロムじゃないんだから、もえすこし穏やかに断ろうな」

「」「ハイ」「」

「ジン！久し振り」

大きな声で呼ばれた。周りにも聞こえたのだろう。さっきの男もギ

ヨツと顔を強張らせた後、胸を撫で下ろしていた。手を出さなくてよかった、とでも思っているのだろう。

「あいつが『英雄ジン』なのか、じゃあ、あの水色の髪の女が『水災の魔女』なのか？」

「『水災の魔女』ってなんですか!？」

ソフィアが悲鳴をあげている。その引きがねになった男が側に来た。

「久し振りだなジーク」

「もうギルドは君の噂で持ちきりだよ。やっぱりジンは、すごいな」

「そうでもないよ。それよりはソフィア達を送ってくれて助かった。ありがとう」

「いって。そうだカイル、ちょっと来てくれ」

ジークは、相方を呼びよせ

「お久しぶりです、ジンさん」

あれ、カイルの口調が変わっているような。

俺の疑問が解決する前に、さらに意外な申し出があった。ジークが真剣な顔で

「ジン、俺たちをジンのチームにいらてくれないか？」

何故俺のチームなんだ、普通は女ばかりで入りづらいと思うんだが

「ジーク達は俺達の目的を知らないだろ。なのに何故チームに入りたいんだ？」

これに答えたのは、意外にもカイルだった。

「私達は、昔騎士だったのです。ですが私達は、戦争で主君を失いました。そして新しい主君を探していたのです。そして私達はあなた様に出会いました。仕えさせていただけないでしょうか？」

やっぱりカイルの言葉使いが変わっている。それだけ本気なのだろうか。チームに仕えることになるのか？。だがチームの増強も必要だそれに彼らは信用できる。俺が数少ない知り合いの冒険者だ。

「わかった。チームに迎えよう、ただ俺は男には厳しいぞ」

「ありがとうございます」

新たに二人の仲間が増えた。その後二人はジン達の目的を聞いて。「やはりあなたを選んでよかった」と感慨深げに呟いていたとか。

手早く冒険者登録を済ませ

新しい仲間とギルドカードを見たことがない人達のカードをみることにした。

まず新しい登録組の

名前	フェリス	種族	人間	性別	女
ギルドランク	G				
能力ランク	総合E	気力F	魔力C		

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの料理人 ジンの義妹

名前 ミリア 種族 人間 性別 女

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力E 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド

フェリスとミリアは、完璧に魔術師タイプだな。これでは、後衛に偏ってしまうな。
新しい男どもは

名前 ジーク 種族 人間 性別 男

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力B 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 一級騎士

名前 カイル 種族 人間 性別 男

ギルドランク C

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 二級騎士

名前 レティーシア 種族 人間 性別 女

ギルドランク D

能力ランク 総合C 気力A 魔力D

チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 ジンの女 皇女

ありがたいことに、三人とも前衛タイプだった（ジークも前衛だった）。これなら、チームのバランスがよくなるな。
それにしてもジンの女つてずいぶん直接的なっただな神の野郎。
残りのメンバーもカードを出す。

名前 ソフィア 種族 人間 性別 女
ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

「ジン様、私『水災の魔女』じゃないですよ」

ソフィアの称号が増えていた。水災の魔女については、かなり不満そう。ソフィアは、あの時危ない人を助けていただけだからな。

名前 イリヤ 種族 エルフ 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 リリス 種族 人間 性別 女

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

名前 ティリエル 種族 龍族 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力B 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 幼い銀龍

三人のカードには、変化はなかったが、ティリエルのカードを見たときに新しい男二人は、かなり驚いたようでティリエルを長い間凝視していたので

「ティリエルを見すぎだアホども」

目潰しをしてやった。

二人は、悲鳴をあげながら地面を転がった。

「ここまでするか普通？」

「言ったる、男には優しくないって」

「厳しいって言ってたよ！」

「細かいことは気にするな。最後は俺だな。」

名前 ジン 種族 人間 性別 男

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 英雄 8人の女に愛される男 奴隷の解放者 精霊術師

『英雄』が増えている。後前からあった称号が変化している。まあ主ではないしな。

さっきまで騒いでいた二人は絶句している。そんな二人は放っておいて次は依頼だな

依頼を見に行くとまた、顔見知りがいた。クレアさんだ。

「クレアさん久し振りってほどでもないか」

「そうですね」

「家は決まりましたか？」

「それがなかなか決まらなくて、今はギルドの空き部屋を使わせてもらっているんです。」

この時、しばらく留守にする屋敷と暇になるであろう使用人達を思いだした。それならと

「クレアさんいい物件がありますよ」

俺は、屋敷を使うように勧めた。最初は、遠慮していたが、屋敷の主要人物が全員出るので信頼のおける人に任せたいことと使用人が暇になることを話してやっとクレアさんは頷いた

「それなら、ご厄介させてもらいますね。ありがとうございます。
ジンさん」

後ろの女達からは冷たい視線が送られてくるが気にしない。

細かいことを話したあとクレアさんと別れる。

今度こそ依頼を受けに行くぞ。

32話 新しい依頼と第一皇女

「それじゃあ依頼を受けるわけだが」

「だが？」

何人かに？マークが浮かんでいる。

「この人数で一つの依頼を受けても時間がもつたいないからいくつのチームに分けようと思う」

テツと男二人以外の仲間の顔に影がさしたので慌てて付け足す

「分けるといってもそのチームが中心になって受けた依頼をやるっただけで、基本皆一緒に行動するからあんまり気にするなよ」

テツ以外皆安堵していた。まあテツは、小太刀だから俺と一緒に行くって決まっているからな。

結局皆と相談した（各々の思惑も混じって）結果こうなった。

Aチーム 俺とテツ

Bチーム ジークとカイル

Cチーム レティーシアとミリア

Dチーム リリスとソフィア

Eチーム イリヤとフェリスとティリエル

というチーム分けになった

受けた依頼は、

Aチーム	ランクA	岩窟竜一頭の討伐	5万ギル	無期限	モルド伯爵領
Bチーム	ランクC	牛鬼五体の討伐	1万ギル	一月以内	元王国領南部
Cチーム	ランクD	ゴブリンの群れの討伐	4000ギル	二週間以内	元王国領の西街道付近
Dチーム	ランクD	生熱の種の採取	30個	5000ギル	半年以内
Eチーム	ランクF	魔物五十匹討伐	2000ギル	一月以内	元王国領北部に生息
ニビルの森					

このほかにチームとして特別クエストとして元王国領内の魔物の討伐依頼を受けた。

この依頼は、元王国領を立て直すためにクイント皇国が出した依頼で制限がない代わりに報酬は少ない、一応受けておくという依頼だ。これのおかげで冒険者が魔物討伐に積極的になるらしい。

この依頼は、ギルドカードのチームの下に

A・000 B・000 C・000 D・000 E・000
F・000

と表示されていてチーム内で混同されているらしい。

「それじゃあ、今度は武具屋だな」

フェリスとミリアの魔法を使うための媒体を買いに行った。二人ともソフィアやイリヤのしている指輪をジンがプレゼントした物だと知っていて

「わたしも指輪がいいです」

ということになり二人に別々に媒体としての指輪をプレゼントした。フェリスの指輪は、黒い魔石の付いた指輪で魔力増幅に重点を置いた指輪だ。フェリスの指輪はシンプルなデザインだ。黒い魔石は黒真珠に似ている。

ミリアの指輪は、緑と黄色の魔石を付けたもので風と雷の魔法が使いやすいくなる指輪だ。ミリアの指輪は、魔石が二つな分少し凝っているが派手さはない上品な指輪だ。

あとティリエルの武器だが、ティリエルは、ダガーを2本選んでいた。二重強度強化がかけられた物だ。

指輪が4500と5500で1万ギル、ダガーは一本2000ギルだった。

23600 - 14000 = 9600ギル

武器の次は魔具を取り扱う店に行くことにした。

以前の討伐依頼の時にリリスを失いそうになったことがあった。森のランクに相応しくないランクAのノールサイが現れたからだ。それらの不測の事態に対処するためにいくつか考えていたのだ。そのひとつが魔具に頼ることだった。リリスに話は聞いたがそれだけではわからない、俺が欲しい物があればいいのだが。

入ったのは、レティーシアがお忍びでよく使っている魔具屋だ。

魔具屋といっても魔具といってもいろいろで、魔術を込めた装飾品、使い捨ての魔符（魔術を込めた符）などあらゆる物を扱っている。魔具以外にも魔物の一部や魔石などの素材などもある。

俺が探しているのかは装飾品だ、武具屋にもあったが、武具屋のもの、ほとんどが戦闘用だった。

この世界の字が俺は読めないの、店主に話して探してもらったことにした。

目当ての物は、見つかった。

『絆の腕輪』といって登録した相手の居場所がわかり、自分の危機を伝えることができる。

チームがバラバラに動くときにつけたり、お金に余裕のある家庭が子供につけたりもする。

腕輪に少し細工をしてチームの証にすることもある。

これを、人数分買う。細工はいつかしたいと思う。

11×500＝5500ギル

9600－5500＝4100ギル

店を出たあと、旅の準備をジーク達に任せ先に宿に戻る。準備のお金は、ジーク達が払うことになった。もうチームの一員だし腕輪のお礼も兼ねてらしい。お金もずいぶん少なくなったのでありがたい。皆を先に帰らせて俺は、城に向かう。馬車を借りるためだ。今の馬車では、六人ぐらいいしか乗れないからだ、金もないから依頼主に借りることにしたのだ。

顔パスでお城に入る。

しかし、皇帝は今忙しいらしく待つことにした。
庭で暇をもて余していると、城の方から女が二人歩いてきた。
驚いたことに、第一皇女とレティーシアの影武者だった人だ。

「どうしたんだ、アリシャちゃん」

「むっ、私の方が年上」

「いいじゃないか、こんなに可愛いんだから、えっとそっちは？」

「レイシアと申します。」

「名前交換してたんだ」

「はい、レティーシア様の希望です。何度自分の名前に反応し
うになったか」

笑顔でレティーシアの愚痴を言っている。苦労していたようだな。

「ハハ、レティーシアらしい、話は戻るけど、こんなところにど
うしたんだ？」

「あなたがいるから会いに来た。」

「俺？」

「興味がある。あなたのことを教えて」

「条件がある」

「なに？」

最初は馬車を頼もつかと思ったが、自分の話を馬車と同じにするのは気が引けた、だから

「君のことも教えて」

「えっ」

「俺のことを教えるから君の事を教えて」

「わ、わかった」

その後、二人で会話を交わした。俺の世界のことアリシャの思い出などあらゆることを聞き話した。

「じゃあアリシャは、ハーフエルフのハーフなのか」

「そう私は、エルフのクォーターこの容姿は、そのせいだと思う」

自分の平らな胸と身長を指しながらアリシャは言った、そのアリシヤは今では、俺の膝の上で会話をしている。
レイシアさんは、少し後ろで微笑んでいる。
そんな楽しい時間に水を指すやつが来た。

「アリシヤ姫そんなところで何をしていらっしやる」

高圧的な喋りかたで騎士風の男が近づいてきた。明らかにこちらを見下す表情で

「そのようなどこの馬の骨ともわからない男と話しては、姫様が汚れますぞ」

「お前と話す方が穢れる」

「アリシャこいつは誰だ？」

アリシャは苦々しそうな表情で

「第六師団長で私の元許嫁」

師団長ということは、ゲオルグよりは下だな。師団長は、所詮將軍の指揮下にある。

「おい平民、元ではない。父達が勝手に解消したただだ。」

こいつはアホなのか、許嫁は親が決めるものなんだから親が解消してもおかしくないだろうに

「アリシャなんで解消になったんだ？」

「素行不良でいくつか罪も犯してる」

よくそんなやつに師団長を任せているな。ゲオルグに相談しようかな。

「そんなゴミみたいなやつに、可愛いアリシャを任せるわけにはいかないな」

二人の反応は、似ているが正反対だった。

アリシヤは、無表情ながら頬を染めて恥ずかしがり。

ゴミは、顔を真っ赤にして怒り狂っている。

「貴様俺を侮辱してただで帰れると思うなよ。」

「なんだ、土産でもくれるのか？」

「殺されたいらしいな」

「やれるならやってみろ」

「言っただけ、貴様に決闘を申し込む」

「ジン止めた方がいい、これはランクA。あなたの精霊術はすごいけど決闘には不向き」

ゴミは、何気にアリシヤが物扱いしたことに気付かずに

「姫様は、よくわかっている。謝るなら今のうちだぞ平民」

「アリシヤ大丈夫だよ。俺は剣術もやるからな、こんな三下すぐに倒せる」

「ならば、受けるのだな」

「ああ受けてやる、ありがたく思え、師団長」

33話 決闘 英雄VS師団長

「ただ決闘するのもつまらないな、そうだな賭けをしよう」

「賭けだと？」

「そう賭けだ。俺の方からは、そうだな・・・俺が勝ったら今後一切アリシヤに近づかないで貰おうか」

「ふん、いいだろう。その代わり俺が勝ったら、お前を奴隷にして売り払ってやる」

こいつ奴隷と言ったか。皇国で禁止されていることを当たり前のように。適当な時に潰しておくか、その方がこの国のためになりそうだ。

「これよりジン殿とラウル殿の決闘を始める。攻撃防御は、持った武器のみ魔術や精霊術などの使用は禁止とする。急所への攻撃も禁止、急所に当てた場合当てたほうの負けとします。それでは・・・
・始め」

合図をしてくれたのは、訓練場で訓練をしていた他の師団長だ。審判をお願いした。

こいつラウルって名前なんだ。そういえばこいつの名前聞いてなかったな、まあ興味もないしどうせすぐ忘れるいいか。

俺が使う武器は短い木刀、ラウルが使うのは長めの木剣だ。

驚きの速さでラウルが間合いを詰め、左から木剣を横に振るう。ジンはこれを木刀で受け止める。ラウルは、すぐに木剣を引きなんと

も突きを放ってくるがこれらをジンはすべて弾いてみせる。次にラウルは上段から木剣を振り下ろすが、これは後ろに飛び避ける。

「どうした、攻撃してこないのか、それとも手も足も出ないか」

「以外だったよ、もう少し雑魚っぽいと思ってた。」

実際すべて防いでいるが、ラウルの攻撃は一連の流れになっており切り込む隙がない。今までこの世界でまともに打ち合ったことがあるのはラシードとレティーシアだが、少なくともレティーシアよりも強いだろう。

だから、まずラウルを一度蹴り飛ばして距離をとる。

「ぐっ、だがこれくらいで」

「ちょっと確認したいんだけど、いい？」

「なんだ命乞いか？」

「いいや、ただあんたに本気でやっていいか聞こうと思ってな」

「貴様ふざけるなよ、これは決闘だぞ本気でやれ」

「いいぜ、レイシアさんその木刀投げてください」

「ふえっ、・・・こ、これですか？」

突然呼ばれて驚いたレイシアさんが近くの壁に立てかけてあった通常の長さの木刀を持ち上げる

「そうそれです。投げてください」

投げてもらう

「ありがとうございます」

「なんだ武器の長さの問題だともいうのか」

ラウルが嘲るような表情を浮かべる

「ああ違う違う」

投げ入れてもらった木刀を右手に、下からあつた木刀を左手に持つ

「俺は、二刀流だ。」

「なんだと、は、はったりだ」

「なんだ評価は、下方修正だな。俺まだ左腕しか使っていないんだぜ」

「なっ」

「俺が刀神から習った、神双流は左の小太刀で攻撃を防ぎ、右の大太刀で攻めるのが基本、見せてやるよ俺の本気」

本気で相手に踏み込む。左の木刀で迎撃のための木剣を受け流し右の木刀を首に添える様にギリギリ止める。

二つの動作を同時に行うことでたった一度の攻撃で決着をつけた。

二つの武器を持ったことで動きが遅くなるどころか、重心が安定し

て動きの速さも上がっていた。

「ま、まいった」

「もうアリシャに近づくなよ。師団長殿」

ラウルがその場に倒れてしりもちを付く。

ジンが、ラウルに背を向けアリシャたちの下に歩きだすと、後ろのラウルがブツブツ呟いて

「・・・の・・・ほの・・・やせ・・・焼き尽くせー」『フレイム・バレット』」

無数の小型の火球がジンに向かって放たれる。ラウルが、逆上し魔術で攻撃してきたのだ。審判役の師団長が止めようとするが、間に合わない。それに、このコースはアリシャたちの巻き込まれるコースだ。

しかし、俺の近くにきた炎の玉は、すべて俺の手前でしばむように消滅した。

「な、ぜ」

「精霊術で壁を作っただけだ」

風の精霊術で真空の壁を作ったのだ。炎では、これをこえることは出来ない。

「今の攻撃、アリシャたちにも当たるコースだったな、少しお仕置が必要だな」

ラウルに精霊術の雨を降らせる。

火で髪の毛を炙り

水で息できなくし

風を圧縮してぶつけ

土で下から土の槍で突き

雷で感電させたりした。

服は焼け落ち、鎧は碎け、髪の毛は焦げ、体中を痛打される。見るも無残な姿になっていくラウルに、審判をした師団長だけではなくアリシャやレイシアまで同情の眼差しを向けていた。

ラウルがボロボロになり気絶したのをみてお仕置きをやめる。同情の眼差しをラウルに向ける師団長に

「師団長ちよつといいか」

「は、はい、な、なんでございましょう」

すっごい慌てようだな、そんなに怖かったかな？

「さっきの賭けの話、広めておいてくれるか。これがアリシャに今後近づかないように」

ゴミのようになったラウルを指しながらお願いする。

「はい、わかりました。」

「頼んだよ、アリシャ庭に戻ろうか」

「わかった」

庭に戻って、もう一度アリシャを膝の上に乗せる。

「ジンって、結構怖い？」

「敵でさらに男なら、どこまでも残酷になれるな。だけど女には基本優しくすることになっている。」

「よかった。それにしてもジンは強い」

「ありがとう」

「わたしもあなたに・・・」

「俺に？」

「な、なんでもない、そ、それよりジンは、お城には何をしに？」

急な話題変換だなまあいいか、何しに来たかだったな・・・

「ああー、すっかり忘れてた。馬車を借りに来たんだった」

「馬車？何故？」

「近いうちに旅に出るんだよ、アッシュの頼みで」

「兄上余計なことを」

突然アリシャの機嫌が悪くなったような気がする。

「どうかした？」

「なんでもない」

しばらくアリシャがなにやら考え込んでいた。

「馬車だったら私の頼みを聞いてくれたら用意する」

「頼みによるなあ」

「大した事じゃないこの指輪をつけてほしい」

アリシャの指についている物と同じ指輪を差し出してきた

「指輪？いいけどなんで？」

「あなたの、腕輪と同じような物、この指輪は特注品、相手と会話
が出来る。」

「つまり、たまに話そうってこと？」

コクコク

アリシャがすごい勢いで頷く

「姫様その指輪は」

「レイシア黙る」

「は、はい」

アリシャがレイシアを黙らせている。何かありそうだが危険はないだろう。

それに会話をしたいと思ってくれることは少し嬉しい、だから受けとることにした。

アリシャの手で指輪をつけてもらう

「対呪、や気力、魔力の増強などいくつか効果がついている」

「そんな便利な物をいいのか？」

「いい、ただ」

「ただ？」

「その指輪は、私以外には外せない」

「えっ何故？」

後で試したが、俺の契約破棄の力でも外せなかった。契約とは違っようだ。

「その内わかる。馬車はレイシアに頼む。馬車が来るまでお茶にする。私の部屋に来て」

アリシャに連続で喋られ言葉を返す暇もなく、部屋に連れられて行くことになった。

アリシャの部屋には本がいっぱいあった。本棚で左側の壁が埋まっ

ているし机にも本の塔ができている。

「本好きなのか？」

「好き、人は面倒だから」

「たしかに、皇女となると面倒だろうな」

とてもドロドロした人間関係になりそうだ。

「でもあなたは、どこにも所属していないし対等に話しても問題ないからとても落ち着く」

アッシュも同じことを言っていたな。

部屋に入ったからだろうか、やわらかい表情を見せてくれた。普段無表情な分よけいに可愛い。

その後も二人でお茶をしながら他愛もないことを話してすごした。日が傾いてきたので帰ろうとすると

「使いを出す。問題ない。それより一緒にご飯を食べる」

「わ、わかった」

またアリシャの勢いにのまれてしまい、そのまま食事を共にすることになった。

暗くなり、さすがに帰らないと、と説得すると。

「私と一緒にイヤ？」

「イヤじゃないけど、いろいろ急で」

「だって、ジン旅に出るから」

そういえばそうだな。そういうことなら今日ぐらいはアリシヤに付き合つことにするか。

翌日アリシヤと朝食を食べ終わった後、城を出ることに

「あの馬車は？」

レイシヤさんに尋ねると

「もう昨日には屋敷についていますよ」

不思議そうな顔のレイシヤさん。

騙された。

まあいいかこういう可愛いウソは許せる。

屋敷に帰ると指輪について聞かれたが、とある人からプレゼントされたただけ説明した。

皆気になるようだが、俺が答えないので諦めた。ミリアは、なにか感づいているようだったが追求はなかった

34話 岩窟竜

異世界44日目

「魔の火よ、眼前の敵を燃き尽くせ、『ファイア・ボール』」

指輪で増強された魔力でフェリスが、直径1メートルぐらいの火球がハイウルフに命中する。

「できた。できたよ、お兄ちゃん。褒めて褒めて」

「すごいぞ、フェリス」

誉めながらフェリスの頭を撫でてやる。

ジン達は、今別れて行動している。Bチーム、Cチーム、Dチームでゴブリンの群れ討伐に出ている。

そして余った、Aチーム、Eチームは実戦経験のないフェリスの魔術の練習をすることになったのだ。

今は、Fランクの魔物しかでない森にいる。

ミリアは、元レティーシアの付きのメイドだったからか、今のギルドランクの依頼ぐらいなら問題ないそうだ。

ここには、俺と小太刀のテツ、ダガーの練習をしているティリエルと教師役のイリヤと生徒役のフェリスがいる。

俺も将来的には魔術も使うつもりだから、イリヤの説明をフェリスと一緒にしっかり聞く。

「体内にある魔力の源は、基本無色と言われていますが、これを魔力に変換する時に、色が付く人がいます。」

「色ってなんですか？」

「この場合の色は、視覚的な意味での色ではなくて、魔力の質のことで赤だと火の、緑だと風の魔術に使えます。」

「へえ」

「変換するさに色が付く人は、その色の魔術に関しては、詠唱短縮、威力増加などいくつかの利点がありますが、その代わり他の魔術を扱いづらいです。」

イリヤなんだか楽しそうだな。教えるのがすきなのだろうか？

「ちなみに、私は薄い白で治癒術が得意です。そして赤色を持つ人を炎術師、緑色を持つ人を風術師、私の薄い白は治癒術師等と呼ぶこともあります。ミリアさんは、変わっていて緑と黄色の二つを持っています。」

「それで、ミリアさんの指輪は、二つ魔石が付いていたんですね。」

「そうですね。フェリスさんは無色のようでしたので増幅の指輪にしましたね。」

「じゃあ、私は得意な魔術ないんだ。」

フェリスが落ち込んでしまった。イリヤが慌ててフォローする。

「だ、大丈夫ですよ。得意なものはありません。不得意なものもありますから。」

「器用貧乏?」

「はう!?!」

見事なカウンターが入った。

「フェリスあまりイリヤで遊ぶな」

「えへへ〜ごめんなさい、イリヤさん天然で面白いんだもん」

「それは認めよう」

「ご主人様」

イリヤが、可愛いらしい非難の目を向けてくる
うん、可愛いだけだな

こんな感じで緩くフェリスの練習または修行を続けた。

ゴブリンの群れは問題なく討伐できたらしいです。

次の依頼

モルド伯爵領の、依頼主であるモルド伯爵に岩窟竜討伐の補足事項について聞きにきたのだが

「貴様らは、岩窟竜をさっさと倒せばいいのだ」

こればかりだ。

「ですから、討伐で5万その場から移動させるだけで3万と依頼にあるのでその確認をですね」

補足事項とは、街道から移動させれば必ずしも討伐する必要はない、というものだった。

「知らん知らん、さっさとあの邪魔者を討伐してこい」

「では、この依頼は、破棄されるのですね？」

「そんなことっておらん、ええい、貴様らは黙って言うことさけ」

「話になりませんね。私たちはあなたの部下ではありません。そういうことでしたら、ギルドのほうに再申請してください。」

こちらが、席を立つと

「ま、待て、わかった。その依頼の通りでいい」

「わかりました。」

胸くそ悪い屋敷を後にする。

今は、Bチームが牛鬼討伐に出ているので、周りは女ばかりだ。

「ご主人様、何故あのような者に会いに行かれたのですか？」

「岩窟竜を説得ができるなら戦う必要がないだろ」

「り、竜を説得ですか」

「ティリエルがいるから可能性はある。それにアッシュの情報で、あいつは奴隷を持っている可能性があるんだ。」

「でしたら、その、何故捕まえないのですか？」

「目撃情報はあるんだが、奴隷そのものが見つからないんだ。今も精霊術を使って探していたんだが見つからなかった。」

「ガセつてこと？」

「まだわからん、もう一度屋敷に入るためには、依頼を終わらせないと」

ティリエルだけを連れて、岩窟竜に会いに行くことに。

岩窟竜は、モルド伯爵領が使う大きな街道を塞いでいた。確かに邪魔だな。

討伐されないのは、基本無害だからか？

岩窟竜から攻撃はしてこないそうだし。村の人間は、山賊がいなくなっただと喜んですらいた。

岩窟竜は、巨大な岩のような竜だった。その体は、ノワールサイよりさらに硬く柔軟らしい。竜ならプレスも扱うだろうから本来ならSランクの依頼だ。それがAランクなのは岩窟竜が本当におとなしいのだろう。

岩窟竜の頭部と思われる場所に移動する。（わかりづらい）

「ティリエル話せそう？」

「はい、といいますが、たぶん」

ティリエルが、何故か反応に困っている。

「ワシと話がしたいのか？」

「うお、びっくりした。喋れたのか」

それでティリエルが困っていたのか。

「ワシは、これでも長く生きておる。人の言葉くらいは扱える。それにしても珍しい組み合わせじゃな、銀龍の嬢ちゃんと、うゝん・・人間か？」

「一応人間だ。話ができるなら、手っ取り早い。単刀直入に聞く、じいさんはなんでここにいるんだ？」

「お、お兄様。古龍と言ってもいい方に、じいさんはちょっと」

「じいさんかそれも悪くないが、ワシの名前はストルと言う。」

「そうか、ならストルさんと呼ぼう。俺はジン、救世主をやっている」

「わ、私は、ティリエルと申します。」

「救世主？まあよからう、よろしくの。さてワシがここにいる理由じゃったな。」

あっさり流されてしまった。まったく動じないな。

「ワシは、とある村で縁あって小人族を守っておったのだが、一ヶ月ほど前に村の小人族が三人ほど人間に連れ去られての。特殊な方法で追いかけて、あの屋敷にいることがわかったのだが、攻撃して事を大きくしては、小人が殺されかねん。それで、ここに陣取ってジンくんみたいなのか、屋敷の誰かが交渉に来るのを待っておったのだ」

「小人族・・・そういうことかあのゲス野郎！、連れ去られた小人族が心配だ。ストルさんこちらの要件を話させてもらう」

小人と聞いて、何故見つからなかったのか、わかった。

要件を話し終え、ストルさんは、しばらく黙考して

「ジンくんの申し出を受けよう。これは、友好の証だ受け取ってくれ。」

ストルさんがくれたのは、きれいな丸い石だった。蒼くて透明で宝

石のようだった。それを三つくれた。それがなにか知っているのだからティリエルが

「よろしいのですか？これほどの物を三つも」

「それだけの価値が君たちにはあるとワシは判断した。」

「ティリエルこれは、なんなんだ？」

「『竜宝珠』、地に属する竜にだけつくることのできる宝珠でつくるのに長い時間を必要とします。地の竜にとって家宝のようなもので、人にとっても売値で最低でも50万ギルはします。それにこの竜宝珠はとても純度が高いです。」

ティリエルが、興奮している。

「ストルさん一つテツに与えていいか？」

「その不思議な小太刀のことが構わんよ」

気付いていたか、小太刀の姿なのによくわかるな。アルベルトとどっちが強いんだろう？

それにしても、ありがたい

テツを抜き宝珠と重なる、今までの吸収で一番強い光を放った。

「主、これすごい。力が溢れてきます。」

テツは、突然人型になった。顔を見ると頬を上気させている。瞳が蒼っぽく変化している。落ち着くのを待って

「テツ、小太刀になってみてくれるか」

テツに小太刀になってもらい持つてみると、その存在感がまるで違った。見た目は小太刀なのに大剣以上の存在感だ。斬らなくてもその鋭さが格段にあがっているのがわかった。刀身にあった白い龍の紋様が変化して、青い龍と白い龍が絡み合った紋様になっている。

「【主私を両手で持つてみてください。】」

「こうか」

テツが光だした、光が収まったとき二振りの小太刀が握られていた。左の小太刀に白の龍が、右の小太刀に青の龍の紋様が浮かんでいる。

「【隠し機能その二です。】」

「はは、すごいな」

「【長さもその内変えられるかもしれないです。ただ力は半々になつてしまいます。】」

「それでもすごいよ。やっぱりお前は最高だテツ。」

「【ありがとうございます。・・・そして私はもう餓えた『鉄餓刀』ではありません。主のおかげで『黒龍刀・鉄』へと成長しました。これで私は、主のための主だけの刀になりました。】」

「俺だけの」

嬉しさを噛み締める。

一通り感動したあと。

「ストルさん一度ここを離れてくれないか、そうしたら屋敷にすんなり入れるんだ。」

「わかった。ジンくんティリエルちゃんそれにテツちゃん後は頼んだよ」

「任せてくれ」

「はい！」

35話 小人救出

異世界45日目

「依頼通り岩窟竜を街道から退かした。討伐ではないので3万ギルもらおうか。」

今回は、俺とテツの二人だけで屋敷に出向いた。武器の携帯は認められていないが、テツは当たり前のように同伴している。少々危ないかもしれないから他の仲間は置いてきた。

「知らんな、証拠を見せてみる。岩窟竜のお主達が退けた証拠を」

「実際に、岩窟竜は移動している。」

「そんなもの証拠にはならんだろう。ククク、素直に討伐しておれば証拠になったであろうにな、ハハハハハ」

ム力つくのでさっさと本題に入る。

「正直報酬の件は、別にどうでもいい。」

「なんだもう諦めたのか、ククク」

笑いが止まらないようだな。その耳ざわりな笑いを止めてやろう。

「一階東側の倉庫のような部屋の小さな三つの金庫の中身」

ピクッ

「・・・何故、それを」

「企業秘密だ」

モルド伯爵の護衛二人が武器を構え、伯爵は側の呼び鈴で外の私兵を呼び寄せる。

扉から多数の私兵が入ってきて、ジンとテツを囲む。十六人が、その兵に向かって聞いてみる。

「お前達に聞く、この屋敷の奴隷については、知っているのか？」

「だったらどうするんだ、お前はここで死ぬんだから関係ねえだろ」

「そっちのチビは、俺たちで犯してや・・・る」

ドサ

テツに向かって気持ち悪い視線を向けていた男の首より上がセリフの途中で後ろに落ちた。無音の『風刃』で頭を切り落したのだ。

「大体わかった。お前は死んでおけ、テツ」

「はい」

テツが小太刀の姿になると同時に

「『炎蛇・四首』」

炎の蛇を四匹だし私兵にけしかける。

「人が刀に」

「なんだ、精霊術なのか」

動揺している兵を次々に喰らう。七人ほど喰ったところで

「『ウォーター・ウォール』」

水の壁で炎蛇を相殺される。さすがに山賊のようにはいかないか、と考えながら炎蛇に気を取られていた後ろの二人の胸を斬る。二人とも鉄でできた鎧を着ていたが、今のテツに鉄の鎧など何の障害にもならない。バターを切るよりも楽だ。

これで十人、あと六人。一先ずそのまま後ろに下がり距離を取る。

「野郎よくもやってくれたな。」

三人が同時に攻撃してきた。狭い空間で三人が同時に攻撃してこちらの動きが制限されるが、それは相手もおなじで動きが読み易い。

「テツ、二刀に」

テツを二刀に分け、回避が出来ないからすべての攻撃を弾く。

「増えただと」

「なんだこいつあたらねえ」

「全部弾きやがった」

防いだ時間で精霊を操り地面を揺らす。

「なっ」

「くっ」

体制が崩れたところで二人を切り殺す。一人になった敵を蹴り倒し喉を踏み潰す。

残り三人の内、すれ違いざまに二人切る。最後の一人も少し打ち合いの後、つばぜり合いの最中に炎蛇で焼いた。

残ったモルド伯爵に

「一緒に来てもらっ」

顔面蒼白の伯爵の首を掴んで、監禁されているだろう場所に伯爵を引きずって向かう。

途中出てきた兵は、『風刃』ですべて音もなく殺した。金庫を見つけるが鍵がかかっている。

「外せ」

「こ、ここにはない」

ベキッ

「ギャー」

左腕を折る。

「嘘をつくなわざわざ別の場所に置く理由がない。さっさと鍵を外

せ」

「わかった、言っとおりにする。」

入り口付近にあった机から鍵を取り出して鍵を外す。

「これでいいのか？」

「ああ、ご苦労」

刀を振るい両足の腱を切る。

「ギッア……な、なぜ？」

「殺しはせん、ただ逃げられても困るのでな『流雷』」

そう言つて意識を刈り取る。

金庫の中は狭く真つ暗で、身動きも取れない。小人族は、そこに押し込まれていた。それはもう監禁ではなく拷問の域だ。

三人の内一人は、すでに事切れていた。小人族は、初めて見るから年齢がわかりづらいが、見た目は普通の幼い子供だとても痛ましい。他の子も小さいからか性的な虐待はないが所々怪我をしている。金庫に押し込まれていて衰弱もしている。いそいで運ばなければ命にかかわる。

まず、首輪を外し窓から光の精霊術で信号弾を打ち上げる。すると、すぐにティリエルが、空から降りてきた。

「急いで運ぼう」

近くの村の宿に運びベットに寝かせイリヤに治癒術をかけてもらう。
小人族を皆に預けて岩窟竜呼びに行く。

「ストルさん二人は、助けることはできた。だけど一人はすでに・
・すまない」

「・・・そうか、いや君のせいではない。ワシもまたなにもできなかった。」

「他の二人もかなりやばい小人族の村つて南の奥だよな？」

「そうだ」

人間と亜人は中央と南部で住み分けている。

数千年前、人間と亜人对魔人の戦争があったそうだ。戦争は人間側が勝ち魔人は北に追いやられた。勝った人間と亜人は、最初はうまくいっていたが、大昔で他種族に対して無知なこともあり、すれ違いや争いが起き長い年月をかけて人間は中央に亜人は南に住むようになった。亜人達は、さらに細かく分かれていった。人間の国によつては、亜人が多数いる国もあるが、それは中央より南に近い国々だ。

そして小人族の村は、そのな中でもかなり南の奥にある。おそらく国いくつかをまたぐことになるだろう。

「小人族の二人は、今帰ることに耐えられないだろう、だから一度俺の知っているところで療養させたいんだが」

「それは、ありがたいが、そこまで迷惑をかけるわけには」

「別に迷惑じゃないさ、それにストルさんは、俺に竜宝珠をくれただろ。それにあの提案も受けてくれたし、恩を返したい」

「ありがとう、それでどこで療養させるのだ？」

「元グーロム王国のお城だ、ここから一番近くて安全だ。ストルさんはどうする？」

「生き残った二人の顔を見たら一度村に戻ろう」

「わかった。落ち着いたら、俺の屋敷に移すつもりだから皇都のほうに来てくれ、皇国には話しておく」

「それでかまわない、本当にありがとうジンくん」

「それでだな、その、小人族の遺体はどうする、屋敷には置けなかったから宿の近くにもってきているが、俺のほうで葬ろうか、それとも連れて帰るか？」

「連れて帰らせてもらえるか、あれは親がいてな親元に帰してやりたい」

「わかった。」

異世界47日目

遺体をストルに渡し、小人族を城に運び、モルド伯爵の捕縛を命じる等、面倒なことがすべてが終わると。

俺の気分は沈み込んでしまった。今はベットで不貞寝している。

気付くと周りに女達が集まっていた。

ティリエルが

「どうしたのですか、お兄様？」

「ひとり助けられなかった。」

テツが

「それでも主は、二人を助けました。主だから出来たことです。」

「ふたりともボロボロだ。」

イリヤが

「ならば私が治します。」

「後遺症が残るかもしれない」

ソフィアが

「それでも命は助かりました。」

「心には傷が残る」

ミリアが

「ご主人様が癒せばいいのです。私たちも手伝います。」

「死んだ子には親がいた。」

レティーシアが

「今度こそ、助けないといけないな」

「でも他にも、まだ奴隷はたくさんいる。他国にもたくさんいる」

フェリスが

「お兄ちゃんなら、きっと奴隷をなくせるよ。お兄ちゃんにしかできないと思うんだ。」

「・・・そうだな、俺がやらないとな。そのためにもっと強く」

リスが

「私たちも、強くなる、ジンを支えて、一緒に守るよ」

「ありがとう。これからは元王国領の大掃除だ。手伝ってくれ」

皆が

「」「はい」「」

36話 依頼の報酬

異世界58日目

「帰ってきたー」

リリスが叫んでいる。

ジンたちは、依頼を終わらせ久しぶりに皇都に戻ってきていた。まずは、ギルドに報酬を貰いに行くことにした。

受けた依頼は、

Aチーム	ランクA	岩窟竜一頭の討伐	5万ギル	無期限	モルド伯爵領
Bチーム	ランクC	牛鬼五体の討伐	1万ギル	一月以内	元王国領南部
Cチーム	ランクD	ゴブリンの群れの討伐	4000ギル	二週間以内	元王国領の西街道付近
Dチーム	ランクD	生熱の種の採取	30個	5000ギル	半年以内
Eチーム	ランクF	魔物五十匹討伐	2000ギル	一月以内	ニビルの森

ちなみに、期間については、期間がすぎるとギルドカードにカウントされなくなるので誤魔化しは出来ない。一応ギルドの支部から結果報告をする決まりだが、これは達成できなかったときにすぐに依頼を再張り出しするためだ。

岩窟竜の討伐依頼は、依頼人を征伐したので報酬は受け損ねた。

なので

ランクC 牛鬼五体の討伐 1万ギル

ランクD ゴブリンの群れの討伐 4000ギル

ランクD 生熱の種の採取 5000ギル

ランクF 魔物五十匹討伐 2000ギル

合計21000ギルになった。

特別依頼は

A・004 B・033 C・112 D・232 E・211

F・126

という結果だった

特別依頼の報酬は

Aランク 半金貨3枚

Bランク 銀貨1枚

Cランク 半銀貨3枚

Dランク 半銀貨1枚

Eランク 銅貨3枚

Fランク 銅貨1枚

なので

半金貨 12枚 12000ギル

銀貨 33枚 3300ギル

半銀貨 56枚 5680ギル

銅貨 75枚 759ギル

合計 21739ギル

最後に素材の売り払いで

オオクロコダイル Aランク

オオクロコダイルの牙 200ギル 40個 8000ギル

オオクロコダイルの肝 600ギル 4個 2400ギル

ブルー・コブラ Bランク

ブルー・コブラの鱗 60ギル 120枚 7200ギル

ブルー・コブラの毒液 140ギル 瓶6個分 840ギル

合計18440ギル

総計 4100 + 21000 + 21739 + 18440 = 65279

持ち金 65279ギル

やっぱりAランクの依頼が潰れたのは痛いな。十一人の仕事としては、それほどの額ではない。

次は、ギルドカードの更新だな。
まずフェリスだがクレアさんのおかげでギルドランクが一つあがった。フェリス自身順調に成長している。

名前 フェリス 種族 人間 性別 女

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力E 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの料理人 ジンの義妹

他の仲間も

名前 ミリア 種族 人間 性別 女
ギルドランク F
能力ランク 総合D 気力D 魔力C
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 ジンのメイド

名前 ジーク 種族 人間 性別 男
ギルドランク B
能力ランク 総合B 気力A 魔力B
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 一級騎士

名前 カイル 種族 人間 性別 男
ギルドランク C
能力ランク 総合B 気力B 魔力B
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 二級騎士

名前 レティシア 女 17歳 人間
ギルドランク D
能力ランク 総合B 気力A 魔力C
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 ジンの女 皇女

名前 ソフィア 種族 人間 性別 女
ギルドランク E
能力ランク 総合C 気力C 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

名前 イリヤ 種族 エルフ 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 リリス 種族 人間 性別 女

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

名前 ティリエル 種族 龍族 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合B 気力B 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 幼い銀龍

皆順調に力を付けている。

俺自身は

名前 ジン 種族 人間 性別 男

ギルドランク B

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 英雄 8人の女に愛される男 奴隷の解放者 精霊術師

Aランクの魔物をはじめ多数の魔物を狩り力をつけた。今の能力ランクは、ラシード將軍とほぼ同じになっている。

「皆順調に力をつけているな、このままがんばろう」

「……はい」

いい返事が返ってきた。実際皆、これから自分をどうやって鍛えるかどのスタイルを目指すか、この旅で大体の未来像が出来たようだった。

「皆お疲れ、今日は屋敷でゆっくり休もう」

「……はい」

こっちの方がいい返事な気がする

屋敷に戻ると出迎えがあつた。屋敷の使用人と小人の少女二人はわかるのだが、何故か以前ラウルの後始末をお願いした、師団長も来ていた。

まずは、小人の少女の二人が

「助けていただきありがとうございます。わたし、キリといいいます。こっちは妹のユリです」

「ありがとうございます。」

可愛らしいお辞儀をしてきた。二人とも15歳らしいが見た目は10歳くらいに見える。二人とも健康そのものだ。

「よかった、元気よさそうだね。不自由はない？」

「大丈夫です。クレアさんもメイドさん達もよくしてくれます。」

「それならよかった。」

「あの、私たちは村に戻れるのでしょうか？」

「こら、失礼でしょ」

不安そうなユリをキリが叱る。

「すぐには、無理だけど必ず村に戻れるようにする。ただ一つだけお願いがあるんだ。」

「なんででしょう？」

「村に戻ったらすべての人間が君達を傷つけたようなやつらじゃないことを村に伝えて欲しいんだ。お願いできるかな？」

「わかった伝える。それに、ここの人たちは、優しくかったし。」

「ユリももう少し、言葉使いに気をつけなさい」

「でも、この人怒ってないし」

「それでもよ」

「別にいいよ。キリもそんなにかたくななくてもいいよ」

「そついうわけには」

「まあ、無理強いはしないけどね。しばらくはこの屋敷でゆっくりするといいよ」

「はい」

次は師団長だった。そういえば名前知らないなどうしよう。

後ろのミリアがこっそり

「第八師団長のタッド師団長です」

「タッド師団長殿今日は、どういった用件で」

「アッシュ皇子からこれをあなたに渡すようにと」

差し出してきた袋には、金貨が数枚入っていた。

「これは？」

「モルド伯爵征伐の報酬と岩窟竜の退去の報酬　金貨十三枚です。
お納めください。」

「こんなにいいのか？退去は3万だから征伐が10万ということになるが」

「お気になさらず、モルド伯爵の資産没収でかなり稼いだようですから」

「俺が働いただけこの国が潤うということか」

「ハハハ、そういうことになりますね。それでは私はこれにて失礼します。ああ、私のことは、タッドで構いませんよ。皇国にとってあなたは英雄なのですから」

「わかったよ。タッド」

師団長は、城の方に帰っていった。

「ようし皆、数日休憩したら、また旅に出るからな準備しておけよ」

「はい」

これからジン達『世界を結ぶ者達』は数ヶ月間、他国が集まるまで奴隷の解放に力を注ぐことになる。

65279 + 130000 = 195279ギル

持ち金 195279ギル

設定資料（36話まで）

異世界58日目の段階で

【主人公の成果】

チーム 『世界を結ぶ者達』を結成。人数10人+テツ

ハーレム 八人

ソフィア・イリヤ・リリス・テツ・ティリエル・ミリア・レティー
シア・フェリス

グーロム王国を潰して、クイント皇国に大きくする。

報酬として屋敷を皇帝から貰う。

お金 195279ギル

【人物設定】

主人公 ジン

前の世界ではやりたいことがなかった。そのため、異世界に来ること
にあまり迷いはなかった。そして異世界に来ることです生き甲斐を
見つける。力は精霊界で精霊王に修行してもらった。（あと刀神に
も）

能力

全精霊王との契約 ・すべての精霊を操れる

火・風・水・土・雷・光・闇がある

聖痕の発動 ・ 属性ごとにある 光と闇はできない

火Ⅱ炎王 風Ⅱ嵐帝 水Ⅱ水龍 土Ⅱ岩皇 雷Ⅱ雷神

神双流 刀神直伝の二刀流の剣術

契約破棄 大抵の契約は強引に破棄できる

ハーレムヒロイン

ソフィア 精霊の巫女

精霊に使えているため聖痕を持つ主人公を信用した。村を救われたことと救われた時の精霊術を見て主人公に惚れる。精霊使いでもあり水の精霊魔法が得意。 落ち着いた少女で髪の色は水色。

装備 水の指輪

イリヤ エルフの治癒術師

高級奴隷として売られそうなところをリリスと一緒にジンに助けられる。

ジンのご主人様と慕う。 マッサージが得意。エルフならではの美貌を持つ 金髪で天然。

装備 ヒーリング・リング

リリス 生粋の冒険者 スピード型

戦闘奴隷として売られそうなところをイリヤと一緒にジンに助けられる。

魔物との戦闘で危ないところをジンに助けられてジンに惚れる。

活発な少女 炎髪

装備 エストック（両手突き剣）

ティリエル 銀龍

牛鬼に襲われているところをジンに助けられる。ジンをお兄様と慕

っている。

銀龍としては、幼く将来が楽しみ 年齢より幼く見える。 銀髪
装備 ダガーを2本

フェリス 亡国の姫

一度すべてを失ったが、ジンの元で新しい人生を歩む。
ジンとおにいちゃんと言って慕っている。 髪は緑色。

装備 ブースト・リング

ミリア できるメイドさん

元皇族付きのメイドだったが、ジンに恩返しをするためにジンのメ
イドになる。

呼び方は、ご主人様。

装備 風雷の指輪

レティーシア 第二皇女

ジンの強さを気に入る。 姫というより騎士に近く付いた通り名が『
姫騎士』

長い金髪で少しキリツとした、美人。 ジンをジン殿と呼ぶ。

装備 ロングソード

テツ 小太刀の少女

『鉄餓刀』から『黒龍刀・鉄』になる。 持ち主の邪魔になるため気
力、魔力を持たない。

最近二刀に分かれることができるようになった。 黒髪でジンの前以
外は基本無表情。 ジンに貰った銀の首飾りは宝物。 ジンのことを主
と呼ぶ。

ハーレム 予備軍

クレア ギルド職員

ジンに興味を持っている。ジンに誘われて屋敷に住むようになる。
短い黒髪と眼鏡で秘書っぽい女性。

アリシヤ 第一皇女 エルフのクォーター

小さいことを気にしている。ジンに、通話の出来る指輪を渡すなど積極的。レティーシアと違いしっかり皇女をやっている。

キリとユリ 小人

小人の双子。キリが姉でユリが妹。瓜二つだが見分けは付け易い。
金庫に閉じ込められているところをジンに助けられる。キリは気が強く。ユリは気が弱い。二人とも奴隷時代の後遺症で軽い暗所恐怖症と閉所恐怖症。

小雪 精霊

ジンの子供？。ジンをパパと呼んで慕っている。

その他のキャラ

クルト

クルト・クイント クイント王国の皇帝。レイシアの父

アッシュ

クイントの王子 今は元グーロム王国領の管理を任されている。

アイリス

アイリス・クイント クイントの皇妃

ゲオルグ

クイント皇国の将軍

ジーク

騎士でジンに仕えることを選ぶ

カイル

ジークの友人で同じく騎士ジンに仕える

アルベルト

銀竜。ティリエルの父親 戦って友になる。SSクラスの力を持つ。

ラシード将軍

グーロム王国の将軍だった。ジンの誘いに乗る。今はクイント皇国の将軍をやっている。Aランクの実力者。聖痕なしのジンと引き分けている。

ラウル

クイント皇国の第六師団長。ジンにボコボコにされる。

タッド

クイント皇国の第八師団長。

ガルダ

元ギルドマスター、今はギルド支部長

ミーシャ

皇国のメイド、変な方向に天然

レオン

皇国の騎士

レクト

ミリアの弟 元戦闘奴隷

オルム

村長兼ソフィアの保護者

コートル将軍

グーロム王国の将軍。死亡

【ギルドカード】

名前 ジン 男 種族 人間 性別 男

ギルドランク B

能力ランク 総合 A 気力 S 魔力 B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 英雄 8人の女に愛される男 奴隷の解放者 精霊術師

名前 ミリア 種族 人間 性別 女

ギルドランク F

能力ランク 総合 D 気力 D 魔力 C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド

名前 レティーシア 種族 人間 性別 女

ギルドランク D

能力ランク 総合B 気力A 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの女 皇女

名前 ソフィア 種族 人間 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力C 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

名前 イリヤ 種族 エルフ 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 リリス 種族 人間 性別 女

ギルドランク B

能力ランク 総合B 気力A 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

名前 ティリエル 種族 龍族 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合B 気力B 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 幼い銀龍

名前 フェリス 種族 人間 性別 女
ギルドランク F
能力ランク 総合D 気力E 魔力B
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 ジンの料理人 ジンの義妹

名前 ジーク 種族 人間 性別 男
ギルドランク B
能力ランク 総合B 気力A 魔力B
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 一級騎士

名前 カイル 種族 人間 性別 男
ギルドランク C
能力ランク 総合B 気力B 魔力B
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 二級騎士

名前 クレア 種族 人間 性別 女
ギルドランク C
能力ランク 総合C 気力B 魔力C
チーム なし
称号 ギルド職員

【世界観】

数千年前、人間と亜人对魔人の戦争があった。戦争は人間側が勝ち魔人は北に追いやられた。勝った人間と亜人は、最初はうまくいつていたが、大昔で他種族に対して無知なこともあり、すれ違いやいざこざが起き長い年月をかけて人間は中央に亜人は南に住むようになっていった。亜人はさらに細かく分かれていき国や集落ができた。人間の国によつては、亜人が多数いる国もあるが、それは中央より南に近い国々だ。

通貨は

金貨一枚＝10000ギル

半金貨一枚＝1000ギル

銀貨一枚＝100ギル

半銀貨一枚＝10ギル

銅貨一枚＝1ギル

1ギル＝約10円くらい

【登場した力】

闘気

気力によつて変動する。身体能力の強化。武器の強化。

魔術

魔力によつて変動する。あらゆる現象を引き起こせる。

属性 風

『トルネード』 無数の風の刃で切り裂く

属性 火

『ファイア・ボール』 火球を飛ばす

『フレイム・バレット』 無数の小さな火球を飛ばす

精霊術

気力、魔力は必要ないが、習得が難しく、才能に左右される。

火・水・風・土・雷・光・闇の七種類がある。

火の精霊術 『炎蛇』 火の蛇を作り出して攻撃、『炎竜砲』ドラゴンのブレスをイメージした熱線。もともと威力が高い、『炎爆』爆音と衝撃で攪乱する

風の精霊術 『風刃』 鋭いカマイタチを作り出す、『風見鳥』 偵察用の鳥型の精霊獣を作る、『削嵐』 無数の風の刃で敵を削る、『疾風』 風による補助による高速移動

水の精霊術 『水翼』 大量の水を使うための前準備、『陸津波』 陸で津波を起こして押し流す、『水撃』 圧縮した水をぶつける、『斬水』 高圧縮した水を細く使って相手を切る

土の精霊術 『土壁』 土の壁を作り出す、『岩壁』 岩の壁を作り出す、『土鉄岩金壁』 土壁、鉄壁、岩壁、金剛壁を作り出す。『落とし牢』 落とし穴

雷の精霊術 『落雷』 カミナリを落とす、『流雷』 相手を気絶させる、『タケミカヅチ』 槍状のカミナリに回転を混ぜすべてを貫く。

【魔物】

ランク A

ノワールサイ

黒い鉱石を纏ったサイ型の魔物。突進力と防御力はSクラス。

オオクロコダイル

ワニ型の上位の魔物。かなりの巨体で、傷つけることはできても止めをさすのが難しい。
噛み付きは必殺。

ランク B

ブルー・コブラ

個体の戦闘能力より、その隠密能力が特徴。見つけることができれば、Dランクの冒険者でも倒せる

牛鬼

群れと連携が脅威。武器を扱える。個体はそれほど強くない。

Dランク

ゴ布林

圧倒的な数と繁殖力が特徴。個体は弱い。

Eランク

グリーングリズリー
熊型の魔物。緑色の毛を持つ。普通の熊より大型で凶暴。あまり熊と変わらない。

バインドスネーク

蛇型の魔物。獲物を縛って絞め殺す。

Fランク

ラビットドン

ウサギ型

ウサギが大きくなり凶暴化した。

ハイウルフ

狼を少し強化したような魔物。

魔物以外

岩窟竜

Sクラスの力を持つ。ストルは、長く生きていて古龍に近い力を持っている。

銀龍

SSクラスの龍の上位種。

37話 会合の前

異世界200日目

「た、助けてくれ」

さつきまで、奴隷の売買をしていた男が、目の前で命乞いをしている。

「金もやる、奴隷も解放するだから」

ザシュ

「うっ、あっ」

目の前の男は、首から血を流して事切れた。

「「主殿」」

ジークとカイルだ。二人は俺を「主殿」と呼ぶようになっていた。

「残りの奴隷商人は？」

「集まっていた奴隷商人の主要人物は、すべて殺しました。他の物は拘束しています。」

「」苦勞さん。」

「これで元王国領のゴミは、大体片付きましたね。これからどうす

るのですか？」

「俺たちの働きで元王国領が早く片付いて、他国の代表が少しずつ集まっているらしい。だからここにいる奴隷を解放したら、一度皇国に戻る。」

「了解しました。」

この二人もずいぶん力をつけたな、ここには護衛を入れたら100人近いゴミがいたのにそのうち半分を片付けてしまった。他の仲間も、ここ数ヶ月で力をつけた。魔物の大侵攻まであと160日しかない気合をいれていかなうとな。

異世界205日目

皇都への帰り道、足にフェリスとテツを乗せて馬車に揺られているとレティーシアが

「ジン殿、前方に牛鬼の群れだ。馬車が襲われているどうする？」

「・・・助けよう」

特別クエストは、三週間ほど前に終わったので牛鬼を倒しても金にはならないが、見捨てるわけにもいかない。

件の襲われている馬車の護衛は手練のようだがたったの6人だった。牛鬼の数が多く馬車を守るのに精一杯のようで、効果的な攻撃がでないようだ。あのままでは、いずれ牛鬼側に流れが傾くだろう。魔物のほうが体力もある。

「先に行くぞ」

体に闘気を纏って飛び出す。すぐにスピードに定評のあるリリースが後ろに続く。牛鬼の数は、ざっと22体ぐらいだ。この世界にも少しは詳しくなった、だからわかるがこの数は異常だ。その異常性は一先ず置いておいて牛鬼を倒すことに集中する。

まず馬車から離れている牛鬼に向かって『風刃』を放ち四体始末する。残り18体

「テツ、二刀に」

テツを左右に持って、群れに突っ込む。そのまま馬車まで突き抜ける。抜ける間に三体の腹を掻っ捌く。残り15体

「あ、あんたは？」

馬車から女の子が話しかけてきた。

「通りすがりの冒険者だ。馬車の中に戻れ、もうじき俺の仲間が来る。」

そう言いながら目の前の牛鬼の首を刎ねる。護衛の人間も救援に勢いづき二体ほど倒す。残り12体

俺の仲間も到着し数が同等になる。そうなると後は問題なく討伐できた。一対一で後れを取る者はここにはいなかった。安全を確認しているとさっきの女の子が

「ありがとう助かったわ。わたしは、シャルル。あなたは？」

「俺はジン。冒険者だ。」

「そう、あなた達も皇都に行くのでしょ、一緒に行かないかしら。というよりうちの護衛に怪我人が出たから、ご一緒されてもらいたい、というのが本音だけど」

開けっぴろげな子だな。ただ発言に作為を感じるな、断りづらい状況をつくられている気がする。まあなにか問題があるわけでもないし別にいいか。

「いいよ、同行しよう」

「ありがとう」

まあ同行と言ってもつかず離れずに皇都を目指し野営のときに少し世間話をした程度だったが。

異世界207日目

皇都にたどりついて、すぐにシャルとわかれた後、仲間ともわかれ一人で城に向かう。

城に着き皇帝に会うために回廊を進んでいるとアリシャが駆け寄ってきた。

「久しぶり、アリシャ」

アリシャは挨拶を無視して、なんとタツクルしてきた。そのままジンの体に抱き付き。

「ホントに久しぶり」

「指輪で話していたじゃないか」

「偶にだった」

「えっと、今から君の父親に会いに行くんだけど」

「わたしも一緒に行く」

「えっとね」

「行く」

「わかった」

アリシャは、見た目に反して押しが強い。可愛いのでつい許してしまふ。こういうのを甘え上手と言っのだろうか。

「クルト、邪魔するぞ」

「久しぶりだね、ジンくん。おや、アリシャも一緒なのかい」

「ああそこで一緒になった。」

「いつの間に仲良くなったんだい。アリシャは人見知りが激しいのだが」

「俺は、この世界で組織と繋がりが無いから話しやすいらしい」

「・・・あれ？君ってたくさん女いるよね？（ジンくん意外と鈍感なのかな？）」

「うん？まあ、この世界ではいるな。でも前の世界では、一人身だったんだぜ」

「（そのせいかな？）えっとね。アリシャはだねへブ」

クルトが何か言おうとするのを、アリシャが手に持っていた本を投げつけて黙らせる。

「ジン、速く本題を話す」

「まあ、そうだな」

聞かないほうがよさそうだな。

「今度の他国の代表者との会合の方はどうなっている？」

「集まりは、順調だよ。ただどうやって魔物の侵攻を信じさせるかが問題だよ。みんな頭固いから」

「それついてなんだが、大侵攻が始まる場所を、見てきたんだが、大きな真っ黒い半球ができていた。」

「『無得と魔物の大地』か」

魔物の大侵攻のある場所は、大陸の中心にある半径数十キロに及ぶクレーターがある場所だ。

ここでは、作物は育たず、水もない。そして、魔物をいくら倒しても強くなれない不思議な場所。なので魔物以外の人間をはじめとする、すべて生き物はその場所を求めない。ゆえに、そこは誰の領土ではなく多数の魔物が生息する場所。そこが『無得と魔物の大地』だ。

「それを、見せられれば。兵を出す思うんだが。」

「どうやって連れて行くかだね。」

「いざとなれば力ずくで連れて行くさ」

「ジンくんそれは、ちょっと」

「そうならないように、祈っていてくれ」

「まあ、それについては、任せるよ。呼んだのは私だが、会合の進行はジンくんに頼みたいんだが」

「面倒だが仕方ないか、俺なら一応中立ってことにできるしな」

「そういうこと。あ、これこの前の奴隷商人を潰した報酬ね。結構貯まったんじゃない。」

渡された袋には、金貨が五枚入っていた。

「この報酬合わせて、たしか100万ギルくらいだな。」

「稼いだねえ」

「まあな」

小人族の子供を助けられなかった後から、俺は精力的に元グーロム王国領のゴミ掃除に励んだ。

そのおかげで、かなりのお金が貯まったのだ。

その後、細かい打ち合わせをした後、皇帝の部屋をあとにする。

「ジン、がんばってるね」

「そうでもないさ、俺はやりたいうようにやっているだけだからな。」

「あら、ジンこんなところで会うなんて奇遇ね」

つい最近どこかで聞いた覚えのある声が聞こえた。後ろを向くとシヤールが歩いてきた。

「ジンこいつ誰？」

「なに、この失礼な子供」

二人の機嫌が悪くなったような。

「黙れガキ」

「ほんつとくに口が悪いわね。あんたのほうガキでしょ。」

なぜか二人は、お互いを睨み合っている。

「二人とも落ち着け、何故そこまで初対面でいがみ合えるんだ？」

「「なんとなく気に入らない」」

「仲いいな」

「「よくない」」

ハモったやっぱり仲いいな。

「えーと、こっちはアリシャ、そこでこっちはシャルな」

とりあえずお互いの名前を教えてみる。

「シャル？」

「アリシャ？・・・そういうこと、ならここは私が引きましょう」

名前を言っただけで、争いは収まってしまった。分けがわからん。

「ジンあれには、気をつけてあれは商人、油断すると金を筆記取られる」

「まあそんな気はしていたがな。」

シャルは、会話がというより交渉が得意そうだったからな。俺たちにタダで護衛させていたしな。

屋敷に久しぶりに戻ってみると

キリとユリが、メイド姿で迎えてくれた。

「お帰りなさいませ。」

「二人とも別に働かなくてもいいんだぞ」

「いえ、働かざる者食うべからずですから」

「そうか、なにかご褒美をあげないとな」

「あのそれでしたら、その、お願いが」

「なにかな？」

「えっと、その」

「もう、ユリ。私が言うよ、えっとね、ユリが夜一人が怖いから一緒に寝て欲しいんだって、いつもは私が一緒に寝てるんだけどね」

「うゝゝ、キリだって暗くて狭いところ苦手なくせに」

「うっ」

そうか二人とも奴隷のころのことがトラウマになっているんだな。

「いいよ。それじゃあ今日は一緒に寝よう。それに今二人の部屋は別々だったね。今度一緒にしてもらおうか？」

「いいんですか、お願いします。」

キリの良い返事が返ってきた。

ユリがそれを聞いて微笑んでいる。

「・・・あ」

キリが恥ずかしそうにしているので

「可愛いよ、キリ」

「あう」

ますます、赤くなった。

「キリずるい」

「ず、ずるくない」

「ハハ、じゃあ夜にね。」

夜になって寝室にいくとベットの大きさが三倍くらいになっていた。
ベットを三つほどくつつけているのだろうか。

「な、なんだこれ」

近くのメイドさんに訊いてみると

「お嬢様方の希望でベットと急遽大きくしました。」

「なんで？、大変だったろ」

「理由はこれから女が増えるだろうから一度に一緒に寝られる人数を増やすため、と聞いています。大変でしたけど、その、頑張ればご主人様に添い寝させていただけると言われまして」

頬を染めながらそう言ってくれる。それ自体は嬉しいんだが。

俺はまったく聞いてねえぞ。

「まあ、俺としては、嬉しいけど今日は」

「はい、今日はキリ様とユリ様が添い寝されると伺っています。それにこれからは屋敷にいることも多くなるそうですし、わたしはその時にでも。」

「そう言ってくれて嬉しいよ、ありがとう」

「いえ、そんな」

「ああ、ご主人様となにしてるの」

「見つかってしまいました。それでは、ご主人様失礼します。」

そう言っ同僚のもとに走っていく。

その夜、枕を持ったキリとユリが部屋を訪ねてきて、一緒に寝た。二人とも怖いのか俺の腕をずっと掴んだまま離さなかった。それが少し心苦しかった。

ジンは二人を抱きしめて眠ることにいた。そのためささやかな胸が
夜通し当たっていた。

38話 人の王達

異世界208日目

人が治める国の代表達が集まる日がやってきた。

今ジンとクルト皇帝は、会合を行う部屋で各国の代表が来るまで、これからのことを話していた。

「大進行は丸一日、24時間、朝昼晩戦闘が続く。そんな戦い誰も経験はないし、前例もない。ジンくん正直私は不安だよ」

「それでも、やらないといけない。」

「問題は、長い時間と夜の暗闇だね。こんな長時間の戦いも暗闇の中の戦いも人間はしないからね。」

「時間は、部隊いくつにも分けて何度も入れ替えるしかないし、夜は何かで光を確保して防御重視しかないな。」

「そうなるだろうね。夜に頑張って攻撃して同士討ちなんてごめんだからね。」

コンコン

「ウルティア国の代表がお越しです。」

「ちょっと早いな」

「ウルティア国ならかまわないよ。通して」

入ってきたのは、美しい美女だった。

「失礼します。久し振りですねクイント王。お願いがあつて早めに来たのですが、そちらの方は？」

「彼は、冒険者のジン。我が国の英雄だ」

彼女の反応は、かなり意外なものだった。女性は、入り口から走りだしジンの隣まで来て。喜色に溢れた表情で

「あなたが英雄ジンなのですか。お会いできて光栄です。私は、ウルティア国代表カルディアと申します。よろしくのお願いしますね」

とても一冒険者に対する態度だとは、思えない。

「よ、よろしくジンだ。（おいクルトどういうことだ）」

「（私にもわからん）カルディア殿、それでお願いとは？」

「実は、彼に会ってみたかったです。水の聖痕を、持つ彼に」

「ああそういうことね」

なんだ聖痕が珍しいだけか

「それだけではありません。先の戦争で水の精霊術で5万の奴隷を殺さずに無力化した、そのお手並み、その発想、その精神は、我が

国ではすでに伝説です。」

ここまで言われるとさすがに恥ずかしいな。

「何故そこまで？」

「我が国ウルティアは、湖と川の国、水というのは我が国では特別なんです。首都も湖の上にあるんですよ」

「湖上の都市か、見てみたいな」

「是非来てください。大歓迎します。」

「ありがとうございます。落ち着いたら行かせてもらいます。それで突然なのですが、カルディア様少し質問してもよろしいですか？」

「質問は構いませんが。様付けはお止めください。国の者に怒られてしまいます。」

カルディアが面白そうに笑って言う。

「では、カルディアさんのお国は今回の呼びかけをどう思っていますか？」

「我が国は、ジンさんに会えるので、嬉々として私を送り出しましたよ。土産話に期待するそうです。」

だめだ、参考にならない。

「えーと、では他国の反応を、どう予測しますか？」

「そうですね。書状には世界の危機とありましたが、信じていないと思います。呼び掛けに応じたのは、クイント皇国が大きくなったからと旅費の八割を皇国が負担すると書状にあったからでしょうね。」

「つまり他国は、大いに不満である」と

「そうかと」

カルディアが少し気まずそうに同意する。

「まあ、それくらいは想定の範囲内だし何とかなるだろう」

「ふふ、楽しみにしていますね。」

しばらく会話を楽しんでいると、会合の時間が近くなり次々と代表者が集まってきた。

参加者についてクルトから、事前に説明を受けた。

まず最初に現れたのは、

ヴァーテリオン帝国、帝王のラインツ王だった。

「失礼する」

ラインツ王の最初の印象は、王の中の王、まるで霸王のような男だった。従者を一人連れてクルトの正面に座った。

ヴァーテリオン帝国は、クイント皇国がグーロム王国を吸収するまで皇国と同等の国力だった、今でも人の国では、二番目の国力を持

っている大国だ。そして数は少ないが竜騎兵^{ドラグーン}を有する国でもある。
この大陸で少数の部隊戦では、最強を誇っている。

次はリニヨン教国のカリウス教皇と聖女ウリアのツートップが入ってきた。

「失礼」

「失礼します。」

二人は、円卓の皇国よりの位置に座った。教皇は白を基本とした神官服を、聖女は同じく白を基本にした巫女服だ以前ソフィアが着ていたものに似ているが質はかなり違うのだろう。布が多くて正直動きずらそうだがこれでも軽装だったらしい。リニヨン教国は、この世界の宗教を司る国だ。人が治める国に対しては、すべての他国へ少なからず影響力を持っている。聖職者は、魔人を毛嫌いする者が多いらしい。今後の課題になりそうだ。

次はファールランド王国、国王のヘンリー王だ。

「お邪魔します。」

ヘンリー王は、これといって特徴はないのだが、彼は王だ、と思わせる不思議な男だった。ファールランド王国は、なんと魔人を受け入れている国だ。そのせいでリニヨン教国と仲が悪いらしい。入って来たときもカリウス教皇とヘンリー王が睨み合っていた。そしてそのまま教皇の対面から少しずれたところに座った。

次はカルモンド王国、国王のグスター王と王大使のエクス王子が入ってきた。

「・・・」

「失礼します」

グスター王は、無言で適当な席につき、エクス王子は入室の言葉を言って席につく。正直カルモンド王国にはあまり良い印象を持っていない。グーロム王国との戦争の時に明らかにグーロム王国を援護する動きをとっていたからだ。国にいる奴隷の数も多い。それでも無視ができないのは、国内に二つの有数の鉱山を持っていて、そのおかげで経済力も軍の装備もかなりのものなのだ。しかしそれも今の国王になってから国力は下がっていつているようだ。

次はテンブル騎士国の、騎士王ジャックとその娘、『剣姫^{けんき}』の異名を取るクリス王女が入室した。
入り口でクリスが一礼して入室する。

騎士王と格好は普通の王と変わらなかったが、クリス王女はドレスと甲冑を合わせたような格好だった。

テンブル騎士国は、集団での戦闘能力が高い、軍人はすべて騎士道精神を持つ事が求められる国だ。礼節はしっかりしているが、騎士が貴族階級なためか差別的な考えを持っていて、平民層を守られる対象として平民を下に見る傾向がある。それもジャック王になってからはその傾向は減ってきているようだ。

お次は、ヤマト国の国王キリガネとその娘、『舞姫』の異名を取る
トウカ姫の二人だ。

「邪魔するぜ」

キリガネは不遜な態度で、トウカは一礼して入室する。キリガネは
服装は着物を崩した着方をしているトウカは、着物を動きやすく改
造した物を着ている。

ヤマト国は、武士の国で個人の戦闘能力が高い者が多い。Sランク
の実力者が複数いる。この世界の武士は主君に仕える者と傭兵とし
て世界をまわる者の二種類がいる。

そしてテンプル騎士国の騎士と傭兵は仲が悪い。騎士は傭兵を意思
なき者達と毛嫌いし、傭兵は騎士を群れないと戦えないと嘲ってい
る。

ヤマト国が座った場所はテンプル騎士国の対面だった。キリガネ王
とジャック王は、視線を交わしていたがそこに悪感情は感じなかつ
た。例えるならライバルに向けるような挑戦的な視線だった。二人
の姫もお互いを見て微笑んでいる。どうやらトップ同士は敵対して
はいないようだ。

次はクラフト商国のトランド王とその娘が入って来た。その娘が

「あれ、ジン？なんでここにいるの？・・・あんだそんなにえらか
ったの！？」

シャルだった。

「娘よ、皇国でジンといえば、『英雄ジン』のことだともうのだから」

「うえ、そ、そういえばそうね。だからアリシャがあんなになついていたのね」

「よろしく、シャル」

「え、ええよろしく」

「よろしくなくていい。ジンが汚れる」

アリシャとアッシュもやってきた。

「なんですってー!!」

「シャル後にしなさい。ここは、各国の代表がきているんですから」

「・・・はい」

アリシャとにらみ合った後、しづしづシャル達は、少し離れたところに座った。

クラフト商国は、商人の国だ。経済力が高くあらゆる国と商売をしている。交通の要所があり人が治める国だけではなく亜人の国に対してもそれなりの影響力を持っている。そして獣人の狸族りぞくが多数暮らしている国でもある。

「なにが、あつたんだ？」

アッシュがさっきのことを聞いてきた。

「面倒だから秘密」

「ひ、ひどい。僕皇子なのに」

セリフとは裏腹になぜか嬉しそうだ。こいつ実はマゾなのか。

「あれ？ジンその指輪確かアリシャのこんやへブツ」

確信を言う前にアリシャに黙らされた。それにしても『こんや』か・
・・指輪・・・、まさか婚約指輪じゃないだろうな。考えても答え
は出ないので考えるのをあきらめる。

これらの国にクイント王国をいれた9カ国が主だった国だ。
発言は主にこれらの国がすることになるだろう。

その後は、小国が次々と入室し席を埋めていった。

すべての席が埋まった。その数21ヶ国の代表が集まった。この世
界でこれほどの、国の代表が一同に会するのは、はじめてのことだ。

「すべての代表者が揃ったようですね」

すべての視線がジンに集まる。その中で、ジンは丁寧始める

「それでは、この世界を守るための会議を『世界防衛会議』を始めたいと思います。」

39話 世界防衛会議：一回目

「それでは、この世界を守るための会議を『世界防衛会議』を始めたいと思います。」

親しい国同士で会話をしていた代表たちも話すことを止めジンを注視する。

一瞬の静寂の後、ラインツ王が問いかけてくる。

「君が進行役をするのかね？」

「はい、そうです。」

カルモンド王国のグスター王が

「どこの馬の骨とも知れないものに任せて良いのですかな。」

「わたしは異世界から来ました。この場でもっとも中立だと自負しています。」

「異世界？君はふざけているのか？」

グスター王は呆れ半分、怒り半分といった感じだ。

「そんなつもりはありません」

「クルト皇なぜ彼を進行役にしたのだ？」

ジンが相手にしないでいると、今度はクイント皇国の責任を追及し

てきた。

それに対して面白そうにクルトが

「それはもちろん、この集まりは、彼が作ったものだからですよ」

「どういう意味だ？」

「つまりこの集まりは、ジンの主催なんですよ。」

「なんだと、クイント皇、我々を騙したのか！？」

「そんなつもりはない。わたしは呼びかけたただだし、あなた方の旅費は、彼が稼いだお金で払うのですよ。」

「・・・帰らせてもらう」

突然グスター王が席を立ち、出入り口へ向かう

「ち、父上お待ちください」

エクス王子が止めるが、グスター王はそのまま扉に向かう。しかし出入り口には、ジークとカイルが陣取っていた。カイルは抜剣すらしている。

剣の柄に手を置くジークが、

「主の話はまだ始まっておりません。席にお戻りください。」

「き、貴様らなにをしているのか、わかっているのか」

ジークはそれを無視して繰り返し返す。

「お戻り下さい」

「こ、この」

グスター王が怒りを爆発させようとしたところに、ファールランド国のヘンリー王が

「そう短気を起こさず、ひとまず席に戻って話だけでも聞いたらどうですか？」

「・・・ふん」

グスター王が不満そうに席に戻る。そこでトランド商王が商人の質問をする。

「クルト皇、先程ここに集まる者の旅費の八割をそちらの英雄殿が払うと言ったが、旅費といってもこれだけの数だ、かなりの額なはずだ。どうやって工面したのかな？」

「それはだね。私はグーロム王国の富裕層の九割の財産を没収したんだが、その成果のほとんどは彼の功績なんですよ。その報酬で旅費程度どうともなりますよ。」

これは実際に受け取った報酬とは、また別口だ。

「ほう、素晴らしいですな。しかし、私にはできそうにないですな」
たしかに、資産をあれだけ没収できたのは、グーロム王国が害国だったからだろう。

ラインツ王が、

「そろそろ本題を話してはどうだね。」

「そうですね。そうさせてもらいましょう。」

いよいよか、と皆がジンに今まで以上の意識を向ける。ジンが真面目な顔を作って告げる。

「皆さん『無得と魔物の大地』はご存知ですね。そこに、真っ黒い半球状の空間ができていることはご存知ですか？」

「いや知らないな」

ラインツ王が答え、他の代表達も口々に知らないと答える。

「きょうから152日後の正午に、その黒い空間から大量の魔物が現れます。世界を滅ぼすほどの規模の魔物の侵攻です。」

少しの間静寂が流れる。

その中、グスター王が

「何故そんなことがわかる」

「神にこの世界に送られる際に教えられました。」

「今度は神か」

グスター王が、吐き捨てるように言う。

神と言う言葉に黙ってられない国がある。
宗教を司るリニヨン教国だ。カリウス教皇が

「軽々しく神を口にしてもらいたくないですな」

その声には明らかに怒気が含まれている。

「そう怒らないでください。私が言った神は、私の世界の神です。
あなた方のこの世界の神とは、なんの関係ありません。」

こう言われては、教皇も反応に困ってしまう。

そこに、ファールランド王国のヘンリー王が

「何故君が送られたのですか？」

「この世界を救うために」

「では何故別の世界の神が送ったのですか？この世界の神ではなく」

「神の事情までは知りません」

「この世界の神は何もしないのですか？」

「ファールランド王、何が言いたい？」

教皇が先程より明確な怒気を纏って質問する。

「いえ、やはり神は使えないな、と思っただけですよ。」

今まで黙っていた、聖女ウリアが辛らつな言葉を吐く。

「黙りなさい。王でありながら魔人などと仲良くするなど、万死にあたいします。この売国奴」

ファーランド王もこれに、怒りをにじませ

「魔人を恐れることしかできないあなた方になにがわかる」

「魔人は敵です。魔人の中には食人を好む種族もいます。人の身でありながらどうして仲良くできるのか理解できません。」

「それは、一部の種族に過ぎないし、長い年月をかけて彼らは自分を制御できるようになった。食人は、もう彼らに必要なものではない何故それを認めない」

聖女ウリアとファーランド王が舌戦を始めようとした瞬間

「
」

二人から音が消失していた。

「
」

驚いているようだが、やはり声は聞こえない。驚きが少しおさまった頃にジンが声を抑えて注意する。

「ここは、あなた方のための問答の場ではありません。お静かにお願いします。」

コクコク

二人は、なんども頷く。すると二人の空間に音が戻った。ジンは全く動いていない。

呆然とした聖女が

「今のはいったい」

「音を伝えるのは、空気です。私はその空気の動きを止めただけです。」

「その止めるだけが難しいと思うのですが。」

「お気になさらず。それでは、本題ですが……あなた方には『無得と魔物の大地』に軍を派遣していただきたい。」

「ふ、ふざけるな！、何故わたしが、貴様に従わなければならない」

まあ、軍を動かせといっではわかりましたとは、いえないだろうな。

「何も私に従え、と言っているわけではありません。王の責務を果たせ、と言っているのです。」

「クイント皇国は兵を出そう」

「ウルティア国も兵を出します」

「しよ、正気が貴様ら」

うろたえるグスター王を見かねたラインツ王が

「ジン殿何か君の言葉を証明できる物はないのかね」

「確固たるものはないですね。」

「何かはあるんだね」

「ええ、まあ」

「それで構わない。教えてくれ」

「それでは、まずギルドカードですね。」

カードを取り出し、ラインツ王にのみ見せる。

「称号を見てください。あ、能力ランクはバラさないでくださいね。」

「・・・救世主だと（それにこの能力ランクは）」

円卓がどよめく。ラインツ王と周りの代表も驚いているようだ。

「はい、神様が私を救世主としてこの世界に送った証拠になるかと」

「たしかに、しかしこれだけでは、漠然としている。」

「そうですね。状況証拠としては、最近の魔物の異常な出現が上げ

られます。ノワールサイや牛鬼はもと『無得と魔物の大地』近辺に多く生息していました。それが最近低ランクの狩場に現れ冒険者に被害がでています。」

この件に関わりのある、シャルが援護する。

「私も皇都の近くで20をこえる牛鬼に襲われました。」

冷や汗たらたらのトランド王。

「娘よ、私は聞いていないのだが。」

「あははゝ気にしない気にしない。」

「気まずそうに、顔をそらすシャル。護衛が少なかったのは、ケチっていたのだろう。」

「やつらが住処を離れたのは、黒い半球が関係していると思われる。状況証拠としては充分でしょう。」

「しかし、それではまだ弱い」

「ええですから、あなた方には、『無得と魔物の大地』に一緒に行ってもらい黒い半球を物的証拠として見てもらいたいです。お願いできませんか」

「・・・わかった。ヴァーテリオン帝国は同行しよう。すべての国で行くのか？」

「いいえ、主要国の、ヴァーテリオン帝国、リニヨン教国、ファー

ランド王国、カルモンド王国、テンプル騎士国、ヤマト国、クラフト商国、ウルティア国そしてクイント皇国の9ヶ国で行きます。皆様よろしいでしょうか？」

「クイント皇国は、問題ない」

「ウルティア国も問題ありません」

「世界の危機なのです。我らリニヨン教国は同行します。」

「クラフト商国も旅費を出してくれるなら問題ない」

「・・・つち・・・エクス見てきなさい。カルモンド王国からはエクス王子を出す」

「ファールランド王国も同行しましょう。」

次々に了承が得られる。思っていたより順調だ。しかし今までこれといって発現のなかった残りの二国が

「テンプル騎士国は断る」

「いやだね、ヤマト国は拒否するぜ」

「・・・何故ですか？」

「そちらは、こちらを騙し出入口を塞いでいる。あまりに不敬ではないか。」

「ここまで好き勝手されて、はいわかりました。なんて言えるかよ。」

どうやら武闘派の二国は、納得がいかないようだ。今まで黙っていたくせに、この言い様は、王として大丈夫なのか？

「必要なことでした。嫌だと申されても連れて行きます。世界の命運が懸かっています。力ずくでも連れて行きます。」

「いいだろう。力ずくでもというのなら。そうだなジン殿、我と手合わせをして我に勝てば我が国も同行しよう」

「それがいい。うちもそうするぜ。『英雄ジン』の力、見せてもらおうじゃねえか」

「……はあ、わかりました。お相手しましょう」

思わぬ形で二人の王との手合わせが決まってしまった。

40話 英雄VS二人の王

勝負は、闘技場を使うことにした。この場に來たのはクイント皇国とヤマト国とテンプル騎士国とカルディアとシャルだけだ。残りは各々の部屋で待機している。

先にやるのは、騎士王だ。白と赤の全身甲冑に、フルアーマー両手剣だ。両手剣には、これといった装飾はない無骨な剣だが騎士王が持つのだナマクラではないだろう。ジンはテツを一刀モードで構える。

「本当に、精霊術も使っているのか？」

「ああ、構わない。というよりその言葉遣いが素かい？」

「そうだ。あれは、会議進行用だ。」

「まあいいや、そんなことは。さっさと始めよう。」

「殺し以外何でもありの単純ルールだな。クリスさん、トウカさん審判をお願いします。」

「はい」

「わかりました。」

「（テツこの戦いに切れ味は、必要ないから。初撃を受けたらすぐに二刀になって。）」

小声でテツに話しかける。

「【はい】」

「それでは、両者よろしいですか。それでは……始め！」

ジャック騎士王との試合が始まった。

一瞬で間合いを詰めた騎士王が剣を降り下ろしそれをジンが受ける。受けたところでテツが二刀に分かれる。余った一振りで騎士王に斬りつける。奇襲のこの攻撃を騎士王は難なく回避する。

「ふっふっふ、君が黒刀を二刀つかうことは『陸津波』」知ってうへぶ」

お喋りしている騎士王に、大量の水をぶつける。一応威力は押さえである。

「喋っている時は、聞くものじゃないかね。」

「ならもういいか？」

「うん？ああ来たまえ」

ジンは、水浸しの地面に手をおいて

「『流雷』」

ビリビリビリ……バタン

トウカがジャッジをくだす。

「……ジンの勝利。」

「……お父様、……はあ」

溜め息をつくクレス。

「次は、父上ですね。無様はさらさないでくださいね。（ニコッ）」

トウカさん恐っ

「お、おう」

次はヤマト国のキリガネ王との試合だな。

キリガネは侍スタイルで武器はもちろん刀だった。

「始めてください。」

キリガネがとった戦法は、高速移動と連続攻撃だった。キリガネは、高ランクの気闘と独特の歩法でジンの周囲を縦横無尽に移動して攻撃を仕掛ける。ジンは、その攻撃を二刀と風による空間把握で最小限の動きですべて防ぐ。

高速ゆえに短い時間の間に多数の攻撃をすべて防がれたキリガネの動きに隙ができる。この時キリガネが攻撃を誘っていたのかはわからない、何故ならジンは攻撃をせずにキリガネの足を思いつきり踏んづけた。そのままその足を精霊術で地中に埋め動きを封じる。

「んな」

焦るキリガネから距離をとりキリガネの周りに五つの火球を作り出す。

「こ、殺しは無しだぜ。だ、だからまだ負けじゃねえ」

悪足掻きをするキリガネに、聞こえないように風を操作して、他の者に耳を塞ぐように伝える。

気絶している騎士王以外が耳を塞いだのを確認して。

「『炎爆陣』」

キリガネは全方位から衝撃と爆音を浴びて昏倒した。

クレスがジンの勝利宣言を行う。

「ジンの勝利。」

「捕まったところで素直に負けを認めていれば、みられた試合だったのに、まったく父上は」

爆音で飛び起きた騎士王が起きて早々

「あれでは、納得できんもう一度やろう」

ふざけたことを言っている。『流雷』の後でこれだけ動けるといふことは、あの鎧に何かあるのだろうか。

「お父様、何を言っているのですか？と突きますよ。」

「まあ、いいですよ。」

「話が早い。いくぞ」

ジンは、テツを一つに纏め気を流し本気で、振るってきた両手剣に斬りつける。

カラン

両手剣がポツキリ折れ刀身が地面に落ちる。一度受けた時に不思議に思っていたが、やはりこの両手剣、ナマクラだったようだ。しかしこのナマクラで最初の攻撃のときにテツで受けた時に折れなかったことが凄い、よほど気をうまく流さないと一撃目のときに両手剣の方が折れていただろう。

「うっ、まいった。」

この言葉でこの騒動は一応の、決着がついた。
そのあと

「いやあ、噂道りの腕前だね。あれで聖痕無しか、凄まじいね。」

「まったくだ。俺の攻撃をすべて完璧に防ぐたあ大したもんだ。」

口々に褒める二人に

「よく言う。二人とも本気では、なかっただろうに」

「あれ、バレてる。」

「そりゃあジャック殿の剣なんか、ナマクラもいいところだし、キリガネ殿も剣技だけでしたし」

「「あの〜」」

二人の王の娘が、不思議なものを見るような顔で

「何故父上たちは、仲良くお話ししているのですか？」

「お父様も会議が不満で勝負を始めたと言っていますが」

「ああ、あれかあれは嘘だ」

「その通り、つまりやらせだ。」

娘二人の周り温度が急に下がった気がする。

「・・・何故そのようなことを？」

「あそこでごねたらジンと戦えると思ってな。」

「右に同じ」

「父上」「お父様」

「「ちょっとお話が」」

二人の王は物陰に連れていかれ。

「娘よ、どうしたのだ？」

「トウカどうした？」

「娘よその腕はそつちには曲がらなあああああ」

「トウカその手に持っているのは、なんぎゃーーーーー」

二人の制裁はしばらく続いた。

「ああ、テンブル騎士国は、『無得と魔物の大地』に同行する。」

「ヤマト国も同行する。」

「ジン殿申し訳ありませんでした。」

「ジン様すみません。父上がとんだ粗相を。」

「いや、気にするな。俺もそんなことだろうと思っていたから。」

「???どうしてそんなことが、わかったのですか?」

「俺の名前が出てからこの二人ずっと無言だったし、お互いを見て無言で相談していたみたいだからね」

「それだけですか?」

「ああ、だから確信があったわけじゃないよ。それはともかく今日出発するには中途半端な時間だな。出立は明日にしよう。」

「クルト他の王にも伝えておいてくれ。」

「わかった」

「それじゃあ、俺は屋敷に戻って仲間と打ち合わせをする。護衛の方は、クルトの方で頼む俺のチームは別のやつを守るからな」

「別？まあ君のことだ、きっと考えがあるのだろう。護衛の方は任せてくれ」

「じゃあクレスさん、トウカさん失礼します。」

屋敷に戻ると、ミリアが迎えてくれた。

「ご主人様、会合の方はどうなりましたか？」

「明日『無得と魔物の大地』に行くことになった。」

「それには、私たちも行つてよいのですか？」

「ああ皆で行く。あと亜人の子達も連れて行くからお前達はその護衛を頼む。」

「亜人の人たちもですか？何故ですか？『無得と魔物の大地』は決して安全なところではないですよ」

「一度目の侵攻は、人間の国だけで何とかなるが、二度目の侵攻は人間の国だけでは難しいんだ。だから亜人にも協力してもらう。そのために現実を知る亜人が必要なんだ。もちろん無理強いするつもりはない、これから頼みに行く。」

「そういうことですか。でも、ふふ、ご主人様の頼みを断ると思えませんかえ」

意味深なことを言うミリアをおいてキリとユリのところに向かう。

コンコン

「キリ、ユリいるか？」

「ご、ご主人様！？」

「ちょ、ちょっと待って」

中からドタバタ聞こえる。しばらくして、ビシッとメイド服を着たキリとユリが出てきた。

「どうされたんですか？」

「ちょっと話があるんだ。入っていいかな？」

「どうぞお入りくださいご主人様」

「どうしたの、ご主人様？」

二人に『無得と魔物の大地』に同行してほしいと理由と一緒に説明する。

「確かにちょっと危険なんだけどそこは俺たちが」

「いいよ」

「いいですよ」

「・・・そんなあつさりいいのかい？」

「ご主人様のお役に立てるなら。かまいません」

「私たちご主人様のこと大好きだし、その方が一緒にいられそうだし、問題なし」

「二人ともありがとう」

二人を抱きしめ頭を撫でる。

「「ご主人様」」

二人の甘えた声が耳元で聞こえ、頬をスリスリしてくる。小人の体は人の子供と変わらないのでお肌はすべすべでやわらかくて気持ちいい。三人でしばらく戯れた。

「もう行くのですか？」

「ほかの亜人達にも話しに行かないといけないんだ」

「我慢なさいユリ」

「キリ、ご主人様の服を放してから言おうよ」

「あう」

二人の頭をもう一度撫で

「それじゃあ行くね」

「はい」

ここ数ヶ月の仕事でたくさん奴隷が屋敷に集まっていた。屋敷にいる亜人のほとんどは、ジンが奴隷から開放した者がほとんどで皆ジンに恩を感じている者ばかりだったからだろう。他の亜人たちも快く同行を了承してくれた。

その夜ちよつとした事件が起きた。

「「ご主人様添い寝させてください」」

夕食を済ませてジンが自室に戻ると屋敷で働いているメイドたちがあられもない姿で待ち構えていた。下着姿の者もいればネグリジェ姿の者もいるさすがに全裸の者はいないが、この状況はいつたいうことなんだろう？。

「ご主人様がまた、皇都を出ると聞きましたので」

「添い寝をさせていただく約束聞いていませんか？」

「添い寝をする格好ではないと思うのだが」

「ふふ、ご主人様がお望みならばここにいる12名ご主人様にこの身をささげます。」

「ご主人様、こんな格好で来ているのです。お察しください」

「わかった。みんなベットにいこうか」

その夜12種類の喘ぎ声が、ジンの寝室から聞こえてきた。

41話 二つの馬車の中

異世界209日目

「何故こうなった」

今ジンが乗っている馬車には、アリシャ、シャルル、カルディア、クリス、トウカ、ウリアと会議に参加した女性が勢ぞろいしていた。ジンは最初、自分のチームと一緒に行動するつもりだったのだが、クルト皇が

「君の発案なんだから君はこっちでしょ」

とこっち側に連れてこられたのだ、そしていざ出発して馬車の中を見渡すと・・・女しかない。

右隣にはアリシャが、左隣にはカルディア、正面にはシャルルが座っている。シャルルの両隣にクリスとトウカが座りウリアはトウカの隣だ。

「同乗を希望した。」

「私は、ジンさんと親睦を深めたくて希望しました。」

アリシャとカルディアは嬉しいことを言ってくれる。

「君たちは？」

他の女性に視線を向けると

「お父様にジンさんは婿候補だから会ってこい、と言われてまして。」

「私も、父上に似たようなことを言われました。」

「あたしは、ジンがどれほどの器なのか見てこいって父が、まあ私は一度ジンに助けられているからそこんところはあんまり気にしていないけどね。」

黙っている聖女に視線が集まる。

聖女が顔を赤らめて否定する。

「な、なんですか。私は違いますよ。ただカリウスが他国の動きを見て。じゃあうちも一応、と押し込まれただけです。」

それは、他の娘とどこか違うのだろうか？

「そんなことよりアリシャさん、カルディアさん、ちょっとくつきすぎではないですか。」

「そんなことない。これでも控えめ」

「そうですね。隣に座っているだけですよ。」

「それで控えめって普段は、どうなってるんですか？」

もつともな発言だった。実際にジンと二人の間に隙間はなく肩には頭を乗せるという、かなりの密着度だ。他の姫も少し赤くなっている。

「見せましょうか？」

「いいです。遠慮します。」

トウカが話題を変える。

「そ、そういえばジンさんは、刀を使うのですよね？」

「ああ、一応な。」

「今度手合わせしませんか？」

「私も頼みたい。」

『剣姫』と『舞姫』から手合わせの申し出だ。

「いいよ。機会があればその時にでも」

「ねえねえ、ジンあの一角ってジンの仲間よね。あの一角って何を護衛しているの各国の代表じゃないよね？」

二度目の魔物の侵攻の時は、亜人にも手伝ってもらったことを話す。

「大侵攻ねーいまだに信じられないのよね」

「私は信じますよ。」

そこで意外な発言をしたのは聖女ウリアだった。

「何故ですか？」

「主神オシリスから、世界に危機が迫っていることは、聞いていましたから」

この世界の神様が、

「・・・なんで公表しないのよ。」

「内容がわからなかったので公表できなかったのです。内容も解決策もないのにただ危機が迫っています。などと言えません。」

「じゃあなんであの場で言わないのよ」

「あの時は判断に迷っていたのです。各国が一定の理解を示したので今お話したのです。」

「まあいいけど。でもこれでジンの言葉が裏付けがとれたね」

「この世界では神の存在が認められているんだな。俺の世界の神は、ほぼ人間に無干渉だったから神はいないことになっているのに。」

「そうなのですか？まあこの世界でも神の声が聞こえるのは、世界に一人だけで代々声を聞いた者が聖女をしています。」

「そういえば、リニヨン教国は教皇と聖女の二君主制だったね。よく成り立つね」

「教国は、内側を教皇が、外側を聖女が司っているんです。内政と外交ですね。教皇は国民に支持されてなりますが、聖女は神に選ば

れます。だから我が国には両方とも大事なんです。」

「つまり教皇の方が実権を持っているけど、それも神の後ろ盾のある聖女あってこそその物ってことか？」

「よくわかりますね。たしかにそんな感じですね。」

感心したようにウリアが頷く。

その後もジンは各国の姫たちと交友を深めていった。

その頃、ジンの仲間達が乗る馬車では、

「まったくクルト皇帝は、余計なことをしてくれそうですね」

「「ご主人様と一緒にいられると思ったのにな」」

「お兄ちゃんと一緒にがよかったな」

ソフィアが悪態を付き。キリとユリとフェリスは落ち込んでいる。キリとユリは、メイドの格好をし始めた頃から、ジンをご主人様と呼ぶようになっていた。

「申し訳ありません。父上が」

「レティーシアはいいのよ。」

「そうですね。レティーシア様も本来ならあちらに乗ってもよかつ

たはずですし。」

レティーシアが謝り、リリスとミリアが擁護する。

「今頃お兄様は姫様方のお相手をしているのでしょうかね。」

「ご主人様を盗られた」

「私は主の物なのに」

ティリエルが馬車の中を思い浮かべ、イリヤとフェリスが不満そうに頬をふくらませている。

「また、増えるのでしょうか？」

「そうだろうねえ」

「しかたないですよ、わかっていたことです。」

「この話はやめましょう。あまり良い結果には、ならないでしょうし」

「そうですね。」

リリスがここぞと話題を変える。

「それじゃあ、最近あった良いことを報告して気分を盛り上げよう
くはいますは、ソフィアさん」

「え〜！。え、えっと実はジン様とこの前川で水泳を教えてもらい

ました。」

「どんなのを教えてもらったの？」

「くろーるという泳法で、これがとても速く泳げるんです。いつか海水浴に行く約束をしました。」

「「「いいな。」」」

「そしてナイスよ、ソフィア」

「はい次、フェリス」

「この前チーズケーキをお兄ちゃんと二人っきりで食べました。」

「チーズケーキ！食べてないよ」

「お兄ちゃんとの二人だけだもん」

「くううう次、テツちゃん」

「この前体の隅々まで綺麗にしてもらいました。」

「な、なんですって」

「小太刀の姿のときに」

「「「なうんだ」」」

皆安堵していた。特にキリ、ユリ、ティリエル、フェリスの年少組

はあからさまにホッとしていた。

「次、ティリエル」

「実は今お兄様と聖痕無しで空を飛ぶ練習をしているんです。それがやっと形になってきてるんですよ。」

「・・・ご主人様は、どこまで行かれるのでしょうか？」

「そりゃあ、この世界をまるまる守れるくらいでしょ」

「ねえねえ、どうやって飛ぶの？」

「薄い木の板を使うんです。足を板に固定して板と背中風を受け取ります。」

「ジン殿は、すごいな。一度乗せてもらおうかな」

「お兄様でも当分は難しいと思いますよ。」

「「「そっか」「」」」

ジンの女達は、ジンのことで一喜一憂しながら『無得と魔物の大地』への道程を過ごした。

42話 黒い半球

異世界215日目

「『炎蛇・四首』」

四体の牛鬼を炎の蛇で燃やす。

「魔物の数が増えてきたな。」

「そうだね。どうするジン？」

リリスが隣から聞いてくる。

「俺が外で警戒する。『無得と魔物の大地』はもうすぐそこだし大丈夫だろ。」

ガサガサ

藪からブルー・コブラが出てきた。牙をかわしながらその首切り落とす。他に魔物がいないのを確認してから採取をするためブルー・コブラに近づくブルー・コブラの死骸が黒い粒子になって消滅した。

「ジンこれって」

呆然とするリリスに

「たぶん、黒い半球と関係があるんだろう。リリスしばらくこれは内緒にしておいて。意識は統一しておきたいから『無得と魔物の大

地』で実際に見せたほうがいいだろう」

「わかった。仲間にも秘密？」

「説明が難しいから、黙つとく」

「わかった。」

異世界216日目

「ここが『無得と魔物の大地』か、本当に何も無いんだな」

そこには、草一本も生えていない荒地が広がっていた。荒地は中心に向かってゆるやかな下り坂になっていて、その中心には以前見たときより大きな黒い半球がある。皇都のお城が丸々入るくらいの大きさだ。

「なんだあれは」

王の誰かが呟いた。『世界を結ぶ者達』のチームメンバー以外は皆黒い半球に驚きを隠せないようだ。ジンを信じていた、クルトやカルディアですら驚いている。

「あれが、魔物の大侵攻を証明している。」

ジンは言いながら、光球を作り出し半球に近づけるが中を照らすことはできない完全な暗闇だった。

「確かに、あれは異常だ。近くまで行っても大丈夫なのか？」

「いや危険です。おそらくすでに魔物が少数出てきている可能性があります。」

「なんだと、それは本当か？」

「それを今から確かめに行く。王の方たちは、私の後を付いて来て下さい。」

「わかった。」

ラインツ王が代表して答える

先頭をジンが少し後方にジークとカイルが続き、そのさらに後ろに護衛と各国の代表それにジンが連れてきた亜人たちが続く。

ジンが100メートルくらいまで黒い半球に近づいたときに、異変は起こった。半球の一部が、ブクブクをふくれ大きな泡のような物がいくつかできる。

「なにが始まるんだ」

「ジーク、カイル少し下がって後ろのやつらを守れ」

「了解」

ジークとカイルが後ろに下がり臨戦態勢をとった頃に

パンッ

とすべての泡が破裂して中から100近い魔物が現れる。

ハイウルフ・燃狼^{ねんろう}・コールドオオカミと狼型の魔物ばかりだ。燃狼は、体が燃えている狼型の魔物だ。コールドオオカミは、冷気を纏った狼型の魔物だ。

後ろでは、驚きの声が出るが、ブルー・コブラの件である程度予想をしていたジンは、冷静に対処する。

まずは『風刃』で魔物を切り裂く、だがあまり減った気がしない。ここには、重要人物が多いリスクは極力省くべきだろう。

「土の聖痕を発動『岩皇^{がんこう}』」

ジンは土精霊を纏い、魔物の群れを見る。

「『刺石槍^{しせきやう}』」

ガガガガガッ

魔物の群れがいる地面から石の槍が無数に突き出し魔物を串刺しにする。

石槍を逃れた魔物は、ジンが斬り殺す。漏れた魔物はジークとカイルが始末した。目算で100近い魔物が一分ほどで片付いた。

「すごいこれが聖痕持ちの力なんですか」

「父上との戦いなんて大したことなかったんですね」

「娘よ、なにもそこまで言わなくても」

「なんだあれは」

ファールランド王が指を指した先では、先程殺した魔物が黒い粒子になって消滅していつているところだった。消滅が終わった場所に魔物の痕跡は何もなく。ただ石の槍が突き出ているだけの大地が広がっていた。

ジンは各国の王の場所に行き。

「急いでこの場を離れます。あなた方も状況の理解はできたでしょう」

「ああ確かに、嫌というほどな」

『無得と魔物の大地』から出たところで、野営をすることにする。そこで今後どうするかを話すことになった。

「ヴァーテリオン帝国はジン殿の発案に同意する。兵も出そう」

他の国もそれぞれ同意する。問題はカルモンド王国だが、そこはエクス王子が約束してくれた。

「絶対に父を説得してみせます。」

「よろしくお願いします。」

「急ぎ皇都に戻り他の王達にも話を通そう。」

「時間がないな、軍の配置が難しい小競り合いをしている国が多い戦争をしている国もある」

「まずは、どの国にも武力衝突はやめさせる方針でよいですか」

「同意する」

各国の王達は王らしく今後の話をまとめていく。

「ジン殿確認したいのだが後何日あるのかな？」

「144日間です。」

「すぐに動けるのは、皇国くらいだろうあまり時間はないな」

「そこら辺は、あなた方のほうが専門でしょう。」

「確かにそうだな。ジン殿は何かないかな？」

王がジンに意見を求めたのだ、ジンは確かな手ごたえを感じた。

「一つ提案なんですが『無得と魔物の大地』の近くに拠点が必要だと思うんです。それを四つ作って攻略の要にしたい。」

「確かに物資のことや長時間の戦いを考えると拠点は必要だ。今までは、この辺りに拠点を作るとは、まったく意味がなかったがこれからは違う。改めてお願いするジン殿力を貸してほしい。」

「もちろんそのつもりだ。拠点は皇国に作ってもらいたい、いいか

「クルト皇？」

「かまわないよ。皇国はすでに準備を始めている。それぐらいの余裕はあるさ」

「頼もしいな。たださっきは144日間といったが。実際はもっと速く『無得と魔物の大地』に入って迎撃準備と魔物狩りをしたいから時間は本当にない。だから今回の拠点は一つだけでいい」

「わかった。皇都に戻ったら正式に同盟を組もう」

「リニヨン教国とファールランド王国もそれでよろしいかな？」

そう、問題はこの二つの国なのだ。この二つの国は、国境に兵が集まっており小競り合いが絶えないのだ。小国同士の戦争は、黙らせることができるが、この二つの国はそうはいかない。どうしても両国の了承が必要だ。

「仕方ないでしょう。あれを見せられては。我が国は、リニヨン教国は世界を守ることを第一に考える。ファールランド王国との一切の武力衝突は避けよう。」

「ファールランド王国も、兵を国内に引かせましょう。それが世界のためです。」

「ありがとうございます。」

なんとか両国の了承は取れた。だが和解したわけでもないので問題は以前残っている。そこでラインツ王がジンに質問した。

「ジン殿もし両国が拒否したどうするつもりだったのだ？」

「答えなければいけませんか？」

「私は、君の覚悟が知りたい。異世界から来た君がどれほどの覚悟があるのか」

「では、ラインツ王ならどうしましたか？」

「質問を返すのは感心しないな」

「これは失敬、そうですね。武力衝突はできないですから・・・
トップを入れ変えます。」

当人のカリウス教皇とヘンリー王がギョツとする。

「あれを見てまだそんなことを言う愚物なら殺します。秘密裏に」

「・・・覚悟はわかったが、あまりそういうことは言わない方が
良い。信用されなくなる」

「そうですね。それに排除は最後の最後です。それまで説得など手
は尽くすつもりですよ。」

「ジンくんあまり無理しないようにね。聞いているよ君は戦争の時、
人を殺して悲しんでいたんだろう」

「・・・この場で言うなよクルト」

「僕はね君が心配なんだよ。いつか君が潰れてしまっんじゃないか

と」

「大丈夫だ、一人でやるわけじゃない。侵攻は三度あるんだまだまだ先はある。無理をするつもりはない。」

「わかった。その言葉を信じよう」

「帰ってから忙しくなる。俺は仲間ところで休ませて貰うよ。」

そう言ってジンは話し合いの場を去った。

43話 ジンとギルド

異世界222日目

皇都に戻ってきて、最初にしたことはこれからについての会議だった。

結局皇都での会議で決まった連合軍内の分担は

クイント皇国が、まとめ役と拠点設営を、

ヴァーテリオン帝国、テンプル騎士国、ヤマト国が軍部を、

クラフト商国、カルモンド王国、ファールランド王国が財務を、

ウルティア国、リニヨン教国がそれ以外を、

ジンは、冒険者ギルドを動かすように頼まれた。

これは、国ごとにそれぞれ準備をやってしまうと9カ国で帳尻合わせが必要になる。それでは、侵攻に間に合わないので仕方なく分担したのだ。

ジンが冒険者ギルドを担当するのは、国がギルドに介入するのが難しいからだ。

冒険者は自由を重んじるため、国が介入するのを嫌うのだ。そこで立場が微妙なジンが担当することになった。

そのあと各国の代表達は、一度国に戻った。自国の状況の確認と軍の編成と人材を集めるためだ。これから設営する拠点に各国の武官、文官が集まるそれを指揮するのは、クイント皇国の役割になる。

中立の意見を聞くためにジンが呼ばれることはあったが、基本的にジンは自分のことに専念することになる。

ジンは、自分の屋敷に戻ってまず、クレアさんに会いギルドについて学ぶことにする。

「ギルドマスターさえ押さえればいいのかな？」

「大抵のことは、ギルドマスター1人でいいですが、大規模に動かすなら支部長や有力チームにも話をしたほうがいいでしょうね。」

「チームにも、ですか？」

「はい、チームランクがAランク以上に限りますが。」

「チームランク？」

「ギルドがつけるチームのランクです。ギルドカードの機能とは、関係ないのでギルド内ではしか通用しません」

「俺のチームは？」

「チームランクは、Aですね。一年たらずで、これは異例の早さですね。」

「皇国で有力なチームは、どこですか？」

「有力チームは、二チーム。ランクAの『ランスロウ騎士団』と『そつじゅうそつせん双獣の双炎』ですね。」

「その二チームと話せますか？」

「可能でしょう。ジンさんは気にしていないようですが、あなたのチームも有力チームなんですからね」

クレアは面白そうに笑って

「本当に名声に興味がないのですね」

「色々面倒だからな、名声は必要な分だけでいい」

「そうですね」

「クレアさん、頼みがあるんだが。できるだけ早くそいつらと話がしたい、なんとか出来ないか？」

「確約は出来ませんが、やってみます。」

「お願いします。」

「私も、ジンさんにはお世話になっていきますから。それでは、今からギルドに行つてきますね」

「今からですか？」

「早い方がいいですから」

もう少しで日が暮れる時間だ。

しかしできるだけ早く、と言ったのはこちらだ。ここは甘えよう。

「ありがとう、クレアさん」

異世界228日目

クレアさんのおかげでギルドマスターと二つのチームのリーダーと会えることになった。

今ジンは、彼らが待つ部屋へ向かっているところだ。クレアさんにこれから会う連中のことに聞いてみる。

「そうですね。ギルドマスターは、元冒険者で自由を大事にするお方ですね。国を嫌っているわけではないですが、口を出されるのを嫌います。チーム『ランスロウ騎士団』は騎士道を重んじる方々です。冒険者と騎士を混ぜたような方たちです。『双獣の双炎』のリーダーは、獣人の姉弟でチーム名のとおり火を扱い得意だそうです。」

「お会いしたことがあるんですか？」

「いいえ。あったことはありません。聞いたことがあるだけです。チームランクAって言うのは、本当に有名なんですよ。」

「ってことはうちも？」

「はい。超期待のチームです。つきました。どうぞごゆっくりお話を話してください」

話している間に部屋についていた。

部屋で待っていたのは、どこかの王かと思間違えそうなほどの威厳を備えたギルドマスターと騎士風の男が三人と獣人の男女だ。獣人の二人はどうやら狗族^{くそく}、犬の獣人のようだ。ギルドマスターが迎える

「ようこそ『英雄ジン』」

「どうも」

「面倒なことは省こう黒い半球のことだね」

知っているのか！各国の代表すら知らなかったのだぞ

「……………」

「私はこれでもギルドマスターだ。そしてギルドはもつとも情報が集まりやすい場所だ。これくらいは簡単だよ。ちなみにこの場にいるチームのリーダー格の者は、実物も見ている」

この世界に来てからここまで先を行かれたのは初めてだな。だが、お話は始まったばかりだがこれからが本番だ、と思っていたら

「我々ギルドは協力しない」

「なっ、なんだと!？」

「こちらの二つのチームリーダーも同意してくれた。」

「……………何故だ？」

「ギルドは国がすることに介入しない、そして国も必要以上にギルドに介入しないこれは昔から決まっていることだ」

獣人の姉が

「わたしたちは、国という組織を信用していない。クイント皇国外はまだ奴隷をつかっている。そのような国に助力するつもりはない」

騎士風の男の一人が

「冒険者とは自由なのだ、国の駒になるわけがないだろう」

「そのとおりだ、我々冒険者ギルドは冒険者の自由を守るため。国に対して助力はしないこれが我々の総意だ」

ブチッ

この瞬間ジンの中で何かが切れた。

「言いたい放題言ってくれるな、おっさんちよつと耳が早い程度で天狗かこの野郎」

ジンのあんまりな口調にこの場にいるすべての人間がギョツとする。

「自由ってのは、責任を果たした者だけが与えられるものだ。お前の言う自由はただのわがままだ」

「わ、わがままだと」

「だいたい、自由も何も世界がなくなればそんなの関係ないんだよアホが」

この時のジンは、この世界に来てから200日以上この世界のために動いていた。前の世界の快適な暮らしを捨ててだ。ジンは、奴隷の解放、元王国領のゴミ掃除とずっと働いていた。そして積み^{征伐}もりに積もったストレスが冒険者どもの妄想を聞いて一気に爆発したのだ。

「それに奴隷だあ、こっちが頑張ってグーロム潰して奴隷解放に勤^{いそ}しんでいたっていうのに自由だなんだと、ほざいているやつが、奴隷をつかっているから信用できないだあ？。ならてめえが奴隷解放しろってんだよ。」

獣人の女は少し気まずそうに顔をそらす。

「国の駒になるわけにはいかないだあ。しっかりとした意思があれば駒になてならないんだよ。駒になることを気にしている時点であんたらは、駒以下だ。」

騎士風の男は、口をポカンとあけている。

「ああゝなんか馬鹿らしくなった。世界見捨てちゃおうかなゝ」

「ジ、ジンさん正気に戻ってください。あなたにもこの世界で守りたいものがあるでしょう」

「別に俺の仲間だけなら世界ごと守る必要ねえもん」

「・・・こ、こんなジンさん初めて見ました。ってそれどころではありません。ジンさんお願いですこの世界を守ってください」

「でもさあクレアこいつら世界が滅んでも関係ないって言ったんだぜ。」

ここでジンは核心を言った。ジンからすれば呆然としている彼らの言葉は、世界が滅ぼうが知ったことではない国が勝手にやるだろ、と言っているようなものだ。ジンは、すべてを守ろうとしているつまり彼らのことも守る対象だった。その彼らが別に滅んでもいいといったのだ。ジンの怒りはもっともなものだった。

「それでもお願いします。ジンさん私を助けてください」

クレアの真摯な言葉にジンが正気に戻る。

「クレアさん・・・わかったよ。まあすでに国は巻き込んでしまっているんだし仕方ないか」

正気には戻ったが、ジンは今も蔑んだ目でギルドマスターとチームリーダーを見ている。普段向けられない侮蔑の視線に耐えられずに獣人の弟のほうか

「そ、それでも、人間の王たちが奴隷を容認している事実が変わりません」

「なら奴隷制度をなくしてやろう。それで問題ないな。じゃあ今からお前こつち側な」

「うえ、な、なくす、？奴隷制度を？」

「そうだ、俺がなくす奴隷制度なんてム力つくもん絶対なくしてや

る」

「君は国の使いではないのか？」

これが彼ら冒険者側の一番の失敗だ。

彼らはジンを国の使いとして見ていた。しかし、ジンはただ頼まれたから来たただけだ。この部屋の中で正しくジンを見ていたのはクレアだけだった。

「当たり前だボケ。ああ、真面目に話す気が失せたから、今から言うことに黙って頷けよ。あんたには大侵攻に参加してもらう。いいな？」

「な、それは……」

彼らがすぐに頷けないでいると。ジンはこの部屋の空気すべてを支配して音を消した。

そして、この部屋にいるクレア以外の人間は、今まで感じたこともない目の前に壁があるかのようなプレッシャーを部屋の入り口にいるジンから感じていた。ギルドマスターとAランクチームリーダーたちは、殺気は含まれていないそのプレッシャーに死の覚悟し、圧倒的な実力差を実感していた。

「わかったか？」

「……わかった。ギルドは協力する」

「それでいい。それじゃあほかの国のギルドにも話を通しておいてくれ、おっさんならできるだろう。もしふざけたことをしたら消すからな」

そう言っでジンは部屋をでた。これをギルドマスターチームのリーダーたちも本気だと理解できた。

こうして、ギルドとの関係は、最悪の状態から始ることになった。

「よかったですか？ ジンさん」

「あゝ実はあんまり良くないけど。アッシュに丸投げすることにした。ム力ついたから仲間と侵攻までのんびりすることにするよ。」

「それがいいと思います。ジンさんにも休日が必要です。」

「意外だな。幻滅するかと思ってた」

「前からお体が心配になるほど頑張っておいででしたから」

「そうだったかな？。」

「はい、ギルドの方は、任せてください。」

「それでは、お言葉に甘えます」

クレアはもう一度、部屋の中へ。ジンは屋敷へと戻った。

44話 婚約と和解

異世界229日目

アッシュに、ギルドとの連携を頼んだ（押し付けた）後、城内を歩いていると、アリシャに見つかった。前から思っているのだが、もしかして待ち伏せされてるのだろうか。

「ジン、一緒にお昼食べよ。」

「いいよ」

挨拶などをすつとばしたアリシャの申し出をジンも快く承諾する。

アリシャの部屋で食べることになり、アリシャの部屋に向かう。

その途中で見覚えのない禿頭の男とすれ違った。その禿頭の男に何故か憎しみと殺意のこもった視線を向けられた。

部屋に着いてからアリシャに聞くと

「ジン、それはちょっとひどい。あれはラウル」

「ラウル？ああ、あの身の程知らずか、髪切ったんだな。」

「・・・ジンが髪の毛を燃やしたんだよ」

さすがにアリシャもラウルを哀れに思うが、よく考えたらあんなのどうでもいいので、これからやることに気持ちを切り替える。

「ジン指輪は、つけてる？」

「もちろん」

「ありがとう。実は今日は私の誕生日」

「えっ、ごめん知らなかった。」

「気にしない。ただお願いがある。」

「なんだい、今なら大抵のお願いは聞くよ。」

「椅子に座って、私の手を握って目を閉じて欲しい。」

「わかった。」

アリシャに対する申し訳なさのため、ジンは奇妙なお願いをあつさり聞いた。

椅子に座り目を閉じた。

そのまま十秒ほど待つと指輪が熱くなってきたと思ったら膝にアリシャの掌を感じた。

チュッ

驚いて目を開くとアリシャの唇がジンの口に触れていた。

普段無表情のアリシャが嬉しそうに笑顔を見せる頬は少し赤い。

「契約完了」

「契約？」

「うん、婚約」

「こ、婚約？・・・何故こんなやり方を？」

「私は公務でジンの傍にいられないから。ジンは、契約の破棄ができるんだよね。もし嫌なら破棄して、嫌じゃなければ・・・キスして」

チュツ

アリシャを抱きしめてこちらからキスをする。

「嬉しい」

アリシャは、静かに喜びを言葉にする。

「ジン、一つやりたいことがある。」

「なんだ？」

「ギルドに連れてって」

今のジンには何気にハードルが高い。しかし今日はアリシャの誕生日ということなので。連れていくことにする。

「わかった。一度屋敷に寄るけどいい？」

一応テツを連れていくためだ。

「かまわない」

「それじゃあ、行こうか」

屋敷に戻ると

「お帰り、ご主人様」

「お帰りなさい、ご主人様」

キリとユリが出迎えてくれる。

「そちらの方は？」

「彼女はアリシャ、この国の第一皇女だよ。」

「こ、皇女様、は、はじめまして」

「第一皇女？にしては小さいね」

「キリ失礼だよ」

「わたしエルフのクォーター、何故か成長が遅い」

「なんだか私たちみたいですね。私は小人族なんですよ。」

「おかげでご主人様に子ども扱いされがちなんだよねえ」

「親近感がわく」

「私たちいい友達になれそうですね。」

三人娘はすぐに仲良しになってしまった。

それにしても知らず知らずの内に子供扱いしていたのか、これからは気を付けよう。

「ご主人様お願いがあるの、私たちギルド登録がしたいの」「したいんです。」

「・・・なぜだ？俺はストルに無事に村に帰すと約束している。あまり気が進まないんだが」

「その、ただご主人様と一緒にいたくて」「ダメ？」

「うん」

「別にいいと思う。屋敷に閉じ込めるのはどうかと思う」

アリシャがキリとユリを擁護した。

確かにアリシャが言うことも、もっともだここは二人の意思を尊重しよう。

「わかった。ただ当分は外に出るときはランクA以上の人と一緒に」

「はい」

その後テツを探してからギルドに向かう。

ジンがギルドに入るとそこに静寂が生まれた。

酒を飲んでた男たちが近づいてきた。一目で酔っているのがわかるほど顔が赤い。

「てめえか、俺たちの自由を奪おうとしている英雄様ってのは」

「さあな」

男の一人がジンの肩を掴む

「しらはつくれんじゃねえぞ、調べはついてんだよ」

「なら最初から聞くな、面倒なやつだな。俺は今ギルドのことで機嫌が悪い文句があるやつは全員かかって来い。」

「上等だ。全員で袋叩きにしてやる。」

ギルド内の人間のほとんどがその場に立ち上がった。

ジンは冒険者たちを見渡し

「ギルドマスターに言った言葉をそのまま送ってやる。自由ってのは、責任を果たした者だけが与えられるものだ。お前の言う自由はただのわがままなんだよ」

男たちが一斉に飛び掛ってくる。

「『竜巻』」

ジンとキリ達を囲むように竜巻が発生した。近くの者は宙に巻き上げられ、離れている者は吹き飛ばされて壁に叩きつけられる。竜巻が消えると巻き上げられていた、男達は平衡感覚がなく受身も取れずに地面に叩きつけられた。

ジンは悶えている男を踏みながら受付に進み

「登録がしたいんだけど」

「ひっ……えと、その」

すごい怯えようだな。少し傷つく

「あー、女の子には手荒なことはしないから」

「は、はい、すみません。どうぞこちらに」

三人の登録は滞りなく終わった。

名前 アリシャ 種族 人間 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 皇女 エルフのクォーター ジンの婚約者

アリシャは、何故か満足気だ。

名前 キリ 種族 小人族 性別 女

ギルドランク G

能力ランク 総合E 気力C 魔力F

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの娘

名前 ユリ 種族 小人族 性別 女

ギルドランク G

能力ランク 総合E 気力C 魔力F

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの娘

「私達ご主人様の子供じゃない（です）よ！？」

キリとユリが叫んでいる。それにしても本当に子ども扱いしていたんだな。

「ジン殿」

キリとユリを見て和んでいるところに不愉快な声が聞こえた。

「・・・なんだ？」

無視しようかと思ったが、アリシャ達の前だから返事だけはした。

「この前は申し訳なかった。」

顔を向けるとそこには頭を下げる『ランスロウ騎士団』のリーダー

格の三人がいた。

「でっ」

我ながら扱いが酷い。

「私のチームは元グーロム王国の騎士だった者達ばかりです。」

突然の身の上話だ、これには面食らう

「我々は、国のやり方についていけず国を捨てました。自分たちは正しい道を選んだと昨日まで思っておりました。」

チームリーダーは、決意を込めた顔をこちらに向け

「しかし、それは間違いでした。我々は、国民を見捨ててただ逃げただけだと、ジン殿の言葉で気づきました。ですから、我々は国民を救ってくれたジン殿の力になりたいのです。お願いします。我々に世界を守るための戦場をお与えください。」

大人三人が頭を下げてきた。彼ら騎士にとって頭を下げることはそう軽いことではない。ジンは彼ら認めることにした。

「・・・わかったよ。この前のことは、水に流す。ただ今の責任者はアッシュ皇子だ。まあ、口利きぐらいはしよう」

「ありがとうございます。」

また頭を下げるチームリーダー

「それは止める。あんたの方が年上なんだからな」

「そうだな、わかった。ところでジン殿、友好の証にギルドカードを見せあわないか」

「まあいいが」

「それでは、我々から」

名前 カロルド 種族 人間 性別 男

ギルドランク S

能力ランク 総合S 気力S 魔力S

チーム 『ランスロウ騎士団』

称号 特一級騎士 剛槍 超越者 到達者

名前 アーマイン 種族 人間 性別 男

ギルドランク A

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム 『ランスロウ騎士団』

称号 一級騎士 到達者

名前 ヤッシュ 種族 人間 性別 男

ギルドランク A

能力ランク 総合A 気力A 魔力A

チーム 『ランスロウ騎士団』

称号 一級騎士

「剛槍？」

「あれ知らないかい。Sランクになったら。ユニークな称号がつき易いんだよ。」

「そうだったのか、それじゃあ俺のだな」

名前 ジン 種族 人間 性別 男

ギルドランク A

能力ランク 総合S 気力SS 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 英雄 11人の女に愛される男 奴隷の解放者 精霊術師 準貴族 超越者

「き、気力がSSだって。君もSランクじゃないか。」

まあ驚くわな。

「そんなに驚くなよ。」

「ユニークな称号が多いですね。」

「これに、さらに精霊術があるとは」

ヤッシュとアーマインも驚いているようだ。

「なあアリシャ、『準貴族』ってもしかして」

「皇族との婚約の副産物だと思う」

「もしかして結婚したら皇族？」

「もちろん」

王侯貴族か、なんだかドロドロしたイメージしかないぞ。

「まあいいか、じゃあな『剛槍のカロルド』俺は屋敷に戻るよ。三日後ぐらいに城に行ってくれ、話は通しておくから」

「わかったよ『英雄ジン』」

45話 からあげ

異世界242日目

「お兄ちゃん、何か食べたいものはないですか？」

フェリスが、膝の上から尋ねてきた。

「そうだな、からあげってわかる？」

フェリスは首を左右に振って

「わかりません。どんなのですか？」

「えっと確か鶏肉に下味をつけて小麦粉を薄くまぶして油で揚げたものかな？」

「お兄ちゃん一緒に作りましょう」

「いいよ。でも急にどうしたんだ？」

「その、甘えるなら今かな」と

お料理が甘えることになるところがフェリスらしいな。

「それじゃあ、お買い物に行こうか」

「はい」

元気のいい返事が返ってきた。

今ジンとフェリスは、以前ハンバーグを作ったときに来た肉屋に來ている。

「いらっしやい、この前はすみやせん」

「別にいいよ、なあフェリス」

「はい。あの後いっぱいお兄ちゃんに優しくしてもらいました。」

「今日は鳥肉を買いに來たんだが、何か良いのはあるか？」

久しぶりの前の世界の料理の再現だ、良い物で作りたいと思ったのだが

「鳥肉かい、融通してやりたいんだが、本当に今は良いのがなくてなあ。すまん」

「何かあったのか？」

「いやね、お国がどうも買い占めているらしくてなあ。ただでさえ鳥肉の類は、他の肉に比べて供給が少ないんだよ。獲物が空を飛ぶからな。」

「そうか、ちなみにここら辺で一番いい鳥型の魔物はどこにいるか知っているか？」

「それならノーバル山のフリールバードだな。」

ノーバル山には、一度行った事がある。ティリエルの父が住んでいる山だ。アルベルトにも会いたかったからちよいどいい。

「よし、フェリス、ノーバル山に行こう。」

異世界244日目

「お兄ちゃん、すごい行動力です。」

「いいじゃないか、どうせ暇だったし。」

ジン達は、ノーバル山にやって来ていた。メンバーは、ジンとフェリスとティリエルとテツのだけだ。これは、移動に空を飛ぶためティリエルに乗れる定員がフェリス一人だけだったからだ。

「お兄様、お父様に会っていくのですか？」

「帰りにな、これからの事とか色々話したいからな」

「主、そろそろフリールバードの生息地だから、刀になっとくね」

頭上から声が聞こえてきた肩車をしてやっていたのだ。

「ああ頼む」

そついうと小太刀が前に落ちてきた。それをつかみ腰に挿す。それ

と同時に、風による探知を拡げる。

「見つけた」

「何処ですか？」

「あっち」

指を指して方向を教える。

「やってみる？」

「やります！」

返事と共にティリエルが銀龍に姿を変え宙を舞う。

以前乗せてもらった頃に比べ姿を変える時間が短くなった。それに空を飛ぶ姿は軽やかで優雅だ。

ティリエルは、ここ数ヶ月の特訓で、自分にしかない飛行能力に磨きをかけた。

速度、体力共にかなりの上達だ。

現にティリエルは、素早くフリールバードを捕捉してすでに戦闘に入っている。

フリールバードは、風を操る怪鳥だ。大きさは今のティリエルとあまり変わらない。

ティリエルは、フリールバードのカマイタチや嘴を回避して背後を取る翼を掴む。そのまま降下してフリールバードを地面に叩き付ける。そこを、フェリスが

「魔の風よ、鋭利な刃となりて、我が敵を切断せよ『ウインド・カッター』」

風の刃で首だけ綺麗に切り落とす。フェリスは精度と威力そして多様性を目指した。

得意分野とはいえ、Bクラスの魔物に危なげなく勝利した。ジンは年少組の成長に、胸が熱くなった。

しかし、感動に浸るのはここまでだった。こっちに、フリールバードの群れが接近していた。

ジンは背中のボードを地面に下ろす。

ボードは、テツに合わせて黒を基本としたカラーリングだ。これには、『浮遊』と『障壁』の魔法がかかっている。魔力を通すことで宙に浮くことができる。さらに風の精霊術を合わせて空を飛ぶのだ。

「ティリエル、フェリス数が多いから後は俺がやる。」

「はい」

この飛び方は、浮遊に精霊術を使用しないので空にいる時も精霊術が使えるのが利点だ。

そこからは、ジンの高空戦の訓練の時間になった。空を舞いながら炎を雷を放ってフリールバードを打ち落とす。戦闘が終わる頃ジンの高空戦はある程度形になっていた。

地に落ちたフリールバードはフェリスとティリエルが『採取』で鳥肉を手に入れていた。

ちなみにこのボード、ただの木の板に魔法を刻むことがほとんど無いため、特注になってしまい、五万ギルもした。

百万　―　五万〃九十五万ギル

「お兄ちゃん大漁ですね。これだけあればいろいろ試せますね。」

「そうだな。数ができたらアッシュに持って行ってやるか、ギルドのこと押し付けてしまったからな」

その後、アルベルトに会ってから皇都に戻った。

このとき、アルベルトと一悶着あって少々地形が変わったがそれは余談だ。

異世界247日目

フェリスの唐揚げは絶品でした。

今は城のアッシュに、お裾分けに来ていた。

フェリスとアリシャ（城門で待ち構えていた）を連れてアッシュの部屋に向かう。

「アリシャよく来るのがわかったな」

「婚約指輪の力。居場所がわかる」

そんな隠し機能が

「どうやるんだ？」

頬を染めて

「ひ、秘密」

すげえ気になる。

アッシュの部屋に着いた。

「アッシュ差し入れだ。唐揚げっていう俺の世界の食べ物なんだが」

「ジン久しぶり、ありがたく頂くよ。」

アッシュの部屋には、書類の山ができていた。

「大変そうだな？」

「・・・いや、ジンがギルドの件、丸投げして僕の仕事増やしたんじゃないか」

呆れ顔のアッシュと面白そうに笑うジン。二人の間には確かな絆が見えた。

「そうだけどさあ、俺があいつらと打ち合わせしたらその内、殺しちゃうかもしれないぜ」

「何があつたか知らないけど、それは困る」

「だろ、それじゃあ邪魔しちゃう悪いしお暇するは。差し入れここに置いていくな」

「ああ、また来てくれ」

部屋を出るとカルモンド王国の王と王子がこちらに歩いて来た。

「やあ、グスター王にエクス王子お久しぶりです。」

「会議で決まった役割を放棄したようだな。」

「いろいろあったんだよ」

忌々しそうにこちらを見ているグスター王がフェリスを見て

「うん？その娘は？」

「フェリスのことか？」

「フェリス？・・・いやなんでもない」

「そうか、じゃあな」

ようもないのでその場を後にする。

「あの娘、グーロム王国の」

「父上どうしましたか？」

「いいや少し面白いものを見つけたのだ」

グスター王の視線は、元グーロム王国王女のフェリスを見ていた。

「気づかれたな。」

「何が？」

「フェリスの正体に」

「えっ、もしかしてさっきの王様にですか」

「ああ」

フェリスが顔面蒼白で目に涙を浮かべている。

「わたし、どうしたら。お兄ちゃんに迷惑が」

「大丈夫だよ。俺が何とかするから。それに実はそんなに問題でもないしね」

「ぐす、そうなんですか？」

「ああ、だから泣かないで」

「はい、お兄ちゃんを信じます。」

「よし、それじゃあ屋敷の戻ろう。」

早めに解決してやらないとな、と思いながら帰路につく。

46話 世界防衛会議：二回目

異世界260日目

魔物の大侵攻までちょうど100日間になった日に、各国が集まったの『世界防衛会議』の二回目が開かれることになった。

今回の主催はまとめ役に決まったクイント皇国だ。もちろん以前の主催者のジンも参加することになった。

ジンはこの会議に、レティーシアとフェリスを同行させている。

今回の会議では、確認が主なものになった

「軍は東西南北に分けました。」

今回の進行役は、連合のまとめ役になったクイント皇国のアッシュ皇子がやっている。

「これが内訳になります。ここでは小国の兵を連合兵とさせて頂きます。」

東方軍は、クイント皇国10万とウルティア国3万、連合兵2万の15万

西方軍は、ヴァーテリオン帝国8万とクラフト商国5万、連合兵2万の15万

南方軍は、リニヨン教国6万とテンブル騎士国6万、連合兵3万の15万

北方軍は、ファールランド王国5万とヤマト国5万とかカルモンド王国5万の15万

「この合計60万の兵が、主力になります。さらに遊撃部隊として冒険者と連合兵の混合で5万を用意しています。さらに独立部隊として1万を用意しています。」

全部で66万の軍隊が、やっとこれだけの力を集めることができた。

「軍の責任者は、東方軍をクイント皇国が、西方軍をヴァーテリオン帝国が、南方軍をテンプル騎士国が、北方軍をヤマト国が、担当します。そして遊撃部隊をラシード將軍にお願いします。独立部隊は、ジン殿にお願いします。」

「ちよつと待った。」

このタイミングでグスター王が待ったをかけた。

「ジン殿に独立部隊を任せるのは反対です。」

「何故ですか？グスター王もジン殿の実績はご存知でしょう」

他の王たちも怪訝な顔をグスター王に向ける。グスター王はそれらの視線を無視して。

「ジン殿は、一度会議で決まった役割を放棄している。そんな者に1万の部隊を任せていいとは思えん。」

周りの王からも

「確かに少々無責任な気がしますな」

「それにジン殿はあくまで平民ですし」

「何か役職についているわけでもないしのう」

等と、次々にジンに対する不満の声が出てきた。今不満を口にして
いるのは小国の王達だ。彼らは小国とはいえ一国の王たちだ、冒険
者にあれこれ言われるのに、抵抗があつたのだらう。今までは、大
国がこれといってジンに対して何も言わなかつたので黙っていたが、
カルモンド王国がジンを非難したことで小国の不満が表に出てきた
のだ。

「それに実績といつても皇国内のことで、我々にとって利益ある行
動を取つたわけではありません。」

「確かにそうですな」

「今のところジン殿には兵を出せと言われたただけだな」

「ジン殿は何を考えているかわからないところがありますね」

「しかし、ジン殿はグーロム王国の蛮行を阻止した実績がある。こ
れはあなたの方々にとつても意味のあることだつたはずです。」

アッシュがジンを擁護する。

グーロム王国の奴隷推奨の犠牲になつていたのは、そのほとんどが
小国だつた。グーロム王国は小国をいくつも食らつて大国になつた
のだ。小国の王達は、グーロム王国に怯えていたのは確かで、ジン
がグーロム王国を潰した時には感謝していたのだ。

「それは確かにそうですが。」

「グーロム王国を、潰したことは感謝しているが」

小国の勢いは治まつたが、グスター王はこれを待っていたと言わん

ばかりに

「確かにジン殿はグーロムを滅ぼした実績がある。」

グスター王はそこで終わらず。

「だが、ジン殿はグーロム王国の王族、ミリー王女を匿っているようですな」

「ほ、本当ですか？ジン殿」

これにはカルディアをはじめとした大国の代表も驚いている。

「・・・」

ジンが黙っているとグスター王が続ける

「異世界から来たジン殿は知らないかもしれないが、国が滅んだときその国の王族は全員が斬首なのだよ。つまりミリー王女は本来なら生きてはいけけないのだよ。それに、グーロム王国に酷い目に合わされた人は多い、王女の生存を彼らは認めないだろう。それを君は匿っているこれは重大な裏切りだ」

「それは本当ですか？ジン殿」

「それは、あんまりではないですか」

ジンにとってそれらは理解ができない感覚だ。何故親がやった責任を子どもが取らされるのか理解できない。それがこの世界の王族の責任の一つだとしても、それは歪んでいると思う。

「そして、そこにいるのが、グーロム王国の王族の一人ミリー王女だ」

グスター王がジンの隣にいるフェリス指差して宣言する。フェリスの顔色が悪くなっていく。

周りの王たち、これには言葉を無くした。それもそうだこんな場所に本人を連れてきているとは誰も思わない。

「・・・・・・・・」

「何か言ったらどうなんだ？ジン殿」

「ああ、終わりましたか」

「貴様ふざけるのも大概にしるよ」

おお、ジン殿から貴様に戻ったよ。これだけで余裕がなくなるのか、やっぱり小物だな。大体俺をここから排除してこれからどうするつもりなんだか。そこは一度忘れて相手をするにすることにする。

「私としては、どうして親がやったことを子どもが責任を問われるのかわからないんですよえ」

「それが王族というものだ、自らの命で物事を終わりに導くのも王族の務めだ」

「年端もいかない。何か罪を犯したわけでもない者を殺すことが正しいと？」

「そついうものだ。」

「この場に、フェリスのことを知っていた人はいるのですか？」

誰からも返事はない。ようするに知らなかったのだろう。

「それなら問題ないでしょう。そのまま知らないものとしてすごせばいい」

「そんなことが認められるわけがないだろう」

「別に認めてもらう必要は感じませんね。」

「ふん貴様ならそう言うだろうな。だから、私は貴様ではなく別の者に独立部隊を任せるべきだ、と言っているのだよ。」

これに多数の賛成あった。そこでジンが

「ああ、盛り上がっているところ悪いんだが、あなた方は勘違いしている」

「・・・何をだね」

「フェリスはグーロム王国とは無関係だ」

「な、なにを言っている。どういう意味だ？」

「フェリスは王女ではないということだ」

「ふざけるな！私はグーロム王自身から娘だと紹介されたのだぞ、それを」

「騙されたんじゃないか。この子はただの村娘だよ。村を焼かれ城に監禁されていたのを助けたんだ」

「な、何のためにそんなことで嘘を」

「さあ？、エクス王子と結婚させるためとか、王族の肩書きはいろいろ使えるんだろ」

「何を証拠にそんなことを」

「じゃあ聞くがあなたは何か証拠を持っているのか？」

「だから私は直に聞いたと」

「それは証拠には、ならないでしょう。（馬鹿かこいつは）なににより何故他の王の方々はフェリスの存在を知らないのですか？」

「そ、それは」

「その時点でフェリスが王女である可能性は限りなく低いと思うのですが。フェリスは、ただの料理好きの村娘ですよ。今度振る舞いしましょうか？」

「確かに私もグーロム王に子どもがいるなど聞いたことがありませんな」

クルト皇帝の言葉を皮切りに

「確かに王女というのは不自然ですな」

「決め付けるのは早計でしょう」

「料理が得意な王女とは聞いたことがありますな」

「お兄ちゃん」

フェリスがジンの首に抱きつく。

そのフェリスを見てクルト皇帝が、

「そんなに小さな女の子を答えが出ない話で不安させることもないでしょう。独立部隊は、ジン殿に任せるということで」

「し、しかし」

グスター王が食い下がるが

「元々この1万は、グーロム王国の戦闘奴隷を中心とした者たちで、皆ジンの元で戦うことを望んでいる者たちだ。ジン殿の下で戦わねばいけないでしょう。」

「・・・わかった。好きにしろ」

もう無理だと理解したのだろう、グスター王は自分の席に座った。

この会議では、グスター王に恥をかかせる事になってしまったが、別にいいだろう。正直グスター王は、何かと突っかかってくるから邪魔なのだ。適当な時にエクス王子と入れ替えたほうがよさそうだな。

その後は、細かい指揮系統を決めた。正直知らん名前ばかりなので省く。

これ以降は、何事もなく二回目の『世界防衛会議』は終わった。

47話 ティリエルの誕生日

異世界288日目

今日はティリエルの誕生日だ。

「ティリエル、入っていいか？」

「どうぞ」

ジンはティリエルの部屋に来ていた。

「お兄様、お待ちしていました。」

部屋には、しっかりめかし込んだティリエルが待っていた。今日はティリエルとデートの約束をしているのだ。

部屋に入るとティリエルが近づいてきて、抱きついてくる

「今日はお兄様を独り占めしていいんですね。」

「ああ、そうだぞ」

「えへへ」

早くもティリエルの頬が緩んでいる。

「行こうか、俺たちにだけできるデートに」

背中にあるボード改め『シュバルツ黒飛板』に目を向ける。

屋敷の庭から空に飛び立つ

「ティリエル競争するか？」

「はい、負けませんよ」

ティリエルと競争したり、のんびり漂ったり、空中戦について話したりと時間を過ごす。競争の結果は、速度は引き分け、機動力はジンが勝ち、持久力はティリエルが勝った。

青空をティリエルと満喫してから皇都に戻る。

「楽しかったです。次はどうしますか？」

「行きたいところがあるんだ、付き合ってくれないか？」

「どこにですか？」

「装飾品店」

「これはこれはジンさん。ようこそお越しくださいました。ご注文の品はできていますよ。」

店主がジンを出迎える。

ここは、以前テツの首飾りを買ったところだ。その後も屋敷のメイ

ド達にプレゼントを買ったりとすっかり常連になった。誕生日を聞いてから、プレゼントを特注で作ってもらっていたのだ。

「見せてくれ」

店主が持ってきたのは、銀で作られた腕輪が二つあった。その腕輪には、複雑な文様が描かれており一箇所だけ窪みがある。ジンは、そこに竜宝珠を取り付ける。

「お、お兄様、竜宝珠を、使ってもよいのですか？」

慌てるティリエルに

「こちらの品は、魔具を取り扱う方にも協力してもらって作った物でして。竜宝珠をつけることで完成するものでして。身につけた者の魔力、気力の底上げ。腕輪同士の通話。常時展開の障壁などの機能が付いております。」

「名前は？」

「『しろがねのりゅうりん 白銀の龍輪』と言います。」

「これを私に？」

「ああ、俺とお揃いだ。」

自分の腕につける、そして銀の腕輪を見せながらティリエルの頭をなでる。

「こういうときは、キスとかの方が良いです。」

嬉しそうに頬を緩めながらそんなことを言うティリエル。

「それは家に帰ってからな。」

『白銀の龍輪』しろがねのりゅうりんをティリエルの腕につけてあげる。右腕には、『絆の腕輪』。左腕には、『白銀の龍輪』が輝いていた。

「ありがとうございます。お兄様、一生大事にします。」

日が落ちてきたので屋敷に戻ってティリエルと二人で夕食を取ることにする。

夕食が終わり夜が近づくにつれティリエルが挙動不審になっていた。

どうやら、夜のことを考えて緊張しているようだ。

「ティリエル」

「ひゃい」

重症だな。変な声で返事をしてしまい恥ずかしそうにしているティリエルに

「怖い？」

「えっ」

「これからやることが」

「怖くはないです。ただ、私はやっぱり他の方より子どもっぽいのでお兄様をがっかりさせてしまうのではないかと、不安で。それに私は、龍だから成長が遅いから。」

ティリエルは、龍の寿命の長さを気にしていたようだ。

「大丈夫だよ。俺はティリエルのこと大好きだから」

「お兄様、私も大好きです。愛しています。」

「ありがとう。それにね、皆にはまだしっかりと話していないんだけど、俺は人間でありながら、長命なんだ。」

「それって、もしかして」

「ああ、俺と同じ時間を生きられるのは、今の仲間の中では、テツとティリエルだけなんだ。」

この世界のエルフの寿命は400年ほどだからイリヤでも難しい。力をつければ少しは違っだろうが、今はまだ無理だ。

「どうして長命に？」

「この世界で能力ランクが上がれば寿命が延びるのは知ってる？」

「はい、知っています。龍でも力がある者だけが古龍へとなりますから」

「俺はすでに能力ランクがSだし。さらに精霊界で生活したことで体が変化して精霊にすこし近い存在になっているらしい。この二つが重なって長命になったんだ。今のままでも700年は生きられそうなんだ。だから小さいとかあんまり気にしないでくれ。俺にとってティリエルは救いなんだ。」

「はい、一生お傍にいますよ。『お兄様』」

あの後、ティリエルは「お、お風呂に行ってきます」と残して部屋を出ていった。

ジンはティリエルとの会話で再確認した。このままだと、今の仲間達といつか別れることになる。

だが、この世界を守るためには、力がある。力を手にすれば寿命が延びる。寿命が延びれば一人になる。

人との別れなんて当たり前のことなにな、俺は強欲になったようだな

「暇なときに、長寿の方法でも探してみるか」

ジンは、この世界を見て不死は無理でも不老長寿の可能性はあるのではとこのごろ考えていたのだ。

「まあそれも、魔物の大侵攻を終わらせてからかな」

まあ、適当なときに探してみるさ。

その夜

ティリエルが寝巻き姿で、ジンの寝室を訪れていた。

「お兄様、いますか？」

「いるよ。おいで」

「お、お邪魔します。」

「そんなに硬くならないで」

「やさしくしてくださいね」

ジンはベットに腰掛け、ティリエルを膝の上に乗せる。

「もちろん、ティリエルとは数百年の付き合いになるからね。しっかり時間をかけて開発してあげよう」

「うう、みなさんの言ったとおりです。」

「なんて言ってたの？」

「夜のお兄様は、ちょっと意地悪だと」

「たしかに、そうかもな」

そういいながら、寝巻子を脱がす。

「お兄様、展開が早いです。その、キスから」

「わかった。」

ちよつと意地悪をした。ディープキスを十分ぐらい休み無しで続けた。終わった頃にはティリエルはトロトロになっていた。

「愛してる」

「ふあい、お兄様」

その日は、ティリエルにとって色々な意味で忘れられない誕生日になった。

48話 第1回 世界防衛戦：戦前

異世界350日目

大侵攻の日まで10日となった日、ジンは『無得と魔物の大地』に立っていた。

そこには、すでにながりの魔物が発生していた。ジンたち、先行部隊は来るべき時のために魔物の駆逐を行っていた。殺すと黒い粒子になって消滅するので後始末は必要ないのは楽だ。来ているのはジンの独立部隊の内の5000人だ。

「本隊が来るまで後三日だったか？」

「はい、三日後になります。」

ジンの問いにミリアが答える。

「今日中に片付きそうだな、どうしょつか？」

「ゆっくり待ちましょう。そして楽しいことをしましょう。」

「まあそうするか」

何事もなく終わればいいんだがな。

異世界353日目

昼前には主力が到着し始めた。

「ジンお疲れ」

アッシュがジンに近づいてくる。

「二日前からのんびりしていたがな」

「それでも警戒はしていたんだろ。あとは、僕たちが引き継ぐよ。」

「ああ、任せる。」

その後は、忙しかった。兵隊が次々と到着してそれを配置につかせたり、人員、装備の確認する。さらに堀を作ったり防御柵を作ったりと大忙しだった。ジン達にはあまり関係がなかったが。

異世界360日目

魔物の大侵攻から二時間ほど前にはすべての軍が配置についた。黒い半球の東西南北を扇型に展開した軍勢が囲み、黒い半球との間には、深い堀が二重に掘られている。その次には防御柵が立てられている。

できるだけの準備はした、力も付けた、あらゆる力を集めた。あとは結果を出すだけだ。

取った戦法は、堀の外から魔術部隊が魔術で殲滅して他はそれを援護する、そして軍を三万ずつにわけ3時間前後で入れ替える、というものだ。3時間の戦闘の後に12時間の休憩できることになるつまり半日もあるのだ。遊撃部隊は、南西と北東に配置して、不利になった戦場に投入される予定だ。

戦場が広すぎ、すべてを見通せる者がいないため総指揮官はおらず
東西南北ごとに指揮官を置いている。

東方軍はクイント皇国のクルト皇帝が

西方軍はヴァーテリオン帝国のラインツ王が

南方軍はテンブル騎士国のジャック騎士王が

北方軍はヤマト国のキリガネ王が

戦争に慣れている王が、指揮官になった。

「そつえば連絡は、どうやるんだ？」

全軍を見渡しながらアッシュに尋ねる、すると呆れた表情のアッシュが

「・・・ジンのところにも配給してるんだけど」

「何をだ？」

「これだよ」

といって出してきたのは、数字の書かれた腕輪だった。書かれている数字は3桁でこれには332と書かれている。

「これはね腕輪ごとに番号があつて、登録している番号の腕輪と通話ができるんだよ。」

まるでケータイだな。

「便利なものがあるんだな。」

「あらかじめ登録したもの同士しか通信できないけどね」

「高いのか？」

「そりゃあもう、世界に千個しかないんだからね、一個3百万ギルはするよ。だから大事に使ってね」

「わかったよ。」

最後の会議が開かれた。

「いまさら話すことなどあるのか？」

キリガネが疑問を口にする。

「これといつてないな。ただ、これだけは伝えておこうと思ってな、・・・前回も話したが侵攻はこれが最後じゃない、だからできるだけ兵を死なせないように戦ってくれ。これは相手を潰して終わりの戦いではないんだからな」

「難しいことを言うなジン殿は」

他の王が苦笑する。戦う以上被害は出るのだ。

その時ジンの腕輪が淡く光りだした。それもそうだとジンも苦笑する。

「なんだ、通信？」

ジンは不思議そうに周りを見る、本来通信できる人間は皆ここに集まっている。ジンは不可解ながらも無視もできず通話に出る。

「誰だ？」

「【英雄ジンだな。】」

会議の途中なのだが、腕輪はそんなことお構いなしに続け、会議をぶち壊す発言をした。

「【お前の屋敷の人間を数人預かっている。人質の命が惜しければお前は、戦闘には参加するな】」

「な、なにを言っている。俺を戦線から外すことに何の意味がある？」

「【お前に活躍されては困る者がいるのだよ】」

「わかっているのか、世界が滅ぶんだぞ」

「【私の知ったことではない、イエスかノーかだけを答えろ】」

「・・・わかった。戦闘には、参加しないこれでいいか？」

「【それで結構。もし参加すれば女は犯した後で殺す。せいぜい静かにしておくんだな】」

それで通話は切れた。

「ジンさんどうするのですか？」

トウカが聞いてくる。

ジンはこちらに

「ちょっと待つて。クルト、皇都に確認を取ってくれないか？」

「わかった」

しばらくして

「ジン君残念だが君の屋敷が何者かに襲撃されたらしい。タッド師団長が、懸命に搜索している。だから」

「俺は一度皇都に戻る」

「ジン君それはいけない。これは君が始めたことだろう」

「貴様、またしても役割を放棄するつもりか！」

「ジン殿、考え直せ数人の命と世界そのものどちらを取るか、など明白だろう」

王たちが口々にジンを止めるが、

「確かにこの戦いは俺が始めたものだが元々この戦いはこの世界のものだ。そしてこの世界が俺の大事なものと引き換えにしか守れないのなら。そんな世界を俺は守るつもりはない。」

このジンの世界を見捨てる宣言にクイント皇国の人間は戸惑った。ジンが見捨てるといったこの世界には万単位でジンが救った人々がいることを知っているからだ。しかし、他の王はそうもいかない。

今まで肯定的だった大国の王たちがジンに非難の声を投げかける

ヘンリー王が

「ジン殿、ふざけるなよ無責任にもほどがあるだろう」

キリガネが、

「ジン俺はお前が気に入っていたんだぜ。だがなそれはだめだろう」

カルディアでさえ、ジンの言葉を理解できないと言うように

「ジン殿、我々を見捨てるのですか？」

他の王たちも不満を口にする。

ジンは彼らを

「だまれ」

罵倒した。

「あんたたちが、俺をどう思っているかは知らないがな。俺は聖人じゃないんだ。そして俺は本来この世界とは無関係の人間だ。俺がこの世界に来て世界を救うのはただ救いたかったからだ。そして今人質に取られているのは、この世界で俺の世界を作ってくれている人たちだ。俺はこの世界では異物だ、だから俺は、・・・俺の世界を、居場所を守る」

王たちもこれには黙った。自分たちがジンに力を貸しているのではない。自分たちが力を借りていることに気づいたのだ。しかし、そ

れでも自分たちを見捨てると言われて平静ではいられない。

「なら、我々は、どうすれば」

「勘違いするなよ、俺は帰ってくる。」

「「「「「「「「「「はっ?」」」」」」」」

「俺は今日の夜には、帰ってくる。それに助っ人も呼んである。あんたたちは、それまで持ちこたえてくれればいい」

「なにをどうやって?」

聖女ウリアが、何を聞けばいいのかもわからず尋ねる。

「こつやってだ、風の聖痕スレイグマを発動『嵐帝』らんてい」

ジンを風が包む。精霊術師以外にも見えるほどの精霊が集まり風が緑がかって見える。

「もう一度言う俺は、かならず帰ってくる。それまで持ちこたえてくれ」

ジンは言い終わると空へと消えた。

ジンが去った会議の場では

「我々はジン殿に頼りすぎていたのだろうか?」

「しかし、準備はほとんど我々で」

「それも我々に仕事をくれたと言えるし、あちらはあくまで個人だ」

「とりあえず、持ち場に着こう。これは我々の世界を守る戦いなのだからな。」

各国の王たちは、自分たちの持ち場に戻っていった。

トウカ姫、クリス王女、聖女ウリアは、心配そうに空を見ていた。

49話 第1回 世界防衛戦：開戦

ジンは風を使つて仲間達に皇都に戻ることを簡単に説明した後、今の自分に出せる最高速度で空を飛んでいた。

「絶対に助ける。そして犯人は拷問のあとに殺す」

会議の場で見せていた冷静な態度とは違い、その顔には明らかな怒りを浮かべている。

自分の身内に手を出されて怒り心頭だったのだ。

戦場の方はあまり気にしていなかった。あそこには66万もの軍がいるのだ、自分ひとりが抜けてもそれほど大局には関係がないとジンは思っていた。

その戦場では、魔物の大侵攻が始ろうとしていた。

黒い半球が一斉に泡立ち始めたのだ。大きな黒い風船のようなものがいくつもできている。

遠い空を飛んでいるジンが持っている懐中時計のような物の数字がゼロになった瞬間に

パンパン、パパパン、パン

すべての風船が弾けた。その瞬間、東西南北の軍からありとあらゆる遠距離攻撃が放たれた。

東方軍では、クルト皇帝とカルディアが指揮をしている。

「全軍攻撃やめ、初戦を担当する部隊以外は防御柵付近まで後退」

最初の攻撃のために前進していた軍を下げる。
これは、他の軍も同じだった。

土煙が晴れてきたころ

魔物の消滅を意味する黒い粒子のなかに大きな人影が見えた。それは大量のストーン・ゴーレムだった。大量のストーンゴーレムは、堀へと近づき自ら身を投げ出し自らの体で堀を埋め始めたのだ。

「皇帝陛下あれば厄介です。中央のゴーレムに集中して倒しましょう。バラバラに攻撃しては堀を無力化されます。」

側に控えている、ゲオルグ将軍がクルト皇帝に提案する。

「わかった。第一魔術部隊から第十魔術部隊は中央のストーン・ゴーレムを集中攻撃。」

前線の魔術師の部隊に伝令が届くと

「了解しました。第一魔術部隊右前方のストーン・ゴーレムを攻撃します。『フレイム・シュート』準備……放て」

「……『フレイム・シュート』……」

いくつもの火炎弾がストーン・ゴーレムに直撃して粉砕する。第一魔術部隊は、ゴーレムが黒い粒子になるのを確認して次の目標に移る。クイント軍ほど動ける軍隊は、他の国ではヴァーテリオン帝国に少しあるだけだ。クイント皇国軍は平均能力ランクと錬度が高い

ことで有名なのだ。軍という集団ではもつとも敵にしたくないタイプの軍隊だ。

適切な指揮により、東方軍は堀の維持に成功している。

西方軍のヴァーテリオン帝国では、

「ドラグーン・チーム竜騎兵部隊に、ストーン・ゴーレムを攻撃させる。」

「御意」

ラインツ王は、堀を維持すること優先して虎の子のドラグーン竜騎兵を投入した。

竜騎兵は、空を進みストーン・ゴーレムを次々と粉碎した。手に持った巨大なランスで貫いたり、相手の攻撃が届かないところから魔術を放ったり、騎乗する竜のブレスを浴びせたりと大陸の最強の部隊の名に恥じない働きをした。

西方軍も竜騎兵部隊のおかげで堀の維持に成功した。

しかし南方軍と北方軍は、有効な手を打てずに二時間後一つ目の堀を無力化されてしまった。

北方軍の三国の王が集まる天幕では

「なんなんだあいつらは！」

キリガネが苛立った声をだす。

「これは、思った以上にきつい戦いになりそうですね。」

ヘンリーの声も硬い。

彼らが言っているのは、魔物がとつた最初の行動のことだ。やつらは、まず最初にストーン・ゴレムで堀を無効化してきたのだ。つまり、こちらの戦術に合わせて魔物を出していることになる。

各国の予想では、所詮は魔物という考えがあつたが会戦わずかでの認識を覆されたことになる。

「報告します。跳躍力のある魔物が、第二の堀を飛び越えて接近中です。」

「こつもやすやすと、・・・重装歩兵で迎撃。後方の部隊は、防御柵の後ろまで後退させろ。」

「何故我が国の兵なのだ、ご自慢の武士を出せばいいだろう」

重装歩兵は、カルモンド王国自慢の部隊だそれを使うと聞いてグスター王が喚いている。キリガネはうんざりしながら。

「あなたの国の重装歩兵は足が遅い、しかし守りが堅いこれは当然の采配だ。グスター王はあなたはご自分の軍にお戻るといい。」

「なんと、危険ではないか」

「大丈夫だ、今の魔物はCランク以下の小物ばかりだ。」

「・・・わかった。」

グスターが戻った後、

「何故あんなのが王をしている。」

「キリガネ殿、それはおそらくエクス王子の存在でしょう。カルモンド王国では、エクス王子を次の王にと決まっている。王位継承を円満にするために、グスター王を放置しているようです。」

「息子に守られる王位か、そこまでいくと哀れだな」

「そうですね。しかし、キリガネ殿今は戦闘中です。戦場に意識を向けましょう。」

「そうだな。」

パパン

ストーン・ゴーレムだ。

「またか、魔術師隊に、一体ずつ確実に倒すように伝える。」

第二の堀が無力化されるのも時間の問題だろう。

南方軍では、少々状況が異なった。

「はっ、橋だと」

ジャックが担当している南側の堀に、大蛇の橋ができていて、その橋を使って多数の魔物が堀を越えてきた。

橋は、大蛇が3体が絡み合っていてできている。それが3つある。

「三騎士を出せ。大蛇を潰すように伝えろ」

三騎士とは、テンプル騎士国内で最高の騎士三人に与えられる称号で、それぞれ特別な武具を与えられていた。

聖剣カリバーンを与えられた^{パラディン}聖騎士

竜剣ドラグニルを与えられた^{ドラゴン・ナイト}竜騎士

魔剣レヴァンティンを与えられた^{フレア・ナイト}炎騎士

三人の騎士は、それぞれ別の大蛇の橋に馬を走らせた。

^{パラディン}

聖騎士に与えられた聖剣カリバーンには破魔の力があり、魔物を一撃で斬り殺す力をもっている。聖剣は、魔物に対して圧倒的に有利な武器なのだ。

聖騎士は、近づく魔物をすべて一振りで片付けて難なく橋にたどり着く。たどり着くと聖剣に大量の魔力を流す、すると聖剣の刃が巨大化した。これが聖剣の二つめの能力だ。聖騎士は聖剣を振り上げ、橋の上にいる逃げ場のない魔物ごと大蛇を一振りで真っ二つに斬った。

これで、一つ目の橋が落ちた。

^{ドラゴン・ナイト}

竜騎士に与えられた竜剣ドラグニルは、持ち主の気力のランクを二つ上げる力がある。

竜騎士は人とは思えない動きで敵を葬っていた。たとえば、自分の倍はある熊型の魔物を片手で投げたり、ゴーレムのパンチを素手で受け止めたり、十数メートルの跳躍を見せたりした。

同じく大蛇の橋にたどり着いた竜騎士は、大蛇の頭を蹴りあげるすると大蛇の頭が浮かび上がった。そして落ちてきた頭を切り落とした。

これで二つ目の橋も落ちた。

フレア・ナイト

炎騎士に与えられた魔剣レヴァンティンは、炎の魔剣だ。魔力を流すことで炎を生み出す剣だ。炎の精霊を集める力も持っている。

炎騎士は、進行方向に炎を飛ばして魔物を焼き払い道を作る。その炎は、ストーン・ゴーレムを溶かし燃狼ねんろうすらも焼いていた。

炎騎士も大蛇の橋の場所にたどり着いた。炎騎士は、魔剣を大蛇に突き刺し内側から燃やし尽くした。絡まっていた他の大蛇もろとも灰となった。

これで最後の三つ目の橋も落ちた。

「さすがは、テンブル騎士国の三騎士ですな」

リニヨン教国のカリウス教皇が三騎士を賞賛する。

「どうも。三騎士を下がらせろ、戦いはまだまだ続くのだからな。第1騎士団から第8騎士団を前面に出せ。教皇、神官騎士団を出してください。」

「わかった。君のところの騎士団の穴を埋めればいいのかな?」

「話が早くて助かります。」

攻撃が得意なテンブル騎士団が押し返し、防衛が得意な神官騎士団

が守ることで南方軍は、戦線を押し返すことに成功した。

しかし、北方軍は、さらに二時間後、会戦から四時間たった頃に第二の堀も無力化されてしまった。

50話 第1回 世界防衛戦：助っ人

「何をしているのだ、カルモンド軍に何があつた!」

第二の堀を2時間で無力化されてしまった北方軍。戦線の防衛を担当したカルモンド軍の動きがあまりにも遅すぎたのだ。

「それがどうやら、軍中のグスター王が何かと軍を勝手に動かそうとしているようでして、指揮系統に混乱が生まれているようです。」

「なっ、なん、だと・・・やつは、正気か。」

キリガネは、呆然とした表情を浮かべる。

「それが、どうやら自軍に戻ったことで、気が強くなったのか自分を守るように将兵に強要しているようです。」

「・・・ヘンリー王、あいつ斬ったらダメか?」

「聞かないでください。一瞬許可しそうになりましたから。」

「あのバカ、・・・まだ二十時間もあるんだぞ。ずっとあいつのお守りをするのか俺達は」

「この戦いが終わったら、さっさと王位を退いてもらいたいものです。ですが今は」

「わかっているさ、すべての部隊を防御柵まで下がらせる。迎撃準備だ、相手はBランク以下の魔物だ、なんかなる。今はな」

足止めの部隊以外が防御柵まで後退するが、またしてもカルモンドの軍が、遅れている。

そのせいでカルモンド軍が突出してしまっている。あれでは、集中攻撃を受ける。

「何をしているんだ、グスターは」

「どうするキリガネ殿？」

「・・・しかたない全軍戦線を一度上げる、カルモンド軍を引つ張り戻すぞ。グスター王は、もっと後ろに下げる正直邪魔だ。」

「閣下緊急事態です。」

「今度はなんだ？」

もううつんざりだといった、風情のキリガネ。

「黒い半球付近にノワールサイを確認しました、その数約百体。」

ノワールサイは以前リリースを苦しめたAランクの魔物だ。ノワールサイの突進の対処は回避が基本だ。しかし人間が密集するこの戦場で回避は、難しい。それに本来は群れないノワールサイが百体だ。

狙われるのはもちろん突出したカルモンド軍だ

「ヤバイぞ、いくら重装歩兵でも、あの数のノワールサイは止めら

れないぞ」

敵は、待つてはくれるはずもなく、ノワールサイの群れ？はカルモンド軍に向けて進撃を始めた。

その様子は、さながら角のはえた黒い壁が向かってくるようで、カルモンドの兵士は恐怖に包まれた。

「む、無理だろこんなの」

「逃げ場なんかないぞ」

「なんでノワールサイが群れてんだよ、おかしいだろ」

兵士が諦め絶望し始めた頃

ノワールサイの群れが吹き飛んだ。ジンの友人（友竜？）である銀龍アルベルトのブレスによって。

アルベルトは、もう一度ブレスを放ち、堀を無力化させていたストーン・ゴーレムも吹き飛ばす。

アルベルトは、第二の堀を再生した後、一度キリガネとヘンリーの前に降り立ち人形ひとがたを取る。

「君たちが、人の王か？」

「ああ、わたしはヤマト国の国王キリガネ」

「わたしは、ファールランド王国の国王ヘンリーといいます。」

「銀龍アルベルトだ。ジんくんの要請でこの戦いに助力する。」

「あなたがジンの言っていた助っ人が、これは心強いな。」

「父上先程のは・・・こちらのかたは？」

そこに、トウカが天幕に訪れた。

「さっきの銀龍殿だよ。」

「えっ・・・ご、ご助力感謝します。・・・これでジンさんへの風当たりも弱くなるといいのですが」

「うん？　そういえばジンくんはどこにいるのかね？　戦場にはいないようだが。」

「それが実は」

事の経緯を話す。

「そうか」

アルベルトはそれ以外の言葉を口にしなかった。

そこに、キリガネが

「アルベルト殿聞きづらいのだが・・・どこまでやれる？」

「全力のプレスはあと三回だな」

三回だけか、いや三回もあると考えるべきなのだろうな。銀龍のプレスは、地形を変える程の威力だ。贅沢は言えない。

「改めてお願いします。力をお貸しください。」

軽々しく頭を下げられない王二人の代わりにトウカが頭を下げる。

「もとよりそのつもりだ。娘も参加しているからな。」

「娘？」

「ああ、ジンさんと行動を共にしている。」

ジンさんのハーレムには龍族までいるんですか、とトウカが心の中で思っていると

「トウカ出遅れるなよ」

「ななな何をいつているんですか？」

トウカの顔がみるみる赤くなっていく。

これは珍しい。ジンのことをそれなりに意識しているようだ、と
キリガネは心の中で思う。

「いやお前の婿の」

「黙ってください。父上はさっさと指揮に戻ってください」

キリガネは、面白いものを見れたとでも言うようにニヤニヤしながら指揮に戻る。

「はいはい、わかってるよ。各騎士団は魔物の駆逐を魔術師隊は、ストーン・ゴーレムを潰せ。今度は死守しろよ」

北方軍は一時間後、開戦から五時間ごろに戦線を押し戻すことに成功する。

北方軍が戦線を押し戻した頃、東方軍の前には赤い巨大な亀が現れた。

「皆よけるー」

東方軍の戦場では、無数の火球が空から降りかかってきていた。前衛部隊は、その火球をまともに受けることになる。

赤い亀は、ランクAの火砲亀^{かほうき}、背中にたくさんの砲門を持ちそこから無数の火の雨を降らせる魔物だ。ノールサイ以上に硬くその火力で村を焼き尽くす危険な魔物だ。本来なら近接に持ち込んで一気に弱点である目や口を攻撃するのだが堀と他の魔物がそれを許さない、一方的に火球を降らされる状況になっていた。

「くそ、赤亀のやつ好き勝手やりやがって」

「またくるぞ、伏せる」

また無数の火球が飛んできた。

「『水上壁』」^{すいじょうへき} 「『水天門』」^{すいてんもん}

突然二つの水の壁がでて火球を打ち消した。

「出てくる場所が悪かったですね」

「湖と川の国ウルティアの代表の力見せてあげましょう。」

それは、『水災の魔女』の称号を持つソフィアとウルティア国の代表カルディアによるものだった。

その後も火砲亀の攻撃を二人は防ぎ続けた。二人が防いでいる間にティリエルが火砲亀に空を飛んで近づく。ティリエルは無数の火球をすべて回避して背中仲間を火砲亀の前へと運んだ。

火砲亀の前に降り立ったのは、ジンの仲間のリリスだ。

「ここからは、私の番だよ。」

リリスはジンの仲間の中で随一の速さを生かして魔物も火球も避けて火砲亀の前までたどり着くそして両手で持ったエストックで目を貫く

「『スパーク・ショット』」

エストックを刺したまま頭の中を雷撃で焼いて止めを刺す。

リリスは、火砲亀が黒い粒子になって消滅するのを見届けてその場を脱出する。この時も魔物はリリスを捉えることができなかった。

リリスはそのまま堀の付近でティリエルに拾ってもらい退避することに成功した。

ソフィア、リリス、ティリエルの力は格段に上がっていた。

ソフィアは、軍隊の半分を守るほどの水の壁を何度も作り出した。

以前のソフィアは威力に関してはジンに頼っていたのを魔術を組み合わせることで自分で威力を大幅に上げた。

リリスは、以前歯が立たなかったAランクの魔物を瞬殺して見せた。ティリエルも、人を乗せての回避行動、体力、機動力に磨きがかか

っている。

今の彼女らのギルドカードは

名前 ソフィア 種族 人間 性別 女

ギルドランク C

能力ランク 総合B 気力C 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

名前 リリス 種族 人間 性別 女

ギルドランク A

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

名前 ティリエル 種族 龍族 性別 女

ギルドランク C

能力ランク 総合A 気力A 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの義妹 銀龍

とすっかり上級者の力を身につけている。彼女らのおかげで東方軍の被害は最小限に抑えられた。

しかし開戦から6時間がたった頃、東方軍と西方軍も、第一の堀を無力化されることになる。もともと東方軍は、効率的な遅延でしかなかった。そこに火砲^{かほう}の邪魔が決定打になった。西方軍は竜騎兵^{ドラグーン}隊に疲れが見えてきたので、自ら第一の堀を放棄した。

火砲亀の攻撃を受けた部隊以外には、目立った被害は出ていないが、これで東西南北のすべての第一の堀は無力化されたことになる。

これからは、堀を越えられる魔物だけとはいえ断続的に戦闘が続くことになる。これからがジンとクルト皇帝が憂慮していた長時間の緊張状態の戦闘に入ることになった。

51話 第1回 世界防衛戦：外 救出

開戦から7時間たった頃ジンは、皇都のお城にたどり着いていた。

「英雄さま、何故お城に？」

と中庭で手入れをしていた庭師のじいさんに話しかけられる。今ではジンの名前は城の中に限れば結構有名になっている。

「ちよつと野暮用でな」

じいさんに返事をしながら師団長のタツドをさがそうとするが。

「ジン殿お待ちしておりました。」

タツドのほうから数人の部下を連れてやって来た。

「話は聞いてるよな。状況は？」

「怪我人は三人、三人とも軽傷です。確認できているので八人が連れ去られています。屋敷の損害は、ひどくありません」

タツドが、全体の説明をしてから。

「怪我人は、庭師が斬られたようですが傷は深くはありません。あとメイドが二人軽い打撲をおっています。」

「連れ去られたのは、メイドが7人とギルド職員が1人の8名です。」

クレアさんも攫われたのか。

「屋敷は、一部が焼けましたが、焼けた範囲は狭いです。後は扉や窓が少し破壊されています。」

タッドの部下が詳細の説明をしてくれる。意外だったのは彼らが協力的だったことだ。おそらくタッド師団長がしっかりしているのだろう。本当ならジンが数時間で帰ってきたこと自体がおかしいのだ、それを質問しないのはタッドがジンに時間がない事を理解し、無駄口を叩かないように徹底させているのだろう。

「タッド師団長、今から言う場所に兵を集めてくれ。」

「もう見つけたのですか？」

「見つけた。」

実は、城に来る途中に皇都全体を探索していたのだ。

「俺は先に助けに行く。できるだけ早く来てくれよ。」

最初は呆気にとられていたが、すぐにもちなおし。

「了解しました。」

皇都にある、とある倉庫の地下に、縛られた8人の女と傭兵風の男

が数人と騎士風の男が1人いた。
縛られた女を見ながら傭兵風の男が

「なあ旦那、まだこいつらにいたずらしたら駄目なのか？皆上玉だぜ」

旦那と呼ばれたのは騎士風の男だ。

「後半日は、待て。」

「なんでだよ」

「その頃には、戦いは終わっている。そうなれば人質の意味はなくなる。そうなたら好きにしろ。」

傭兵風の男が野卑な視線を女達に向けるが、そこに絶望の表情はなかった、なにか希望があるかのように目に力があるのだ。

傭兵風の男が薄気味悪いものを感じていると

ガシャーン

突然窓が破砕し、そこから男が中に飛び込んできた。

次の瞬間、旦那と呼ばれた男以外の誘拐犯は、風の刃で首を切り落とされて死んだ。

1秒で倉庫を制圧したのは、もちろんジンだ。

旦那と呼ばれた男が逃げようとしたので、片足を切り落とした。

「ギイヤー・・・」

耳障りな悲鳴を風で遮断して女達のところに行く。

「ご主人様来てくれた」

「当たり前でしょ、あたし達のご主人様なんだから」

「うん、・・・うん」

「ご主人様大好き」

「ご主人様愛しています」

「抱いて」

メイド達は、ジンが来てくれたことに歓喜している。よかった酷い怪我はないようだ。

「みんな良かった。クレアさんも大丈夫ですか？」

ボーツとしているクレアさんに話しかける。

「え・・・は、はい。大丈夫です。」

「良かった」

「（ジンさん、王子様みたい）」

「・・・クレアさん、俺今『嵐帝』状態だから、その、聞こえたんだけど」

「えっ」

クレアさんの顔が真っ赤になっていく。普段のできる女の雰囲気はそこにはなく、恋する乙女のようなクレアさんがいた。普段とは違うクレアさんに新鮮味を感じる。

しかし今は時間がない。女達の縄を解くと皆を外に出す。しばらくしてタッドが到着して女達を預ける。

ジンは、倉庫に戻って旦那と呼ばれた男に近づき

「依頼人は誰だ？」

「喋っているのか？」

「喋らせるんだよ」

ジンは、女達に聞こえないように風を操作して音が漏れないように部屋に防音を施す。

そして、まず切り落とした足の切断面を焼いて止血する。勝手に失血死したら困るからな。

「いあゝあゝ」

体を焼かれて悶えている男に

「喋りたくなったら話せ」

その後、数分後男は通信用の腕輪を持ってきた男の名前を喋った後に死亡した。依頼人については最後まで喋らなかった。

「ジン殿どうでしたか？あの男、黒幕を吐きましたか」

「今から確認に行く。タッド師団長は彼女達を頼む。もし傷つけたら……想像に任せる。」

「わ、わかりました。では、男を連行します。」

「ああいいよ。もう死んでるから」

「……………」

この場にいた兵士達は、女達の護衛に全力を注ぐことをひそかに決意した。

「じゃあ俺は城にようがあるから先に行く。」

城に向けて走りながら。自分の心を落ち着かせ脳をフル回転させる。そしてひとつの回答を導き出した頃に城に着いた。城にはアリシヤが待ち構えていた。

「何があつたの？」

「俺に対して妨害があつたんだ。それでちょっとラウルにようができたんだ。」

以前からジンに対して憎悪を抱いている男だ。

もう少し細かい事情を話して、聞きたいことを聞く。

「そういえばラウルは、腕輪を紛失している。弁償で30万ギル払ってた。」

「ありがとうアリシャ。後は直接聞こう」

ラウルは、すでに見つけている。

しばらくして、ラウルは捕獲した。今日の前には椅子に縛られたラウルがいる。

「ラウル師団長、あなたが捕らえられた理由はわかっていますね。」
アリシャが問い詰めるが

「何のことだ私はしらん」

「この持ち主がお前からもらった、と証言している。そして持ち主は、俺の身内に手を出した。この意味がわかるな」

「なっ、・・・いや、ち、違う、まで、俺は何も知らない。俺はただ横流しただけで。あんたの身内に手を出すつもりなんてこれっぽちも。」

「だろうな」

アリシャとラウルがポカンとしている。

「え？」

「どういうことジン？」

「考えてみてアリシャ、こいつは紛失してすぐに弁償している、ただの師団長に30万ギルなんて大金払える訳がない。つまりすでにパトロンがいたんだよ。つまり裏から糸を引いているやつは別にいるんだよ。」

「そ、そうなんだ、俺は売っただけなんだ」

「それも立派な犯罪だがな」

項垂れるラウル。

「なんでそんな面倒なことを？」

「こいつを身代わりに殺すつもりだったんだろ。腕輪を証拠にしている。」

「な、んで、俺なんだ」

ラウルは、理解が追い付かないようだな。

「お前が俺に恨みを持っていたからだろう。ただそれだけだ。」

「そんなことで」

「ジンどうするの？殺すの？」

ラウルが肩をビクツと震わせる。これからどうなるかを想像したのだろう。ラウルは以前、ジンにボコボコにやられた過去がある。

「まずはそうだな、お前が腕輪を売った相手は誰だ」

「た、たぶん、カルモンド王国のグスター王だ。話を持ちかけて来たのはグスター王の側近だったし、一度だけ腕輪に関してグスター王に声をかけられた」

グスターが意味もなくただの師団長に声をかけるわけがないこれは確定だろう。

グスターか、……あいつはそろそろ殺してやろうか。

「そうか。じゃあ後は横領で儲けた金の倍を国に納めろ。それで許してやる」

「えっ」

「いいの？ ジンは男には容赦しないと思っていたんだけど」

「ラウルは利用されただけだる許すさ。だがな、ラウル次はないからな、これに懲りたらもう少し真面目に生きろよ。」

「あ、ありが……とう」

「ジンがそういうならいい。でも師団長の役職をそのままにはできない。」

「それは任せるよ。そろそろ戻らないといけない。」

ジンが歩き出すと

「ジン」

アリシャが、呼び止める。

ジンが振り返ると、アリシャが飛び付いて来てキスをしてきた。

「頑張つて」

とても不安そうな表情を見せる。アリシャの不安な顔を見るのは初めてだ。

安心させるために今度はこちらからキスをする。長めのキスをして頭を撫でてから離れる。

「ああ、任せろ。行ってくる。雷の聖痕を発動『雷神』」

開戦から八時間が過ぎた頃、ジンは『雷速』を駆使して『無得と魔物の大地』を目指す。

51話 第1回 世界防衛戦：外 救出（後書き）

稚拙な文章ですが、よろしくお願いします。

最後まで読んで頂きありがとうございます。

ご指摘・ご感想等ありましたらよろしくお願いします。

52話 第1回 世界防衛戦：英雄参戦

会戦から9時間が経過した頃、戦場は闇に包まれていた。

連合軍では、篝火が灯して自軍を照らしていた。

そんな中、連合軍は窮地に立たされていた。大量の魔鳥やガラスが黒い半球からでてきたのだ。連合軍は空の魔鳥から一方的に攻撃を受けることになっていた。

連合軍で空を飛べるのは竜騎兵部隊と銀龍のアルベルトとティリエルだけだ、とても戦場全てをカバーできない。

他のものでは地上から攻撃しても暗くて狙いが定まらずほとんど効果がないのだ。

今は竜騎兵と銀龍が鳥型の魔物を倒してくれるのを期待するしかなかった。

しかし、竜騎兵は持久戦を考えて魔術や竜のプレスは控えランスで突き殺すようにしていたので撃破するのに時間がかかっていた。

アルベルトは、1日くらいは余裕で戦えるので全力で次々と撃破していた。

そして目覚ましい働きをしたのが、ティリエルの背に乗ったミリアとフェリスのメイドさんコンビだった。

フェリスが、光系の魔術で辺りを照らすそこを早い雷系の魔術で撃ち落としていた。

「『ライトボール』」

「『サンダー・アロウ』」

二人の息もぴったりだ。今も『ライトボール』で見つけた魔鳥やガラスをミリアが『サンダー・アロウ』で撃ち落とした。今日のためにジンが二人を組ませて訓練をした成果だ。

訓練を重ねたことで二人は、まるで姉妹のように仲良しになっていた。

「やりましたね、ミリアさん」

「ええ、フェリスちゃん。それにしても不甲斐ないですね」

「???なにがですか?」

フェリスは、不思議そうな表情を浮かべる。話の流れで自分達のことではないと思うのだが

「各国の対応のことです。どの国も対応できていないではないですか。」

「仕方無いですよ。もともと空の戦いなんてただの人には経験なんてありませんから。お兄様がすごいんですよ。」

ティリエルも会話に入ってきた。

「それもそうですね。さすがは、私達のご主人様です。」

「そつえばお兄ちゃんまだかな?」

「そろそろ来られるでしょう。」

「あはは、1週間かかる道程を十時間足らずで帰って来てもお兄ちゃんならそんなに驚きませんね。」

「そうですね。・・・あつ、ミリアさん、フェリスさん次が来ました。今度は多いです。」

「わかりました。魔の光よ、闇を払いて、わが敵を照らし出せ『ライトボール』」

今回の光球は、かなり大きい、それでも今のフェリスには朝飯前だ。

「『サンダー・アロウ』」

ミリアは、『サンダー・アロウ』を無詠唱で使った、さらにその後は技名の詠唱も行わずに雷の矢を放っていた。

お互い得意分野を磨いた結果、それぞれの足りない所を補い合うことができるようになった。
フェリスが多様性と威力を
ミリアが速度と正確さを
それぞれ磨いていた。

二人の今のギルドカードは、

名前	ミリア	種族	人間	性別	女
ギルドランク	D				
能力ランク	総合B	気力C	魔力A		
チーム	『世界を結ぶ者達』				

称号 ジンのメイド 雷術師 風術師

名前 フェリス 種族 人間 性別 女

ギルドランク D

能力ランク 総合B 気力D 魔力S

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの料理人 ジンの義妹

三人は、近くの魔鳥を片付けた後、別の場所の魔鳥も倒して回った。

別の空では、

「隊長、いきました。」

「任せろ！、ハアア」

隊長は、気合い声を上げて手に持ったランスで逃げてきた魔鳥を貫いた。魔鳥は黒い粒子になって消滅する。

「お見事です。」

二人の竜騎兵^{ドラグーン}だった。

驚いたことに二人の声は、女性のそれだった。

竜騎兵になる絶対条件は竜を手なずけることだ。これがかかなり難しい、竜もいくらかは人に馴れているがティリエルやアルベルトのように言葉を交わせるわけではないのだ。

そして何故か女性の方が竜がなつきやすいのだ。

実際、竜騎兵部隊^{ドラグーン・チーム}の男女比は、半々だ。

隊長と呼ばれた女性は、美しい女性だった。名前はアルシナ、竜騎兵部隊の隊長を勤める女傑だ。

「あっちの方がすごいさ」

アルシナがティリエルたちの方を見ながら言う。そこでは、二人と銀流が次々と魔鳥を撃ち落していた。

「確かにすごいですね。『英雄ジン』の仲間って皆あんな感じなんでしょうか？」

「さあな、わたしは英雄の方に興味があるが」

「だ、ダメですよ。隊長は男なんかに惑わされちゃあ」

「君は私を何だと思っているんだ……うん？通信だ」

「【アルシナ隊長ですか？】」

「ああ、そうだ」

「【先程、大量の魔鳥の発生を確認しました。今すぐ地上に退避してください】」

「何を言う、それこそ我々が」

「【これは命令です。詳しくはわかりませんが、空にはすでに手を打っているそうです。】」

「……………わかった。」

アルシナの遠い空に数千の魔鳥を確認した。

「あれをどうにかできるのか？」

アルシナは、疑問に思いながらも地上に降りた。

「本当に大丈夫なのか？」

開戦から10時間が過ぎた頃

アルシナが地上に降りてから数分たった。空には5千近い魔鳥やガラスが飛び交っていた。

地上に降りたアルシナは空を見ながら

「今からじゃあ空に上がるのは厳しいな」

「どうします？」

「どうするも何も……あつちから来るさ」

魔鳥が空で攻撃態勢に入っていた。おそらく攻撃は圧縮した風の塊だろう

（手を打ったんじゃないかったのか）

今にも攻撃が放たれようとした瞬間

「『万雷』^{ばんらい}」

万の雷が、すべての魔鳥を貫いた。

「なっ」

一匹の例外なく空にいたすべて魔鳥は、黒い粒子になって消滅した。

「なん、ですか、これ？」

「わからん、だがこんなことができるのは」

アルシナが結論を言おうとした時、空から人が降ってきた

「到着つと」

降ってきたのは、男だった。男は重力を感じさせない着地を決め。

「あゝ、着いたぞ。言われたとおり空の魔物は一掃した」

男は、通信用の腕輪で誰かと話している。

「こっからは、好きに動くからな、そのための独立部隊だろ」

これが決定的だった連合軍で独立部隊を任されているのは、クイン
ト皇国の英雄だ。

つまり目の前にいるのは『英雄ジン』なのだ。

「貴方が英雄のジン殿なのですか？」

「うん？そつだよ、始めまして。そつちは、えーと、竜騎兵の隊長さん？」

「アルシナだ、よろしく」

「よろしく、突然で悪いんだけどアルシナさんに、お願いがあるんだけどいい？」

「なんだい」

「独立部隊の場所に連れて行ってほしいんだ」

「貴方は空を飛べるのでは？」

「さっきの『万雷』で聖痕が切れたんだ。風の聖痕も切れてるから空を飛ぶには専用の装備がいるんだそれを取りに行きたいんだ」

「わかった、後ろに乗るといい」

アルシナは、後ろにいる白竜を指差しながら言う。

「ありがとう」

「だ、だめですよ。隊長、男と相乗りだなんて」

「バカなことを言っていないでお前は他の部隊と合流しろ」

アルシナは、部下を諫めながら竜に乗る。ジンもそれに続く。

「うつゝ、お姉様に手を出したら承知しませんからね！」

「お姉様と呼ぶなと言っただろう！」

ジンが呆れていると、

「ゴホン・・・あゝ私は行くからな」

アルシナは、返事を待たずにジンを乗せて飛び立った。部下の女はまだ何か喚いていたが無視することにしたようだ。

白竜の背に乗りながら（そういえばティリエル以外の竜に乗ってティリエルに怒られないかな？）などと考えていると

「ジン殿、いくつか質問してもいいだろうか？」

「どうぞ」

「貴方ほどの力がありながら、今までどこにいたんですか？」

「皇都」

「は？」

「だから皇都まで行って人質を解放してから帰ってきたんだよ」

「人質・・・なるほど、大体状況はわかりましたが、それでもな

ぜ数人のために戦場を離れたのか理由を聞かせてもらえませんか？」

「うーん、いいけど、先に質問をしてもいいかい？」

「答えられることなら、答えよう」

「じゃあ聞くけど、君は何のために戦ったの？」

「えっ・・・それは、・・・世界を守るために」

「嘘だね。この世界の人間で世界を正しく認識できる人間がいるとは思えない。本当の理由は、この世界に住む誰かだったり、国だったり環境だったりのはずだよ。」

「確かに、そう、かも、しれませんが」

「俺も同じだよ。いや、異世界から来た俺にとって、屋敷の人間は家族ように大切な存在だ。俺は、家族のために戦っているそれだけだ。」

「それは、世界を守ることと反するのか？」

「手段と目的を間違えちゃダメだろ。ここでは世界を守るのが手段で、俺の女を大事にするのが目的だ。手段のために目的を犠牲にしたら意味がないだろ」

「そう言われるとなんとなく納得してしまうな」

「納得するのか、普通は理解できてもなかなか領けないものなんだが。君は面白いな、どうだ俺の女にならないか？」

「きゅ、急になにを言っている。ふざけているのか！」

アルシナが真っ赤になって怒鳴る。それは怒りかそれとも恥ずかしいだけなのかは、わからない。

「そんなつもりはない、まあすぐに答えなくてもいいよ。そうだなこれから俺の活躍を見ていてくれないか？」

「それぐらいはいいが」

「それじゃあ、アルシナが見てくれるんだから頑張らないとな」

実はアルシナの中では、ジンの評価はそんなに悪くなかった。彼女も竜騎兵をやっているから、それなりに力に価値を置く考えを持っている。そしてジンの力は魔鳥5千を一瞬で片付けるほどだった。力に溺れている感じでもないし、突然の告白には驚いたが、戦士としては草食系より肉食系のほうが、という思いもある。

それに、（世界より女を助けに行ったりするし、とても大事にしてくれそうだな）と乙女なことも考えていた。

アルシナは傍目^{はため}にはわからないが内心では、かなりジンのことを意識していたのだ。

アルシナは、ドキドキしながらジンを独立部隊に送る羽目になった。

53話 第1回 世界防衛戦：新たな力

開戦から12時間が経過した。大侵攻も半分が終わったことになる。

ジンが『黒飛板^{シュバルツ}』を確保してからしばらくした頃、またしても魔鳥が黒い半球から出てきた。

それも今までとは比較にならない数だ、その代わりに地上の魔物は激減していた。

東方軍の空には、ジンとアルシナだけがいた。ティリエル達は、別の軍の救援に向かっている。

「さっそく来たか。（グスター王は後回しだな）アルシナさんは、俺が撃ちもらしたやつを頼みます。」

「わかりました。」

ジンは、『黒飛板』の上でこう言った。

「さあ、これから俺の『本気』を見せよう」

ちなみにジンにとって万の軍勢の戦争も、銀龍アルベルトとの戦いも本気を出してはいなかった。

正確には、本気を出せなかった、ということだが。

アルシナは、これから何が起きるかとても興味を持っていた。なん

せ最初に見たのが、五千の魔鳥を消滅させた『万雷』だ。戦士としてジンの本気に興味を持つのは当たり前だろう。

この時、アルシナはジンの仲間ですら聞いたことのない。ジンの『詠唱』を聞くことになった。

「【我は創造する、源は火、形は銃、力は魔弾、・・・精製、^{ステ}聖痕武器 紅炎銃・プロミネンス】」

詠唱を始めるのと同時にジンの火の聖痕から赤い光が溢れ出てきてジンの前に、紅い光球ができる。火の精霊も今までにない密度で光球に集まっている。詠唱が終わると同時に光が弾け中から、紅を基本とし色彩で砲口は2つ、装填数は六発の大きな紅い銃が現れた。ジンは落ちてくる銃を右手で握る。

ジンが大侵攻に備え、長時間戦闘用に作り出した『^{ステイグマ・ウェボン}聖痕武器』の初お披露目だ。

聖痕の発動は強力だが、発動中は何もなくても力を消耗するし発動を止めると再発動に時間がかかる。その弱点を無くすための『^{ステイグマ・ウェボン}聖痕武器』だ。

「魔弾装填、『^{とうかだん}灯火弾』」

ガンガンガンガン

ジンは、装填の言葉と同時に四発の『灯火弾』を撃ち出した。放たれた魔弾は、東西南北の空へ飛び、それぞれの軍の中央上空付近で止まり強烈な光を放ち始めた。

戦場は、4つの小さな太陽を迎え昼間のように明るくなった。

「こんなに、あっさりと」

アルシナは、自分たちを苦しめた闇がこうもあっさり解決したことに、愕然としていた。

「魔弾装填、『^{ついでだん}追火弾』」

ガガガガガッ

六発の魔弾が連射され魔鳥に襲い掛かる。魔弾に気付いて魔鳥が視線から逃げるが、魔鳥の近くで魔弾が方向を変え魔鳥に向かう。六発の魔弾は、六羽の魔鳥に直撃し魔鳥を撃ち落した。

「『追火弾』を常時装填」

ガガガガガガガガガガガガガガガッ

『追火弾』は、敵を追尾する必中の魔弾だ。ジンは絶え間無く魔弾を打ち出し、打ち出した弾数と同数の魔鳥を撃ち落としていく。

「すごいな、これは」

アルシナは、その様を側で見せられて、魅せられていた。

「【ジンくん、南方軍側にノワールサイが現れた。迎撃してくれないか？】」

腕輪から声が聞こえる、クルト皇だった。

「わかった。空は自分たちで守れよ。この明るさならやれるだろ」

「【ああ、大丈夫だ。それについても感謝するよ】」

「アルシナさん、ついてきて」

「了解した。」

「アルシナさんっていつもそんな喋り方なの？」

「ああ、変だろうか？」

アルシナにとってジンは初めての気になる異性だ、内心不安に思う。ジンに言われて自分の男っぽい喋り方が気になり始める。

「いいや。俺は良いと思うよ。」

「そ、そうか」

アルシナにとって男の一言一言に一喜一憂するのも初めてのことだった。

「じゃあ行こうか。」

「ああ、行こう。」

二人は、南方軍の上空に移動してきた。

「魔弾装填、『連爆弾』」

ジンは、ノワールサイの群れに六発の魔弾を撃ち込んだ。
六発の魔弾が同時に爆発してノワールサイの群れを吹き飛ばした。
威力も申し分なしだ。

「アルシナさん、どうだった？」

「すごい一言だったよ」

「そうか、良かった。それじゃあこのまま駆逐するかね」

ジンは、その後も紅炎銃・プロミネンスを駆使して魔物を殲滅して
回った。

この時ジンは、空にいたため気付くことができなかった。地下で魔
物が蠢いていることに。

ジンはこの時、気付けなかったことを後で悔やむことになった。

開戦から14時間、真夜中の2時にそれはやってきた。

最初に異変に気付いたのは、南方軍の前衛部隊を指揮していた。
テンプル騎士国の王女で『剣姫』の異名を取るクリス王女だった。
クリスが気付いたのは、偶々部下に、土の精霊術師がいたからだ。

「姫様、これは」

「わかっています。すぐに父上に知らせましょう。」

クリスが通信用の腕輪で連絡しようとした時、突然地面が隆起し始めた。

「遅かったようです。」

ボコッボコッ

と地面から巨大なワームが姿を現した。その姿は肉、でできた丸い筒に牙が生えたような魔物で見た目はかなり気持ち悪い。ランクは、Sランクそれが三体だ。

ワームが発生したのは、西方軍、南方軍、北方軍それぞれに3匹ずつだ。

出てきたワームは、近くの兵士を数人丸呑みして地下に戻った。

三つの軍は大混乱に陥った。ただでさえランクSの魔物は脅威なのに、今は夜中で同時に三匹だ、平静でいられるのは、本当の強者とバカだけだ。

「俺は南方軍のところに行く、北方軍の方も何とかするから、西方軍には遊撃部隊を向かわせて」

ジンは、指示を出しながら、『灯火弾』効果が弱まったので、再度『灯火弾』を撃つ。

「【わかりました。】」

今連絡していたのは、いち早く状況を知らせてくれた東方軍のカルディアだ。クルト皇は、万が一のために指揮をしているそうだ。クルトには東側だけワームが出ていないことに何か思うところがあるようだ。

「アルシナさんどうしますか？自軍に戻りますか？」

「できれば、一緒に行かせてくれませんか」

「いいんですか？」

「ワームに対して我々竜騎兵では、地中のワームには太刀打ちできませんから」

「わかりました。それでは、急ぎましょう」

「ジン殿は、いつもその口調なのか？」

「・・・いいや、もっと軽い感じだな」

「そちらの方がいいかな」

「わかった。よろしくアルシナ」

「よろしくジン殿」

南方軍は大混乱に陥っていた。安全な場所がわからず兵士は右往左

往していた。どこから出てくるかわからない敵というのが、恐怖を加速させる。

ボコッ

またワームが地面から現れて兵士に襲い掛かった。

「魔弾装填、『飛燕弾』」
ひえんだん

ガガンッ

高速の二発の魔弾がワームを直撃する。しかしワームは、直撃したときに少しよろけただけで、何事もなかったように地中に逃げ込んでしまった。

『飛燕弾』は速度重視で威力が低いSランクのワームを仕留めるには火力不足だったようだ。

その後も他の魔弾を試すが、ワームはジンの近くには現れないため遠距離から撃つしかないのだが、『追火弾』は、穴の中まで追いかけるが中で誤爆してしまう。『連爆弾』は、爆発する前に地中深くに逃げられた。『灯火弾』に殺傷能力は無い。最後の魔弾は、周りの人間を巻き込んでしまう。

紅炎銃・プロミネンスと、ワームの相性は最悪だった。

『聖痕武器』の弱点は、汎用が利かないことだった。

さて、どうするかな。

53話 第1回 世界防衛戦：新たな力（後書き）

聖痕武器 「ステイグマ・ウェポン」

紅炎銃・プロミネンス
こうえんじゅう

五種類の魔弾

『追火弾』

追尾型の魔弾、秘中の魔弾（地中の敵には当たらなかった）

『灯火弾』

補助型の魔弾、夜の暗闇を照らす光源を作り出す

『飛燕弾』

高速型の魔弾、威力は低い

『連爆弾』

爆弾型の魔弾、六発の魔弾を同時に爆発させる。高威力、広範囲の魔弾

『????』

?????、威力が高すぎるため、未使用

54話 第1回 世界防衛戦：地中の敵

開戦から15時間、真夜中の3時頃、独立部隊が南方軍に到着した。今は、天幕で対策を話し合っていた。天幕の中にはジャック騎士王とクリス王女とカリウス教皇あと三騎士が南方軍から、独立部隊からはレティーシア、ジーク、カイルとジンが来ている。アルシナもこの場に来ている。

「ジャック、一応作戦があるんだが」

「聞かせてくれ、正直お手上げだ。ワームを討伐するときは、専用の毒入りの餌と拘束具を使用するのが普通なんだ。あいにくそれらはここには無いし、それも同時に三体だ。かなり厳しい状況なんだが、どんな方法が？」

「作戦は単純だ、俺が外に出す。うちの者と、三騎士の方々に仕留めて終わり。」

「わかりましたわ。」

真つ先に賛成したのは、三騎士の聖騎士^{パラディン}だった。声からわかるとおり女性だった。口調からして、おそらく貴族の令嬢なのだろう。他の三騎士は声は出さなかったがその場で頷いた。兜を着けていて表情はわからないが、二人とも体から戦意が満ち溢れている。ワームに好き勝手されて相当鬱憤が溜まっているようだな。

三騎士の様子を見たジャックが

「わかった。君達に任せよう」

全員が配置に着いてしばらくすると、

ボコボコボコ

「出た」

ワームが姿を現した。ジンは、空を飛んで出現地点を目指す。喰われそうになっていた女兵士を『飛燕弾』を撃ってワームから助ける。もちろん『飛燕弾』では、大したダメージを与えられないのは、承知している。ワームはまた地中へと潜ってしまった。ジンはワームが潜った付近に着地して。

「大丈夫？」

「は、はい。」

何故か女兵士は、頼染めていた。

「じゃあ危ないからそこにいてね。土の聖痕ステイグマを発動『岩皇』」

ジンは、地に手を付いて地中のワームを探す。

「・・・見つけた。全員いくぞ、絶対仕留めろよ。」

地面が隆起したかと思ったら、地面が割れてそこからワームが飛び出してきた。ジンは、すかさずワームが地中に逃げないように地面を固める。

レティーシア、ジーク、カイル、と三騎士がそれぞれがワームに襲いかかる。

レティーシア、ジーク、カイルの三人は、剣術と魔術を併用して戦うスタイルを目指した。その結果、臨機応変な戦いができるようになっていた。三人とも長剣と盾の装備して格好だ。

三人のギルドカードは、

名前 レティーシア 種族 人間 性別 女

ギルドランク B

能力ランク 総合 A 気力 S 魔力 B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの女 皇女

名前 ジーク 種族 人間 性別 男

ギルドランク A

能力ランク 総合 A 気力 S 魔力 B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 一級騎士

名前 カイル 種族 人間 性別 男

ギルドランク B

能力ランク 総合 B 気力 A 魔力 B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 二級騎士

三人は目立った成長はないが、堅実な成長を遂げていた。

地上に出たワームは、その巨体をくねらせて周りの兵士を薙ぎ払う。

一般の兵士達が吹き飛ばされる中、レティーシア、ジーク、カイルはその巨体を避けてワームの体に飛び乗って剣と魔術で近距離攻撃を仕掛ける。三騎士は、向かってきたワームの体を各々の方法で撃退していた。聖騎士は、聖剣カリバーンの刃を巨大化させてその巨体を切り落とした。炎騎士は、ワームの体に飛び乗って魔剣レヴァンティンを突き刺し体内から燃やす。竜騎士は、巨体を片手で受け止め空いた手に持った竜剣ドラグニルで切りつけていた。

数分の戦闘の後、ワームは力尽き黒い粒子となって消滅した。

「助かったよ、ありがとう」

「こつちも助かった。三騎士がいなければもつと手間取っていただろうからな。」

「今から他のところに行くのかい？」

「いいや、様子見する。俺が行かずに片付くならそれに越したことは無い。」

「そつえば、西方軍には遊撃部隊を行かせたらしいが、北方軍は？」

「北方軍は、大丈夫だろ。最後の助っ人が少し前に到着したからな」

ジン達が話し込んでいた時、

西方軍では意外なことに『ランスロウ騎士団』が活躍していた。『ランスロウ騎士団』は、あらゆる魔物との戦闘を想定して準備をし

ていた。その中にワームに対する対策もあつたのだ。

ワームが好む魔物の肉にワーム用の痺れ薬を大量に含ませたものを仕掛ける。肉を食べて動きが鈍ったところをカロルドの剛槍がワームを貫いていた。他の騎士たちもワームを攻撃している。『双獣そつじゅうの双炎そつえん』のメンバーもワームを一体撃破していた。

北方軍では、ワームが大きな長方形の岩塊から体を突き出した状態で身動きが取れなくなっていた。

これをやったのは、先程戦場に到着した最後の助っ人

岩窟竜のストルだ

「さあ、後は適当に倒してくれ」

身動きの取れないワームを、竜騎兵が始末して回る。

「助力感謝する。」

「あなたもジン殿の、彼は計り知れませんか」

「ありがとうございます。ストルさん」

王と王女が謝辞を述べる。

「久しぶりだな。ストルの爺さん」

銀龍のアルベルトは、気さくに挨拶をしていた。

「アルベルトの坊やか、大きくなったなあ」

「どうも」

「しかし、来るのが遅れてすまなかったな。かなり被害がでたそう
な。どこかの高貴な人間が死んだと聞いたが」

「ああ確かに死んだよ」

「えっ、どの方が？あまり騒ぎにはなっていないようですが」

トウカも知らないようだ。

「グスターだ」

南方軍の天幕

「グスターが、死んだ、だ、と」

愕然としたジンが報告を繰り返す。

「ああ、うん悪くワームの一番最初の攻撃で呑み込まれたようだ。
どうしたんだい？君はグスターを嫌っていたと思うのだが」

「俺の身内を攫った黒幕が、グスター王だったんだ」

「なっ」

「あの野郎、俺が殺^やる前に死にやがって！」

グスターの名前を聞いて、グスターに対しての怒りを思い出したが、

その本人はすでに死んでいる。やり場の無い怒りが、ジンの心を満たす。

「・・・ジンどうするんだい？グスターは王だったから、カルモンド王国に賠償を請求することもできるが」

ジャックが恐る恐る尋ねる。下手をしたら国際問題になる可能性がある。

しかし、ジンは怒りをなんとか治めて

「しないよ、俺のはあくまでグスター個人に対する恨みだ。憎しみの対象を広げるようなことはしない。そんなことをしたらきりが無いだろ。」

「それを聞いて安心した。今はエクス王子が指揮を執っているそうだ。」

ジンは本当に疲れた様子で

「そうか。俺は疲れた、肉体的にも精神的にも。だから少し休むことにするよ。」

「わかった。横の天幕を使うといい、クリス、ジンを案内しなさい。」

「わかりました。ジンさんこちらへどうぞ」

55話 第1回 世界防衛戦：休憩

開戦から17時間が経過した朝の5時

ワームを撃破してからも前線では戦闘が続いていたが、それほど激しい戦いにはなっていなかった。

南方軍の天幕では

「ジンは、大丈夫だろうか？」

ジャック騎士王は、ジンの騎士に質問してみる。

「大丈夫でしょう。主はグスター王の死ではなく一発も殴れなかったことにショックを受けていたようなので」

「まあ、確かに私を含め他国の王にとってグスター王の死は、どちらかというと言報ですからな」

「その内、落ち着きますよ。」

「できれば、早いほうがいいだろう。何か無いかな？」

「そうですね。・・・女、ですかね」

「英雄色を好むと言うしな。よしクリス、シャルロット、ジンを励まして来い。」

シャルロットとは、パラディン聖騎士のことだ。貴族のお嬢様で、髪型はボリ

ユームたつぷりな長い金髪を巻き毛にしている。顔立ちは、可愛らしくまだ子供っぽさを残している。

「わかりましたわ。私も英雄殿に興味がありますし。」

「シャルロット、もしかしてジン殿のことを」

「ち、違いますわ。というか展開が急すぎませんか、クリス様」

真っ赤になって反論するシャルロット。

「そうかなあ？」

「そうですね」

「・・・まあいいか、それじゃあ行こうか」

「はい」

二人は、天幕を出る。

「クリス様、英雄殿はどういう御方なんですか？」

「わたしも、それほど詳しくありませんが。聞いた話だと、グーロムとの戦争の時に人を殺して悲しんでいたそうです。」

「どうしてですか？戦争ならしかたないではありませんか」

「彼は仕方ないから殺す、というのが嫌いだそうです。それに彼の

故郷は戦争の無い所だったそうですよ。」

「平和だったんですね。結局どんな御方なんですか？」

「うーん、難しいな。会って話してみるといい。その方が早い」

「まあ、それはそうでしょうけど」

二人は、話しながら横の天幕に移動する。
ジンがいる天幕に近づくと中から

「ご主人様、気持ちいいですか？」

「ああ、気持ちいいぞ」

「「ご主人様こっちは、どうですか？」」

今度の、声は少し幼く感じる。

「ご主・様、・・・堅いですね。」

「・・・熱いです」

「じゃあ今度は、わたしが・・・に乗りますね。」

天幕越しでよく聞こえない

「「ご主人様、次は私ですよ」」

シャルロットの顔がどんどん赤くなっていく。すぐに限界がきたよ

うだ。シャルロットは、天幕の中に飛び込んで

「あなた方戦場でいつたい何をしているんですの!？」

「うん？」

「・・・えーと、マッサージかな」

「マッサージですね」

「指圧です。」

「へっ」

シャルロットは、お嬢様らしからぬ声をだした。

シャルロットが入った天幕の中には、うつ伏せになった英雄と、その背に乗って指圧をしているエルフの女性と足を揉んでいる小人と思われる少女が二人いた。

「えと、私は、その・・・失礼しますわ。」

勢いよく天幕に入ってきた令嬢が、今度は飛び出していった。

「キリ、ユリ確保」

「「はい」」

動揺していたシャルロットは、キリとユリの連携の取れた追い込みにあっさり捕まった。小さなキリとユリを乱暴に振り払うこともできずシャルロットは天幕の中に連れ戻される。

「シャルロットさんが、どういつ勘違いをしていたのかは大体わかってるよ」

「うっ・・・その、すみません」

「べつにいいよ。可愛かったから」

シャルロットの顔がこれでもかど赤くなっていく。

「主は、元々気づいていたから、あまり気にしなくてもいい」

テツも人の姿を取って話に加わる。

「気づいていた？」

「主は、精霊を使って周りの音を拾っている」

シャルロットが責めるようにジンに目を向ける。

「ごめんね。可愛かったから」

ジンのちよつとした悪戯だった。

「いえ、私が勝手に勘違いしたんですし。とてもお元気そうですね。先程はグスター王が死んで、ずいぶん落ち込んでいましたのに」

さっきの話題を出す、それがシャルロットの精一杯の反撃だった。

ジンはその言葉に、思っていたより明るい口調で

「ああ、そのことで来てくれたのか、ありがとう。」

「べ、別に、そんなことは」

ただの礼に動揺するシャルロットをクリスが面白そうに見ている。視線に気づいてシャルロットは、俯いてしまった。そのシャルロットに向かってジンが話す。

「本当に来てくれてありがとう。ただ、前向きに考えることにしたんだよ。俺があの時グスターを殺したり痛めつけていれば、国際問題になっていただろう。小国の王達から反発が出たかもしれない、これからのことを考えると、それは困るんだ。それにワームに生きたまま喰われるのも、まあまあ惨いと思うしな。」

シャルロットとしては、『まあまあ』どころではないと思うのだが、もっと酷いことをするつもりだったのだろうか？

「それで精神的には、折り合いが付いたから今度は、体を休めていたんだよ。君達も休んでいくといい、イリヤは治療術師だから、マッサージも気持ちいいぞ。」

「遠慮しますわ。まだ戦闘中ですから」

「そういうな。おそらくこれから先にこの戦いの山場が来る。こういう戦いでは、終わりの方で何かがあるものだし、東方軍にだけワームが出なかったのも気になる。きっと何かあるだろう。だから今は体を休めたほうがいい」

「はあ、それでは、休みますか？」

「休みましょう」

「じゃあ、シャルロットさんには、俺がマッサージしよう」

「そんな英雄殿にでもらうわけには」

「いいからいいから、座って座って」

シャルロットを近くの椅子に座らせる。

「俺は肩揉みをさせて貰おう。」

ジンがシャルロットの肩に手を置くと

シャルロットが肩をピクツと震わせる。

「あの、今何を？」

「ああ、俺の肩揉みは、指圧と電流を使ったものでね、ちよつと刺激が強いかもしれない」

「あの、胸が、ピリッてしたのですが」

「まあ、上半身全体をマッサージするようなものだからね。胸も対称だよ。大丈夫、触ったりはしないから」

ジンは、肩揉みを続けると、シャルロットの胸も大きく弾んだ。

「気持ちいい？」

「気持ち、いい、ですが、これ、は、その、あん」

シャルロットの身体がピクピク震えている。誰が見てもわかるくらいシャルロットは、強い快感を得ていた。ジンは、シャルロットの身体が火照っていくのに気づかないふりをして肩揉みを続ける。

「それは、よかった。もっと激しくしよう」

「あつ、ちよ、まつ、ああん」

シャルロットは言葉を中断され、その後も長い間、肩を揉まれ続けた。

「あつ・・・んっ・・・あゝ・・・」

シャルロットの顔はだらしく緩み、開きっぱなしの口からは、よだれが垂れている。シャルロットは、長い肩揉みでトロトロになっていた。

そこにジンは

「それじゃあ、これで止めだ」

そう言うとジンは親指で背中を押す、するとシャルロットが

「……………」

身体を特に胸を大きく震わせて仰け反る、声にならない悲鳴を上げて絶頂に導かれた。くたゝとジんに背中を預けるシャルロットに。

「どうだった？」

「とても、はあはあ、気持ち、よかった、ですわ、英雄様。」

この時のシャルロットの心の中は、ジンの存在がすべてになっていた。

「また今度してあげるよ」

「はい、お願いしますわ。」

シャルロットは、そこで一度気を失った。一部始終を見ていたクリスは、真っ赤にしてイリヤのマツサージを受けている。

「俺がしょうか？」

「え、遠慮する。と言うよりあれは絶対に、肩揉みじゃ無かったと思うんだが」

「ハハハ、まあそうかもね。」

「はあ」

ジンの笑顔にクリスはため息をついて

「・・・それより先程の話は本当ですか？」

「あくまで推測だよ、推測」

「それでも、もし何かあったら」

「そのために今は休むんだよ。どうせ即応できるのは、俺かアルベルトくらいだからな」

「そうですね。．．．．．どうして後ろに立ってるんですか？」

「肩揉み」

「やっぱりですか！」

ガシッ

ジンがクリスの肩を掴む。

「あっ．．．」

「大丈夫だよ。まだ時間はあるから」

「や、だめ、うっん．．．あっ」

それから20分かけて、クリスは絶頂に導かれた後、失神した。

ちなみに、今回戦闘には参加していない三人のギルドカードは次のようになっています。

名前	イリヤ	種族	エルフ	性別	女
ギルドランク	D				

能力ランク 総合B 気力B 魔力A
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 キリ 種族 小人俗 性別 女
ギルドランク E
能力ランク 総合D 気力B 魔力E
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 ジンの娘

名前 ユリ 種族 小人族 性別 女
ギルドランク E
能力ランク 総合D 気力B 魔力E
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 ジンの娘

56話 第1回 世界防衛戦：贈り物

開戦から18時間が経過した朝の6時頃

クリスとシャルロットは数分してから意識を取り戻した。

「身体の調子はどう？」

ジンがいい笑顔で質問する。

「・・・疲れが、取れていますわ」

「なんでしょうこの敗北感は。」

「直接は、もっと気持ちいいんですよ。」

イリヤが、二人に耳打ちする。

二人は、何を想像したのか、顔を真っ赤にして俯いてしまった。初々しくて可愛いらしい。

「【ジン君、聞こえるか？】」

「どうした？」

「【東方軍に魔物が集中し始めた。とにかく来てくれ】」

「わかった」

「当たってほしくない予想ってどうしてこう当たるかな。君達も来

てくれないか。きっと戦力が必要になる。」

二人は、ジンの言葉に頷いて立ち上がる。

開戦から19時間が経過した朝の7時になり辺りがすっかり明るくなった頃に、ジンたちは東方軍に着いた。

東方軍の戦場では、5千の牛鬼が防衛線を作っていた。その後方では黒い地面が見える。その黒い地面はノワールサイの大群だった今までとは桁が違う数千のノワールサイだ。

「クルトどうなっている！」

「ジンくんよく来てくれた。」

「それよりあれは何なんだ？お前も警戒はしていただろう」

「それが、急に東方軍以外のところから牛鬼が集まってきたて防衛線を張ったんだ。それもほとんどの個体が盾を持っている」

「堀は？」

「無効化されている。さらに後ろには、大蛇が控えているのを確認している。」

「最悪だな。あれが突っ込んできたら、防げないぞ」

「ああ、今腕利きを集めているが、一度ワームの対策に三方に散ってしまっている。」

「これが狙いだっただのか、これではつきりしたな。黒い半球には、何かしらの意思のようなものがある。そして高度な作戦を立てられる。神のやつはそんなこと言っていなかったぞ。最悪だな」

「確かに最悪だな。何か策はあるかい？」

「・・・ちょっと待ってくれ、考える時間をくれ」

突っ込んでこられたら負けだその前に終わらせなければいけない。牛鬼はどうとでもなる。ノワールサイを潰せればいいんだ。時間稼ぎがいる。

「アルベルトは？」

「ここにいるよ、ジンくん」

「良かった。プレスは撃てるか？」

「二発ぐらいなら何とか」

「上出来だ。クルトまず牛鬼を殲滅してくれ。俺がノワールサイを殲滅する。テツ付いて来てくれるかい？」

「私はいつも主と共にあります。」

テツは、当たり前という顔をして頷く。

「ちょっと待ってくれ、そんなことが可能なのか？」

「俺を信じる」

「ご主人様、私も」

「主、私も」

「お兄様！」

「ジン様、私も連れて行ってください」

ジンの仲間達が次々に同行を申し出るが

「ダメだ。危険すぎる。君達では間違いなく死ぬ。生き残れるとしたら」

ジンは天幕の中を見渡して。

「俺だけだ。」

ジンの言葉に皆、押し黙る。そこにアルベルトが近づいてきて小声で。

「（ジンくん、奥の手を使うのかい？）」

「（・・・使う）」

「（あれは、長時間戦闘には向かない）」

「（それでもだよ。）」

東方軍、指揮官のクルトが

「ジンくんにすべて任せるよ。皆には無責任と言われるだろうが、

我々には他に手立てがない。・・・また、ジンさんに頼ることにな
ってしまっただな。」

「次に活かせ三年後がある、それじゃあ説明するぞ、戦いの流れは
こうだ」

ジンが皆に説明をすると。

「ジン様」

「主、ご再考を」

「お兄ちゃん」

「ご主人様は、死ぬおつもりですか」

仲間がジンを引き止める。奥の手を知らない仲間には、余程無謀な
作戦に聞こえたのだろう。

「大丈夫だ、奥の手を使う」

「奥の手？」

「でも、」

いきり立つ仲間をアルベルトが

「ジンさんに、任せなさい。」

「お父様！」

「ティリエル、アルベルトは俺の奥の手を知っているからの言葉だ
から、そう責めるな」

「・・・すみません」

「さあ、いくぞ。時間がない。クルトすぐに牛鬼を殲滅してくれ。そのあと鶴翼の陣を作ってくれ。一匹も逃がすなよ」

「わかつているよ」

「俺は、時間が来たら出る。その前に、他の王にも説明がいるな。クルト任せた。俺は準備してくるから」

しばらくして、各国の王族が東方軍の戦場に到着する。クルトが各国に作戦を話す。するとラインツ王が

「・・・できると思っているのか？」

「できる。それに他に方法がない。」

「素通りさせられないのか？」

「三年後、後ろから攻撃を受けかねない、もしそうになったら確実に負けるぞ。」

「そう、だな。結局我々は彼に頼るのか。」

「くそう！」

キリガネが、嘆く。

トラント王が

「シャルル、アレを英雄殿に届けてくれ」

「わかりました。」

シャルルが天幕を出る。

「皆さん、配置に着いてください。これがおそらく最後でしょう。我々がジンくんの負担を軽くしましょう。」

シャルルは、ジンを探して陣地を走り回る羽目になった。居場所がはつきりしなかったのだ。目撃証言を元にジンを探して見つけた場所とは馬車の中だった。

「ジンさん、こんなところで何をしているんですか？」

そこには、台座に座って震えているジンがいた。顔色も悪く見える。

「えっ」

「・・・見られたか」

「だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫。ちょっと怖いだけだよ。」

「怖い？」

「ああ、怖いんだ。確かに俺には力がある。大抵の事ならできてし

まう力が、だからだろうな、俺は今まで命の危険を感じる戦いの経験がないんだ。だから、これからある死ぬかもしれない戦いが怖いんだ」

シャルルにとってジンは、まぎれもない英雄だ。それは今でも変わらない。一度は命を助けられてもいる。

しかし、英雄としてしかジンを見ていなかったシャルルには、目の前のただの少年に掛ける言葉が出てこなかった。

しばらくして。

「あー落ち着いた。シャルルも座ったら。」

「あ、はい」

ぎこちなくシャルルがジンの隣に座る。

「さっきの秘密にしておいてね。」

「な、んで、ですか？」

言葉に詰まりながら質問する。

「俺は、連合軍を作った張本人だからな。象徴みたいな意味もあるから、ああいうのは見せられない。」

そこには、いつもの『英雄ジン』がいた。今のシャルルには、それがとても脆く見えた。

脆く見えたからか、シャルルにはジンが死んでしまう気がした。

だからか、シャルはとんでもないことを言った。

「い、生きて帰って来たら、一つなんでも言うことを聞くわよ!」

言った内容もすごいが、このタイミングでは、死亡フラグになりかねないと思うのだが。

「なんでもだね」

「え、ええ、余程のことではない限りは。」

「わかった。絶対に帰ってくるよ。」

シャルの頭を撫でる、気持ちよさそうに目を細める。

「あの、これせんべつ餞別。」

シャルが赤い紙の束を五つ取り出した。

「これは?」

「爆符五十枚を束にした物よ。爆符は、火炎系の上位の魔術『エクスプロージョン』を込めた魔符よ。」

「高いんじゃないか?」

「爆符1枚、1万ギルぐらいね。」

5束×50枚×1万ギル＝250万ギル

ジンがこの世界で元王国領の奴隷^{ユミ}推奨派掃除をして稼いだのが100万だった。その2・5倍だ。日本円に直すと二千五百万円相当だ。

「いいのか？」

「いいの。クラフト商国なんて今回大した事していないんだから。その、頑張ってね」

「ありがとう、シャルル」

もう少ししたら決戦だ。

決戦前にシャルルが贈った言葉と魔符は、ジンに力を与えた。

57話 第1回 世界防衛戦：決戦の始まり

朝の8時になった。開戦から20時間が経過した頃

決戦が始まる。

ジンは、ドラグーン・チーム竜騎兵部隊、アルベルト、ティリエル、ミリア、フェリスを連れて空にいた。空からの目算では、ノワールサイの数は、万に近い数になっている。

少し前にクルト率いる東方軍が牛鬼を殲滅に成功した。それからすぐにジンの作戦が始まる。

「まずは、第一段階だ。アルベルト頼む」

「任せろ」

銀龍のブレスが、堀を自分の身体で埋めているストーン・ゴーレムを吹き飛ばす。

第一段階で、第二の堀を再生することに成功。

「第二段階だ。竜騎兵部隊、爆符の束を投下」

竜騎兵が爆符束をノワールサイの大群に、シャルルに貫つた五つの内三つを落とす。

前のほうの三ヶ所で五十の『エクスプロージョン』が同時に発動し

大爆発が起きる。

ノワールサイ、五百体前後が吹き飛んだ。爆発した付近のノワールサイは爆音と爆風によって平衡感覚を失いその場に蹲っている。

爆発と同時にジンが急降下する。

空に展開していた魔鳥やガラスが、ジンに迫る。

そのヤガラスを高速で突っ込んできた竜騎兵^{ドラグーン}がランスで貫く。

「ジン殿に近付けな。全力で魔鳥を叩き落すんだ。ジン殿は我々の最後の希望だぞ。」

アルシナだ。アルシナが貫いた魔鳥に止めを刺しながら指示を出す。アルベルト、ティリエルも加わり魔鳥を攻撃する。

ジンは援護を受けて立ち止まらずにノワールサイの上空にたどり着く

「残りの力を一発の魔弾、魔弾装填『竜炎弾』」

大群の中心に砲口を向け撃ち放つ

ガンッ

『竜炎弾』が放たれ大群の中心に消える。魔弾が落ちた始点で大爆発が起き火柱があがる。火柱は、拡大を続けノワールサイを呑み込んでいく。炎の中のノワールサイが黒い粒子になって消えていく。

ノワールサイの大群、1割を焼き付くしてやっと火柱の拡大が終わり徐々に鎮火していった。

これが第二段階。

パリン

紅炎銃が、ガラスが割れるように砕ける。どうやら力を使いきったようだ。

ジンは、黒龍刀を抜いてノワールサイの前方に降り立つ。『黒飛板^{シュバルツ}』は、ティリエルに確保しておいてもらう。

「第四段階だ『四重・岩壁』」

岩壁が牛鬼と堀の間に

ジンが作った4つの低く長い岩壁が戦場を真つ二つにした。重ねた状態ではなく四枚横に並んだ状態だ。

これで、『岩皇』も解けてしまった。

今の戦場の配置は

東方軍<<岩壁<<岩窟竜<<第二の堀<<ジン<<ノワールサイの大群

空には、竜騎兵、アルベルト、ティリエル、ミア、フェリスの高空戦力

という配置だ。

「いくぞ、テツ」

「【主、ご武運を】」

狙いは、足だ。足を使えなくして身動きできないようにする。そうやって魔物の壁を作って時間を稼ぐ。

ジンは『竜炎弾』と爆符束で浮き足立っている大群に真正面から突っ込む。

身体を回転させながら左右の、ノワールサイの足を斬りつける。足を切られたノワールサイは、その場に転倒する。その頃群れが動き出した。転倒しているノワールサイは踏みつけられたり角で貫かれたりして死んでいく。ジンにも、多数のノワールサイが向かってくる。

「水の聖痕を發動『水龍』、^{ステイグマ}『流水陣』」

ジンは、水を使ってノワールサイの突進のベクトルをジンの脇を通るように操作する。

脇を通るノワールサイの足を斬る。多数のノワールサイが堀を乗り越えようとしている。おまけに、大蛇まで堀の近くに来ている

「まだ堀を、越えられると困るんだよっ」

ジンは、堀の近くに移動することにする。ジンは、移動しながらもノワールサイを斬りつける。

「『水翼』」

ジンは、『水翼』で水を確保してから

「『だいかすい大渦水』」

渦巻き状の大量の水が大蛇を中心とした場所の魔物を削り潰した。

「『水翼』・・・『万水』」

今までで最大量の水を出して堀を水で満たす。堀を乗り越えようとしていたノールサイは溺死することになった。さらに、これで大蛇の橋を使わない限り超えられることはなくなった。その代わり、『水龍』の時間はかなり減ってしまったが。

「はあ、はあ・・・」

堀を水で満たしてから一時間が経過した。朝の9時を過ぎた頃だ。

「はあ、はあ、さすがに疲れてきたな。」

この頃になると、ノールサイはジンを集中的に攻撃するようになっていた。ジンは、地面を転がりながら足を切りつける。

水を使った戦闘をしている中で転がり回っているせいで、ジンは泥だらけになっている。おまけに水を含んだ地面を、ノールサイが動き回るので地面が泥沼でいしやうになってしまい一箇所に長くいられない。そのためジンは移動しながらの戦闘を強いられた。

「【ご主人様、大丈夫？】」

「なんとかな」

今度は大蛇が三十匹現れた

「また大蛇が出てきたか、さすがにすべてを殺すことはできないな。だが見逃すわけにもいかない。近いのから、片付けるしかないか」

近くにきた、ノワールサイを斬りながら愚痴る。

大蛇に向けて走りだすと今斬ったノワールサイを挟んで反対側にいるノワールサイ3体が、倒れているノワールサイをジンに向かって突き飛ばしてきた。

「なに！？、がっ」

ノワールサイの、巨体をもろに受けてしまう。地面を転がるジン。

「【主！大丈夫ですか！？】」

「ああ、大丈夫だ。身体中が痛い、酷い怪我はしていない、それに座ってはいられ・・・ない」

突撃してきたノワールサイの巨体を転がって避ける。避ける際に足を斬るのを忘れない。

「はあああ、これは、さすがに、きつい」

周りをノワールサイに囲まれてしまった。これでは、大蛇のところに行くことができない。

これではノワールサイが堀を突破するのも時間の問題だ。

ノワールサイの上空では、魔鳥をほとんど駆逐したアルベルト達が、上空からノワールサイへの攻撃に移っている。

アルシナが、ノワールサイに囲まれているジンを見つけた。

「ジン殿が」

それを見て、アルシナとティリエルがジンのところに行こうとする。それを銀龍の姿のアルベルトが

「待ちなさい。君達が行って何ができるんだ」

「ですが！」

「君にはそれを使う仕事があるだろう」

アルベルトが、アルシナの竜に括りつけられている爆符の束を指さす

「それに君達が行っても足手まといだ。今は自分の役目を全うしなさい。」

「・・・そう、ですね。」

「わかりました。お父様」

「ありがとう。私はもう一度ブレスを放ったら、岩壁の前に陣取る君達はこのまま攻撃を続けてくれ」

地上では、大蛇の橋が10本も架かろうとしていた。

10時ごろノワールサイの堀を渡るのが本格的になっていた。

「そろそろいいだろう。」

アルベルトがブレスを吐く。しかし、前ほど威力が出せず大蛇の橋を4本吹き飛ばした頃から、ブレスの威力が落ちていき五匹目は落とせなかった。

「爆符を落とします。」

残り二つの爆符の束も投下されて、大蛇と大蛇の上と付近にいるノワールサイを吹き飛ばした。

しかし、残った四本の大蛇の橋から次々と堀を乗り越えてくる。

岩壁の前に、銀龍と岩窟竜が陣取りそれを迎え撃つ。

岩窟竜がブレスでノワールサイを吹き飛ばす。

銀龍は風の魔術で転倒させる。

そして二頭の竜の攻撃を掻い潜ったノワールサイと竜がぶつかり合った。

岩窟竜は踏み潰し、顎でノワールサイを噛み砕く。

銀龍は、尻尾で掴んで投げ飛ばし、近距離から風の刃で切り裂く。

しかし数はいつこうに減らずノワールサイの角が竜の体を突き刺さり始める。幸い竜の鱗は硬いので深手には、ならなかったようだ。

岩壁の前は激戦区と化した。ストルとアルベルトが防げなかったノワールサイが岩壁を崩そうと何度も突撃する様子も見える。

その頃、ノワールサイに囲まれていたジンは

「『小突』」

二刀に分けた小太刀がノワールサイの目を貫く。

刀神に師事した神双流では、小太刀は基本的に防御だが、少ないが攻撃技もある。『小突』は、最小限の動きで予備動作なしで出せる突き技だ。ノワールサイの目を貫くことは、簡単だった。

この頃のジンは、目を貫いて頭の中を潰す戦法に変えていた。囲まれた状態で足を斬って転倒されると、すぐにこちらの身動きが取れなくなるため、確実に殺せる戦法に切り替えたのだ。しかし、この戦法も限界が見えてきた。

ジンの疲労が、ピークに達してたのだ。二時間休憩なしでAランクの魔物と戦闘しているのだ無理もない。

「はあはあ、．．あと二時間を．．切ったか。もういいだろう。テツ、そろそろ奥の手を使う一度一刀に戻って」

「【わかりました。】」

アルベルトにだけは、以前戦ったときに片鱗だけは見せた奥の手。それを全力で使う。

「これから当分は、俺の独壇場だ。」

57話 第1回 世界防衛戦：決戦の始まり（後書き）

こちらの都合でギルドカードの仕様を一部変えました。
申し訳ありません。

58話 第1回 世界防衛戦：終戦

アルベルトとストルだけではノワールサイの猛攻を抑えきれず、岩壁の一部が破壊されノワールサイが一体が通れるぐらいの穴ができる。そこからノワールサイが岩壁を抜けようとする。

一体のノワールサイが岩壁を抜けるのと同時にジンが奥の手を発動する。

「人工聖痕、発動『無敵』」

発動と同時に疲労の濃かったジンの体に生気が戻る。

「【主これはいったい？治療ではありませんよね】」

「『無敵』は、七大精霊全てを等しく混ぜることできる『無色の力』を、扱う能力だ。俺が造り出した人工聖痕に、その『無色の力』を貯めていたんだ。」

「【『無色の力』？人工聖痕？】」

「『無色の力』はあらゆる力の源であらゆる力に色付けできる。今は、体力と治癒力に変換した。もちろん気力、魔力にも変換可能だ。人工聖痕は俺が7つの聖痕を調べて作り出した8つ目の聖痕だ。」

七つの聖痕と『スライグマ・ウエボン聖痕武器』に8つ目の人工聖痕。これこそが聖痕使い・ジンの本領だ。

ノワールサイが突進を仕掛けてくる。

突進を仕掛けたノワールサイはジンの手前で止まった。

どうやらジンが片手で止めたらしい。ノワールサイの突進は木をへし折るほどの威力がある、それを片手で止めてみせたのだ。

「オラァア」

目の前に突っ立っているノワールサイの横つ面を蹴り飛ばす。ノワールサイの頭がひしゃげて車よりも重い体がふっ飛んでいった。

飛んだノワールサイは、辺りのノワールサイを道連れにして突き進む20体ほどを道連れにして消滅した。

ジンは、岩壁の穴が空いた場所に向かって走り出す。『無敵』状態のジンの気力はSSSを軽く越える。数秒で岩壁にたどり着いた。進行方向にいたノワールサイ全てに斬撃か拳打を浴びせる、その全てのノワールサイは、ジンの後方で黒い粒子になって消滅を始めている。

ジンは、岩壁に取り付いているノワールサイ数百体に、向かって覚えての『フレイム・バレット』を放つ。普通の『フレイム・バレット』ではない、一つ一つの火球は大きく、熱量も異常だ。ノワールサイの直撃した部分が消滅する。残った部分も黒い粒子になって消滅する。

岩壁が余波で、熔けている。後で聞いた話によるとガラス化していたらしい。

アルベルトとストルの場所に移動すると

「ジンくん、なのか？」

ストルは、自分の前に来た人物が姿形は一緒なのに、一瞬誰かわからなかった。それだけ今のジン存在感は大きくなっていた。
アルベルトが心配そうに

「・・・大丈夫かい？」

「まだ大丈夫だ。今からノワールサイを殲滅する。アルベルトとストルさんは岩壁の崩壊した近辺を守ってくれ。」

「了解した。無理はするなよ。」

「努力はする」

ジンはその後も、戦場を支配し続けた。

ジンが通った後方には黒い粒子が立ち上る。しかし、すべてのノワールサイを吹き払った結果ジンが通った道からは黒い粒子は、発生していなかった。

ジンの左右から黒い粒子が立ち上る様を見た竜騎兵が

「まるで黒い翼のようだな。」

と呟いた。この言葉が世界防衛戦の終了後に、軍に伝わりジンが愛用している闇の精霊王お手製の黒衣と『黒龍刀・鉄』と『黒飛板』シュバルツが合わさって、戦後ジンは、色々な人に特に兵士から『黒翼』または、英雄と合わせて『黒翼の英雄』と呼ばれるようになった。

ジンの圧倒的な力のおかげで戦いは終わりへと近づいていった。

長い戦闘も終わりに近づき12時を回った。開戦から24時間が経過し大侵攻の日は終わったのだ。魔物の大量発生もすでに止まっている。後は残敵を倒すだけとなった。

ノワールサイの数も1割以下になっている。ジン1人でAランクの魔物を8000体近くは、倒したことになる。

しかし、残り約五百体となった頃

ジンの力の源の『無敵』が解けてしまった。

ジンの動きがガクツと鈍る。『無敵』はアルベルトが言ったように、長時間の使用には向かない、体に負担がかかりすぎるのだ、使用中は『無色の力』で誤魔化しが効くのだが時間切れになると、身体に力が入らなくなり思うように動けなくなるのだ。

左から来たノワールサイの突進をまともに受けてしまいジンの体が空を飛び岩壁に直撃する。

「がつ……く、そ……ぐつ」

ジンは何とか立ち上がるが、突進を『黒龍刀』で受けた際に左腕が折れたようだ。骨折の痛みに、動きが一瞬止まってしまった。

そこを、正面からノワールサイが迫る。ジンは避けられる状態ではない絶体絶命に状況に陥る。

その時、二人の女が岩壁を乗り越えてジンの前に二人の女が降り立つ。

『剣姫』と聖騎士の二人だった。

『剣姫』の剣がジンに迫った角を切り落とし。
聖騎士が巨大化させた聖剣でノールサイの首を落とす。

「クリス、シャルロットありがとう助かった。でもここで何をしている。これは俺の仕事」

「お黙りなさい！英雄様は、わたくしが戦えるようにと、か、か、肩揉みをしてくれたのではないんですの」

「そうです。我々が、あとの激戦を戦えるようにするために、私を絶頂^{イカ}せたのではないのですか？」

「ク、クリス様、表現が直接的すぎます。」

真っ赤になったシャルロットが指摘する、するとクリスの顔にも赤色が混ざる。

「確かにそうだが」

ジンが肯定すると

「それを危険とわかった途端に全部一人で抱え込むなんて酷いですわ。」

「死ぬのが、わかっている戦場に連れて行けるわけがないだろ」

「わかっています。わかっていますけど理解はしていますけど、納得できないんです。」

「俺に、どうしろと?」

「いいんです、英雄様はそのままです」

(さっき酷いって言っただろうに)

「三年後は、一緒に戦ってくださいね」

「努力するよ。それに、まだ終わっていない」

前方にはまだノールサイが500体前後いるのだ。というか今もこっちに向かってきている。

「だめです。ジン殿は休んでいてください。その腕では、まともに刀も振れないでしょう。」

「まだ右腕がある」

「主、駄目です。」

テツが人の姿に戻ってしまった。

「テツ、だがな」

テツの方を見ると目に涙が浮かんでいた。

「主お願いします。休みましょう。もう無理です。」

ずつと傍で見て、そして使われていたテツには、ジンの身体がすでに限界なのを誰より理解していた。

「・・・わかったよテツ。不安にさせてごめんな。」

折れていない右腕でテツを抱き寄せる。ジンの腕の中で泣いているテツの背中を撫でながら。

「しかし、どうするんだ？俺抜きで」

今はアルベルトとストルが支えてくれているが、二人も結構ボロボロだ。ノワールサイ500体の相手はできないだろう。そう思っていたときに、

「ご主人様」

「主、ご無事ですか」

「ジン生きてる！」

「お兄様、大丈夫ですか」

「お兄ちゃん」

「ジン様」

「ジン殿、助けに来ました」

ジンの仲間が、岩壁を乗り越えたり空から降りてきたりしてイリヤ、キリ、ユリの戦闘能力の低いメンバー以外が勢ぞろいになっていた。

「あとは、私達にお任せください」

「わたしは、ノワールサイにリベンジだね。」

その後も、続々と救援が到着する。残りの三騎士や竜騎兵部隊を率いたアルシナも到着した。『ランスロウ騎士団』まで来ている。

皆この戦いに参加した人間の中で、かなりの実力者たちだ。それがジンのために一箇所に集まってきてくれたのだ。

「皆、ありが……と……う」

仲間の到着で緊張が解けたのだろうジンは、そこで気を失ってしまった。

彼らの活躍で程なくしてノワールサイ500体は討伐されジンは救出された。

59話 戦いの後

異世界363日目

ジンは、馬車の中で目覚めた。

目を開けると嬉しそうなだけど泣きそうな表情を浮かべたソフィアが見えた。

「ジン様・・・、良かった。」

「おはよう、ソフィア」

ソフィアの顔が上に見えるどうやら膝枕をされているらしい。

「ジン様は暢気ですね。2日も起きなかったんですよ。」

そんなに、寝ていたのか。前の世界では、長くても十時間以上寝たことなんてなかったのに。

「本当に良かった。皆さんも呼びましょう」

「ちょっと待って。少しこのまま膝枕を楽しみたい。」

ジンは、ソフィアの膝に手を置いてソフィアの動きを止める。

「あっ、はい」

ソフィアは、嬉しそうに返事をしてジンの頭に手を置いた。

「ソフィアさん、お兄ちゃんの様子はどうですか？」

だが、すぐにフェリスが、馬車に入ってきた。

「お兄ちゃん！、起きたの」

顔を外に出して

「皆さんお兄ちゃんが目を覚ましましたよ。」

騒がしくなりそうだな。

予想に反してジンの仲間たちは、静かなものだった。抱きついたりキスしたりはしたが、長くは留まらずに馬車を出た。

ジンが寝ている間に、皇都に着くまでは大人しくすることに皆で決めたらしい。

仲間の後は、各国の代表たちが訪れた。ジンの世話をしていたイリヤが気をきかせて外にでる。

「ジンくん、良かった。目を覚ましたんだね」

「各国の国王が、こんなところに集まって何事だ」

「君は今回の戦いの最大の功労者だからね」

「この場であなたを軽視する者はいませんよ。」

カルディナの言葉にすべての王が頷く。

「まあいいか。今はどんな状況なんだ？」

「残敵は、1日かけてほとんど駆逐したよ。今は混合軍1万を残している。」

「皇都に戻ったら戦勝パーティーが開かれる。ジンくんには、それに参加して欲しい。」

「別に俺は出なくてもいいだろ」

「戦勝パーティーは、活躍に応じた報奨が渡される場でもある。君が報奨を受け取らないと誰も受け取ることができなくなってしまうのだが」

クラフト王国のトランド王が、ジンを説得する。さすがは商人の王だ、言葉が巧みだ。つまり他の人のためにも参加しろということだろう。

「いつなんだ、少し休みたいんだが。」

「4日後には、皇都に着くそうだ。それから3日後に開かれる。」

「・・・わかったよ」

「一先ずはそんなところだ。そのうち、会議を開くから、その時も参加してくれ」

「ああ」

「それじゃあ、お大事に」

王が次々と出ていくなかカルディナだけが残る。王と入れ違いに、『舞姫』トウカ王女、『剣姫』クリス王女、聖騎士のシャルロット、竜騎兵のアルシナ、クラフト商国のシャル王女が馬車を訪れた。皆戦いに参加した身分の高い女性が馬車に入ってくる。

アリシヤ皇女と聖女ウリアは、皇都でお留守番だ。

「起きられたんですね。お加減はいかがですか？」

「体がだるい程度だ。骨折も治っているみたいだし。」

イリヤの頑張りのおかげだろう。

「綺麗どころが集まってどうしたんだ」

「前の時と同じよ。父さんに押し込まれたのよ」

「前もそうだったのですか？」

そういえばアルシナとシャルロットは、前の時はいなかったな。

「ええ、今回はわりと本気でジンさんとの繋がりが欲しいようですが。」

「英雄様のお仲間の方はいいのですか？」

「クルト皇帝が何か取り引きしたようですよ。」

「まだ俺は」

「存じていますわ。英雄様はまだお疲れですわ。ですから、お世話をさせていただきますいませ」

さつきも言ったが、ここにいるのは、竜騎兵のアルシナを含め皆、高貴な身だ。つまり世話をしてもらう側の人間だ。

「・・・今まで看病の経験は？」

「「「ありません」」」

「・・・知識は？」

「「「ありません」」」

身の危険を感じていると

「わたくしは、一応軍で教えられましたわ。」

「私もあります。」

シャルロットとアルシナが名乗りを上げる。

「二人の言うことを良く聞いてくれ、やってくれ頼むから」

まあ、死んだりはしないだろ。

結果として、まあ死にはしなかった。

トウカとシャルルが、怪しげな薬を飲まされそうになったり。
クリスとシャルロットが肩揉みを思い出してジンに欲情したり。
カルディナが、体を拭くといって冷水をかけてきたり。
と色々あったがな。

アルシナが、普通に世話をしてくれたのが救いだっただ。

「アルシナ、ありがとう」

「気にするな、大した事はしていない。」

「今はそれが何より貴重なんだ」

「そ、そうか」

その後はアルシナがほぼ一人でジンの世話をしていた。アルシナは上機嫌だったが、他の女は不満そうだった。

その夜

アルシナがジンの身体を拭いているとトウカが

「ジンさんは、どうしてこんなになるまで頑張ったんですか？」

それは、ジンといた時間の少い、ここにいる女性がずっと気になっていたことだ。

「世界を守るのに理由があるか？」

「ジンさん、言っていたじゃないですか。この戦いは、お前達の戦いだって」

「手伝いくらいはするさ」

「手伝いでここまでしますか？」

「世界を守るならそれくらいするさ」

「でも、ジンさんが死んだら。その後はどうすればいいんですか？勝てないですよ」

「そんなのわからないさ。もしかしたら俺が助けたやつが、俺よりすごいやつに成長するかもしれないじゃないか」

そんな人いませんよ、と皆が思ったが口には出さなかった。

「どうしてジンさんなんですか？」

「俺しかいなかったし、俺にしかできなかった。それに、世界を守ればそれだけ可愛い子に会えるかもしれないだろ。実際に君達に出会えた。」

世界を守るということは、王女達のことも入っているのだろう。でも、それではジンを守る人がいない。

そこにアルシナが

「なら、ならわたしがジン殿を守ります。まだ力不足ですが、いつか隣で支えてみせます。」

「その役目は、わたくしのものですわよ」

シャルロットも名乗りをあげる。

「シャルロット、それは私の役目です。それには、まずはジン殿の仲間と同じ土俵に立たなければいけませんね。」

ジンを置いて話がどんどん大きくなっていく。

だがジンは、彼女らが自分を支えると言ってくれたことを嬉しく思う、そして以前仲間が同じことを言ってくれたのを思い出した。

異世界367日目

皇都についた頃、ジンの体調は、普通に動ける程度には治っていた。

ジンは、皇都についてすぐに屋敷に向かう。誘拐された子達が気になっていたのだ。

「お帰りなさいませ、ご主人様。よく、ご無事で。」

屋敷の使用人達がジンを出迎える。

「ただいま。皆大丈夫だった?」

「全然平気です。ご主人様が助けてくださいましたから。」

「そうか。皆一度中に戻ろう、話したいことがあるんだ。ここにいないやつらも一階の広間に集めてくれるか」

しばらくして、屋敷の全ての人間が広間に集まった。

メイドが23名 庭師が3名（全員女性）

ジンのチームメンバーが12名にクレア

これにジンを加えた40人がこの屋敷で暮らしている。

ジンはその内メイドと庭師の26人を、広間に集めた。

「今回、皆を危ない目に合わせて悪かった」

ジンが頭を下げる

「ご、ご主人様、頭を上げてください。私達は好きでここで働いているのですから」

「でも、またこういうことがあるかもしれない。今回の戦いで俺を排除する動きは弱くなるだろう。だが、今度は俺の力を使おうとする奴らが出てくるかもしれない、だからな君達には」

「ご主人様、私達はやめませんよ」

1人のメイドがきつぱりとした声で断言する。ほかのメイドの顔にも『やめたくない』と書いていた。

「しかし、危険なんだ。」

「ご主人様、そのことで考えがあるんです。」

「考え？」

「私達もギルド登録しようと思っんです。」

彼女達が言った考えとは、つまりメイド23人の内15人がギルド登録をしてチームを新しく作り、屋敷の警護、主の近衛、などをやりたいということだった。リーダーは、ミリアが目を掛けていたジニーという女の子がすることになっているそうだ。

ジニーだけを自室に呼んで話を聞くことにする。

「力をつけるにしても、それじゃあ危険が増えることになる」

「大丈夫です。危ないことはしません。それにクビにしたって皆自主的に、チームを作ってしまうですよ。」

「なんでそんなことを？護衛を雇ってもいいんだぞ」

「その護衛には、男が来ることになるでしょう。それは、ご主人様も本意ではないでしょうし、私達も嫌です。それに、その・・・」

ジニーがなにやら言いづらそうにしている。

「なに？」

「そのご主人様の近衛になれば、その、えっと、傍にいられる時間も・・・増えると思ひまして。」

ジニーが恥ずかしそうに打ち明ける。

「ここでチーム作りに反対するのはさすがに甲斐性がないな。わかった、チーム作りを認めようただ条件がある。」

「条件ですか？」

「そう、ジニー、俺のモノになれ」

「あ・・・はい！喜んでこの身を捧げます。」

「それじゃあ今日の夜、夜伽を命じる」

「わかりました。ただご主人様にお願いが」

「なんだ？」

「その、夜伽に私の二人の妹も連れて行って良いでしょうか？二人とも、ご主人様のことを深く慕っております。それに実は、他のチームメンバーの娘たちは、ご主人様にお情けを頂いているようなのです。どうか妹にもお情けをくださいませんか？」

「いいぞ、連れてくるといい、ただ俺は」

「存じております。激しいと聞いています。楽しみにしていますね。」

部屋を出ようとするジニーに聞き忘れていたことを聞く。

「そつえばチーム名は決まっているのか？」

「はい、『メイド隊』です。」

その夜

「ご主人様、ジニーです妹も一緒です。入ってもよろしいですか。」

「いいよ、入ってきて」

入ってきた三人娘はメイド姿だった。三人の容姿は驚くほど似ていた、薄い褐色の肌に黒髪で並べて見るとなんだか1人の人物を年代順に並べたようだ。年は3歳ずつ離れているらしい。

「じ、次女の、ディアです。」

「三女の、ケティーです。」

声まで似ている。これは、いろいろ想像してしまうな。

「三人ともおいで」

三人がベットまで来る。

「本当に似ているな。」

そつ言いながら三人を後ろから抱きしめる。

「ディア、ケティー、二人も俺のものになってくれるかい？」

三人の真ん中の次女のディアがジンの胸に頭を預けて。

「はい、この日を待ち望んでおりました。」

三女のケティーは、なんとジンの手を掴んで自分の股間に押し当てた。

「めちゃくちゃにしてくださいご主人様。」

ケティーは、とてもエッチな娘のようだ。

「むっ」

ケティーの行動を見たジニーもジンの手を服の中に導いて直に胸を触らせる。

「ご主人様、お口にお情けを」

二人を見たディアがキスをおねだりする。

三人とも互いに張り合ってどんどん行為が過激になっていく。ジンはその全てに答え、ジンからも過激なことを三人娘にしていく。

三人娘は、ジンの腕の中で気を失うまでの三時間、競い合うように快楽を求めた。

60話 戦勝パーティーと報奨

異世界370日目

戦勝パーティーが開かれる日になった。ジンは、女達に先に城に行くように言われてお城の控え室で待っていた。ジンはいつもの黒衣の姿だ。

しばらく皆を待っていると

「ご主人様、お待たせしました。」

最初に入ってきたのは、ミリアだった。ただその姿は、いつも通りのメイド服姿だった。てっきりドレスを着てくるのかと思っていた。

「これが、私の正装です。それにこの格好ならジン様の後ろについて行けますし」

メイドの鏡だな。ミリアは元々皇族付きのメイドだったから、こだわりの一つや二つはあるのだろう。

その後は、続々と女達が入室する。

ソフィアは、髪の毛と同じ色の水色のドレス。仲良しになったカルディアが見繕ってくれたらしい。

イリヤは、エルフの衣装を意識したものらしくで袖がない大胆な緑色のドレスだ。

リリスは、黄色いドレスを着ている。ドレスのヒラヒラが気になっ

て落ち着かない様子だ。

レティーシアは、赤いドレス着ている。こちらは、皇女だけあつて着慣れているようだ。

ティリエルは、黒一色のシンプルなドレスが、銀髪に良く似合う。

キリとユリは、おそろいの白いドレスを着ている。

フェリスは、メイド服のままだった。どうやら公の場で姫とばれそうなことをしたくないらしい。

テツは、パーティーにもドレスにも、興味がならしくジンの腰に刺さっている。

これらのドレスは、クルトと交渉してあつたらしくどれも質が良いらしい。

「皆綺麗だよ」

「一括りなのはいただけませんが、まあこの状況では仕方ありませんね。」

「ありがとうございます。」

褒められてそれぞれ嬉しそうに顔を綻ばせる。

ちなみにジークとカイルの格好はタキシードだ。まあそれはどうでもいいか。

そこに、アリシャが訪れる。レティーシアと同じ赤いドレスだが、少し落ち着いた意匠になっている。

「ジン、そろそろ出番」

報奨の授与のことだろう

「わかった、アリシヤも綺麗だ」

「ありがと」

一見無表情だが口の端が少し緩んでいる。

皆を引き連れて、会場に向かう。

ジンが、会場に入った途端に、騒がしくなる。そして貴族達はジンに近づくものと遠巻きにするもの、あと様子見の者に分かれた。遠巻きにする者たちは

「あれが、『黒翼の英雄』か」

「本当に強いのか？」

「女をあんなに連れてどういっつもりだ」

彼らは、ジンのことを無視はできないが、平民と仲良くなんかできないといった連中だ。

そして、ジンに近づいてきたのは、ジンの活躍を聞きジンと繋がりたい貴族達だ。

「英雄様、始めましてわたくしはリニヨン教国、伯爵家の娘のメリルと言います。」

「私は、ヤマト国のフウカと言います。以後お見知りおきを」

そして圧倒的に女性が多い。どうやらジンの女好きを聞いて貴族が

令嬢をあてがってきたようだ。

「な、なんですか、これは？」

仲間の誰かの疑問に、アリシャが

「ジンは、前の戦いの最功労者。九大国がジンを支持しているのも大きい。今のジンは超重要人物」

「あ、あなた達」

「待ってください」

ジンの前に出ようとしたリリスを、腕を掴んでレティーシアが止める。リリスがレティーシアの方を向く

「なに？」

「この場合は、ジン殿にとっても大事な場、邪魔してはいけません。」

レティーシアは皇族として、こういう場には慣れている。もちろんアリシャもだ

「ここは、社交場、ジンの独占は厳禁。」

「社交場・・・ですか」

正直、彼女達は誰かと交流するつもりなどない、というのが本音だ。まあ、ジンに許可は貰っているのです。つこい奴には実力で排除するので問題はないのだが

それより、ジンの周辺がどんどんすごいことになっていく。人の壁で身動きも取れそうにないし、誰が何を喋っているのかもわからない。

パンッ

手を打ち合わせる音が会場全体に響き渡り、会場が静寂に包まれる。どうやらジンが精霊術を使って音を増幅させたようだ。

「えーと、一気に話されてもわからないので、後程4人から5人ぐらいで来てください。そうしたら応対しますので」

そう言ってジンは、その場を移動する。

「これより、防衛戦の功労者の報奨の授与を行いたいと思います。」

アッシュ皇子がジンの作った空白の時間を使って、報奨の授与に入る。

「『黒翼の英雄』ジン殿前へ」

ジンが前に進んでいく。会場の奥には、九大国の王達が並んでいる。王達の前まで進むがジンはあえて膝はつかなかった。王達もそれを咎めず報奨の授与が始る。

「英雄ジン殿の戦功、ノワールサイ約8千頭の撃破、魔鳥ヤガラス約7千の撃破、ワーム3体の討伐に協力など、他多数の戦功を立てた。」

この発表は全ての貴族の度肝を抜くことになった。一般の兵士には岩壁で戦いが見えていなかった。それで正確な情報が出回っていなかったのだ。貴族達は、この場で初めてジンの正確な戦功を聞いて、噂以上であることを知ったのだ。

「これにより、ジン殿に金獅子勲章を授与する。」

今度のざわめきは小さかった。金獅子勲章は、戦功に対する勲章の中ではかなりの上位だがジンの戦功からみれば当たり前のことのように見えたのだ。

「そして、さらに我々は、彼に九大国で通用する爵位を与える。この場でジン殿を伯爵に任ずる。」

今回のざわめきは大きかった。それだけ伯爵位の授与は、かなりの異例なのだ。この世界では、今までも平民や騎士が爵位を得ることはあったがそれは、せいぜい男爵か子爵であり、伯爵の任命は初めてのことだった。

「そして、金貨100枚の授与をもって終わりとする。」

95万+100万-15万（メイドの装備とその他諸々）＝180万

ジンが一礼してその場を後にする。

「次、テンブル騎士団、三騎士の・・・」

その後も、報奨の授与は行われていたが、皆どこか上の空だった。自分を取り戻した者達は四人または五人のグループを作ってジンの近くに陣取っていく。

ジンの仲間も数人呼ばれ報奨を渡される。

180万＋50万＝230万ギル

「これにて、報奨授与を終わりとします。」

アッシュが締めくくったのと同時に多くの人間がジンの元に走る。

が、いつの間にかジンは九大国の王達の前に移動していた。

「クルト皇、それに皆さんちよつとよろしいですか？」

「あ、ああ」

クルト皇は、冷や汗を流しているように見えたが、すぐに奥の部屋に移動してしまった。

「あんた達、本人に相談もなく何を勝手に決めているのかな？」

ジンの顔には、笑顔が張り付いているが、目が笑っていない。

「いや、必要だったんだよ。本当だよ」

「俺に話さなかったことが必要だったのか？」

「いや、それは、面白そうだったから」

「ほうほう……俺がそれで納得するとても」

「い、いいじゃないか、私だってアリシャとの婚約には、びっくりしたんだよ」

ジンの周りの温度が下がったような気がして、クルトが慌てて言い訳する。

「ああ、そういえば。クルトには事後承諾だったらしいな」

「そうなんだよ。ってそれはいいんだよ。実はね」

「話を逸らしたな」

「実はね、ジンさんに頼みたいことがあるんだよ。」

「・・・はあ・・・なんだ？」

ジンは、ため息を吐きながらも、聞く姿勢を取る。

「九大国の身分の高い女性を娶ってほしい」

「・・・はあ？」

「今回のことで君の存在は、もはや伝説になっている。君をどこかの国が保有している、という勘違いを無くすための処置なんだ。あくまで共有ということにしたいんだ。」

「俺は物じゃないぞ。だが、まあ言いたいこともわかる。」

「すぐに結婚しろとは言わない。だから、まず君の屋敷に住まわせ

たいんだが、いいかい？」

「そのための爵位か。」

結婚するにしても婚約するにしても貴族のほうが何かと便利だろうからな。

「駄目じゃないが、いくつか条件がある。まず来るのは一国から三人まで、侍女等も含めてだ。あと国家間の問題や身分の差を持ち込まないこと今はこれくらいだな。」

「わかった。伝えよう」

「誰が来るんだ？」

「それは、まだはつきりとは決まっていない。後の楽しみに取っておいてくれ」

「わかったよ。それじゃあ、俺はパーティーに戻るぞ仲間が心配だ。」

ジンが席を立つと

「そうだね。我々もそろそろ戻らなければ、主催の我々がいつまでも席を外す訳にもいかないからね。」

そういつて各国の王達も席を立て、パーティー会場に戻ることにする。

61話 英雄の今後の課題

ジンが、王達を連れて奥の部屋に消えた後のパーティー会場

「フェリスちゃん、大丈夫？」

「えっ」

ミリアが心配そうにフェリスに話しかける。

「こういう場合は、苦手でしょう。」

「はい、ちよつと。でも、大丈夫です。」

フェリスは、グーロム王国の王族だったことがばれなかが気になって、上流階級の人間に苦手意識を持っている。

以前会議の場で庇ってくれたジンが、この場にはいないのが尚更フェリスを不安にする。

「そうですか、一応誰かつけましょうか」

「そんなの悪いですよ。私はお兄ちゃんが戻ってくるまで、隅っこにいますから。」

「わかりました、気を付けるんですよ」

「はい」

話題の英雄と九大国の王が席をはずし静寂に包まれていた会場も時

間が経つにつれ、雑談を始める者達が多くなっていた。

そんな中、フェリスが会場の端っこでジンが戻ってくるのを待っている。

「おい、そのメイドちょっと来い」

フェリスを城のメイドと勘違いしたのか、貴族の男がフェリスを呼びつける。

「すみません、私は城のメイドではないんです。」

「使用人風情が意見するな、いいからちょっと来い」

「私は、あなたの使用人ではありません。」

「ちっ、貴様、どこのメイドだ。」

「おにい、・・・ジンのメイドです。」

「ああ、あの成り上がりか」

貴族の男が嫌なものでも見たかのような表情を浮かべる。

「・・・」

フェリスはこの時点で男の評価は最底辺まで落ちていた。

「何とか言ったらどうだ」

「別に何もありません。失礼します。」

一秒でもこの男の近くに居たくないフェリスは、その場を後にする。

「おい、ちょっと待て」

フェリスは、貴族の声を無視して仲間のところに向かう

「あのガキ、私を無視するとは無礼な。」

仲間の所に戻ってきたフェリスが不機嫌そうなのを見てイリヤが話しかける。

「どうしたのフェリスちゃん。」

「・・・お兄ちゃんを侮辱されました。」

「・・・なんて言われたの？」

「お兄ちゃんのこと成り上がりって、お兄ちゃんが頑張ったからの伯爵になっただけなのに」

「おい、さっきのメイド」

先程の貴族がこちらに歩いてくる。わざわざ追いかけてきたようだ。それも多数の護衛らしき人間を連れてきている。その護衛は鎧こそ着ていないが長剣を帯剣をしているパーティーには相応しくない格好だ。

嫌なものを感じてイリヤがフェリスの前に立ちはだかる。

「何のようですか？」

「ほお、エルフかい女だな。」

イリヤは、その言葉には取り合わず。

「私達の主を侮辱したようですね」

「ふん、事実だろう。おまけにこんなに女を連れ込んで見せびらかして英雄殿は何か勘違いしているんじゃないか。それに聞いているぞ、屋敷で働いているのはほとんどが元奴隷だそうじゃないか、まったく神経を疑うよ。」

パーティーに武器を持ち込んでいる恥知らずの癖に、と思いながらもイリヤは口には出さない。テツは例外だ。

「ここに、私達がいるのは、私達も戦いに参加していたからです。何もしていないあなたにとにかく言われる筋合いはありません。それに屋敷のメイドは皆いい人ばかりです。主は元奴隷だとかにこだわるお方ではありません。」

「奴隷など家畜と同じだろう。大方お前達も元奴隷なんじゃないのか？」

確かにイリヤは、一度奴隷の身になった。奴隷らしいことをする前にジンに助けられたが、イリヤにとってそれは苦い思い出だ。貴族の言葉がそれを思い出させ、イリヤの顔が陰しくなる。

「なんだ凶星か、ならそっちのメイドは戦いの戦利品といったところ

るか、まったく英雄が聞いて呆れる」

自分達は、ジンに救われた、その救われたことを侮辱されてイリヤの我慢は限界だった。

「・・・何様ですか貴方は」

「私は、コーデル国、ビラー侯爵家の長男、ビルキッドだ。お前が望むなら奴隷として飼ってやらんこともないぞ」

コーデル国は、南のほうの小国だ。ジンなら1人で滅ぼせる規模の国だ。

「誰が、貴方のようなゴミ虫のようなやつに」

ビルキッドが、顔を真っ赤にして怒鳴りだす。

「貴様！奴隷の分際で私を侮辱したな。お前達、痛めつけてやれ。」

護衛が腰の剣を抜く。

それに気付いた、ジークとカイルが護衛とイリヤ達の間に入る。

「内のお嬢様方に何か御用でしょうか？」

「ジーク聞く必要ないだろ。こいつら、屑だぜ」

ジーク達の方が能力ランクは上だろうが無手と剣だ状況はかなり不利だ。ビルキッドの護衛とジークとカイルが今にもぶつかり合いそうな時

「ジーク、カイルやめろ」

「「はっ」」

ジークとカイルが言葉に従って下がる、ジンが戻ってきたようだ。

「内の者に何か用か？」

「部下の躰はしっかりしたらどうなんだ。」

「何を勘違いしているのかしらんが、俺は部下はこの会場に連れてきていないぞ」

フェリスたちが驚いた表情を浮かべる。ジンは4人を見て

「全員、俺の家族だ。」

今度は、4人の顔が嬉しそうにほころぶ。

「あんたが俺を成り上がりと呼ぶのは構わない、事実だからな。だがな、俺の家族に手を出したら・・・殺す・・・いいな。わかったら、俺の前から消えろ」

本気の殺気をぶつける

「うっ」

「ビルキッド様、ここは」

護衛の一人が耳打ちして。

「わ、わかった」

ジンの殺気に当てられたビルキッドはすごすごとその場を去った。

「イリヤ、フェリス大丈夫だった？」

「お兄ちゃん」

フェリスがジンに抱きつく。

「手は出されていません。ですがあいつら」

「会話は、聞いていたよ。あれが人間の国の奴隷に対する考え方なんだよな。」

実際結構大きな声で話していたにも関わらずビルキッドの奴隷に対する差別的な考えを非難するものは少数だった。イリヤのことを蔑む目で見えるものすらいる。改めてこの世界の奴隷への考え方の酷さを痛感した。

「ご主人様、信じていますよ。」

「ああ、任せろ」

ジンは、イリヤの前で奴隷制度を無くすことを宣言していた。イリヤはそれをまだ信じてくれているようだ。

本当の意味で無くすのには時間がかかるだろう。だが、今のジンは長寿だ。時間はある、それに今は発言力もある。

「ジン様、お時間よろしいですか？」

皇族付きのメイド、レイシアだ。

「ジン殿と話したいと言う方をこちらで整理しておきました。今からよろしいでしょうか？」

「ああ、わかった。ミリアを連れていってもいいか？」

「どうぞ。」

「それじゃあ、ちょっと行ってくるね。ミリア一緒に来てくれ」

フェリスとイリヤにキスした後レイシアについて行く。

王達と入った部屋とは別の部屋に通された。部屋には、扇状に作られた机と椅子が用意されていて一対五の形になっている。もちろんジンは、一の側に座った。

「ご主人様、入ってくるのは4人から五人です。そして中央に座った人をその組の代表だと思ってくださって構いません」

しばらくすると

「ファールランド王国のキュリア様ご一行です。」

「キュリア様は、公爵家の一人娘です。家のほうは魔人を受け入れている貴族達の代表です。」

ミリアが簡単な説明してくれる。このために来て貰ったのだ。

「失礼します。」

着飾った五人の淑女が入室してきた。

「始めまして、英雄様。」

今では、クイント皇国以外でもジンは英雄と呼ばれることが多い。っている。

「どうも始めまして、どうぞお座りください」

ドレスアップした貴族の娘は、とても絵になる。仲間達のドレス姿も綺麗だったが、キュリア達のドレス姿はとも自然体で着ていて似合っている。

軽くそれぞれの自己紹介をすませる。そしてやはり、キュリアが話を始める。

「お会いしたかったです、英雄様。武勇談をお聞かせ下さいませんか？」

「ええ、いいですよ」

ほどほどに、戦いの話をしていくらかの時間がたった頃、キュリアが質問を投げかけてきた。

「次の戦いは、どうなるのでしょうか？」

「・・・三年後の戦いはもっと激しくなるだろうね。今の戦力では、勝てないだろうな」

今の戦力とは人間の国全てだ、それでも勝てないとジンは言った。つまり、人間以外の力が必要だということだ。

「・・・英雄様は、異世界から来られたと聞きました。それでは、魔人についてはどうお考えですか？」

おそらく、これが本題だろう。魔人への対応は直接ファールランド王国に影響することなのだから。

「俺は、何かを言えるほど魔人については知らない。」

キュリアが少し残念そうな表情になる。今の世間の魔人への風当たりは強い、異世界から来たという英雄ならそれもなく魔人のことを理解してくれるかもしれないと思つての質問だったのだろう。

「安心してくれ。俺は魔人すべてを、悪だと言つつもりはない。少なくとも俺の屋敷にいる鬼族のクラツていう女の子は、とても良い子だよ。」

「魔人を屋敷に住まわせてるのですか！？」

驚きの声をだす、キュリアほかの貴族の娘も驚いている。

「ああ、何かと不自由させているのは心苦しいんだが、返そうにも故郷が遠くてな。」

「そうですか。では、英雄様は、魔人は滅ぼす、ということは無い

「思ってもよろしいのでしょうか？」

「それは、安心してくれ。それに俺はこれから先の戦いに魔人の存在も必要になると思っている」

キュリア達の顔に驚きと喜びが表れる。もしそれが実現すれば、人間と魔人の共同戦線ということになる。ファールランドにとってこれほど喜ばしいことはないだろう。

興奮した様子のキュリアが

「そ、それでしたら、近々ファールランドに来られませんか？」

「それは、まだ無理なんだ」

「ど、どうしてですか？」

「魔人その他の種族の溝は深い、三年後には間に合わないと思ってる。だから俺は先に亜人と話をしようと思っているだ。」

「そう・・・ですか、残念ですが確かにそれが正しいですね。でも今日は、ありがとございました。とても実りのある時間になりました。」

少し落ち込んだ声を出したが、最後のほうで持ち直した。

「それは、よかった。」

「それではそろそろ失礼します。後が控えていそうですし」

キュリアは、そう言って席を立つ。

「それでは、またお会いしましょうね。英雄様」

次に入ってきたのは、男だったクラフト商国の商人だ。彼とは、ビジネスの話になっていった。

商品は、情報だ。

「それじゃあ、亜人との関係は悪化しているのか？」

「ええそうです。グーロム王国や奴隷商人が奴隷を得るため起こした数々の事件により、亜人にもかなりの被害がでています。亜人は、ただの人間より需要が高いですから。」

「おたくはどうなんだ？奴隷は扱っているのか？」

「私のところでは一切扱っておりません。そうでなければ、ジン様の前に姿を出せるわけが無いではありませんか」

「まあ、そうだろうな」

その後も、いくつか情報を買う。

230万 - 5万〃225万ギル

買った情報からわかったのは、一国単位でなら協力的な種族もいるが、人間に対してどの種族も敵対とはいかないまでも、警戒はされているようだ。

奴隷の問題に魔人の問題、さらに亜人との問題も出てきた。これは、思っていた以上に忙しくなりそうだ。

まずは、今度ある会議で議題に出すとするか

その後もジンはたくさんの方と面会することになった。面会は夜遅くまで続き何とか今日中に終わったが、レイシアが整理してくれていなかったら、もっと酷いことになっていただろう。

レイシアほしいな。

62話 世界防衛会議：三回目

異世界373日目

三回目の世界防衛会議が開かれた。

もちろん今後の方針についてだ。

「ジン殿確認したいのだが、次の侵攻までどれくらいあるのですか？」

ジンは神様に貰った懐中時計もどきを見る。

「1187日後だな」

「1187日後ですか？1067日後ではなく？」

「ああ、そうになっている。どいうわけか120日遅くなっている。」

今度の侵攻は本来なら三年後のはずだ。この世界の一年は360日だ、三年で1080日間だったが1200日間になっている。

「その頃は、冬です。もしかしたら黒い半球が季節も考慮したのでは」

「まあ、これについては考えても仕方ないだろう。今から今後の課題に移りたいんだが」

「そうですね。」

それぞれ今後の課題をまず出していく。

「まずは、夜ですね。光の確保の方法を考えなければ、ジン殿だけでは三日間照らし続ける難しい。できたとしても赤い銃を思いっきり使えないのは痛い。」

「次に、空ですね。高空戦力があまりにも少ない。ジン殿と竜騎兵と竜だけでは三日間はきついでしょう。」

「ノワールサイの大群はどうする？先の戦いのようにジン殿を使い潰すわけにはいかないぞ」

「どんどん課題がでてくる。全ての課題にジンが関わっているところがなんとも言えない。」

「以前の会議に比べてみんなのやる気が段違いだ。あの戦いを経験して王達の認識も変わったのだろう、これならこの後の提案も何とかなるかもしれない。」

出てきた課題は、

夜の暗闇・高空戦力の不足・ノワールサイの突進・三日間という長時間の戦闘

その他にも色々あがったが大きなものはこの4つだ。

次に対策の話に移る

ノワールサイの突進は、堀を増やして軍の後ろにも作るということになった。

つまり、堀<<軍<<堀にするのだ。

ノワールサイをわざと通して堀に突き落とすというものだ。これならまともに突撃を防ぐ必要はなくなる。

人間は、細い板でも使えばいい、ノワールサイは重いからその程度なら大丈夫だ。

ノワールサイの対策はできたが、他の課題に良い案が出てこず会議は難航した。

「皆さん」

ジンに視線が集まる。その視線に以前のような邪魔者を見るような視線は無く期待するような視線になっている。

「皆さんに提案があります。」

「なにか考えがあるのかい？」

「似たようなものです」

「では、願います」

次の瞬間、ジンは今までの会話と関係のなさそうな、かつとんでもない提案を口にした。

「奴隷制度の廃止を提案したい。」

「なっなにを急に言い出すんだジンくん」

「いったいどうしたんだ？」

「今日は、今後の侵攻の対策の会議だぞ。そう言うことは、別のにきに」

「関係ならある。」

ジンの断言に王達が黙る。そんな中アリシャだけが平然と

「どう関係があるの？」

「ありがと、アリシャ。今あなた方が話していた通り今後の課題が多いです。そして今度の戦い人間だけでは勝てないと私は考えます。」

「どうしてそう思うんだね？」

「高空戦力を今以上増強することはほぼ不可能です。これはお分かりですね」

「確かに、ほぼ無理だな」

「そのほかの課題も解決は難しいです。そこで私は亜人を引き入れることを提案します。空は鳥族がいますし、夜目の利く獣人もいます。そのほかにも彼らは突出した能力を持っています。引き入れることができれば大幅に戦力を多方面に拡大できます。」

「彼らが協力するかね？」

「この戦いは世界を守る戦い、この世界に住む以上は亜人にも協力してもらうのが筋でしょう。」

「だが、それが奴隷制度の廃止とどう関係があるんだい？」

「今の亜人は人間の対して不信感を持っています。その原因が奴隷制度です。奴隷制度をそのままにしては、亜人と同盟が組むことは難しい。」

言うべきことはすべて言った。

「今私が言ったことを一度皆さんで良く考えてみてください」

ジンは席に座って目を閉じる。すると辺りで奴隷制度廃止についての議論が始まる。

「奴隷を解放すると労働力がなくなる」

「解放した後はどうする。面倒を見るのか？」

「金が無いだらう。亜人の奴隷もいる。」

否定的な意見ばかりが出る。内心奴隷を手放したくないのだろう。ひそかに失望しながらも静かに待つ

見送りで意見が纏まろうとした時

「ちなみに、俺は奴隷制度が嫌いだ。奴隷制度が残る世界を守るつもりはない。アルベルトとストルにも手を引かせる。」

この瞬間、提案は提案という名の脅迫になった。

「ジ、ジンくん？」

「俺は、本気だぞ。確かにこの世界では階級制や王制は必要だろうが。首輪で相手の意思を無視する奴隷制度が必要だとは到底思えない。」

「まあ、元々クイント皇国は奴隷を禁止しているのでそれほど問題ではないのだが」

「クイント皇国には、相談役になって貰う。」

「やっぱりそうなるんだね。」

「わが国も奴隷制度を廃止しよう」

ヴァーテリオン帝国がジンの提案に賛同する。

「私の国も廃止します。」

すると他の九大国も賛同する。

ジンの言葉を聴いて亜人との同盟が必要なことも理解しているのだろう他の国々も渋々賛同し始める。

ジンの言葉が王達の自国への言い訳にもなるのも賛同し易くした。自国で反対されてもジンの責任にすることが出来る。ジンは会議の場で発言した言葉の責任は取らなければいけないし、ジン自身自分の言葉には責任を取るつもりだった。

ジンは会議が奴隷のこと程度で揺れているのを見て心の内で

（この様子だと魔人の話は控えたほうがよさそうだな）

と思う。九大国の王達には折を見て話してみるかな。

こうして重大な決定が下されたことにより、今回の会議はひとまず
終わりということになった。

各国の王が席を立ち部屋を出る。そんな中カルモンド王国の新しい
王、エクス王がジンに近づいてくる。

「ジン殿」

「なんだ？」

「父上の無礼、真に申し訳なかった。」

グスターのことが正直その後の戦闘が激しすぎて忘れていたくらい
なのだが。

「ああ、そのことが気にするな。それよりお前は大丈夫なのか？」

「はい、私が王位を継ぐことは、すでに決まっていたから。」

「そうじゃない、肉親の死は誰の死だろうとつらい。お前は平気か
？」

「・・・そんなことを聞かれたのは初めてです。そうですね、父が
死んでからの国を見て、本当に父はわが国にとって邪魔者でしかな
かったのだな、と痛感しました。」

「お前としては？」

「悲しい、ですね。ただ、国のためにもなると思っている自分もいます。ハハ、酷い息子ですね私は。」

「お前は、王の資質を持っているよ。胸を張って玉座に座るといい戴冠式はまだなんだろう？」

「ええ、ですが。次の会議で奴隷制度廃止の細かい決定をしたら戴冠式を行いたいと思ってます。今は戦時と変わらないので国内だけでなりますが」

「そうか、頑張れよ」

「ジン殿はこれからどうするのですか？」

「俺は世界を回るつもりだ。色々足りないものも見えてきたしな。」

「いいですね。僕も一度は旅に出てみたいと思ったことがありますよ。あれ？でも会議ではそんなこと一言も・・・いいんですか？」

「俺は、どこにも所属はしていないからな。後で九大国の王には話すがあくまで報告で相談じゃあない。帰ってきたら土産話をしてやるっ」

「楽しみにしています。それでは、失礼しますね」

「ああ、じゃあな」

彼が王になればカルモンド王国も良くなるだろう。

それから1週間後、正式に奴隷制度廃止が決定された。

奴隷差別はすぐには無くならないだろうが、これはジンにとって大きな一歩だ。

63話 お嫁さん候補

異世界381日目

二度目の侵攻まで後1179日

今日は奴隷制度廃止が決定した次の日で、各国からお嫁さん候補の女性が集まる日だ。

最初に到着したのは、アルシナとその部下だ。来ている服は竜騎兵ドラグーンの格好ではなく、女性用の軍服姿できっちりしていて二人とも凛々しい。

「ジン殿久しぶりです。」

「お姉様に手を出したら殺す。」

ついて早々部下の女がジンに殺気を飛ばしてくる。ジンはその殺気を軽く流して

「アルシナ久しぶり。君がお嫁さん候補なのか？」

「半分当たりで半分外れだ。私だけではないんだ」

「私も候補です。」

殺気を飛ばしてきていたアルシナの部下から驚愕の真実がもたらされた。貴族だったのか、・・・意外だ。

「と言うより私が、本命のお嫁さん候補よ。いい、私はフォードル

公爵家の長女のファアラ、ラインツ叔父様の姪よ。ラインツ叔父様には子供がいらないから私と貴方を結婚させて、貴方に継がせることを考えているようね。」

「・・・・・・はっ?」

「あくまで可能性の話。そう簡単にいくはずがないでしょう。それに私は貴方なんてごめんだわ。」

「そうか、俺も政略結婚は嫌いだ。気が合うなこれからよろしくファアラ」

「ふん」

「まあ、中に入ったらどうだ。メイドが案内してくれるから」

次に到着したのは、ファアランド王国の公爵家令嬢のキュリア嬢が侍従を二人連れて到着した。

「英雄様、これからお世話になります。」

「まさか君が来るとはね」

「ふふ、分かれるときに『また』と申し上げましたよ。ところで英雄様にご相談したいことがあるんです。」

「その子のこと?」

侍従の片方が外套を深く被っていて性別すらよくわからないのだ。

「実はこの子は魔人なのです。屋敷に入れてもよろしいでしょうか？」

「思い切ったことをするね。」

下手なことをしたら殺されかねない

「俺は構わないよ。」

「よかった。マリネ、この方は大丈夫よ。」

マリネと呼ばれた外套を着た子は、外套を脱いだ。中から出てきたのは、普通の女の子に見えた。首を傾げていると

「この子は蛇人^{へびひと}です。身体に鱗がある部位がある部族で、見ての通り見た目は人間とほとんど変わりはありません。」

「へえ、よろしく、マリネ」

「よ、よろしく、お願い、します。」

緊張しているのか警戒しているのか声が硬い、打ち解けるのには時間がかかるかもしれないな。

次に来たのはカルモンド王国で、侯爵家令嬢のルーテシアという娘と侍女が二人来た。ルーテシアは、金髪ロリ少女のドレス姿だ。ミアアの話では少々高飛車らしい。

「始めまして、わたくしルーテシアと申します。これからしばらくは、お世話になります。」

しばらくは、か少し言葉に棘を感じるな。

「始めまして、俺はジン。よろしく」

握手をしようと近づくと

ススス

と後退するルーテシア。

もう一度近づいてみる。

ススス

左に逃げた。近づくと、離れる、近づくと、離れるを何度か繰り返して

「どうしたんですか？」

埒があかないので侍女に尋ねてみると

「その、実はジン様のことを色魔と誤解しているようでして。それにかんがり急な話でしたので、まだ心の整理がついていない内にこのようなことになるってしまつて。」

「だってそうでしょう、各国から女を集めているそうじゃない！」

集めたのは俺じゃないんだが、まあいいかこういう子がいても。

「ああ、そうでしたか、わかりました。この後は屋敷の者に任せましょう。挨拶はできたので、これで失礼します。」

次に来たのは、ウルティア国からでカルディアの妹のカメリア姫とメイドが1人だ。

「小さいな。」

カルディアのミニチュアが目も前にいた。外見は文句なしの幼女だ。

「小さい言っな。成長が遅いだけだもん。」

ずいぶん軽い感じの子だな。

「カルディアの妹なんだよな？」

「そうだよ。と言ってもかなり年は結構離れているんだけどね。」

「でも、嫁さん候補のはずだろ。君じゃあ」

小さすぎる。

「十年も経てば気にならなくなるって、まあ姉さんは自分が狙っているみたいけどねえ」

それで小さなカメリアを出してきたのか。

「これからよろしくね。お兄さん」

その後も次々にお嫁さん候補が到着した。

テンブル騎士国からは、クリス王女とシャルロット

ヤマト国からは、トウカ姫と巫女風の侍女が2人

リニヨン教国からは、聖女ウリアと神官と神官騎士が1人ずつ

クラフト商国からは、シャル王女と侍女が1人

四ヶ国からの候補は知り合いばかりになった。

屋敷は広いのでまだ余裕はあるが、最初に貰ったときは広すぎると思っていた屋敷も、今ではちょうど良く感じるようになってしまった。

その夜、全員を集めての食事会を開くことにする。全員が食堂に集まった頃にクイント皇国第一皇女のアリシャも到着し、食堂に現れたアリシャにお嫁さん候補の女達が注目する。注目する理由はもちろんジンの婚約者という部分で他の者より一歩リードしているからだろう。

注目を集めるアリシャはそんな視線を気にもせず、ジンの元まで来て。

「ごめん、遅れた」

そう言いながら、椅子に座るジンの膝の上に座る。

「な、何をしていますの？」

シャルロットの額に青筋が走っている。他の女も面白くなさそうだ。

「婚約者の特権？」

「私に聞かないでください！」

ジンはアリシャを脇に手を入れて持ち上げ、隣の椅子に座らせる。

「アリシャはこっち」

「むっ」

アリシャが少し不機嫌になったが、他全員が不機嫌になるよりはいい。後ろのメイド達もなんか怖かったし。

「まずは、食事にしよう。うちのフェリスが俺の世界の料理を再現したものでな、まあ俺なりのおもてなしだ。料理の質問は後ろのメイドにしてくれ」

食卓には、以前作ったハンバーグや唐揚げをはじめ、肉料理だけではなく炊き込みご飯や煮込み魚なども再現している。

お嫁さん候補の女達は、舌が肥えていそうで少し心配だったが、おいしそうに食事をしてくれていた。その様子を見てフェリスがジンの後ろで嬉しそうにしている。並んでいる料理の中には、フェリスの創作料理も混じっている。その料理もおいしそうに食べてくれているのが嬉しいようだ。

「見たことが無い料理ばかりです。とてもおいしいです。本当に異世界から来られたんですね。」

「まあな、といつてもそんなに凝った料理は知らないんだけどね。この料理もフェリスが色々工夫してくれおかげだしな」

「フェリスさんって戦いでも結果を出したんだよね。すごい」

カナリアがフェイスを讃える。

「そ、そんなことはありませんよ。お兄ちゃんのおかげです。」

「お兄ちゃんのおかげ？何したの？」

「前もって高空戦の特訓をただけだよ。」

ジンはなんでもないことのように言うが、お嫁さん候補を少なからず驚かせた。

夕食が終盤に差し掛かった頃にジンが

「皆に知らせておかないといけないことがあるんだ。実は俺は数日後には旅に出て、世界を特に亜人の国を回るつもりだ。だから俺は屋敷にいることが少なくなる。」

「そ、それでは、来た意味が無いではありませんか」

「まあ、そうなるが。でも三年後の戦いに必要なことなんだ。」

「同行してもいいのですか？」

「ごめん。最初は、1人で行きたいんだ。」

「どうしてですか？」

「俺は亜人についてほとんど知らない。だから1人で先に行って色々知っておきたいんだ。それに最初は聖痕の力で移動するから同行は不可能だと思う。旅先で合流するのは可能だろうけど。」

「わかりました。」

何人かは来る気満々のようだ。すぐに身内で相談を始めている。

「私達が先に出てもいいのですよね？」

「ああ、構わない。ただ護衛とかのこともあるから俺に相談してね」

クリスの質問に答える。

「居場所は、クルトに腕輪を貰っておくのでそれで頼む。俺からのお知らせは以上だ。それじゃ俺はこれで失礼するよ。細かいことはまた後日に。」

ジンはそう言って食堂をでる。そして自室に戻ると部屋の前にクレアさんが待っていた。

「クレアさんどうしたんですか、こんなところで？」

「ジンさんにお願ひがあります。私をチームに加えてください。」

「えっ、急にどうしたんですかギルドの仕事はどうするんですか？」

「私ギルドは辞めてきました。」

「・・・なんで、そこまで」

「私、拉致されたとき周りの男達の話聞いてあきらめてました。助からないって思ってた。そこに来るはずのないジンさんが現れて助けられて。その時から、ジンさんのことが好きになっていました。いいえ前から意識はしていたんです。それがこの前のことで」

「ありがとう、嬉しいよ」

「ジンさん、私もハーレムに加えてください！」

今のクレアさんはいつものできる女ではなく、恋する乙女のようにとても可愛く見える。

「喜んで。」

クレアを抱き寄せてキスをする。

「ジンさん」

「ちなみにクレア、もう夜だね」

「えっ、はい」

「そして、ここは俺の部屋のすぐ前だ。」

「・・・」

「おいで」

「ジンさん、ちょ、ちょっと待ってください。まだ心の準備が」

「待たない」

クレアを部屋に引きずり込んでベッドに押し倒す。

「ジンさん、あの、ちょっと」

服の上から胸を揉む。

「きゃ」

「やっぱり今日のクレアは可愛いな。つい、いじめたくなる。」

「うっ」

涙目のクレアを解放して

「クレア服脱いで」

「え、はい」

クレアは恥じらいながらも服に手を掛けるが

「あのジンさん、そんなにジロジロ見られると恥ずかしいんですけど」

「いいから。俺に見せ付けるように」

クレアは、恥ずかしがりながら服を脱いでいく。一枚二枚と脱いでいき今は下着姿だ。

「そこでストップ」

下着姿で立っているクレアを後ろから抱きしめる。そしてゆっくり時間を掛けて下着を脱がす、その時のクレアの恥らう姿はグッと来るものがある。全てを脱がして全裸にすると。

「クレアが一番恥ずかしいと思う姿勢を取ってみて」

「・・・はい」

普段のクールな秘書の姿を捨てて、目の前であられもないポーズをとるクレア。

その後も次々と恥ずかしい注文をしていく。

するとクレアは恥ずかしがりながらも従順にすべての注文に答えた。

我慢できなくなったジンと身体を重ねるまで全裸であらゆるポーズをとる羽目になったクレアは、ジンに体のすみずみまで見られることになった。

クレアは、この日を一生忘れることは無いだろう。

64話 世界の敵

異世界382日目

ここは、『無得と魔物の大地』

そして『無得と魔物の大地』を巡回中の部隊

「あゝあ、今頃皇都では戦勝パーティーでもやってるんですかね、隊長」

「もう終わってるさ、それに俺達には関係ない世界の話だ。」

「確かに、そうっすね。でも、英雄様はお呼ばれていますよね。」

「まあ、あれだけの戦功をあげたんだから当然だろう。」

「隊長、あれって本当に英雄様がやったんですかね？」

「どういう意味だ？」

「いやね、どうも信じられないんですよ。ノールサイ、八千頭撃破なんて人間技じゃないでしょう」

「お前は最近そればかりだな。確か片思いの女が最近英雄の話ばかりするんだっただか。」

「うぐ」

兵士がその場に蹲る。

「まったく、英雄の活躍は竜騎兵が確認している。そんなことばかり言っているとその女に嫌われるぞ」

「……ぐす」

どうやら手遅れだったようだ。

哀れな部下に憐憫の眼差しを向けていると

「隊長、人が倒れています。」

「なんだと、何人だ？状況は？」

「それが、奇妙なことに１人だけポツンと倒れているんです。」

確かに奇妙な話だ。ここは、数日前に防衛戦が終わってから混成軍１万がずつと見回りをしている。見回りは部隊ごとだから１人というのはおかしい。異常事態でも死体くらいはありそうなものだが。

「緊急事態かもしれん、急いでその者を保護する。案内しろ」

隊長は、部下１２人を連れて向かう。

移動するとすぐに見えてきた。どうやら一般兵の男のようだ。

「おい、大丈夫か？」

意識がないのか返事がない。さっきまで愚痴を言っていた兵士が真つ先に助け起こす。

「生きてるか？目をあ」

ドス

「えっ・・・あ、う」

生存の確認をしようとした次の瞬間、兵士の胸を血のように赤い剣が貫いた。

赤い剣を持った兵士が剣を兵士の胸から引き抜いて立ち上がる。貫かれた兵士はその場に倒れる。

「貴様どこの部隊の者だ！」

「俺様はもう何処にも所属してねえよ。バーカ」

男が、剣を振り上げ魔術を行使する。

「『ダーク・ファイヤ・ボール』」

聞いたことのない魔術だ。男の頭上に黒い炎で出来た火球が出現する。男が剣を降り下ろすのと連動して黒い火球が放たれ部隊に襲いかかった。

「ああああああ」

「ぎゃあああ」

「ああ・・・あづ・・・」

三人の兵士が黒い炎に呑み込まれ焼け死ぬ。

男は黒い炎を纏ながら生き残りに向かって名乗る。

「よく覚えておけ人間ども、俺様は『黒炎使い』のガーランド。
お前達の敵の名前だーーーー」

叫びながらも一発黒い火球を放つガーランド

「て、撤退だ。至急本部に連絡する」

部隊長は、すぐさま敵わないことを悟りその場を撤退した。

何故か黒炎使いは、逃げる兵の背中には攻撃を加えず、その場も動かなかった。

「これで良かったんだよね？」

逃げた兵士が見えなくなるのを確認して、ガーランドが暗闇に、いや黒い半球に向かってしゃべりかける。

するとなんと黒い半球の中から三人の男と一人の女が現れた。ガーランドに驚きは無い何故ならガーランドもそこから来たのだから。ちなみにこの怪しげな集団の内訳は少年、青年、中年、老人、妙齢の女性の五人だ。

「ええ、いいパフォーマンスだったわ。これであなた1人に人間達

の注目が集まるでしょう。」

五人の中で唯一の女が発言する。

「それはそれは、楽しそうだなあ」

「理解できないな」

五人の中で一番小さな少年がそう吐き捨てる。

「そう言つな坊や、世の中色々なやつがいる」

老人が宥めるが

「そんなの俺の勝手だろ。」

少年は反発するだけだ。

「我々は別に仲間という訳ではない。ただ同種の力を与えられたそれだけだ。後はそれぞれやりたいようにやるだけだ。」

最後の男が発言する。 集団の中で一番身なりのいい中年の男だ。

「それには同意だな。俺は、殺して殺して殺し尽くす。」

「自由」

「我はあの獣を貰う。やりたいことがあるのでな。」

中年の男が言っているのは少し離れた所にいる魔獣のことだ。

「どうぞ、わたしはこれを貰います。」

女は黒い槍を黒い半球から取り出す。

「僕は、このペンダントを貰う」

少年は、逆十字のペンダントを取り出し。

「では、残り物はわしがもらおうかの」

老人は、儀式剣を半球から取り出した。

ガーランドの赤黒い剣や魔獣も黒い半球から出てきたものだ。

「それじゃあ、それぞれやりたいことも違うようだし、俺は先に行くぜ」

ガーランドがその場を後にする。他の者達も無言でその場を後にする。

この時、この世界の敵が、ジンの知らないところで暗躍を始めた。

65話 雪の精霊

異世界382日目

二度目の侵攻まで後1178日

朝、目が覚めると目の前に眼鏡を外したクレアの顔が見えた。眼鏡を外したクレアはどことなく幼く見えて新鮮だ。まあ、そこまではいい昨日はクレアと一夜を過ごした後、クレアを抱き枕にしたのだから不思議ではない。

問題は、背中にもうひとつ体温を感じるからだ。それもキリかユリぐらい小さいのだ。しかしキリやユリではない、二人ならもうひとつ体温を感じないとおかしい、可能性としてはアリシャくらいだろうか？

恐る恐る後ろを向いてみると真っ白い髪の毛が見えた。アリシャではない、アリシャは白みを帯びた金髪だ。毛布を捲つてみるとそこには、白い肌に純白の髪あどけない寝顔を晒している八歳ぐらいの幼女がいた。

「こ、小雪」

ジンのことをパパと慕う雪の精霊だ。その小雪が裸で刀を抱えて眠っている。

「刀？」

「ご主人様、朝でござい・・・ま・・・す。」

タイミング悪くミリアが入って来てしまった。
今の状況、半裸のジンと全裸の幼女

「ご主人様が幼子にまで手を。フェリスちゃんには手を出してないから安心してましたのに。」

「違うからな！」

「うーん、パパどうしたの？」

小雪が起きたようだ。眠そうに目を擦っているのが可愛い。

「ご主人様そんなプレイを」

「ミリア、お前実は悪乗りしてるだろ」

「では、隠し子ですか？実はわたくしこれが一番あり得ると思っているのですが？」

「それが一番近い気がするが、ちょっと違う！」

「はあーあ、ジンさんどうしたんですか？」

欠伸をしながら全裸のクレアさんが起きた。ミリアにはジンでちょうど見えない位置だったのだ。

「まさかのクレアさんとの間の子供ですか！？」

「だから違う。それよりミリア、子供服を急いで用意してくれ。裸でいさせるわけにはいかないだろ。」

「あ、はい。確かにそうですね、かしこまりました。」

ミリアが、すぐに部屋を出た。

朝の出来事から、しばらくたって食堂で朝食を取りながら説明することになった。この場にいるのは、テツとミリアとフェリスとリリスにジンと小雪を含めた6人だ。クレアさんは「今は恥ずかしいので一人にしてください」と言うことらしい。

「つまりこの子は精霊でジン様が精霊の統合を失敗したときに、ジンの血を取り込んで生まれたんですね。」

「そういうこと。存在としては、テツに近いかな。」

「そういえば小雪ちゃんが持つてるのって刀ですか？」

ティリエルがテツを気にしながら小雪にたずねる。

「美味しい、うん？そうだよ。『精霊刀・七星』と言って七種全部の精霊を込めることができるんだって。」

確かにそれは俺向きの刀だ。

「主の刀は私です。」

テツが張り合うが

「でもパパは、二刀流だよ」

「むっ」

珍しくテツが悔しそうな表情をしている。テツだってそんなことは知っているのだ。だから二刀に分かれる力を作ったりと頑張っているのだから。

「あ、後これはパパの刀の人に」

小雪の手から小さな透明な石が出てきた。

「これは？」

テツの不機嫌な声を、小雪は全然気にした様子もなく

「『精霊石』だって、土のおじちゃんが、きつときっかけになるって言ってたよ」

「きっかけ……。主後でお話したいことが」

改まってなんだろう？まあ、テツの珍しい頼みだし断る理由も無い。

「わかった。」

「ジン、土のおじちゃんって誰？」

鍛錬から戻ってきていたリリスが質問する。

「土の精霊王のことだ」

「精霊王がおじちゃん」

食堂になんとも言えない空気が流れる

「あ、忘れてた。パパ、闇のお姉ちゃんが今度行くから覚悟しろー
だって」

「そうか。楽しみだな。」

そうこうしている内に、小雪が食事を終え

「ごちそうさまでした。パパ遊ぼう。」

小雪とは一年以上も離れ離れだったのだ今日くらいは一緒に過ごす
ことにしよう。

「今日は、小雪の相手をするから、悪いけど他の子への説明お願い
していいか？」

「はい。親子の久しぶりの対面です。お任せください」

ミリアが快く快諾する。

「ありがと。小雪、何して遊ぼうか？」

「肩車で屋敷を探検したい」

「よし、わかった。行こっか」

小雪を抱えあげて肩車する。

「わーい、高い高い」

それだけで小雪は喜んでくれる。一通りはしゃぐとジンの頭を抱きしめて

「パパのにおい、久しぶりだよ」

やっぱり寂しい思いをさせていたようだ。だが、ジンは数日後には亜人の国に出発する。

その事も話さなければいけないな。

しかし今は、小雪を楽しませることだけを考えることにしよう。さて、何処から行こうか？

ジンは行き先を考えながら、廊下を進む。

庭に出ると『メイド隊』が訓練をしていた。

まだ日が浅いの随分さまになっているな。魔術をミリアが近接をレティーシアが教えている。

今は自己鍛練の時間らしい。

「ご主人様、入らしていたんですか。その子は？」

いち早く気づいた三人娘が近づいてきた

「この子は、小雪。細かいことは、ミリアに聞いてくれ。」

そういえばまだギルドカード見ていないな

「ギルドカード見せてくれないか？」

「ご主人様のご要望とあれば」

ギルドカード

名前 ジニー 種族 人間 性別 女
ギルドランク D
能力ランク 総合C 気力C 魔力C
チーム 『メイド隊』
称号 ジンのメイド

名前 デイア 種族 人間 性別 女
ギルドランク D
能力ランク 総合C 気力C 魔力C
チーム 『メイド隊』
称号 ジンのメイド

名前 ケティー 種族 人間 性別 女
ギルドランク D
能力ランク 総合C 気力C 魔力C
チーム 『メイド隊』
称号 ジンのメイド

三人とも仲良く能力を上げているようだな、ランクが全部一緒だ。

一緒にカードを見ていた小雪が

「ねえパパこの人達ってパパのハーレム？」

「そっだよ」

小さな子の前であっさり肯定され三人娘は、嬉し恥ずかしいといった感じだ。

「でも、小雪が一番目のハーレムだもんねえ」

あの時は将来的な意味で待っていると言ったんだが、まあ確かに一番目ではあるな。

「確かにそっだな」

『メイド隊』を驚愕しているが、まあいいだろう。

「パパ、小雪もカードが欲しい」

子供でも登録できるだろうか？

まあ、俺がいればなんとかなるか。

「じゃあ、行ってみるか？」

「うん」

所変わって冒険者ギルド

「申し訳ありません。子供の登録はお断りしているんです。」

「大丈夫ですってこの子は強いからです」

「そんなこと言われましても強さの確認が取れないですし」

「確認が取ればいいんだな」

ジンは、そう言つとギルド内にいた冒険者から適当に連れてきた。話していた内容から察するとCランクぐらいらしい

「この子と戦つてくれ。」

「英雄さんよ俺達のことなめてんのか？」

「ああ、もし勝つたら百万ギルやるよ」

冒険者の目の色がかつた。子供を攻撃すればギルド内で干されるだろつが百万ギルあれば当分は遊んで暮らせる。

「いいだろう。」

「小雪手加減しろよ」

「はい」

名前も知らない冒険者が木刀を構える。

ジンの合図で始める

「はじめ！」

「うおおー」

冒険者が声を張り上げて走り出すが

「『氷柱』^{ひょう}」

小雪の頭上に氷槍が現れ同時にその氷槍が放たれる。冒険者の周りに氷の槍が突き刺さり動きを封じる。

「えっ、な」

「まだやる？」

小雪は単純な意味で続けるかを聞いたただだったが、冒険者は生死の判断を迫られているかのような錯覚をした。それも無理は無い、どれかひとつでも氷槍が当たれば死んでいたのだ。

「こ、降参だ」

「パパ勝ったよ」

「おゝ偉いぞ小雪。」

ジンが頭を撫でる。ジンに撫でられて幸せそうな顔をする小雪は、ただの幼い子供だ。しかし、小雪はその小さな身体に強大な力を秘めているあることをこの場で証明した。

「あの屋敷は異常だな」

「子供であれかよ」

「目を合わせるな。殺られるぞ」

「男には容赦ねえからな」

とまあ色々言われているが気にしない

「小雪の登録いいかな？」

受付嬢は何度も頷いた。

ギルドカード

名前 小雪 種族 精霊 性別 女

ギルドランク F

能力ランク 総合D 気力D 魔力C

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの娘 雪の精霊

「へへ」

カードを見ながらにやける小雪を肩車して屋敷に戻る。

そういえば屋敷の案内をまだしていないことを思い出す。

『メイド隊』の訓練も終わった頃だろう。ということは、とジンは考えを巡らせる。

「小雪屋敷に戻ったら探検再開だ」

「うん」

屋敷に戻って向かったところは、屋敷に三つある風呂の内の三十人以上が余裕で入れる大浴場だ。他の二つは男湯と5人くらいが入れる浴場（基本カラとマリネが使う）がある。ちなみにジンは、三つ

全てのお風呂を使う。

「ご、ご主人様！」

もちろん大浴場には、訓練明けの『メイド隊』十五人が汗を流している。

そこに、タオル一枚のジンと素っ裸の小雪が乱入したのだ。

「皆お疲れ様。今日は日頃の苦勞くるわうを労うおうと思ってな。皆を洗ってやろうと思っうてな」

「パパ、小雪が一番だよ」

「ああ、わかってるよ」

「ご主人様、次は私にお願いします。」

ケティーがすかさず名乗りをあげる。そのケティーに張り合っあてジニーとディアが

「わ、わたしも」

「お、お願いします」

三人娘がジンにお願いすると、ほかの女達も

「いいのでしょうか？」

「ご主人様に身体を洗っていただけるなんてめったにないわよ」
「確かにそうね。」

「「わたしもお願いします。」」

最終的に全員の身体を洗うことが決まった。

まずは、小雪からだな

「ほら小雪、ここに座って」

ジンの前の椅子に小雪を座らせ、小雪の真っ白な髪を丁寧に洗う。

「どうだ？」

「きもち」

「そうか」

「うん」

精霊界にいた頃にもこうやって小雪の髪を洗ってあげていた。だから小雪がどこをどう洗ってほしいのか良くわかつている。

小雪は、ジンの手技に満足そうに頬を緩める。

その後、体も丁寧に洗って

「先に風呂に入ってて」

「はい」

小雪は、普通に洗った。次からは、様子が違った。

小雪が座っていたところに今度はケティーが座る。

すぐにジンはケティーの身体を洗い始めた。

素手で

「ご、ご主人様？」

「ダメか？」

「い、いいえ、お、お願いします。」

「それじゃあ、すみずみまで洗うからな」

「えっ、はい」

宣言どおりジンは、ケティーの身体をすみずみ洗った、ケティーの身体でジンが触れていない場所は、ほとんど無いと言っていいだろう。

その後も、ジニーやディアや他のメイド隊の子たちをすみずみまで洗った。『メイド隊』のメイド達の身体は適度に引き締まっただけで、それでいてやわらかかった。

胸の感触は、ケティーがプニっとしていて、ディアはふよんっとしていて、ジニーはムニっとしていた。

「ああ、ご主人様にすみずみまで触らせてしまいました。」

「ご主人様に征服されてしまいました」

「所有物になれたみたいで幸せです」

「私達は元々ご主人様のモノだけだね」

「ご主人様の身体洗いたい・・・身体で」

「ちよつと下品よ」

「やりたくないの？」

「・・・やりたいけど」

若干関係ないのも混じっているが、それなりに好評だったようだ。

ジンも皆の身体を楽しめて役得だった。

その後、メイドに身体を（身体で）洗ってもらってから風呂をあがった。

その夜

小雪がジンの隣で寝ている。その顔は涙で少し濡れている。旅に出ることを話した時に泣かれてしまった。それでも小雪は最後には、小さく頷いてくれた。

「パパ、大好き」

寝言でそんなことを言うてくれることが堪らなく嬉しい。

「主、よろしいでしょうか？」

テツだ。そういえば後で話があると言っていたな。

「どうぞ」

「失礼します。」

「どうした？」

「お願いしたいことが」

「珍しいな、どうしたんだ？」

「主は、私に……満足していますか？」

テツが唐突に、ジンに問いたです。

「それは、もちろん。お前以上の相棒はいない」

「ありがとうございます。その言葉は嬉しいです、でも私は満足していません。主は、人工聖痕を使った時、私を氣遣っていました。私は、主に全力で、私を振るって貰いたいです。」

普段無口なテツが一気にまくし立てる。それだけテツには譲れない一線なんだろうな。

「テツ、話してくれてありがとう。これからもそうやって話してくれ。テツが昔、俺に悩みを打ち明けるように言ってくれたように俺もテツの悩みを聞きたい。」

テツを抱き寄せる。

「主」

「一緒に探そうテツを強くする物を」

「はい、主」

二人は、唇を合わせた。

エピソード 獣人の国へ

異世界390日目

二度目の侵攻まで後1170日

クイント皇国の皇都にあるジンの屋敷の玄関

「パパあゝゝゝ」

「ぐす、……お兄ちゃゝん」

小雪とフェリスが、ジンの袖を掴んで泣きついていた。

「なるべく早く終わらせるから。頼むから泣かないでくれ」

二人を困った表情で宥めているジンの姿は、父親か年の離れた兄のようで周りの女達は、その姿を見て和んでいる。

この場にいるのは後発組の、

カメリア姫、トウカ姫、ソフィア、ミリア、フェリス、カイル、ジークにジニー率いる『メイド隊』三人を加えた10人のチームと、屋敷居残り組の

小雪、クレア、シャル、ルーテシア、キュリア、ウリアの6人が見送りに来てくれている。

といってもルーテシアは隅っこにいる。

それ以外については

今から数日前

ジンは先発組を見送っていた。先発組みは、アルシナ、ファース、アリシャ皇女、クリス王女、聖騎士シャルロット、イリヤ、レディシア、にディア率いる『メイド隊』三人の合計10人だ。

「皆気をつけるんだよ。」

「大丈夫、少しは鍛えた」

無表情で拳を握って見せるアリシャ。ある意味アリシャが一番心配なのだが、よく皇都を出ることを許されたな。

「英雄様、私はこの旅で強くなってみせますわ。その時はお側に」

「シャルロット卿、それはわたしとて同じだ。」

シャルロットの艶っぽい声にアルシナの凛々しい声が重なる。二人がジンの腕に左右から絡む

「シャルロット!」

「お姉様!」

その二人に親しいクリス王女とファースが二人を引き離す。

クリスは、

「シャルロット、私を差し置いて何をしている」

ファースは、

「お姉様離れてください。穢れてしまいます。」

と内容は正反対だった。

「気をつけて行くんだよ。」

「「「ハイ」」」

「ファアラも気をつけるんだよ。」

「な、なんで私まで？」

「可愛いからだな」

「なっ」

ファアラの顔が赤くなる。貴族の割には贅辞に耐性が無いようだ。軍人氣質なのだろうか？

「うっ……言われなくても、……気をつけるわよ」

照れながらも返事をするところが可愛らしい。

「そうか、それじゃあ皆行つてらっしゃい。」

「「「行つてきます。」」」

「行つて……きま、す」

ファーストも小さく返事をしてくれたのがちょっと嬉しい。

こうして先発が、出発したのが3日前だ。行き先は多種多様の獣人が集まる国、ルクラルート郡国だ。

ジンの行き先でもある。

そして今日が、ジンとテツの出発の日だ。

今日はキリ、ユリ、ティリエル、リリスのチームも一緒に出発する。このチームは、キリとユリの里帰りと小人族を連合に参加してもらうための大使の二つの意味合いがある。小人族の国にはストルもいるからあまり心配はしていない。

小人族の国が遠いため移動速度重視のチーム構成だ。

この6人が見送られる側になる。

そして見送りに来た小雪とフェリスが泣きだしてしまったのだ。

なかなか泣き止まないの

「最後の手段だ」

ジンは、泣き続ける小雪の口にキスをした。小雪が驚いて泣き止むがすぐには解放せず息が続く限りキスを続ける。唇を解放すると

「パパと・・・キスしちゃった」

顔を真っ赤にして小雪が口に手を当てる。

ジンは、次にフェリスの唇に吸い付いた。今度は唇の間に舌を入れて口内を舐め回す大人のキスだ。

「あむ・・・おにい・・・」

長い大人のキスが終わった時のフェリスの顔は蕩けきっていて、口の端からよだれが垂れている。

「少しだけ俺に時間をくれ」

「うん」

さっきまでとは打って変わって素直に頷く二人。

「ありがと、愛してるよ」

ジンは何事も無かったかのように他の女に話しかけていく。

「クレア、シャル、離れの建築のこと頼んだよ。」

女達も何事も無かったように返事をする。

「任せてください」

「まあほどほどに頑張るわ」

二人には離れの建築を頼んでいた。ジークとカイルの家になる予定だ。今の環境では肩身が狭いだろっし、女も連れ込めない。

これから、もしも！男がこの屋敷に来ることになったら離れに住むことになる。二人に聞いたら、是非にということで建築が決まった。

ジンは80万ギル出して残りはジークとカイルが負担した。

225万・80万＝145万ギル

「行つてらっしゃいお兄さん。私も後で行くからねよろしくね。」

カメリアが見送りの言葉を掛けてくれる。それにしてもお兄さんが定着してしまったな。

「ご主人様お氣をつけて」

「ジン様はテツさんと二人だけで行くのですから慎重に行動してくださいね。」

「ご主人様、怪我しないでくださいね。」

ミリア、ソフィア、イリヤが名残惜しそうに声をかけてくる。後発組には、元奴隷獣人を郡国へ護送する任務があるため出発が遅い、再開するまで日があるからだろう。

「小雪も頑張る」

小雪が居残り組なのは、小雪がこの世界に来たばかりで、身体能力が見た目通りの幼児並みだったからだ。そこで屋敷に残るケティー率いる『メイド隊』と、一緒に特訓することになったのだ。頑張るとは、その特訓のことだろう。

「そつだな、頑張ったらご褒美をあげよう」

「やった〜」

フェリスが寂しそうに見るので頭を撫でながら

「フェリスの料理が食べられないのは残念だな。」

「お兄ちゃん。私も料理の腕上げておくから楽しみにしててね。」

「ああ、楽しみにしてるよ。そろそろ行くことにする。テツ不自由させる」

「構いません、主」

テツには、ルクラルート郡国では、まだ目立ちないから、人目があるところでは刀の形態を維持するように頼んでいる。そのため会話するのにも気を使うことになってしまったのだ。

「じゃあ行ってくる」

「……行つてらっしゃいませ」「……」

ジンは小人族担当のチームと共に、屋敷を出た。

皇都を出た辺りで

「四人とも先に行くね」

ジンが別れを告げた。

「もうですか？」

「意地でも付いていくって言ったら」

「すまん絶対についてこれないんだ」

「えっ」

一同びつくりする。ここにいるのは空を飛べるティリエルとチーム内最速のリリスがいるのに絶対についてこれないと言うのだ。

「聖痕を使っんですね」

理解したユリが確認のための質問をする。

「その通り」

「「ご主人様！」」

突然小人娘の二人が腕を掴んできた。

「ど、どうした？」

「私達にもキスしてください。小雪ちゃんには、やってたじゃないですか」

「そうです。私達だけまだキスしてもらっていません！」

確かに二人には、そうゆうことはしていないことに気付く。また、二人を子供扱いしていたようだな。

「わかった。つまり、二人は大人のキスをご所望なんだな」

ジンはそう言うときりを抱き上げて唇を重ねる、もちろんそこでは終わらずフェリスと同様に口内を弄り回した。

次にユリも同じようにキスをする。待ち構えていたのだろうユリは、積極的に舌を絡めてきた。

ユリとのキスが終わると惚けているキリの唇をまたしても奪った。

「ご主人さ・・・あむ、んっ・・・」

その後もジンは二人の唇を交互に奪い続けた。30分が経過した頃

「・・・あっ、・・・あ、あ・・・」

二人はピクッピクッと痙攣するまで口内をジンに弄られて、地べたに座り込んでいる。

「お兄様」

「ジン」

ティリエルとリリスの艶っぽい声が後ろから聞こえる。

二人にもたつぷりサービスをする。二人は行為に慣れているから座り込んだりはしなかった。

「そろそろ、行かないと」

「行ってらっしゃいませ、お兄様」

「頑張ってね、ジン」

キリとユリには、刺激が強すぎたのか、まだしゃべれないようだ。

「小人族の件頼んだぞ、雷の聖痕発動『雷神』、『瞬雷』」

リリス達の前からジンの姿が消えジンは、獣人の国へ飛んだ。

『瞬雷』は、使用者を雷化して瞬間移動と可能にする技だが、聖痕の力を全て使ってしまうため使い勝手は悪い。

だがその成果もありジンは数秒で複数の国を跨いで獣人の国の国境付近に到達した。

第一章終了時点の設定資料

【主人公の成果】

チーム 『世界を結ぶ者達』を結成。人数12人+テツ

ハーレム 28人

ソフィア・イリヤ・リリス・テツ・ティリエル・ミリア・レティー
シア・フェリス・キリ・ユリ・クレア・小雪・アリシャ
ジニー、ディア、ケティーの『メイド隊』15名

グーロム王国を潰して、クイント皇国を大きくする。

報酬として屋敷を皇帝から貰う。

人間の連合軍の結成に成功する。

『メイド隊』結成

お金 145万ギル

【人物設定】

主人公 ジン

前の世界ではやりたいことがなかった。そのため、異世界に来ること
にあまり迷いはなかった。そして異世界に来ることで生き甲斐を
見つける。力は精霊界で精霊王（あと刀神にも）に修行してもらっ
た。

能力

全精霊王との契約 ・すべての精霊を操れる

火・風・水・土・雷・光・闇がある

聖痕の発動 ・属性ごとにある 光と闇はできない

火Ⅱ炎王 風Ⅱ嵐帝 水Ⅱ水龍 土Ⅱ岩皇 雷Ⅱ雷神

人工聖痕 第8の聖痕 『無敵』

スライグマ・ウェボン

聖痕武器 紅炎銃・プロミネンス

神双流 刀神直伝の二刀流の剣術

契約破棄 大抵の契約は強引に破棄できる

初級の魔術

装備

黒龍刀・鉄

しろがねのりゅうりん

精霊刀・七星

『白銀の龍輪』

ハーレムヒロイン

ソフィア 精霊の巫女

精霊に使えているため聖痕を持つ主人公を信用した。村を救われたことと救われた時の精霊術を見て主人公に惚れる。精霊使いでもあり水の精霊魔法が得意。水の魔術を練習中。落ち着いた少女で髪の毛は水色。

装備 水の指輪

イリヤ エルフの治癒術師

高級奴隷として売られそうなところをリリスと一緒にジンに助けられる。

ジンのご主人様と慕う。マッサージが得意。エルフならではの美貌を持つ 金髪で天然。

装備 ヒーリング・リング

リリス 生粋の冒険者 スピード型

戦闘奴隷として売られそうなところをイリヤと一緒にジンに助けられる。

魔物との戦闘で危ないところをジンに助けられてジンに惚れる。

活発な少女 炎髪

装備 エストック（両手突き剣）

ティリエル 銀龍

牛鬼に襲われているところをジンに助けられる。銀龍としては、幼く将来が楽しみ。飛行能力を磨く

年齢より幼く見えるのが悩み。ジンをお兄様と慕っている。銀髪

装備 ダガーを2本 白銀の龍輪

フェリス 亡国の姫

一度すべてを失ったが、ジンの元で新しい人生を歩む。料理が大好き。ジンのもとで料理人、魔術師として頑張っている。ジンとおにいちちゃんと言って慕っている。髪は緑色。

装備 ブースト・リング

ミリア できるメイドさん

元皇族付きのメイドだったが、ジンに恩返しをするためにジンのメイドになる。

戦い方はスピード型の魔術師。呼び方は、ご主人様。

装備 風雷の指輪

レティーシア クイント王国第二皇女

ジンの強さを気に入る。姫というより騎士に近く付いた通り名が『姫騎士』

長い金髪で少しキリッとした、美人。ジンをジン殿と呼ぶ。

装備 ロングソード

テツ 小太刀の少女

『鉄餓刀』から『黒龍刀・鉄』になる。持ち主の邪魔になるため気力、魔力を持たない。

最近二刀に分かれることができるようになった。黒髪でジンの前以外は基本無表情。

ジンに貰った銀の首飾りは宝物。ジンのことを主と呼ぶ。

クレア 眼鏡秘書

ジンに誘われて屋敷に住むようになる。短い黒髪と眼鏡で秘書っぽい女性。ジンを意識していたが、誘拐されたときに助けられたことによりジンのことがはつきりと好きになる。元ギルド職員

アリシャ クイント王国第一皇女 エルフのクォーター

年の割りに小さいことを気にしている。ジンに、通話の出来る指輪を渡すなど積極的。レティーシアと違いしっかり皇女をやっている。白みを帯びた金髪。

キリとユリ 小人

小人の双子。キリが姉でユリが妹。瓜二つだが見分けは付け易い。金庫に閉じ込められているところをジンに助けられる。キリは気が強く。ユリは物静か。二人とも奴隷時代の後遺症で軽い暗所恐怖症と閉所恐怖症。

小雪 雪の精霊

ジンが精霊の統合をした時に失敗して生まれる。その際にジンの血を取り込んでいる。

ジンの子供。ジンをパパと呼んで慕っている。髪は純白の長いストリートヘア。

ジニー、ディア、ケティー

三人の容姿は驚くほど似ている。薄い褐色の肌に黒髪で並べて見るとなんだか1人の人物を年代順に並べたように見える。年は3歳ずつ離れている。

ハーレム予備軍

キュリア

ファースト王国の侯爵家令嬢、魔人に対して理解を示したジンに好感を抱いている。ジンの嫁さん候補。

マリネ

キュリアが屋敷に連れてきた蛇人の少女。

シャルル

クラフト商国の王女。牛鬼に襲われているところをジンに助けられている。ジンの嫁さん候補。

アルシナ

ヴァーテリオン帝国の竜騎兵部隊の隊長。防衛戦を経てジンの活躍を近くで見てジンに興味を持っている。

ファアラ

ヴァーテリオン帝国の公爵家令嬢竜騎兵。アルシナをお姉様と慕っている。ジンの嫁さん候補。男嫌い？

聖女ウリア

リニヨン教国の二君主制の片割れ。神の言葉を聴く事ができる。ジ

ンの嫁さん候補。魔人嫌い。ジンの屋敷に滞在。

ルーテシア

カルモンド皇国の侯爵家令嬢、ジンを色魔だと思っている。ジンの嫁さん候補。ジンの屋敷に滞在。金髪ロリ少女

カルディア

ウルティア国の女王。ジンに興味を持っている。強力な水の魔術師。髪は鮮やかな蒼髪。

カメリア

カルディアの妹。まだ幼いがジンの嫁さん候補。カルディアと同じ蒼髪。

ジンをお兄さんと呼ぶ。

クリス

テンブル騎士国の王女。『剣姫』の異名を取る。ジンの嫁さん候補。

シャルロット

テンブル騎士国の三騎士の一人の聖騎士。パラディン貴族のお嬢様で、髪型はボリウムたつぷりな長い金髪を巻き毛にしている。顔立ちは、可愛らしくまだ子供っぽさを残している。

トウカ

ヤマト国の姫。『舞姫』の異名を取る。ジンの嫁さん候補。

その他のキャラ

クルト

クルト・クイント クイント皇国の皇帝。レイシアの父

アッシュ

クイントの王子 今は元グーロム王国領の管理を任されている。

アイリス

アイリス・クイント クイントの皇妃

ゲオルグ

クイント皇国の将軍

ジーク

騎士でジンに仕えることを選ぶ

カイル

ジークの友人で同じく騎士ジンに仕える

アルベルト

銀竜。ティリエルの父親 戦って友になる。SSクラスの力を持つ。

ラシード将軍

グーロム王国の将軍だった。ジンの誘いに乗る。今はクイント皇国の将軍をやっている。Aランクの実力者。
聖痕なしのジンと引き分けている。

ラインツ王

ヴァーテリオン帝国の帝王。

カリウス教皇

リニヨン教国の二君主制の片方。

ヘンリー王

ファーランド王国の王。

ジャック騎士王

テンプル騎士国の王様。自身も騎士として強い力を持っている。

グスター王

カルモンド王国の元国王。自分本位な男。世界防衛戦中にワーム飲み込まれる。

エクス王

グスター王の息子。カルモンド王国現国王。グスターと違いとてもできた人間。

キリガネ王

ヤマト国の国王。刀を扱う武士でもある。

トランド王

クラフト商国の国王。商人気質。

ビルキッド

コーデル国、ビラー侯爵家の長男。奴隷を家畜と断言する。

ラウル

クイント皇国の第六師団長。ジンにボコボコにされる。

タッド

クイント皇国の第八師団長。

ガルダ

元ギルドマスター、今はギルド支部長

ミーシャ

皇国のメイド、変な方向に天然

レオン

皇国の騎士

レクト

ミリアの弟 元戦闘奴隷

オルム

村長兼ソフィアの保護者

コートル將軍

グーロム王国の將軍。死亡

ガーランド

『黒炎使い』と名乗る。黒い半球から出てきた人間で世界の敵。赤黒い長剣を持っている。

カラ

鬼族。ジンの屋敷に住んでいるが、詳細は不明

【ギルドカード】

名前 ジン 種族 人間 性別 男

ギルドランク A

能力ランク 総合S 気力SS 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 聖痕使い 精霊王の友人 救世主 英雄 11人の女に愛される男 奴隷の解放者 精霊術師 準貴族 超越者

名前 ソフィア 種族 人間 性別 女

ギルドランク C

能力ランク 総合B 気力C 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 水の巫女 精霊術師 水災の魔女 ジンの女

名前 イリヤ 種族 エルフ 性別 女

ギルドランク E

能力ランク 総合C 気力D 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 治癒術師

名前 リリス 種族 人間 性別 女

ギルドランク A

能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンの護衛 熟練者

名前 ミリア 種族 人間 性別 女

ギルドランク D

能力ランク 総合B 気力C 魔力A

チーム 『世界を結ぶ者達』

称号 ジンのメイド 雷術師 風術師

名前 レティーシア 種族 人間 性別 女
ギルドランク B
能力ランク 総合A 気力S 魔力B
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 ジンの女 皇女

名前 ティリエル 種族 龍族 性別 女
ギルドランク C
能力ランク 総合A 気力A 魔力A
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 ジンの義妹 銀龍

名前 フェリス 種族 人間 性別 女
ギルドランク D
能力ランク 総合B 気力D 魔力S
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 ジンの料理人 ジンの義妹

名前 小雪 種族 精霊 性別 女
ギルドランク F
能力ランク 総合D 気力D 魔力C
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 ジンの娘 雪の精霊

名前 ジーク 種族 人間 性別 男
ギルドランク A
能力ランク 総合A 気力S 魔力B

チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 一級騎士

名前 カイル 種族 人間 性別 男
ギルドランク B
能力ランク 総合B 気力A 魔力B
チーム 『世界を結ぶ者達』
称号 二級騎士

名前 クレア 種族 人間 性別 女
ギルドランク C
能力ランク 総合C 気力B 魔力C
チーム なし
称号 ギルド職員

名前 ジニー 種族 人間 性別 女
ギルドランク D
能力ランク 総合C 気力C 魔力C
チーム 『メイド隊』
称号 ジンのメイド

名前 ディア 種族 人間 性別 女
ギルドランク D
能力ランク 総合C 気力C 魔力C
チーム 『メイド隊』
称号 ジンのメイド

名前 ケティー 種族 人間 性別 女

ギルドランク D
能力ランク 総合C 気力C 魔力C
チーム 『メイド隊』
称号 ジンのメイド

名前 カロルド 種族 人間 性別 男
ギルドランク S
能力ランク 総合S 気力S 魔力S
チーム 『ランスロウ騎士団』
称号 特一級騎士 剛槍 超越者 到達者

名前 アイマイン 種族 人間 性別 男
ギルドランク A
能力ランク 総合A 気力S 魔力B
チーム 『ランスロウ騎士団』
称号 一級騎士 到達者

名前 ヤッシュ 種族 人間 性別 男
ギルドランク A
能力ランク 総合A 気力A 魔力A
チーム 『ランスロウ騎士団』
称号 一級騎士

【世界観】

数千年前、人間と亜人对魔人の戦争があった。戦争は人間側が勝ち魔人は北に追いやられた。勝った人間と亜人は、最初はうまくいつていたが、大昔で他種族に対して無知なこともあり、すれ違いやいざこざが起き長い年月をかけて人間は中央に亜人は南に住むようになった。亜人はさらに細かく分かれていき国や集落ができた。人間の国によつては、亜人が住んでいる国もあるが、それは中央より南に近い国々。

通貨は

金貨一枚＝10000ギル

半金貨一枚＝1000ギル

銀貨一枚＝100ギル

半銀貨一枚＝10ギル

銅貨一枚＝1ギル

1ギル＝約10円くらい

【登場国】

クイント皇国

人間の国で一番目の大国。ジンが身を寄せる国。

ウルティア国

湖と川の国。ジンに対してかなり好意的。

ヴァーテリオン帝国

人間の国で二番目の大国。竜騎兵を有し唯一高空戦力を保持している。

リニヨン教国

宗教を主軸とした国。教皇と聖女の二君主制の国。

ファーランド王国

魔人を受け入れている国でリニヨン教国と仲が悪い。

テンプル騎士国

騎士の国で三騎士を有する

ヤマト国

武士の国。

クラフト商国

商人の国で狸族が多数暮らす。

カルモンド王国

潤沢な資源を持ちそれにより堅い重装歩兵を持つ。

ルクラルト郡国

多種多様の獣人が人間や魔人に対抗するためにつくった。

コーデル国

南の方にある小国。

【登場した力】

〔闘気〕

気力によって変動する。身体能力の強化。武器の強化。

〔魔術〕

魔力によって変動する。あらゆる現象を引き起こせる。

属性 風

『トルネード』 無数の風の刃で切り裂く

属性 火

『ファイア・ボール』 火球を飛ばす

『フレイム・バレット』 無数の小さな火球を飛ばす

『フレイム・シュート』 中級の炎弾魔術。

属性 雷

『スパーク・ショット』 触れた相手を感じさせる

『サンダー・アロウ』 雷の矢を放つ

属性 光

『ライトボール』 光源を作り出す

〔精霊術〕

気力、魔力は必要ないが、習得が難しく、才能に左右される。

火・水・風・土・雷・光・闇の七種類がある。

火の精霊術 『炎蛇』 火の蛇を作り出して攻撃、『炎竜砲』 ドラゴンのブレスをイメージした熱線。もっとも威力が高い、『炎爆』 爆音と衝撃で攪乱する

風の精霊術 『風刃』 鋭いカマイタチを作り出す、『風見鳥』 偵察用の鳥型の精霊獣を作る、『削嵐』 無数の風の刃で敵を削る

水の精霊術 『水翼』 大量の水を使うための前準備、『陸津波』 陸で津波を起こして押し流す、『水撃』 圧縮した水をぶつける、『斬水』 高圧縮した水を細く使って相手を切る

『水上壁』^{すいじょうへき} 『水天門』^{すいてんもん} 同種のもので水の壁を作り出す

土の精霊術 『土壁』土の壁を作り出す、『岩壁』岩の壁を作り出す、『土鉄岩金壁』土壁、鉄壁、岩壁、金剛壁を作り出す。『落とし牢』落とし穴、『刺石槍』^{しせきそう}地面から石の槍が突き出る

雷の精霊術 『落雷』カミナリを落とす、『流雷』相手を気絶させる、『タケミカヅチ』槍状のカミナリに回転を混ぜすべてを貫く。

〔無色の力〕

色付けによってあらゆる力に変換できる力。身体への負担が大きい。

【魔物】

ランクA

ノワールサイ

黒い鉱石を纏ったサイ型の魔物。突進力と防御力はSクラス。

オオクロコダイル

ワニ型の上位の魔物。かなりの巨体で、傷つけることはできても止めをさすのが難しい。

噛み付きは必殺。

火砲亀^{かほうき}

背中にたくさんの砲を背負った大亀。

ランクB

大蛇

大きいだけの蛇だが、かなりの大きさ。防衛戦では橋の役割を担った。

ストーン・ゴーレム

石でできたゴーレム、堀を自らの身体で埋めた。

ブルー・コブラ

個体の戦闘能力より、その隠密能力が特徴。見つけることができれば、Dランクの冒険者でも倒せる

牛鬼

群れと連携が脅威。武器を扱える。個体はそれほど強くない。

Dランク

ゴブリン

圧倒的な数と繁殖力が特徴。個体は弱い。

燃狼

火を纏った狼

コールドオオカミ

冷気を纏った狼

Eランク

グリーングリズリー

熊型の魔物。緑色の毛を持つ。普通の熊より大型で凶暴。あまり熊と変わらない。

バインドスネーク

蛇型の魔物。獲物を縛って絞め殺す。

Fランク

ラビットドン

ウサギ型

ウサギが大きくなり凶暴化した。

ハイウルフ

狼を少し強化したような魔物。

魔物以外

岩窟竜

Sクラスの力を持つ。ストルは、長く生きていて古龍に近い力を持っている。

銀龍

SSクラスの龍の上位種。

第一章終了時点の設定資料（後書き）

やっと第一章が終了しました。 早めに二章も書くつもりです。

感想をいただけるとうれしいです。

プロローグ 狐族の領主

獣人の国、ルクラルート郡国にある狐族こぎの集落にある屋敷で集会が開かれていた。

「領主様には、ソルジャー・オークの討伐に行っていただきたい。」

下座に座る男が、とても領主に対する言葉とは思えない発言をする。この場の領主とは、獣人の中でも指折りの一族、狐族すべての長にあたる者のことだ。発言したのは、ジユウザという男だ。

「その程度、屋敷の者達で充分だろう」

返答した領主は、まだ小さな少女だった。ジユウザは、領主に向かって小馬鹿にしたように

「屋敷の者は忙しいのです。あなたと違ってね。」

「このっ」

ジユウザは、いきり立つ少女を無視して。

「では、採決でも取りましようか。私の案に賛成の方は挙手をお願いします。」

進んで手を挙げる者、渋々手を挙げる者と様々だが、この場に集まっている狐族の九割以上が手を挙げる。
少女は悔しそうに歯切りする。

「では、明日にでも用意させますので、よろしく願いしますね」

ジユウザは領主の返答を待たずに部屋を後にした。

ジユウザが部屋を出た後

「何様だ、あやつは」

領主の少女が悪態をつく。

「クズ八様、大丈夫ですか？」

心配そうに近侍の男が聞く。聞いているのは押し付けられたソルジャー・オーク討伐のことだろう

「平気よ、問題ないわ」

クズ八は、内心かなり不安だったが、表には出さない。弱みを見せたくないのだ。

この屋敷で信用できる者はほとんどいない。クズ八の両親は幼いときに他界しており、信頼できるのはここにいる叔父であり近侍でもあるミロクくらいだ。しかし、ミロク自身は四尾のため発言力はない。狐族の序列は尻尾の数で決まる。普段、尻尾は一本で力を解放した時に数が増える。一尾から九尾まであり、これを階位と呼んでいる。

クズ八だって今の地位に、就きたくて就いたわけではないのだ。慣習で九尾が領主になることが狐族で決まっているのだ。クズ八の家は本家の傍流であるため、クズ八の立場はかなり弱い。

さらに、先程の階位・八尾のジユウザが集会を牛耳って好き勝手しているのだ。

そして今回は、魔物の討伐という面倒ごとを押し付けられた。おそらくミロクは、任務から外されるだろう。クズ八には側にいる者さえ選ぶことができない。

そして2日後

昼頃、ノエム森林に狐族の集団が入った。

「領主様、お早く」

「わかつ・・・てる、わよ」

クズ八の小さな体躯では歩幅も小さい、それなのに周りの兵士の速度は全くといっていいほどクズ八に対しての配慮が無かった。クズ八の息切れしながらも集団になんとかついていく。森林の中を一人になるのは危険すぎるからだ。

しばらくしてソルジャー・オークを見つけた。オークたちは休憩中なのか無警戒だった。居眠りをしている者までいる有様だった。

その光景を見て狐族の集団は、意気揚々と攻撃を始める。

狐族は火を重んじる傾向があり魔力の色が赤の者が多い。魔術師といえど炎術師が多い、そのため狐族の魔術は獣人の中で破壊力は抜群だ。狐族の3人が火炎系中級の魔術を放つ。

「『フレイム・シュート』」

しかし今回は、その火の魔術が仇になる。起きていたソルジャー・オークが手に持っていた盾を掲げる。その盾に炎が当たると炎は霧散してしまった。

オークが掲げたの盾は、『火避けの盾』といって火を消す力を持っている特殊な盾だ。これを持った敵は狐族にとって天敵だ。

「こいつら火が効かないぞ。一旦引け。」

火が効かないとわかった瞬間、狐族の集団は逃げ出した。

クズハを置き去りにして

クズハも必死に追いかけるが、クズハの足で大人の速度についていけない訳もなく、徐々に離されていき孤立して走るようになった。

（どうしてこんなことに）

クズハの胸中にそんな思いが湧き上がる。それでも今は必死に走るしかない。

地割れが見えてきたあそこには木製の橋がある。橋を渡ってオークが来る前に橋を落とせば、とクズハが希望を見出したとき。

バガン

橋の上で爆発が起きた。爆符を用いた『エクスプロージョン』だ。木製の橋が『エクスプロージョン』に耐えられるわけもなく橋が落ちる。おそらく先に渡った者達が爆破したのだろう。

「そんな、なん・・・で」

後ろからは、オークが迫ってきている。

クズハは、思考がまとまらない内に、後ろから来る恐怖から逃げるために地割れに沿ってもう一度走り出す。

（見捨てられた？それとも私を殺すため？最初から仕組まれていたの、もう嫌。何でこんなことに。誰か助けて）

頭の中がごちゃごちゃになっていたためだろう。クズハは目の前の段差に気付かなかった。

「きゃあっ」

段差に躓いて転倒してしまい、クズハの目に涙が滲む。

「誰か助けてよう」

クズハは、いる筈の無い味方に助けを求めた。
面を上げ後ろを見ると一体のオークが斧を振り上げている。

（わたし、死ぬんだ）

そうクズハが思ったとき。オークがあらぬ方向に凄い勢いで飛んでいった。

「ふえ」

びっくりして変な声を出してしまった。

「大丈夫？」

いつの間にか目の前に、黒衣を纏った男がクズ八を守るように背を向けて立っていた。

1話 ルクラルト郡国

異世界395日目

二度目の侵攻まで後1165日

ジンが仲間達と別れてから5日がたった頃、ジンはルクラルト郡国の街に滞在していた。

ルクラルト群国は、あらゆる種族の獣人が寄り集まった結果、亜人の国の中でもっとも大きな国となった。ルクラルト郡国は、国というよりは、いくつかの種族の同盟関係のようなものに近い、つまり王に当たる人物がいないのだ。そのため、国としての動きはかなり遅い。

種族ごとに領土があり領土と領土を繋ぐ街道に中立街が設けられている。種族間に問題を抱えている種族もある。中立街には、種族間での問題を持ち込むことは禁止されており、中立街はそういった種族間の緩衝地帯の役割を担っている。

ジンが滞在しているのは、そんな中立街の一つだ。

街は獣人が溢れているが、人間が居ないわけではない。皇都にも少数だが獣人は住んでいた。この中立街は皇都と比べ獣人と人間の比率が入れ替わっている感覚だ。

人間に対しての感情も人それぞれで、嫌悪している者、好感を持っている者、無関心の者と様々だ。そんな中、ほとんどの獣人が好感を持っている人間が『黒翼の英雄』だ。グーロム王国を滅ぼし奴隷を解放している『黒翼の英雄』の噂は獣人の国まで轟いていた。

そんな中ジンが最も驚いたのは、中立街が人間の街に酷似している

ことだ。これは、多種族の獣人が住む際にその種族の色が出すぎないようにするために、人間の文化を取り入れた結果、人間の街に酷似した作りになったらしい。

中立街には冒険者ギルドもあり、ジンはギルドに依頼を受けに来ていた。

「まことに申し訳ありません。こちらの依頼はすでに受けている方がいるようなのです。どうやらこちらの手違いで貼り出されていたようです。」

受付嬢の猫族ねこぞくの娘が深々と腰を曲げている。ギルドカードの能力ランクを見てから妙に腰が低くなった。どうやら獣人の国では、高ランクの者は自分の一族から出てこないため、フリーのSランクの冒険者は重宝されているらしい。

人間の国では高ランクの冒険者は、宮仕えを嫌っていたので正反対だな。

「別にいいよ。それにしても、この依頼を受ける人がいるんですね。」

ジンが受けようとしたのは、

依頼ランク A

内容 ソルジャー・オーク80体の討伐

期間 二週間以内

備考 ソルジャー・オークは特殊な装備を持っている模様。

という依頼だ。ソルジャー・オークは持つ武器でランクがDからBで変わる。依頼ランクがAということは、ランクBが数十体はいるはずだ。一般の冒険者では、歯が立たないだろう。

「どうも、狐族^{こねく}の領主様の一族が討伐に出てくれたようなんです。」

狐族といえば獣人の中でも指折りの種族だ。しかも領主の一族が来ているのか、見物に行ってみるのもありだな。

ジンは依頼地を確認させてもらって、ギルドを出る。

「ノエム森林ね」

ジンは、一言呟いて、地図を見ながら街門に向かう。

ジンの格好は、黒衣姿で腰には、テツの刀姿の黒龍刀と精霊刀がある。

『黒飛板^{シュバルツ}』は目立つので、縮小化と軽量化の魔術がかかった荷袋に入れている。

同じ理由で移動は徒歩だ。

中立街からそれなりに離れると

「テツ、もういいぞ」

ジンの言葉に反応してテツが人の姿になる。人の姿になったテツをジンが抱き^だ抱^かえる。

「どうしたの主？」

「せっかくの二人つきりだからな、嫌か？」

「嫌じゃない。ずっとこのままでもいい」

テツがジンの首に顔を埋めてくる。ジンは、その頭を撫でながらノエム湿原を目指す。

途中から走ったので三時間くらいでノエム森林に着く。テツには、走り出したときに刀の姿になってもらった。

ノエム湿原に入ってしばらくすると、黄色い狐耳と狐の尻尾を持つ獣人の集団が見えてきた。おそらく狐族だろう近づいてみると話し声が聞こえてくる。

「助けに行かなくていいのか？」

「いいんだよ。」

「でも」

「もともと、今日はそれが目的だ。ジユウザ様のご命令だぞ。」

「わ、わかった。」

何やら不穏な話しをしている。次に爆発音が聞こえた。これは爆符のエクスブロージョンに似ている。

ジンは、ギアを上げて爆発音が聞こえた方向に全力で駆ける。

途中狐族の集団の横を猛スピードで駆け抜けた。

「なんだ？」

「何か通った？」

狐族の獣人はジンの姿を確認することが出来なかった。SSランクの足に風の補助が加わったジンの動きがそれだけ速すぎたのだ。

すぐに大きな地割れが見えて来た。地割れの反対側で狐族の娘が、ソルジャー・オークの集団に襲われていた。

「誰か助けてよう」

狐族の娘は、涙を流して助けを求めている。何故、子供があんな目に？さっきの奴らの仕業なのか？

ジンの胸中を怒りが走る。

オークが斧を持って狐族の娘に近づいて行くのが見える。地割れを迂回する時間はない。

そこでジンは走りながら土の精霊を操り精霊術を使った。

「『橋渡し』」

土が盛り上がり土橋を形成する。土橋を地割れ半ばまで作り出す。ジンは土橋の上を走る。即席のため土橋が崩壊を始めるが構わず走る。ジンは、土橋の先端まで走ると

跳んだ

一瞬だけ人工聖痕の『無敵』を発動する。『無敵』を使つての跳躍のスピードは、雷速を以上の域に到達した。

一瞬で移動したジンが、狐族の娘に斬りかかるうとしていたオークを膝蹴りで蹴り飛ばす。蹴りを受けたオークは、頭を^{ひっさ}拉げさせて飛んでいく。おそらく生きてはいないだろう。

「ふえ」

狐族の娘が、驚いて奇声を発する。

「大丈夫？」

「えっ、ええ」

「そこにいて」

目の前には70体ぐらいのソルジャー・オークが武器を構えている。
先手必勝だ。

「『炎蛇・四首』」

四匹の炎の蛇を作り出す。

「燃やせ」

「ダメ！炎で、そいつらは倒せない！」

後ろで女の子が叫ぶ。炎蛇がオークの持つ盾に当たった瞬間、炎蛇が霧散した。

「『火避けの盾』よ。火は効ないわ。逃げて！」

オークが武器を振りかざして向かってくる。

「冗談、後ろに女の子が居て、逃げられるか。」

ジンは、黒龍刀（小太刀）と精霊刀（大太刀）を抜き放ち

「本気で刀を振るのは久しぶりだな。」

大太刀を右に小太刀を左に持ったジンが、小太刀を前に構え大太刀を顔の辺りまで引く。

「『大突』」

右の大太刀で突きを放つ。『小突』が早い技なら『大突』は重い技だ。

突き出した大太刀は、オークの肉体を鎧ごと貫き、それでも止まらず、後ろのオーク2体も一緒に貫いた。

「『小突』」

左側にいるオークの頭を小太刀で顎から貫く。一瞬で4体のオークを始末した。

この攻撃によって、オークの攻撃対象がジンに移る。

1体のオークがジンに長剣を叩きつけるが、ジンはその攻撃を黒龍刀で受けオークの長剣を弾く、そしてがら空きの胴を精霊刀で切り裂いた。

同じ戦法で20体を倒した頃、オーク達も1体では敵わないことを悟り四方から攻撃を繰り返すが、ジンは四つの攻撃それぞれに刀を側面からぶつけそれぞれの攻撃の向きを操作する。

「『神双流・四角受け』」

誘導された攻撃は、それぞれ左側のオークに身体に当たり動きを止めた。動きの止まった4体の首を切り落として止めをさす。

「風を解放」

精霊刀から、風の精霊が溢れ刀身を風が包む。

「『風刃』」

ジンが精霊刀を振ると風の刃が生まれ、防御の遅れたオークが身体を斬られて、その場に倒れる。

精霊刀を使うことによって、風刃を使うことが容易になり溜めも必要なくなった。

この時点でオークは逃亡し始める。群れを作る魔物ゆえか一塊になつて逃げていく。

「『落雷雨』」

逃げていく一団に雷の雨が降り注ぐ。

雷を前に火避けの盾は、意味を成さずソルジャー・オークは全滅した。

ジンは刀を納め

「鈍^{なま}つては、いないようだな」

大太刀と小太刀の二刀流がジンの本領とはいえ、ここ一年ぐらいは、テツだけを振るっていたから少し不安だったのだが、聖痕を使わずにBランクを含めた魔物を数十体を、危なげなく倒すことができた。少しの満足感に浸った後で狐族の娘のところに戻る。

やっと少女をゆっくり見ることができた。狐族の娘は、幼い顔立ちに小さな体、金髪、金眼のつり目がちな少女だった。服は華やかな赤い着物を着ていて、その上に同じ柄の上衣を着ている。上衣の長さが腰までで、その間から尻尾が一本出ている。便宜として狐っ娘と呼ぼう。

「もう大丈夫だよ」

ジンが狐っ娘の前にしゃがむと

「うつ、うえゝゝゝん、怖かったよゝゝ」

狐族の娘は、ジンに抱きついて泣き出してしまった。余程怖かったのだろぅなかなか泣き止まなかった。

ジンが、泣き止むまで狐っ娘を腕の中であやしていると。

「あの、落ち着いたから離してちょうだい」

解放すると

「さっきのは、その、忘れてちょうだい、私は・・・」

顔が真っ赤な狐っ娘は、一度悩むそぶりを見せて

「私は、狐族のクスハ、階位は・・・九尾よ」

「へえ、俺は」

「なんでそんなに無反応なの!？」

何やら、怒りだしてしまった。

「えっ、え〜と。尻尾一本しかないみたいだけど。」

「力を解放したら九本になるのよ。ってそうじゃなくて、他にあるでしょう?」

「なにが?」

「狐族の九尾って言ったら狐族の領主のことでしょ!?」

「そうなんだ」

「・・・そうなのよ。はあ、まあいいわ、あなたは?」

「俺はジン見ての通りの普通の冒険者だ」

「あれだけ強くて普通はないでしょ。名前は?」

あちらも結構重大な事を話してくれたようだし、ちゃんと名乗っておくか

「俺はジン、Sランクの冒険者だ。」

「やっぱりSランクなんだ」

ジンの名前は以外と知られていないようだ。
まあいいさ。

さて問題は、狐っ娘改めてクズ八をどうするかだよなあ。ここに来

る前に見かけた奴らのところに返しても、また殺されそうになるかもしれないし、かといって領主を連れ去る訳にもいかない。

ジンが、物思いに耽っていると。クズハが意外な提案をしてきた。

「ねえジンは、今何か依頼を受けてるの？」

「うん？いいや、今はフリーだな」

「なら、私に雇われない？」

2話 狐族の里

「なら、私に雇われない？」

初対面の相手にいきなり雇いたいと言い出した。ジンは驚いてクズハの顔をまじまじと見てしまう。その時のクズハの顔は、とても不安そうな表情だった。きつと殺されかけたことが関係しているのだろう。それを知るためにも、雇われてみるのはいいかもしれない。

「別にいいけど。雇うってことは、報酬を貰うってことだけど、いくらで？」

「えっ、えつと、その〜」

クズハが目を逸らす。クズハは、領主だが自分の自由にできるお金なんてほとんどない。ましてやSランクの冒険者を雇うには高額な報酬が必要なのが普通だ。

クズハの様子からお金がないことを察したジンは

「別に雇われなくても、護衛くらいならするよ。」

「ダメ！私が雇わないとダメなの！」

クズハは、突然現れて自分を助けた男をどうしても自分の側に置きたかった。そのために何か確かなつながりが欲しがっていたそれが雇用だったのだ。

「そう言われても、どうするんだ？」

「だから、その・・・どうしようっ」

「俺に聞かれても。」

「いいから考えてみなさいよ」

「そうだなあ・・・衣食住の確保を」

「そんなの報酬にならないでしょ」

「じゃあ、出世払いで」

「それは、雇えていないでしょ」

「・・・」

しばらく二人は、考えこんで

「なら私を、あなたにあげるわ。」

「はっ？」

「だから私自身をあなたに捧げるって言ってるの！なによ、不足なの？」

平らな胸に手を当てて頬を赤くして涙目のクズハ。

「い、いや、そんなことはないが」

「なら雇われなさいよ」

かなり凄い事を言っている気がするのだが、まあ役得とっておくか。

「わかった。その代わり条件がある」

「条件？」

「ああ、俺はさっきSランクのジンと名乗ったが、他の奴の前ではAランクのシンで通したい。」

「わかったわ」

クズハは、Sランクって大変なのねっと勝手に納得した。ジンにとっては、もちろん『黒翼の英雄』とばれないようにするためだ。

「これからよろしくね。私が主だけクズハって呼んでいいわよ。」

「いやそいうわけには」

「クズハって呼びなさい」

どうやらクズハと呼んで欲しいらしい。

「わかったよクズハ。これからよろしく。」

「ええ、よろしくねシン」

ジンが『火避けの盾』を回収していると

「りよ、領主様、い、生きておられて」

クズハを殺そうとした狐族達が地割れを迂回してやってきたようだ。殺そうとしていたのは、クズハが襲われていたことと落とされた橋を見てほぼ確定した。

「残念だったな。私はシンと帰るから先に帰っていいぞ」

狐族達はジンを見て

「（ど、どうする？）」

「（一度戻ってジュウザ様に報告しよう）」

「（そうだな。）それでは領主様我々は先に失礼します。」

小さな声で話していたが、風を自在に扱うジンには余裕で聞こえていた。

狐族達はそそくさ帰って行った。狐族達が見えなくなると、クズハが不安そうな声音で

「ジンあのな、実は私・・・」

何かを打ち明けようとしているようだが

「うん？」

「いや、なんでもない」

結局クスハは話すのをやめてしまった。

武具を拾い終え、狐族の里に向かう。クスハの表情が狐族の里に近づくにつれて堅いものになっていく。

「大丈夫か？」

「大丈夫よ」

全然大丈夫に見えない。顔色もどんどん悪くなっていく。しかし今日出会ったばかりのジンには理由がわからず何もできない。ジンはもどかしく思いながら狐族の里を目指した。

「ここが、狐族の里、『狐火の巣』よ」

里に着いたのは、真夜中だった。

二人が里に着くと狐族の男達が、どこからか現れ

「お帰りなさいませ、領主様。ジュウザ様が少々お話しがあると仰せです。」

そうついいながらクスハとジンの周りを槍を持った狐族が固める。クスハにだけ聞こえる声で

「（どうするんだ？）」

「ついていく。シンも来い」

クズハが移動するので、それについていこうとすると

「冒険者のお方は別の場所でお待ちください」

周りの狐族が槍を突きつける。

クズハの表情が陰ったのを見たジンは

「断る。俺の依頼主は、クズハだ。あんたらじゃない。」

ジンは、突きつけられた槍を抜刀術の要領で半ばから斬り落とす。

「えっ」

元槍の棒切れを持った狐族は、その場に尻餅をつく。ジンはそれを無視してクズハの隣に歩み寄る。最初に話しかけてきた男が面白くなさそうにしているのも無視だ。クズハの顔から陰は消え、顔を少し赤くして前を向いている。どうやら嬉しさを抑えているようだ。頬が少し緩んでいる。

そのまま二人で男についていく。

二人は、和式の屋敷につれて行かれ、屋敷にある一室に通された。その部屋は上座と下座が段差で区切られていて、もちろん領主のクズハは、上座に座る。

「シンは私の後ろに」

「了解」

二人が部屋に入ってすぐ二人の男が入ってきた。片方は案内をした

男だ。

「話しとはなんだジユウザ？」

クズハが面倒そうに尋ねる。そこに案内をした男が

「その前に、その冒険者。シンと言ったか、領主様に雇われたそうだな。その倍を出すから即刻この里を立ち去れ。大方領主と聞いて護衛を引き受けたのだろが、そやつの好きにできる金などほとんどないぞ。領主と言ってもお飾りだからな」

お飾りであることを知られてジンがいなくなるかもしれないという恐怖でクズハが身体を震わせる。ジンは肩に手をおいて。

「お前には、絶対に払えないよ。一生無理だね」

「貴様！」

「放っておけ、たかがネズミ一匹だ。それより領主様、部下を先に返したそうですな。チームの隊長であつたあなたが部下を先に帰らせるとはどういうことですか？彼らに何かあればどうするつもりだったのですか？」

ジンが横槍を入れる。

「あれだけの、人数で無事にかえってこれないのなら、それは人選をしたあんたらの責任ってことになるだろうな」

「なんだと」

「帰ってこれなかったらだよ。何もなかったんだろ。ならあんたらの人選は間違っていなかったということだ。ならこの話題はもう終わりでいいだろう。なあジユウザさん。」

「……私はこれで失礼する。」

ジユウザは、面白くなさそうに部屋を後にした。

「すごいな、シンは。ジユウザを追い返してしまった。」

「まあ、俺は外から来たからな。それだけだよ」

ジユウザと入れ替わりに男が入ってきた。安堵した表情を浮かべ

「クズ八様、よくご無事で。こちらの方は？」

「こいつは、シン。私の恩人だ。シンこっちはミロクで私の叔父にあたる人だ。」

「クズ八様を助けていただいてありがとうございます。私、クズ八様の近侍のミロクと申します。」

「どうも、冒険者のシンです。」

「ミロク、今日はもう遅いから、休む」

「わかりました。では、シン殿の寢床は」

「き、気にするな私が何とかする。」

クズハはそう言うとジンの腕を掴んでその場を逃げ出した。

「どうしたんだ？そんなに慌てて」

「領主の私が、か、身体で、お、お前を雇ったとばれたら何を言われるか」

「ああそういうことか、でも寢床はどうするんだ。」

「私のベットでいいだろう。」

クズハの部屋は、屋敷と同じ和装の造りなのだが真ん中にベットがあるのだととてもシユールだ。クズハがベット好きなのだろうか？

「そ、それに、私をお前に捧げると言っただろう」

そう言いながら先にベットに入ってしまった。クズハが毛布から顔を出して

「早く来い」

「はいはい」

ジンも隣に入って横になる。

「何もしないのか？何をしてもいいんだぞ？」

まただ、何故クズハが、よそ者のジンにこれほど、引き止めたがるのかわからない。クズハの領主としての立場が悪いのはわかった。そつえばクズハの無事を喜んだのは、ミロクという男だけだった。

もしかしたらクズハは寂しいのだろうか？
それなら

「大丈夫、俺はクズハの味方だから。」

「なんでだ？」

「俺は可愛いやつの味方だからな。さっきも言っただろジユウザには絶対に払えないって、あれはそう言う意味でもある。」

クズハがこちらを向いて頭をジンに預けるように倒した。

「ジン・・・私、本当は領主になんてなりたくなかったんだ。こんなガキに一族を纏めるなんてできるわけないだろ。それなのに慣習で九尾っただけで領主に据えられて」

「・・・」

「ジユウザは好き勝手するし、今日なんか殺されそうになるし、もうやだ」

クズハの頭を抱きしめてやさしく撫でる。

「クズハ、俺の前では一度大泣きしてるんだし、我慢しないでいいんだぞ。」

「大、泣き、なん、て、・・・うつ・・・うわああああん」

クズハはジンの胸に顔を埋めて我慢することをやめた。

クズハが泣き疲れて眠るまでジンは、クズハの頭を撫で続けた。

3話 金の炎

異世界396日目

二度目の侵攻まで、後1164日

ドンドンドン

クズハは、扉を叩く音を目覚ましがり起きた。

「ふあゝああ」

隣に、ジンがないことに気付く。

「昨日あんなこと言っておいて、どこに言ったのだ、あいつは」

不満そうではあるが、不安というわけでは、なさそうだ。そう思っている間も、扉は叩かれている。正直うるさい適当に身支度をすませて。

「誰だ？」

「クズハ様、ミロクです。失礼いたします。」

扉を開けてミロクが、入って来る。ミロクは、開口一番

「シン殿が、とんでもないことを、してくれましたぞ。」

「シンが何をしたんだ？」

「ジユウザ殿の部下に、決闘を挑んで、……ボコボコにしてしまいました。」

「な、なんだと!？」

ガチャ

「よう、クズ八起きたか」

「よう、ではない!何をしているんだお前は!あいつ、絶対に仕返しにくるぞ。」

「それについては、今から話すよ。俺の素性も教えようと思ってな。」

「素性？」

ミロクが首を傾げる。

「クズ八、ミロクさんには、話してもいいのか？」

「ミロクなら大丈夫だ。それより早く話せ」

「わかったわかった。じゃあまずは素性からだが、俺は人間の国では『黒翼の英雄』って呼ばれてる。」

「『黒翼』ですと!？」

「ど、どうしたミロク、大きな声で」

大声で驚くミロクと、意味がわからないクスハ。

「『黒翼』と言えば、人間の国の英雄です。奴隷を解放したりと、それは凄い働きをしているとか。」

「ジン、本当か？」

「本当だ。」

「ジンとは？」

「こいつの本名だ。」

「シンは、偽名でしたか。何故狐族の里に？それ以前に、何故ルクトルーク群国に？」

「それも、今から話す」

一時間後

「黒い半球に、連合軍ですか」

「ジンは、初めからそのつもりで、その、私に近付いたのか？」

「それは違う。あの場に俺がいたのは偶然だ。」

「そうか。」

明らかに気落ちしている。

「ああもう、本題なんだが。・・・クズハ、俺と来ないか。」

「やっぱり」

「狐族の領主は、辞めて構わない。」

「えっ」

「な、何を言う。そんな無責任な。」

慌てて止めようとするミロクを、クズハが制して

「どういうこと?」

「今の君に、領主は無理だ。狐族を纏めることはできないだろう。君のためにもならないし、トップが定かではない組織は信用できない。だから、領主をやめて、俺の元に来い。領主は、ジュウザにでも任せればいい。さっき起こした騒動は、ここを出るための、ただの理由作りだ。」

「それでは、連合に参加するときに問題にならないか?」

「狐族が、連合に参加するときは、あくまでルクトルート郡国の一部族に過ぎない。何とかなるだろう」

それが、ジンの本題だった。クズハにとってそれは、とても魅力的に聞こえたが、ミロクの手前、なかなか頷くことができない。

「私は」

ガシャーン

ガラスが割れる音が、クズハの言葉を遮る

「何事だ！」

襖を倒して部屋に、侵入者が入って来る。侵入者は、外套で顔を隠して、素性がわからない。

ジンは、クズハとミロクを抱えて、外に飛び出る。庭を飛び越え、屋敷の敷地の外まで出るが、そこにも外套を着た奴らが待ち構えていた。

ジンは二人を降ろして、二刀流中心の戦闘に入る。実力差は歴然で、ジンが侵入者を圧倒していたが、ジンが二人の敵とつばぜり合いをしていたとき、そこに特大の火球が降ってきた。

ジンは、なんとか避けたが、つばぜり合いをしていた二人は、目の前で焼け死んだ。

「お前、仲間を！」

ジンの視線の先には、尾が八本になったジュウザがいた。ジュウザが、こうも早く動くのは、想定外だった。おそらく昨日から、準備していたのだろう。

「仲間ではない、ただの駒だ」

「ジン！」

クズハの叫びにそちらを向くと、なんとミロクが、クズハに短剣を突きつけていた。

「何をしている、ミロク！」

沈痛な表情で押し黙るミロク。

「ジンと言ったか、動けばクズハの命はないぞ。わかったら、まず武器を地面に、置いてもらおうか」

ジンは、その場に刀を置く。

「ジン戦え、ジン！」

クズハが叫ぶが、ジンは動かない

「ミロク離せ。ジンがジンが」

「死ね、ネズミが」

ジンの頭上に、先程より巨大な火球が生まれ、ジンに向かって放たれる。

「ジン、ジン、ジン」

ジンが、水の障壁で防ごうとするが、

「ジンに・・・手をだすな――！」

クズハに異変が起きた。

クズハの尾が九本になり、身体からは金色の炎が溢れ出す。すごい勢いで、溢れた金の炎は、周囲一帯を瞬時に包み込んでしまった。

ジユウザも火球も敵も屋敷も

そしてジンやミロクさえも包み込んだ。

炎が消えた時、周りには誰も居なかった。その場にいた者たちを灰も残さず燃やしてしまった。

「あっああ、ジ、ジン、ミロク。私の・・・せい、で。ああ、ああ――」

クズハがその場に、泣き崩れる。心が壊れそうになった所で

ベシ

誰かに後ろから頭をはたかれた
後ろを向くと。

「ジ、ン」

無傷のジンが、そこに立っていた。

「ジン、生きて」

「咄嗟に、『火避けの盾』を出して時間を稼いで、刀を回収して、
地中に逃げたんだ。」

金の炎の前では、『火避けの盾』も時間稼ぎにしかならず、数秒で

燃やしてしまった。

「ジン、私、ミロクを」

「クズハ！お前が焼いたのは、敵だ。ミロクも、少なくともあのときは敵だった。」

戦いを遠くから見ていたのだろう。野次馬が集まってくる。

「お、おい、金の炎が暴走したぞ」

「ジユウザ様が」

「ミロクまで焼かれたぞ」

「ど、どうすんだよ。逃げるのか？」

「俺達が領主にどんな態度をとってたか思い出せよ」

「だからって」

「戦うのか金の炎と」

一部始終を、見られていたようだ。聞こえる会話の内容は、酷いものだった。

「クズハ、金の炎ってなんだ？」

「九尾だけが使える、最上位の炎のこと、なんだけど使えたのは初めて」

九尾だけか、この里で金の炎は、特別なものなのかもしれないな。

「クズハここを出よう。このままここにいたら、何が起きるかわからない。」

「う、うん。でもどうやって?」

周りを狐族に囲まれている。戦う意思があるかはともかく、無理やり抜けようとしたら、一悶着あるだろう。

「これで飛ぶ」

荷袋から『黒飛板』を取りだし、クズハを抱えて空を飛ぶ。

「きゃあー……と、飛んでる」

「中立街まで飛ぶから」

「わかった」

クズハは、複雑そうに、狐族の里が見えなくなるまで、見ていた。

4話 クズハの鍛錬

異世界397日目

二度目の侵攻まで、後1163日

狐族の里『狐火の巣』から逃げてきたジンとクズハは、昨日から中立街にある宿屋に泊まっている。クズハを一人にするのは不安だったので、二人部屋を取ることにした。

朝からクズハは、塞ぎ込んでいた。下から食事を持ってきたジンが話しかける。

「クズハ、起きてるか？」

「起きてる」

ベッドの上で体育座りをしたクズハが、返事はするが声に元気がない。

「元気を出せ。一週間後には仲間が来るから」

「ジンの仲間？」

「家族みたいなものだ」

「ミロクは、唯一の親戚だった」

地雷だったか

「これからどうすればいい？ジンだって爆弾を抱えた私の面倒なんか、みたくないだろう」

「まあ、爆弾の面倒はみれないな。」

「そう、か」

クズハの顔から生気が抜けていくように、青白くなっていく。

「それなら、爆弾では無くせばいい。俺と一緒に金の炎を扱えるように鍛錬をしよう」

「えっ、でも」

金の炎の鍛錬なんて危険すぎる。普通は先代の九尾が付きっきりで教えるのだ

「俺に任せろ。」

どのみちこのままでは、一人ぼっちになるだけだ。クズハは覚悟を決めた。

「わかったわ。やる」

「明日から特訓だからな。その力で誰かを助けられるようになれクスハ。」

金の炎を扱えるようになれば、きっと立ち直るきっかけになる。そ

うなってほしい。

異世界398日目

二度目の侵攻まで、後1162日

翌日、ジンとクズハは、ノエム森林に来ていた。ジンが、土の精霊術で即席の修練場を作る。周りに飛び火しないように深いクレータ―状の修練場だ。

「クズハ、金の炎を出せるか？」

「たぶん出せるけど、加減が」

「気にせず出して」

「わかった」

クズハが腕から金の炎を発現させる。抑えようとしているのか、炎が不規則に揺らめいている。

「クズハ抑えなくていい、本気を出せ。この前はそんなんじゃないかな。つたろ。」

金の炎がどんどん大きくなる。どうやら術者本人には、害はないようだ。

「それを上空に向かって小さくちぎって放ってみろ」

クズハは言われた通り、小さな金の炎を上空に放つ。

途中までは、順調だったが、突然炎の塊が歪みだし爆散した。あたりに火の粉が飛び散る。火の粉は、もちろんジンにも向かう。

「水の聖痕を発動『水龍』、『水天門』」

小さな火の粉に対して、過剰な程の水の障壁を作り出した。しかし、それが正解だった。金の炎は、水の中に入ってもしばらく消えず少ししてから消えたのだ。半端な水壁を作り出しても意味はなかっただろう。

「クズハこの調子でやるぞ。」

「ねえ、ジンはなんでこれが有効だと思うの？」

クズハは、ジンの無事に安堵しながらも疑問を口にする。ジンは、金の炎について何も知らないはずだ。

「暴走の仕方が、昔の小雪に似ているんだ。」

「小雪って誰？」

眉を寄せて、不満そうな顔をするクズハ。

「俺の娘だ。」

「はっ？」

固まってしまったクズハに、一から説明して立ち直らせてから話を続ける。

「それで小雪は、生まれながらにして不安定ながら強大な力を持っていたんだ。」

小雪が今よりも子供だったこともあり、ずいぶん苦勞した。子供だから癪癢一つで周りを凍らせてしまうのだ。ジンは小雪の傍で力の制御方法について模索を続けた結果、小雪はなんとか力を制御できるようになった。

「その時にやったのが、何かの形や技に固めることと、操作に重点を置いた訓練だ。これは勘だが、金の炎の威力を抑えるのは、おそらく無理だ。だから威力は抑えないで他のところに集中して訓練すべきだと俺は思う。」

「それじゃあ、まずは操作からってことね。わかった、やってみる。」

「聖痕には、制限時間があるからな、急ごう」

「了解。金の炎、きつと私のモノにしてみせる。」

それ以降も特訓を続け、2日目では、爆散はしなくなり。3日目には、金の炎は安定した。やはり、炎を抑えようとするのが、いけなかったようで、そこを理解したら上達は早かった。

訓練開始から一週間がたった頃、クスハは独自の成長を遂げた。

「『金狐』」

金の炎を狐の形にしたのだ。

「どお、ジンなかなかでしょ」

得意そうなその笑みには、宿屋で見せた陰は見られなかった。

「よし、中立街に一度戻るか」

「そうね」

二人は、確かな手ごたえを手にして中立街に戻った。

異世界404日目

二度目の侵攻まで、後1156日

中立街に戻ってきた日の夜

寝ようとジンがベッドに入ると

「どうした？」

クズハが、ジンのベッドに入り込んできた。

「ほ、ほら私、あんたに私を捧げてるし、こうした方がいいかな
て」

真っ赤になってクズハが言い訳する。そこにジンは、狐耳に目と止めて。

「なあ、クズハ？」

「な、なによ？」

「耳触つてもいいか？」

「い、いいけど」

「尻尾は？」

「いいわよ」

「それじゃあ失礼して。」

もふもふ

「ど、どう？」

「ふわふわして気持ちいぞ。クズハはどうなんだ？」

「落ちちゆく」

「「.....」」

「落ち着く」

顔を真っ赤にして言い直した。

可愛かったので、今日は尻尾をにぎにぎしながら寝ることにする。

二度目の侵攻まで、後1155日

「起きなさい。起きて」

クズハの呼びかけで目が覚める。

「ジン起きた？起きたなら手を離して、お願い」

ジンは、クズハの懇願に、最初は何を言っているのかわからなかった。自分がクズハの尻尾をまだ掴んでいることに気付いた。

「もう少し」

にぎにぎ

ジンがクズハの尻尾をにぎにぎする。すると

「はああ・・・んっ~~~~」

昨日となんだか反応が違う。声がなんだかエロい。

「クズハ」

「な、なによ」

「もしかして尻尾が、きもちよく」

「そんなわけ」

にぎにぎ

「ーーーーッ」

クズハの身体がピクピク痙攣する。
そこでさすがに手を離す。

「はあ・・・はあ・・・んっ、ジンのアホ」

潤んだ目でこちらを睨んでくるクズハの表情は、とても可愛く、意地悪をしたくなるような表情だった。

「気持ちいいんだ」

「なによ、悪い」

「いいや、俺はアリだと思うぞ」

ジンは身体を起こして、狐耳にも触れて触り心地を楽しむ。

窓から外を見ると、もう昼ごろだった。久しぶりのベッドで寝すぎたようだ。

宿屋のロビーが騒がしい、団体でもついたのだろうか。

扉が叩かれた。

「はい」

返事をしてしまった。

「ジン殿、お久しぶりです。」

「お姉様、お待ちください。」

アルシナとファースラの竜騎兵コンビが入ってきた。どうやら団体は仲間達だったようだ。

ただいまの部屋の状況は、ジンとクスハが1つのベッドに入っていて、クスハの顔が赤く目が潤んでいる。

部屋の状況を見たファースラが

「こんのケダモノー」

いきなりが殴りかかってきた。これは予想できたのであっさり避けたが、避けた先に椅子が飛んできた。アルシナが投擲してきた物だ。椅子がジンの頭にめり込む。

ジンがその場にしゃがみこんでプルプル震えて痛みに耐える。

「お姉様ナイス」

ガッツポーズのファースラと

「すまんジン殿、つい。だ、だがお前も悪いのだぞ。久しぶりに会ったら小さな娘と、イチャイチャしているから」

謝りながらも不平を口にするアルシナは、可愛いのだが。それを気にする余裕はジンには無い。

しばらくして、ジンがプルプルから復活して

「すまん、確かに再会としては最悪だったな。」

「改めて、ジン殿久しぶり」

「久しぶりアルシナ。ファアラも元気そうだな。」

「まあね。それより多分あんたを捜している人がいたから連れてきたわよ。黒衣に二刀ってあんたのことでしょ。」

俺を捜す？誰だ？この国で知り合いなんてほとんどいないぞ。

「名前は？」

「さあ」

「名前くらい聞こうぜ。」

「うるさいわね。確かミロクの妻だと、伝えてくれて言ってたわよ。」

「なんだって！」

尋ね人の素性にジンが叫ぶ。クズハも驚いているようだ。怖がっているようにも見える。

「ジンどうしよう、私はミロクを」

「・・・会おう。ちゃんと話すべきだと思う」

「でも、あたしは仇」

「だからだ。ミロクを殺したのは俺達だ。だから俺達は、ちゃんと

話さないといけない。」

「ジンは、何もしてない！」

「いや、俺はあの時ジユウザを挑発した。その結果、ミロクが巻き込まれて死んだ。俺がすぐにジユウザを殺していれば問題はなかったんだ。だからこれは俺とクズ八の問題だ。」

「・・・わかった。」

「ミロクの奥さんはロビーに？」

「あ、ああ」

「この部屋に通してくれないか、外で話すことじゃないからな」

「別にいいけど」

アルシナとファースは、状況が飲み込めないながらも了承する。

二人が部屋を出た時、クズ八が

「ミロクの、家族か」

と呟いたのが、聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5887w/>

聖痕使い

2011年11月26日22時04分発行